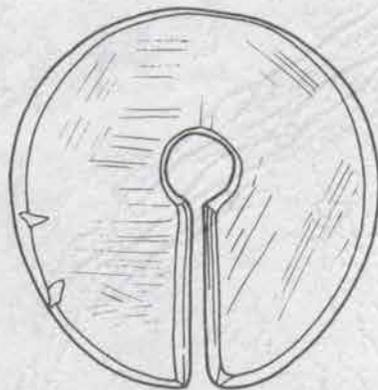


とおり
能登島町通ジゾハナ遺跡

— 広域営農団地農道整備事業（能登島第2地区）
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —



1997

石川県立埋蔵文化財センター

とおり
能登島町通ジゾハナ遺跡

石川県立埋蔵文化財センター



遺跡垂直写真



遺跡遠景(西から)



遺跡遠景(南から)



遺跡遠景(南から)



調査区俯瞰(東から)



調査区俯瞰(西から)



調査区俯瞰(南から)



2号竪穴建物(西から)



6号竪穴建物(南から)



9号竖穴建物(南から)



10号竖穴建物(南から)



竪穴建物群(南から)



出土石器・石製品



1. 試料 1 (凝灰岩 A)



2. 試料 2 (フリント)



3. 試料 3 (安山岩 A)



4A. 凝灰岩 A のオープンニコル (20倍)



4B. 凝灰岩 A のクロスニコル (20倍)



5A. フリントのオープンニコル (20倍)



5B. フリントのクロスニコル (20倍)



6. 安山岩 A のクロスニコル (20倍)



7. 安山岩 A のオープンニコル (20倍)



8. 気屋遺跡の輝石安山岩のオープンニコル (20倍)



9. 気屋遺跡の輝石安山岩のオープンニコル (20倍)

小型打製石器に使用されている石材の偏光顕微鏡写真

能登の縄文前期集落への誘い（序文に代えて）

通ジゾハナ遺跡は、縄文時代前期前葉ごろの集落遺跡であり、この頃（佐波式期）に能登半島などの縄文人たちは、海岸部に進出している。おそらく漁撈活動による海の幸への志向が高まったのであろう。このことは地球的規模の温暖化と海水面の上昇という当時の自然環境と関係が深いと考えている。山間部から海浜近くに移り住んだ縄文人たちは、当然のこととして食生活にもかなりの変化をもたらしたに違いない。通ジゾハナ遺跡出土の石器組成を見ると、狩猟具としての石鏃約25点、漁網用の石錘約60点、すり石・凹石・石皿・叩石など主として堅果類の調理具とみられるもの約155点で、他に木工用の磨製石斧約50点がある。だからジゾハナ村の縄文人たちの食料獲得の方法は、弓矢による鳥獣を対象とした狩猟活動、原始的な定置網漁による漁撈活動、そしてクリ・クルミ・ドングリ類・トチなどを中心とした木の実などの採集活動ということになる。

ただ不思議なことに、ある種のイモ類など土中に育つ根菜類掘りには欠かせないとみられる打製石斧が全く出土していないのである。ところが、この時期の遺跡について調べてみると、例えば筆者が参加した能登島町佐波遺跡の発掘でも、打製石斧は出土していないことに気付いた。さらに穴水町甲・小寺遺跡、田鶴浜町吉田野寺遺跡の報告書を開いてみたが、ここでも打製石斧が掘り出されたという記述が無かったのである。先年、田鶴浜町で佐波期の良好な包含層を検出した三引C・D遺跡の調査担当者にも、打製石斧の存否を聞いたが、出土していないとの返事がかえってきた。

能登の佐波式期前後の縄文人は、なぜか土掘り具としての打製石斧を使用しなかったようである。そこで、『富山県史 考古編』を開き、佐波期と並行関係にあり、最古の玉作集落跡としても知られる富山県上市町極楽寺遺跡の出土石器を当たってみることにした。ところが、極楽寺遺跡でも打製石斧の出土は報じていないのである。打製石斧は、磨製石斧や石鏃・石匙などと同様に、縄文時代では最も普遍的な石器だと思込みやすいが、実はそうではなく、多量の打製石斧が使われるようになるのは、中期以降の縄文人によるものであり、早期・前期段階では意外にも普遍的な道具ではなかったようである。つまり、旧石器時代末期や草創期の段階から、打製石斧に近い石器は存在するが、地域や時期によって消長があり、必ずしも無くてはならない石器にまでは至っていなかったようであり、北陸の佐波式土器期は、まさに打製石斧を使用しない時期だったのである。

通ジゾハナ村の縄文人は、土掘りをしなかったのだろうか。根菜類を食べなかったのであろうか。しかし、簡素なものとはいえ竪穴式の住居を建てているのだから、かなりの土工を行っていたことは疑えないし、素手での土掘りとは考えられない。とすれば、打製石斧以外の道具での土掘りだったと考えねばならない。木の板や掘り棒、カキなど大振りの貝殻なども候補に挙げられるが、考古学的に証明するのは難しい。佐波期遺跡からの出土石器の中で、土掘り具として使えなくはないのは、木工用とされる磨製石斧しか見当たらない。磨製石斧も柄との装着を鏃の形にすれば、土掘りに使えなくはない。しかし、磨製石斧は硬い石を丹念に研磨して作られ、打ち欠いて作る打製石斧に比べて、製作に手数と時間がかかる。土掘りのために磨製の道具は、少しそぐわない感じを与える。それに、佐波遺跡などでは指で摘める程度の小型石斧しか出ていないし、ジゾハナ遺跡でも小型石斧の占める率が高く、素直に木製品の加工具と考えるべきものが多い。

石川県の真脇遺跡、福井県の鳥浜貝塚、そしてマスコミを賑わしている青森県の三内丸山遺跡の発掘など多量の縄文情報が明らかにされて、縄文人の生活の大部分が解明されているような印象を与えているが、実はまだまだ厚いベールに包まれている部分が多い。縄文前期前葉の人々の土掘り法も、私にとっては大きな謎の一つである。

所長 橋本 澄夫

例 言

- 1 本書は石川県鹿島郡能登島町通地内に所在する埋蔵文化財包蔵地である、^{とおり}通ジゾハナ遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 通ジゾハナ遺跡の発掘調査は、石川県農林水産部耕地建設課（平成6年度から農村環境課）所管の広域営農団地農道整備事業（能登島第2地区）の施工に起因するもので、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査及び出土遺物整理、報告書刊行に係る費用は耕地建設課および農村環境課が負担した。
- 4 現地調査から出土遺物整理、報告書刊行に至るまでには下記の機関、個人の協力を得た。
石川県農林水産部耕地建設課（農村環境課）、石川県七尾土地改良事務所（平成8年度から七尾農林総合事務所）、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会、能登島町教育委員会、中島町教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団、新潟県巻町教育委員会、岐阜県教育委員会、名古屋大学、セントラル航業株式会社、富国建設株式会社、浅野豊子、浅野良治、池田恵子、内堀信雄、大藪智子、加藤三千雄、春日真実、河合忍、小島和夫、斎藤幸恵、関森香住、千場勉、ディーン・グッドマン、寺崎裕介、細口喜則（故人）、前山精明、三鍋秀則、宮田進一、山本直人、山本正敏、渡辺誠（個人名五十音順、敬称略）
- 5 通ジゾハナ遺跡の発掘調査は現地調査を平成3年度に実施し、現地調査終了後、引き続き出土遺物整理を実施し、平成8年度に報告書を刊行した。内容、費用は下記の通りである。

平成3年度	内容	現地調査、出土遺物整理（洗浄）	費用	28,913,000円
平成4年度	内容	出土遺物整理（記名・分類・接合）	費用	1,070,000円
平成5年度	内容	出土遺物整理（実測・トレース）	費用	5,100,000円
平成6年度	内容	出土遺物整理（補足・追加）	費用	700,000円
平成7年度	内容	出土遺物写真撮影、原稿執筆・編集	費用	635,000円
平成8年度	内容	報告書印刷、刊行	費用	2,495,000円
- 6 発掘調査出土遺物の整理については、平成3～5年度は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に作業を委託して行い、平成6年度は石川県立埋蔵文化財センターの直営で行なった。
- 7 本報告書の作成にあたっては、山本直人氏（名古屋大学専任講師）には石器石材について、河合忍氏（富山大学大学院生）には弥生時代以降の土器・陶磁器について玉稿を賜った。記して感謝したい。
- 8 本報告書の執筆は、第3章第3節3を河合忍、第4章第2節を山本直人が行い、遺物観察表は浅野良治（富山大学学生）、河合忍が作成した。その他の執筆、出土遺物の写真撮影、写真図版の作成、編集は安が行なった。
- 9 本文・図版・挿図についての凡例は下記の通りである。
(1)方位は座標北を指し、座標は国土座標第Ⅶ系に準拠している。(2)水平基準は海拔高で示している。(3)挿図の縮尺は図内に示した。(4)土層図・断面図について地山はLETRASET SCREEN-TONE No.433（レンガ）、地山でない面は同No.1071（万線）で示した。図版の出土遺物の縮尺は不同である。(5)出土遺物番号は挿図・図版で共通している。(6)注、引用・参考文献は第4章第2節のみ節末に、それ以外は一括して巻末に示した。
- 10 発掘調査で得られた記録資料、出土遺物は石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

報告書抄録

第1章 位置と環境	1
第1節 能登島	1
第2節 七尾湾岸域	4
第2章 経緯と経過	5
第1節 経緯と経過	5
第2節 現地調査日誌抄	7
第3章 遺構と遺物	9
第1節 概 要	9
1 地形と層序	
2 遺構の概要	
3 遺物の概要	
第2節 遺 構	14
1 竪穴建物	
2 土 坑	
3 集 石	
4 塚	
5 その他	
6 小 結	
第3節 遺 物	39
1 名称と記述	
2 縄文土器・土製品	
3 その他土器・陶磁器	
4 石器・石製品	
5 その他	
第4章 考 察	95
第1節 縄文前期の土器	95
第2節 通ジゾハナ遺跡の石器石材に関する一考察—輝石安山岩を中心に—	102
第3節 石器の組成—器種組成と礫石器石材について—	107
第4節 竪穴建物の構造	110
第5節 縄文前期集落の変遷	116
第5章 結 語	121

図版目次

巻頭図版 1

遺跡垂直写真

巻頭図版 2

上 遺跡遠景（西から）

下 遺跡遠景（南から）

巻頭図版 3

上 遺跡遠景（南から）

下 調査区俯瞰（東から）

巻頭図版 4

上 調査区俯瞰（西から）

下 調査区俯瞰（南から）

巻頭図版 5

上 2号堅穴建物（西から）

下 6号堅穴建物（南から）

巻頭図版 6

上 9号堅穴建物（南から）

下 10号堅穴建物（南から）

巻頭図版 7

上 堅穴建物群（南から）

下 出土石器・石製品

巻頭図版 8

小型打製石器に使用されている

石材の偏光顕微鏡写真

図版 1

上 調査前（東から）

下 調査前（取付道、北から）

図版 2

上 2・3号堅穴建物（西から）

下 5・7・15・16号堅穴建物（南から）

図版 3

上 堅穴建物群（南から）

下 堅穴建物群（南西から）

図版 4

上 1号堅穴建物（南から）

下 2号堅穴建物（西から）

図版 5

上 3号堅穴建物（西から）

下 4号堅穴建物（西から）

図版 6

上 1号堅穴建物土層（南西から）

中 2号堅穴建物土層（西から）

下 3号堅穴建物土層（南東から）

図版 7

上 5号堅穴建物（南から）

下 7号堅穴建物（南から）

図版 8

上 6号堅穴建物（南から）

下 12号堅穴建物（南から）

図版 9

上 9号堅穴建物（南から）

下 10号堅穴建物（南から）

図版10

上 集石（9号堅穴建物検出前、南から）

中 9号堅穴建物検出（南から）

下 9号堅穴建物土層（南から）

図版11

上 11号堅穴建物（南東から）

下 13号堅穴建物（南から）

図版12

上 11号堅穴建物・11号土坑検出（南から）

中 11号堅穴建物検出・11号土坑掘削
（南から）

下 11号堅穴建物・11号土坑土層（南から）

図版13

上 13号堅穴建物掘削（南から）

中 13号堅穴建物土層（南から）

下 13号堅穴建物土層（南西から）

図版14

上 14号堅穴建物（南から）

中 14号堅穴建物土層（西から）

下 14号堅穴建物出土の縄文土器（西から）

図版15

上 1・2号土坑（南から）

中 3号土坑（西から）

下 5号土坑（東から）

図版16

上 6号土坑（北から）

中 6号土坑出土の縄文土器（北から）

下 8号土坑（南から）

図版17

上 集石（A～I地点、南から）

下 集石（J～R地点、南から）

図版18

上 集石（A～R地点、南から）

下 集石（X地点、南から）

図版19

上 塚（北西から）

中 塚（東から）

下 塚拡張区（東から）

図版20

上 塚盛土土層（西から）

中 塚周辺土層（㊸地点、南から）

下 塚拡張区集石（西から）

図版21

上 調査後（東から）

下 調査後（取付道調査区、北から）

図版22

出土遺物(1)

図版23

出土遺物(2)

図版24

出土遺物(3)

図版25

出土遺物(4)

図版26

出土遺物(5)

図版27

出土遺物(6)

図版28

出土遺物(7)

図版29

出土遺物(8)

図版30

出土遺物(9)

図版31

出土遺物(10)

図版32

出土遺物(11)

図版33

出土遺物(12)

図版34

出土遺物(13)

図版35

出土遺物(14)

図版36

出土遺物(15)

図版37

出土遺物(16)

図版38

出土遺物(17)

図版39

出土遺物(18)

図版40

出土遺物(19)

図版41

出土遺物(20)

図版42

出土遺物(21)

報告書抄録

ふりがな	のとじままちとおりじぞはないせき							
書名	能登島町通ジゾハナ遺跡							
副書名	広域営農団地農道整備事業（能登島第2地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	河合 忍、山本直人、安 英樹							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	石川県金沢市米泉4丁目133番地							TEL 0762-43-7692
発行年月日	平成9年3月19日							
ふりがな	ふりがな	コ		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とおり 通ジゾハナ遺跡	いせき いしかわけんかしまぐんのと 石川県鹿島郡能登 じままちとおりちない 島町通地内	17405	016	37度 07分 59秒	136度 54分 36秒	19910502～ 19911022	3,200	農道整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
通ジゾハナ遺跡	集落	縄文時代前期	堅穴建物16軒 土坑11基 ピット8基 集石多数 塚1基	縄文土器 土製品 弥生土器 土師器 須恵器 珠洲焼 近世陶磁器 石器 石製品 ドングリ種実		北陸地方において、 多数の堅穴建物遺構 を伴う最古段階の縄 文集落の一つに数え られる遺跡。 植物食糧採集を主 な目的として季節を 限定して使用された 集落と推定。		

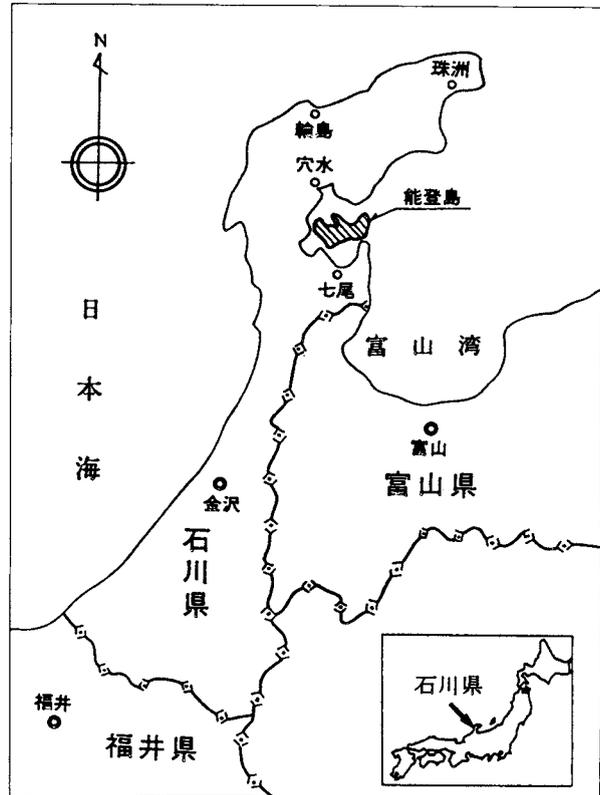
第1章 位置と環境

第1節 能登島

1 能登島の地形

本書で報告する通^{とお}ジゾハナ遺跡は、石川県鹿島郡能登島町通地内に所在する。能登島町は能登半島の東岸部、すなわち内浦のほぼ中央に深く入り組んだ七尾湾内に浮かぶ能登島と周囲の小島を町域とし、面積は47.45km²を測る。東西に長い能登島は、最高所が四村塚山の標高196.8mに過ぎない低山地と海成丘陵が大半を占めている。海岸部ではリアス式に入江と岬が多く連なり長大な海岸線が形成されるが、その大半は岩礁や断崖である。島内に規模の大きい河川が存在しないことから、砂泥が堆積する機会が乏しかったようであり、低地や平野はきわめて狭小で、砂浜や砂丘はほとんど発達していない。

通ジゾハナ遺跡が位置する能登島の西部は、最高所が標高48mと島内でも特に傾斜が緩やかな海成段丘で構成され、^{しぎしま}嶋島入江によって深く抉られた、半島のような形状をとっており、西島と通称されている。通ジゾハナ遺跡は西島において能登半島との海峡部となる三ヶ口瀬戸に突出する丘陵に立地している。「ジゾハナ」は付近の地名である地蔵鼻に由来し、「ハナ」は海岸の突出をあらわすものである。なお、付近一帯は国定公園の指定を受ける景勝地となっている。

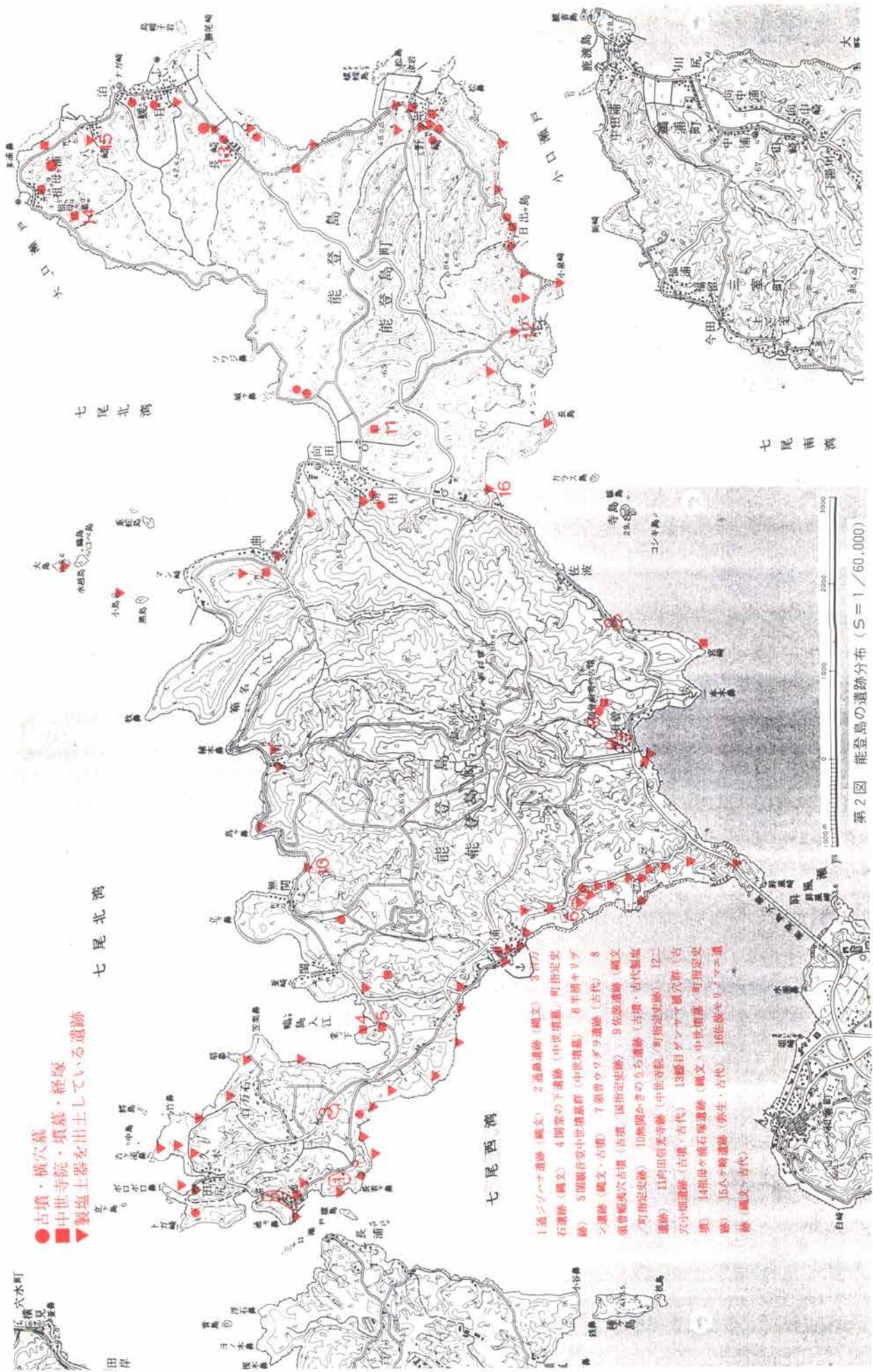


第1図 能登島の位置（『能登島町史』に加筆転載）

2 能登島の遺跡（第2図）

島内の遺跡は海岸や、海岸に近接する丘陵・山地裾で多く発見されている。ほとんどの遺跡で製塩土器が出土しており、中には無関かきのうら遺跡¹（10）のように古墳時代から古代にかけて連綿と営まれた製塩遺跡も見られ、大きな特徴といえる。これは石川考古学研究会が行なった生産遺跡分布調査をはじめとする精力的な海岸部の踏査の成果と言え、古来より海洋資源に多くを依存した人々の生活を窺うことができる。山間部については遺跡数が少ないが、踏査があまり進んでいないこともあって、その実態は不明である。

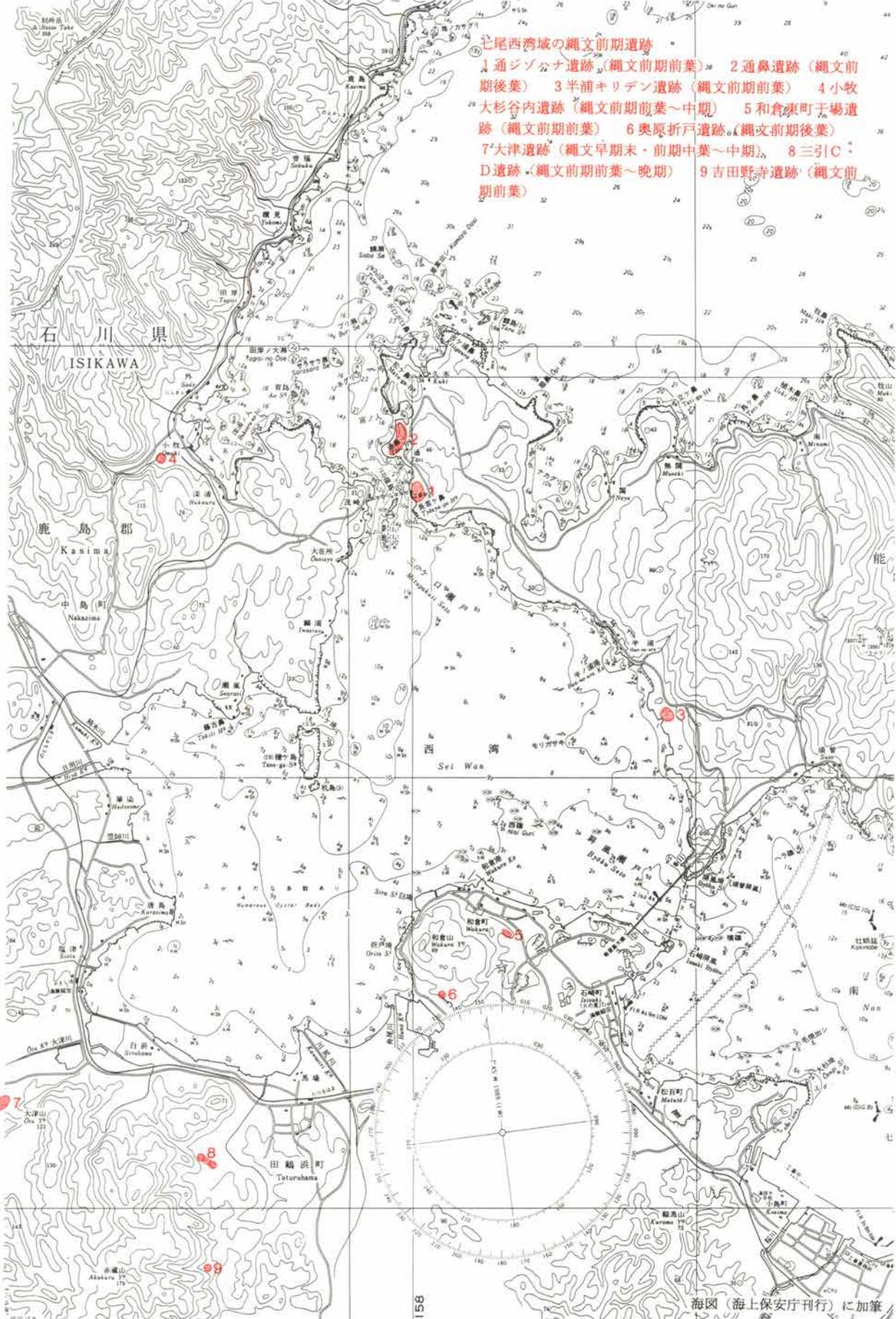
時代別では縄文時代は前期の遺跡が多く、本遺跡（1）の他、通鼻遺跡²（2）、半浦キリデン遺跡³（6）、佐波遺跡⁴（9）があげられる。弥生時代は中期の絵画土器が出土した八ヶ崎遺跡⁵（15）等があるが、確認されている遺跡数は少ない。古墳時代は須曾蝦夷穴古墳（8）等の後期古墳、鰻目ゲンヤマ横穴群⁶（13）等の横穴墓が多く確認されている。古代は製塩遺跡を除けば、奈良時代の掘立柱建物等を検出した須曾ウワダラ遺跡⁷（7）があげられる程度である。中世は多数の墳墓の他、寺



第2図 能登島の遺跡分布 (S=1/60,000)

- 古墳・横穴墓
- 中世寺院・墳墓・経塚
- ▲ 製塩土器を出土している遺跡

- 1 高シノハナ遺跡 (縄文)
- 2 通島遺跡 (縄文)
- 3 山ノ下遺跡 (縄文)
- 4 開堂の下遺跡 (中世墳墓、町指定史跡)
- 5 開眼音堂(中世墳墓群 (中世墳墓))
- 6 平瀬ナリテ遺跡 (縄文、古墳)
- 7 須賀ウツタ遺跡 (古代)
- 8 須賀高穴古墳 (古墳、国指定史跡)
- 9 佐波遺跡 (縄文、町指定史跡)
- 10 無間かきのら遺跡 (古墳、古代製塩遺跡)
- 11 日向須光寺跡 (中世寺院、町指定史跡)
- 12 穴小畑遺跡 (古墳、古代)
- 13 殿目ザンヤン遺跡 (古墳、中世墳墓、町指定史跡)
- 14 組申ヶ浦石塚遺跡 (縄文、中世墳墓、町指定史跡)
- 15 ハゲ崎遺跡 (弥生、古代)
- 16 佐波キリノエ遺跡 (縄文、古代)



第3図 七尾西湾域の縄文前期遺跡 (S = 1/70,000)

院、経塚など宗教・信仰に関係の深い遺跡が多く確認されている。能登島の遺跡は正式な調査例が少なく、詳細が不明なものが多い。特に集落遺跡の実態は時代を問わず不明確である。

第2節 七尾湾岸域

1 湾岸の地形

能登島は北、西、南の三方を七尾湾を隔てて能登半島と対面している。七尾湾には、西に三ヶ口瀬戸と屏風瀬戸、東に大口瀬戸と小口瀬戸という、能登島と能登半島との海峡が存在しており、湾内を北湾、南湾、西湾に区切り、東は富山湾に通じている。湾内は概ね波穏やかで浅く、大橋の架橋前までは、大小の船舶を利用した移動が容易で、対岸との往来も著しかった。能登半島と能登島の両岸では、海岸から目視可能な範囲、すなわち南湾、北湾、西湾それぞれを囲む地域としてのまとまりが明瞭に認められる。能登島は西湾域、北湾域、南湾域といった地域圏を通して、対面する能登半島との関係が深く、離島という閉鎖的な条件を超越した地域と言えよう。

通ジゾハナ遺跡が位置する西湾域は、湾内でも最も浅く、水深は最大でも10m程度に過ぎないが、遺跡が直面する北湾との海峡部は深く、潮流も速くなっている（第3図）。

2 縄文前期の湾岸域

では、西湾域、北湾域、南湾域といった地域圏はいつごろ成立したのだろうか。七尾湾岸における人々の活動は、縄文時代早期以前にも断片的に見られるが、資料が揃ってくるのは前期以降であり、前期前葉に遺跡数が急増する。七尾西湾域では島側で本遺跡と半浦キリデン遺跡、半島側で田鶴浜町に大津遺跡、三引C・D遺跡⁸や吉田野寺遺跡が確認される。北湾域では能都町に真脇遺跡、姫西上野遺跡⁹、田ノ浦コヤダ遺跡¹⁰、穴水町に甲・小寺遺跡、中島町に小牧大杉谷内遺跡¹¹、南湾域では佐波遺跡、七尾市の水上六郎谷遺跡¹²等の、湾岸に点在する分布状況が示される。この段階に遺跡数が増加する傾向は県下でも普遍的であるが、七尾湾岸域では特に卓越している。

縄文前期の遺跡は島側では海岸部に、半島側では海岸部から内陸部に分散して見られる。半島側には、各地域に存在する中小河川の沖積作用により、流域には小規模ながら平野が開けているが、ごく最近に灌漑や干拓が進み安定する以前は、河口に発達した潟湖や沼沢を通してかなり汽水域が入り込んでいた。三引C・D遺跡、大津遺跡、吉田野寺遺跡等はやや内陸部に位置するものの、縄文海進の影響が強い前期段階は汽水域に直面するか近接していた景観が想定され、現在よりも海が近くに感じられたであろう。以上から、島側のみならず湾岸の各遺跡は概ね「海」を強く意識した立地をとることがわかる。ここで注目したいのが「舟」の存在である。福井県三方町の鳥浜貝塚では縄文前期の丸木舟が出土しており、発達した木工技術によって製作された丸木舟が内水面の移動に用いられていた¹³。おそらくは当地でも同様の舟を製作し移動手段とする活動が普遍化していたものと思われ、小湾岸を主な生活領域として山海の食糧の獲得や情報交換を行ない、時には富山湾方面へも漕ぎ出すといったような生活パターンが想定される。湾岸の人々の技術が、波風が抑制された湾内の穏やかな環境において発達したこの段階に、それぞれの地域圏が成立したのではないだろうか。

前期中葉以降、島側では遺跡の減少傾向が見られるが、半島側では真脇遺跡や小牧大杉谷内遺跡等が継続していき、前期後葉頃にピークを迎え、中期へ移行する。両遺跡が中小規模の河川の流域で山地にも湾にも近い位置という、資源の豊富な環境にあることを評価するならば、人口を維持し遺跡を維持させる条件が整った半島側に活動の拠点が移動していったものと考えられる。

第2章 経緯と経過

第1節 経緯と経過

はじめに

本書に報告する通ジゾハナ遺跡の発掘調査は、県農林水産部耕地建設課が所管し、県七尾土地改良事務所が施工する広域営農団地農道整備事業（能登島第2地区）に係るものである。この事業は能登島町、田鶴浜町、中島町のいわゆる鹿北三町を連結して七尾西湾域を周回する幹線道路を新設し、稲作、野菜、果樹、畜産等農業に関係する輸送条件を改善、体系的に整備する事を目的とするものである。能登島第2地区については能登島町通・中島町長浦間の海峡部の架橋を含む総延長5,055mについて計画策定がなされ、昭和62年度の着手、平成13年度の完了が予定された。

この事業に対して、耕地建設課、七尾土地改良事務所、県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、事業区域内の埋蔵文化財の保護について調整を行ない、区域内について事前に分布調査を実施する必要があること、その結果に基づいて再度協議を行なう事を確認している。以下、平成2年度の調査依頼から同8年度の報告書刊行に至るまでの経過について記す。

平成2年度¹⁴

鹿島郡能登島町通地内の事業区域については、平成2年4月に耕地建設課から埋文センターへ分布調査依頼があった。埋文センターは当該区域について平成2年10月4日に重機を使用して試掘調査を実施した。調査費用は耕地建設課が負担した。その結果、一部で遺構・遺物が確認され、遺跡の存在が確実となった。確認された遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地である、通ジゾハナ遺跡の一部と判断された。出土遺物は縄文土器、石器等縄文時代に属するものが主で、他に弥生土器、土師器が含まれており、いくつかの時代の複合も予想された。路線の変更は不可能であり、事前の発掘調査の実施が避けられない状況となった。埋文センターでは耕地建設課・七尾土地改良事務所と協議を重ね、平成2年度は既に埋文センターの調査スケジュールが決定しているため、翌平成3年度以降に発掘調査を実施する方針を確認した。

平成3年度¹⁵

通ジゾハナ遺跡の発掘調査については、平成3年4月11日付けで耕地建設課から依頼があり、埋蔵文化財センターは5月から9月までの現地調査を計画し、耕地建設課に回答した。

現地調査は平田天秋（当時埋文センター調査第一課長）の統轄、中島俊一（同主査）の指導の下で、垣内光次郎、安英樹（同主事）が担当し、川畑誠（同主事）、松田英博、田畑弘（同調査補助員）の助力を得た。作業には下記の方々の参加があった。

藤井一郎、岩政竹男、坂本あさの、藤井しづ江、蔵谷多吉、蔵谷すずか（通地区）、中村重松、中村きみ、藤井ハナ子、藤井 春、田本たかの、浜本澄子、池田すずえ（久木地区）、中村ゆり子、林 竹男、林 まさ子（田尻地区）、龍満一男、丸山高弘（百万石地区）、蔵田よしの（半浦地区）、玉川美津枝（別所地区）、長谷部エイ子（須曽地区）、藤井大輔、林 勝、新木博英（学生）

調査着手前に土地改良事務所担当者と確定した工事設計図面をもとに打ち合せを行なった。その際、周辺道から本線への取付道路の設置区域についても調査が必要であることが判明し、当初約2,500㎡と予定していた調査面積が約3,200㎡に増加した。現地調査には平成3年5月2日から着手した。

調査が進むにつれて、縄文時代前期の堅穴建物を中心とした密度の高い遺構群の存在が明らかに

なった。加えて前述した調査面積の増加、夏期の天候不順、秋期の台風19号による建物倒壊など諸々の要因から、予定していた期間内での終了が困難になった。七尾土地改良事務所では調査区の本線東部から取付道路部分について、調査終了後すぐに仮設道とし、橋脚に着工するための工事用道路として使用する予定であり、調査の遅れが工事行程に影響を及ぼす可能性があった。この問題については埋文センター・土地改良事務所間で協議した結果、調査がほぼ終了した調査区の東部の一部について9月中に埋め戻して工事用の仮設道設置、その他の調査区については期間を延長して調査を継続することに決定した。発掘調査区の図化は、調査区南部で検出された集石に詳細図化が必要と判断し、空中写真測量を撮影を2回に分割して実施した。9月末には一部調査区を工事業者に引き渡し、10月22日には全ての現地調査を終了した。

冬期は空中写真測量図の校正作業、出土遺物の整理作業を行った。出土遺物の整理作業は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して、洗浄作業のみ行っている。出土遺物のうち縄文土器については、非常に脆弱であるため、バインダー溶液（濃度30～50%）で補強しながら洗浄を行なっている。

なお、この年度には石川県遺跡地図が全面改訂されており、それに伴って通ジゾハナ遺跡の遺跡Noが（旧）6321から（新）35016へ変更になっている。

平成4年度¹⁶

平成4年度は、主に出土遺物の記名、分類、接合を行った。作業は社団法人石川県埋蔵文化財保存



第4図 道路路線と遺跡の位置 (S=1/12,500)

協会に委託して、平成5年1月11日から同年3月30日まで行っており、協会職員の尾田裕子、松田智恵子、竹内弘美が担当した。

平成5年度¹⁷

平成5年度は、主に出土遺物の実測、遺物・遺構実測図のトレースを行った。作業は平成4年度と同じく、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して、平成5年9月6日から同年1月28日まで行っており、協会職員の辻森由美子、横山そのみ、尾崎昌美、小谷紀美子が担当した。

平成6年度

平成6年度は出土遺物の実測、遺物・遺構図トレースを若干追加して行った。作業は石川県立埋蔵文化財センターの直営で行っており、大藪智子が参加した。

平成7年度

平成7年度は遺物写真の撮影、原稿執筆、挿図・図版作成、編集を行った。本来はこの年度で発掘調査報告書の印刷・刊行も行なう予定であったが、作業に予想以上に時間がかかり、担当者が冬期に他遺跡の出土遺物整理に従事していたことともあわせて、業務の完了が困難になった。よって農村環境課、七尾土地改良事務所と協議の結果、報告書の印刷・刊行は翌年度に行なうことに決定した。

平成8年度

平成8年度は発掘調査報告書を印刷し、刊行した。

第2節 現地調査日誌抄

5月7日(火)～5月17日(金)

バックホーにより調査区の表土を除去する。

5月14日(火)晴

発掘調査器材を搬入する。

5月20日(月)曇後晴れ

調査区の東から包含層の掘削を始める。並行して塚周辺の精査作業を進める。

6月3日(月)～6月4日(火)

中島俊一、川畑誠、田畑弘、松田英博の助力を得て、塚の平板測量作業を行う。

6月7日(金)晴

マイアミ大学地質音響研究所中島研究室のディーン・グッドマン氏に塚の地中レーダー探査を行ってもらう。

6月26日(水)曇後晴

包含層の掘削がほぼ完了したので、谷の周辺から遺構検出作業に入る。

8月14日(水)～8月18日(日) お盆休み

8月19日(月)晴

調査区西端部に竪穴建物を検出し、掘り下げる。本書の2号・3号竪穴建物である。時期は、出土土器から縄文前期と判明した。



試掘調査



竪穴建物の調査

8月20日(火)～8月23日(金)

調査区東端の塚に接する農道を人力で掘り下げ、塚の伸びを確認する。

8月27日(火)～9月6日(金)

調査区中央部から西部にかけて遺構検出を行ったところ、多数の竪穴建物が切り合いながら確認され、順次掘り下げ・土層断面実測を行う。時期は前と同じく縄文前期のようである。

9月9日(月)～9月16日(月)

塚のたちわりを行う。盛土の下から硝子製の薬瓶が出土し、近世以降の時期と判明した。

9月18日(木)曇

調査区内を清掃し、ヘリコプターからの空中写真測量を行う。

9月25日(木)曇

集石の細部図化のため、ラジオコントロールヘリコプターからの空中写真測量を行う。

9月28日(土)晴

前夜北陸を通過した台風19号による暴風で、仮設建物が倒壊し、器材が散乱した。このため、急遽現地へ出向き、作業員の方々と終日応急処置にあたった。

9月30日(月)～10月4日(金)

台風禍への対応に追われながらも、並行して集石の除去、下層の遺構検出作業を進める。

10月8日(火)曇り時々晴れ

ふたたび仮設建物が建てられ、作業も円滑に進む。台風騒動もようやく一段落である。

10月9日(水)～17日(木)

集石の下層に竪穴建物が確認され、掘り下げていく。これ以降は新たに確認した9・11・13・14号竪穴建物の掘り下げ・土層断面実測・平面実測・写真撮影作業を主に行なった。

10月18日(金)晴

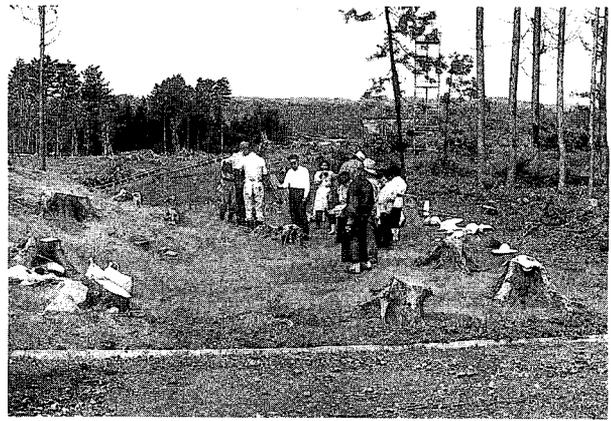
報道機関向けの現地説明会を行う。

10月19日(土)雨後時々曇

天気は雨模様であったが、一般向けの現地説明会を決行した。運よく、説明会の間は晴れており、30名近く参加者があった。

10月22日(火)晴

現地調査が終了。器材をまとめて、埋蔵文化財センターへ撤収した。



塚のお祓い



台風禍



現地説明会



出土遺物整理

第3章 遺構と遺物

第1節 概要

1 地形と層序

通ジゾハナ遺跡は、能登島の西部、通称西島に位置し、能登半島との海峡に突出する丘陵上に立地する。周辺の地形は、入江と標高20m程度の岬状に突出する低位丘陵が連続して海岸線を形成していくことに特徴があり、遺跡付近では、現在通地区漁港となっている入江の南に長者ヶ鼻、北には通り鼻と通称される低位丘陵が展開する。「ハナ」は海岸の突出を表すようである。通ジゾハナ遺跡が立地する丘陵は、長者ヶ鼻の北に小谷を挟んで展開しており、その通称である地藏鼻は、遺跡名「ジゾハナ」の由来である。

発掘調査区は、東西約150m、南北10～30mの道路本線部分、この南に南北約40m、東西10～20mの取付道路部分が加わり、全体として鈎の手状の平面形となる。調査区は丘陵の南斜面に相当する。調査区の大部分は南向きの緩斜面で構成されるが、中央やや東よりに北東・南西方向に走る谷地形が存在し、その東西を地形的に分断する。本線部分は東西方向の長軸が斜面の等高線にほぼ沿っており、標高9～12mの等高線間にほぼ相当する。取付道路部分は谷地形の西岸肩部に相当し、南北方向の長軸が流路にほぼ沿う。丘陵斜面の傾斜は全般に緩いが、調査区西部ではより安定しており、概ね水平方向10mに対して垂直方向1m程度である。調査区東部では谷地形の東岸に段が確認され、標高にして1m以上の立ち上がりが見られる。以下では高い方を上段、低い方を下段と称する。上段では南壁側に塚の高まりが見られる他は、標高が11.5m前後にほぼ揃うほどに著しく平坦化している。

なお、丘陵一帯は、今回の調査時点まで自然な状態が保たれていたわけではない。近現代に開墾され、畑地となったのち植林地となっていたようであり、その際に全体的に削平、攪乱を受けている。特に谷の東岸の段、段以東の平坦地はその際の造成による人工的な地形である可能性が高かろう。谷の中には流路に沿った方向に水道管が埋設され付近の民家に給水している。また、丘陵の西端の湾に臨む部分は、戦後に石材採取のため掘削されて、深く大きい穴となっており、その崖面を調査区の西端としている。

遺跡の層序は調査区北壁について約10mの間隔で、西から順に①～⑮の柱状図を記録した(第7・18・21図)。基本的には第1層表土、第2層黄茶褐色粘質土、地山とまとめることができ、第2層が遺物包含層となる。地山面の標高は12m前後を測る⑥地点が最も高く、ここから東・西・南の三方へ落ち込んでいる。但し東側は谷地形を越えるとまた盛り上がりが見られる。第2層は地点によって異なるが10～20cm程の層厚を測る。含まれる遺物が少ないことや、強い削平を受けていると見られる⑭地点や⑮地点ではごく薄いかとぎれていることから、全体的に後世の開墾でかなり影響を受け変質したようである。⑩～⑫地点は谷地形の土層である。⑩・⑪地点は谷西岸肩部の土層であり、地山面の標高が周囲より下降する。⑩地点では他地点の遺物包含層に対応する層2の下位に層3～5の黒褐色粘質土が堆積しており、縄文時代の遺物が出土している。その他の遺構覆土とは異質であり、谷堆積土と判断される。⑪地点はより谷中央部に近いため、深くなっているが、堆積土に混じりが多く、しまりも悪い。攪乱を受けているものとする。⑫地点は谷中央部の土層であり、層2の下位に層3・4の地山質土、層5～7の暗褐色・黒褐色の粘土が堆積し、さらに下位へ続いている。標高9m前後まで掘削したが地山は確認できなかった。層6・7は湧水層となるようであり、礫が含まれるが、遺物は出

土していない。おそらく谷は遺跡が成立する以前にこのあたりまで既に埋没し、かなり浅くなっていたと思われる。⑬地点は東側の段部分である。表土下の層2～4は地山質の盛土と思われ、段を整えて強調しているものと思われる。層5・6は自然堆積と思われ、これら堆積層を除去すると段はほとんど目立たなくなってしまう。後述するが、地山質の盛土はより東側の平坦地の削平や、塚の構築に深く関係するもので、時期的には縄文時代より新しいものと思われる。

2 遺構の概要

発掘調査の結果、遺構としては竪穴建物、土坑、ピット、集石、塚を確認した。

竪穴建物はプランや規模が明確でないものを含めて、合計して16軒を確認している。調査区内での分布は南向きの緩斜面の標高10～12mの等高線間で、谷の西岸側に集中している。最も密集するブロックでは5軒から7軒が重複して検出されている。谷の東岸側で確認したのは4号竪穴建物の1軒のみである。出土遺物からそれらの多くが縄文時代前期に属する遺構と判明している。

土坑は11基を確認している。ピットはきわめて多く確認しているが、遺物を出土した8基についてのみ、番号を付けて数えた。これら以外のピットは浅く不整形なものが大半であり、木根が多いものと思われる。

集石は密集して検出された礫を指す。その範囲は礫の疎密にばらつきがあって一様に捉えにくい。谷から西側の標高10.5～12mの等高線間を中心にして、調査区内でかなり広く認められる。縮尺1/10で別途測量図化を行っており、密集度の高い部分については断面図を作成している。竪穴建物等、他遺構と重複する場合は、その上面に位置することが多く、より後出的な存在であることが明確である。集石密度が低いものについては、調査時に識別しえたかどうか確かでない。遺物は覆土に縄文土器が含まれ、集石そのものに石器が用いられていることもある。

塚は調査区の東端南壁側で盛土を確認した。当初は古墳の可能性も考えられ、地中レーダー探査も実施して調査を進めた。最終的には盛土を断ち割って近代以降の時期と旧表土を確認した後、旧地表面の精査を行なうため除去している。旧地表面に遺構は確認できなかった。

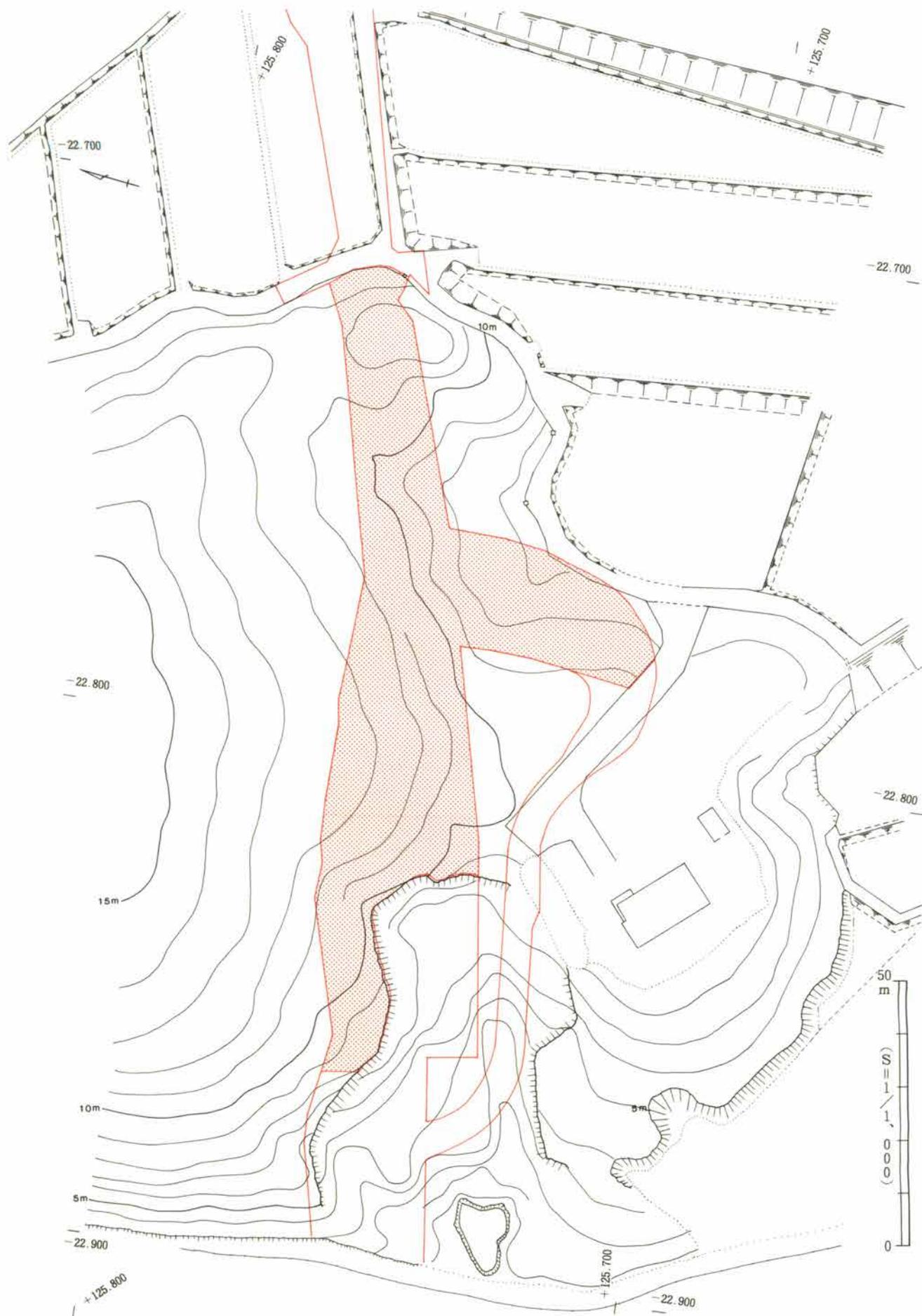
この他、不整形な落ち込みをいくつか確認している。おそらく風倒木の類であろう。

3 遺物の概要

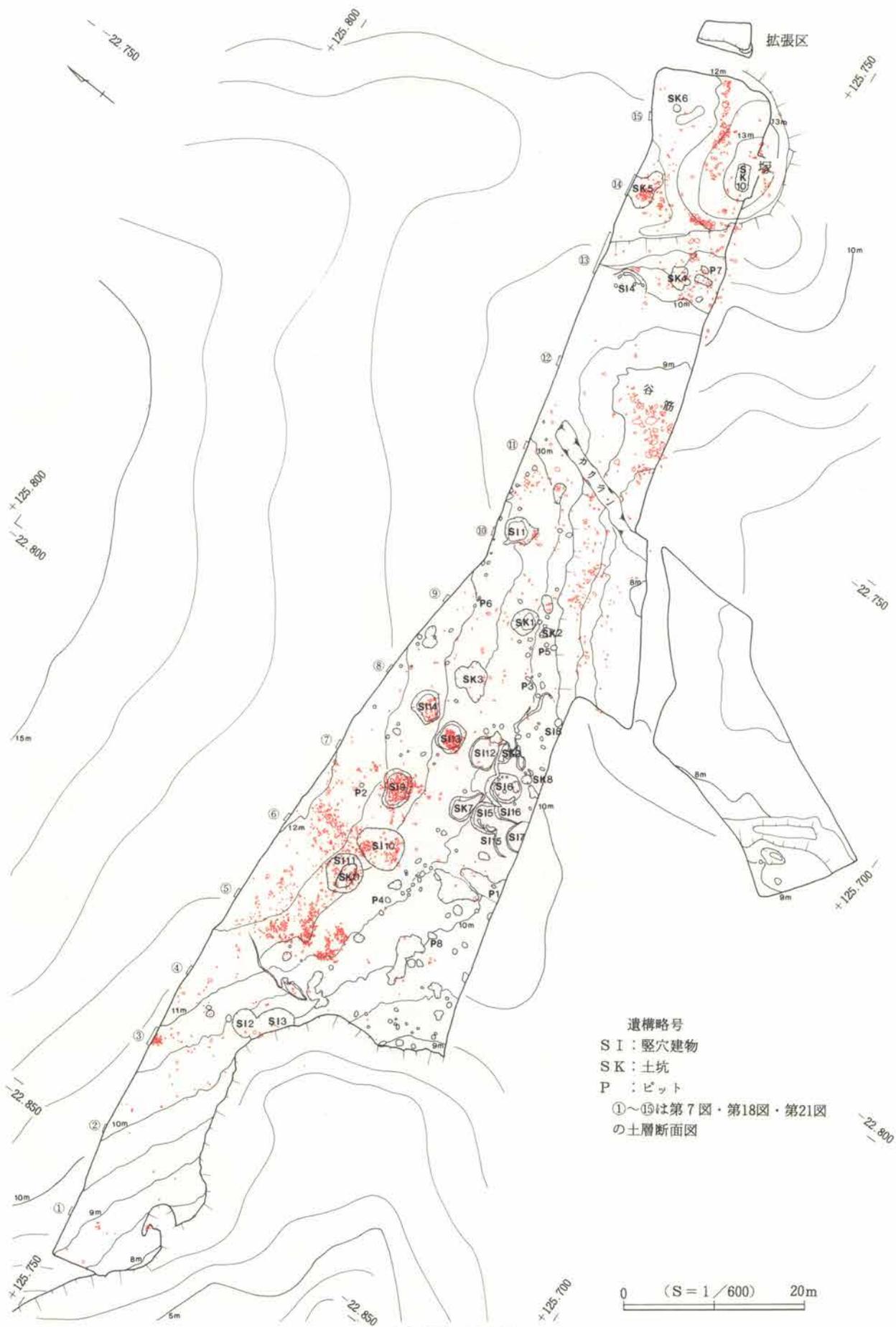
遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、近世陶磁器、石器、石製品の他、自然遺物としてドングリ種実が出土している。遺物の中心は縄文土器と石器である。縄文土器は前期に位置付けられるものが大半を占め、後期が少量ある。その他の時期の縄文土器はごく散発的に出土する程度である。弥生土器は中期のものが定量ある程度で、後期のものは少ない。古墳時代以降の遺物は古代、中世、近世の各時期を通してごく少量出土している程度である。

遺物は竪穴建物や集石などの遺構の覆土や、谷の堆積土に比較的多く含まれていた。包含層からの出土は、前述したような遺構や谷の周辺がより多い傾向があった。また、調査区外から定量の遺物が表面採集されている。調査区北方の丘陵頂部側で多く、南方の谷側では少なかった。また、調査区北方では五角形石鏃や完形の块状耳飾等が採集されており、調査区とやや様相を異にする。

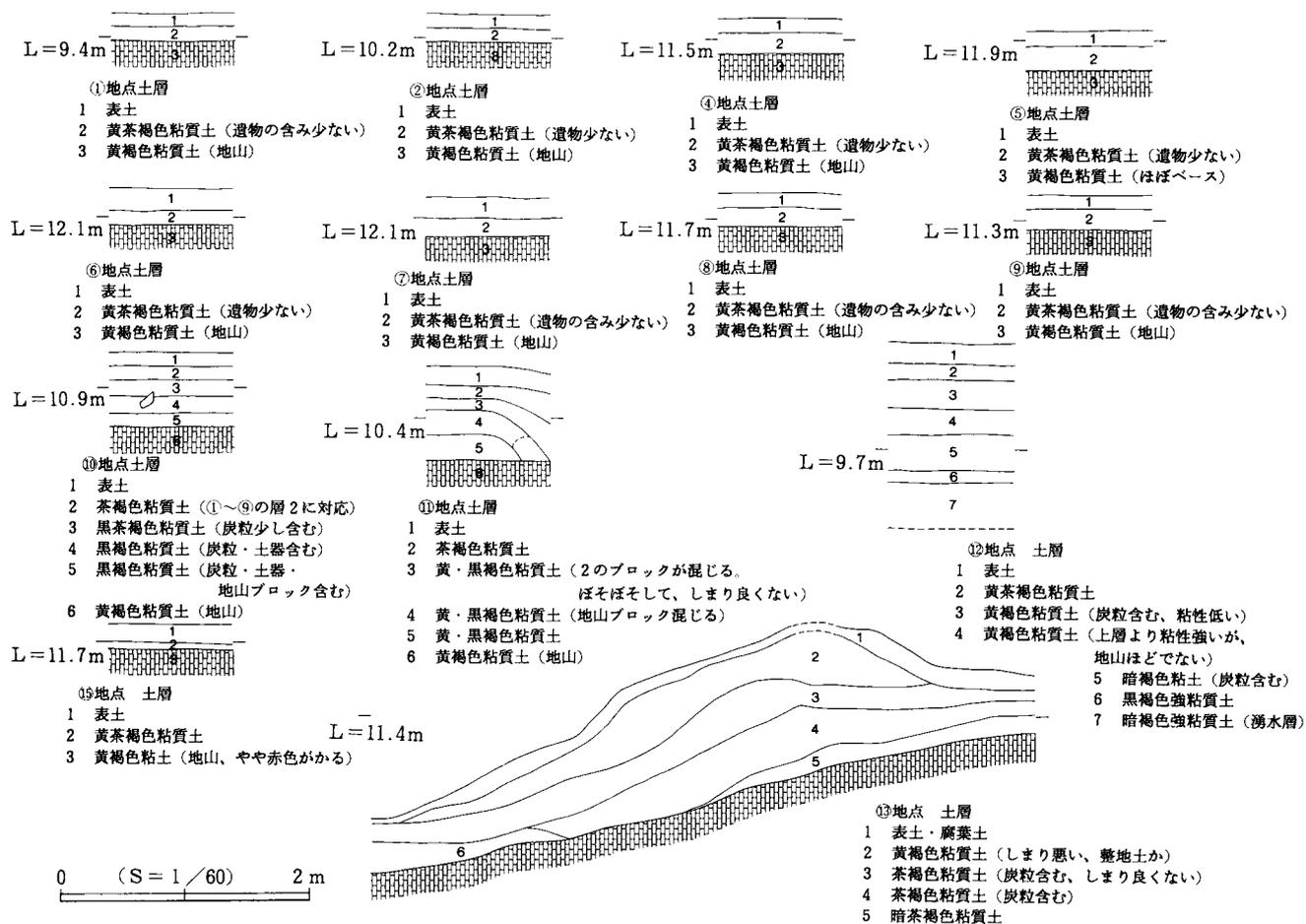
遺物総量はパンケースで24箱に上る。内訳は縄文土器が15箱、石器が8箱で主体となり、その他の遺物が1箱である。



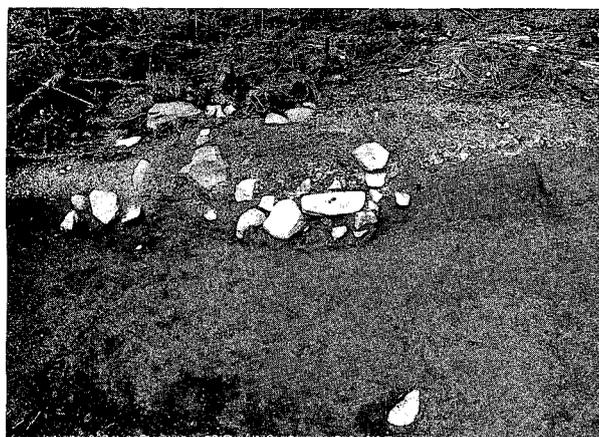
第5図 調査区の位置と地形



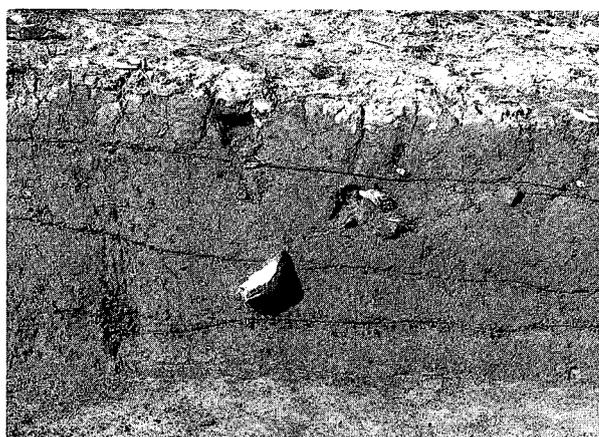
第6図 調査区全体図



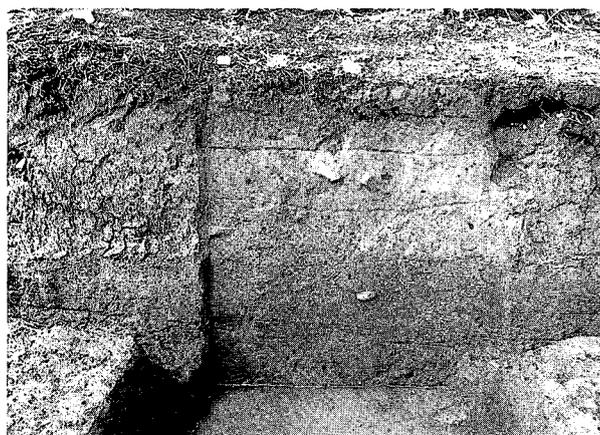
第7図 調査区の層序



③地点



⑩地点



⑫地点



⑮地点

第2節 遺構

1 竪穴建物

1号竪穴建物（第8図、図版4・図版6）

調査区のほぼ中央で、谷の西岸に位置する。谷に近接した標高10.25mと10.5mの等高線間の緩斜面に築かれた竪穴建物である。平面形は隅丸四角形で、辺を方位に対して約45度振る。傾斜に沿う北東・南西辺が2.55～3.1m、交差する南東・北西辺が2.4～2.75mを測る。壁は、概ね丘陵頂部へ向かう北側が立ち上がりが強くて深さ36～41cm、谷へ向かう南側が弱くて深さ10cm程度である。南コーナー部分は特に浅く、立ち上がりが不明確であるが、谷へ張り出して広がっているようにも見える。

床面には壁溝、ピットが存在している。壁溝は北西・北東・南東の3方で見られる。床面から2cm程度の深さに過ぎない、浅い溝である。ピットは遺構ほぼ中央にある長径約40cmほどのものをはじめとしてその周囲に同規模のものがいくつかあるがどれも浅くてはっきりしない。一方で、壁溝と壁の境目部分、及び壁溝の見られない南西壁では床面との境目部分に一回り小さいピットが多数確認されている。径10～15cm程度の規模で斜め外方に向けて10cm前後掘り込まれる小ピットであり、北西壁においては30cm前後のほぼ等間隔で10基以上認められる。なお、南東コーナー部では細かい礫が見られるが、地山に含まれる自然礫が竪穴の掘削で露出したものと思われる。

遺構覆土は12層に分層される。各層は概ね高所から低所へ流れ込むように堆積しているが、上位ほど暗く、灰色がかった色調を呈している。床面直上の層9～12は埋没初期の堆積層であるが、この段階では竪穴建物の機能を失うには至っていないと思われる。層9は焼土粒、層10は炭化物を含んでいる。層11は壁際の小ピットの位置にあたり、その覆土の一部と思われる。遺構の検出面となった層1・2・4・5・12の上面はかなり削平を受けているようであり、その堆積過程は不明確である。

遺物は、覆土から縄文土器、石器（すり石）が出土しているが、量的にはごく少ない。

2号竪穴建物（第8図、図版4・図版6）

調査区の西側に位置し、丘陵の南斜面と西斜面の境界になる標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面に築かれる。平面形は隅丸四角形で、辺をほぼ東西南北に揃える。傾斜に沿う東西が2.8m、交差する南北は南辺を3号竪穴建物と重複するため正確ではないが、辺の描くラインを見る限りほぼ近い数値であろう。北辺は風倒木痕と近接、重複しており、南辺は3号竪穴建物と重複している。先後関係については、2号竪穴建物が古いと考えており、その根拠は3号竪穴建物の項で述べる。壁は垂直に近い急な傾斜で立ち上がっており、深さは北壁で最大であり、約54cmに達する。

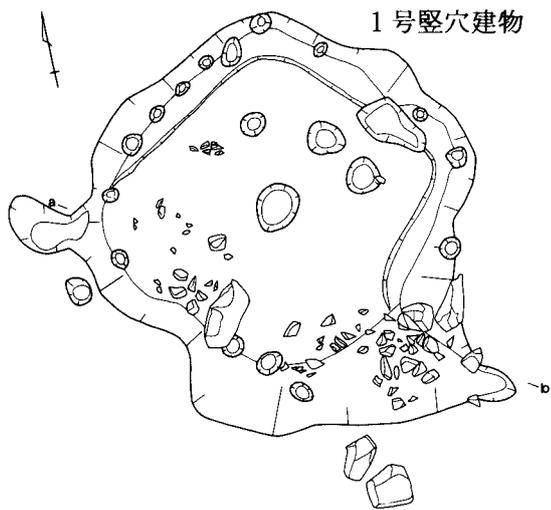
床面にはピットが複数存在している。ピットは遺構のほぼ中央とその周囲の壁際に見られる。中央の2基は、1基が径25cmで深さ15cmほど、もう1基は径15cmで深さ10cmほどのものである。壁際ではコーナー部分とその間で必ずしも等間隔ではないが見ることができ、ほぼ全てが斜め外方に掘り込まれる。径は10～20cm、深さは10～15cmと、中央のものよりやや小さめの傾向がある。南辺の位置と予想されるピットについては、3号竪穴建物と重複するため、どちらの建物に属するのか不明である。

遺構覆土は11層に分層される。堆積層は地山質の黄褐色粘土もしくは粘質土を基調とする下位の層4・6～11と、暗褐色もしくは茶褐色の有機質を基調とする上位の層1・3・5に大別され、前者である程度遺構が埋った後、後者が堆積している。層2はより新期の遺構覆土の可能性もある。

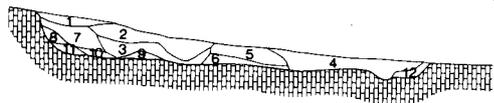
遺物は、覆土から縄文土器、石器（すり石・凹み石・石錘・剝片）が出土している。

3号竪穴建物（第8図、図版5・図版6）

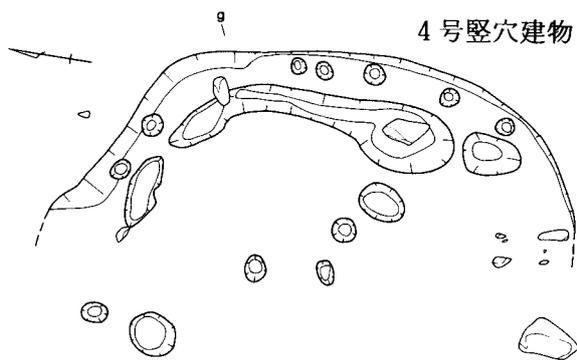
調査区の西側で、丘陵の南斜面と西斜面のほぼ境界に位置する。北東部で2号竪穴建物と重複して



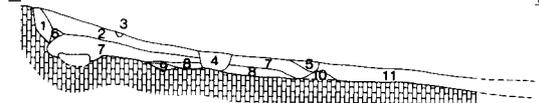
a L=10.7m



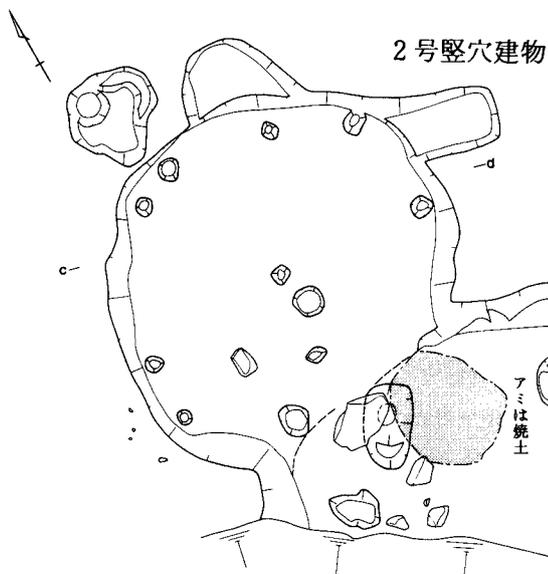
- 1号竖穴建物 土層
- 1 暗褐色粘質土
 - 2 灰褐色粘質土 (5~7に比べ、しまり弱い)
 - 3 黄灰褐色粘質土 (5~7に比べ、しまり弱い。地山土を少量含む)
 - 4 暗黄灰褐色粘質土
 - 5 暗灰褐色粘質土
 - 6 濁灰褐色粘土 (地山土を少量含む)
 - 7 明黄褐色粘土 (地山土を少量含む)
 - 8 黄褐色粘土
 - 9 茶褐色粘土 (焼土粒多く含む)
 - 10 濁暗褐色粘土 (炭化物多く含む)
 - 11 濁黄褐色粘土 (地山土粒多く含む)
 - 12 明茶褐色粘質土



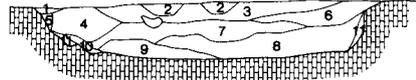
g L=10.5m



- 4号竖穴建物 土層
- 1 黄褐色粘質土 (地山よりやや暗い色調)
 - 2 暗褐色粘質土 (炭粒少し含む)
 - 3 黄褐色粘質土 (しまりが悪い、地山質の流土か)
 - 4 暗褐色粘質土 (炭粒ほとんど含まない、上層のビットか)
 - 5 暗茶褐色粘質土
 - 6 暗褐色粘質土 (しまり悪い、粘性低い)
 - 7 暗褐色粘質土 (炭粒多く含む)
 - 8 暗褐色粘質土 (炭粒、黄褐色土含む)
 - 9 暗褐色粘質土 (8より黄褐色土多く含む)
 - 10 黄褐色粘質土 (暗褐色粘質土細かく含む)
 - 11 暗茶褐色粘質土 (5と同質、炭粒含む)



c L=10.5m

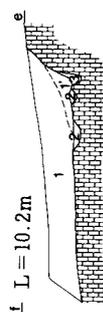


- 2号竖穴建物 土層
- 1 濁茶褐色粘質土
 - 2 濁暗黄褐色粘質土 (ビット覆土か)
 - 3 暗褐色粘質土
 - 4 黄褐色粘質土
 - 5 茶褐色粘土
 - 6 明黄褐色粘質土 (地山土少し含むが、炭粒等の混入少ない)
 - 7 濁黄褐色粘質土 (3に炭粒と焼土粒と地山土が混入したもの)

3号竖穴建物

- 3号竖穴建物 土層
- 1 暗褐色粘質土 (全体に炭粒と焼土粒を含む)
 - 1' 暗褐色粘質土 (炭粒・焼土粒の混入少ない)
 - 2 明黄褐色粘土 (炭粒を少量含む)
 - 3 濁黄茶褐色粘土 (地山土を多く含む)

- 8 黄褐色粘土 (地山土の混入多い)
- 9 明黄褐色粘土
- 10 濁暗黄褐色粘土
- 11 暗黄褐色粘土



f L=10.2m

0 (S=1/60) 2m

第8図 1~4号竖穴建物

おり、南半部は土取りされて残っていない。2号堅穴建物よりはやや低い、標高10m前後の緩斜面に築かれる。平面形は前述した事情により不明確であるが、唯一残る北東辺のラインが丸みを帯びることから、円形、楕円形、隅丸四角形等の形状が考えられる。傾斜に沿う東西最大辺で5.3mを測る。壁は辺の丘陵頂へ向かう部分ほど深くなり40cmほど、その逆は浅くなり24cmほどである。垂直に近い急な傾斜で立ち上がっており、深さは北側が最大で約54cmに達する。

床面には壁溝、ピットが存在している。壁溝は幅20cm、深さ6～7cmを測るが、辺の一部に部分的に見られるのみである。ピットは壁際で集中して見られるもの以外は、どれも不整形で浅い。壁際のピットは壁溝がある部分から東側にかけて見つかり、ほぼ全てが斜め外方に掘り込まれ、概ね径10～15cm、深さ10～15cmの範囲におさまる。ピット相互の間隔は、壁溝がある部分では50cm前後を測り、その東の壁溝がない部分では20～30cmと狭くなっている。

遺構覆土は4層に分層される。層2・3は壁溝とピットの覆土、層1'は層1とほぼ同質であるから、基本的には層1の暗褐色粘質土の単層で遺構がほぼ埋ったと思われる。層中には礫が少量含まれていた。また、土層図には現れないが、遺構西部の壁近くで焼土が確認されている。焼土は南北95cm×東西75cmの範囲で薄い面的な分布を示し、床面から数cm浮いた状態で検出している。遺構がある程度埋まった後の、焚き火等の小規模な火処によって形成されたものと考えられる。層1は2号堅穴建物の層3と同質であり、同時期の堆積である可能性が高い。層厚に差が見られるが、後世に上面を削平されれば十分に生じ得るのでそう大きな問題ではなからう。そして両層の堆積前の状況を考えると、2号堅穴建物は既に層4・6～11で半ば埋没しているのに対して3号堅穴建物は堆積土がない床面の状態にあるとすることができる。よって両遺構の先後関係については、2号堅穴建物が古いものと考えている。また、2号堅穴建物から3号堅穴建物への移行に際しては、2号堅穴建物がなかば埋没する程度の時間差を伴っていることも指摘できる。

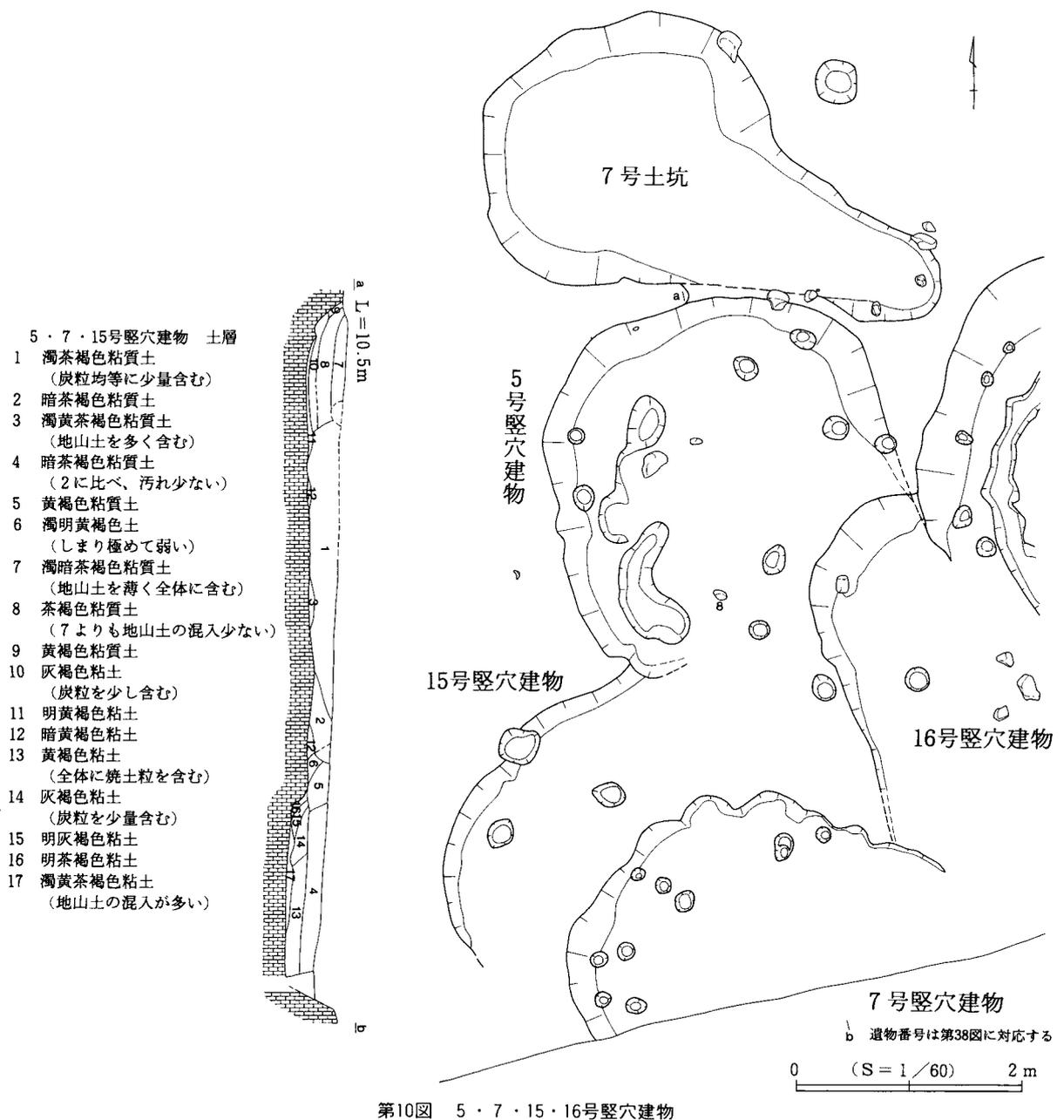
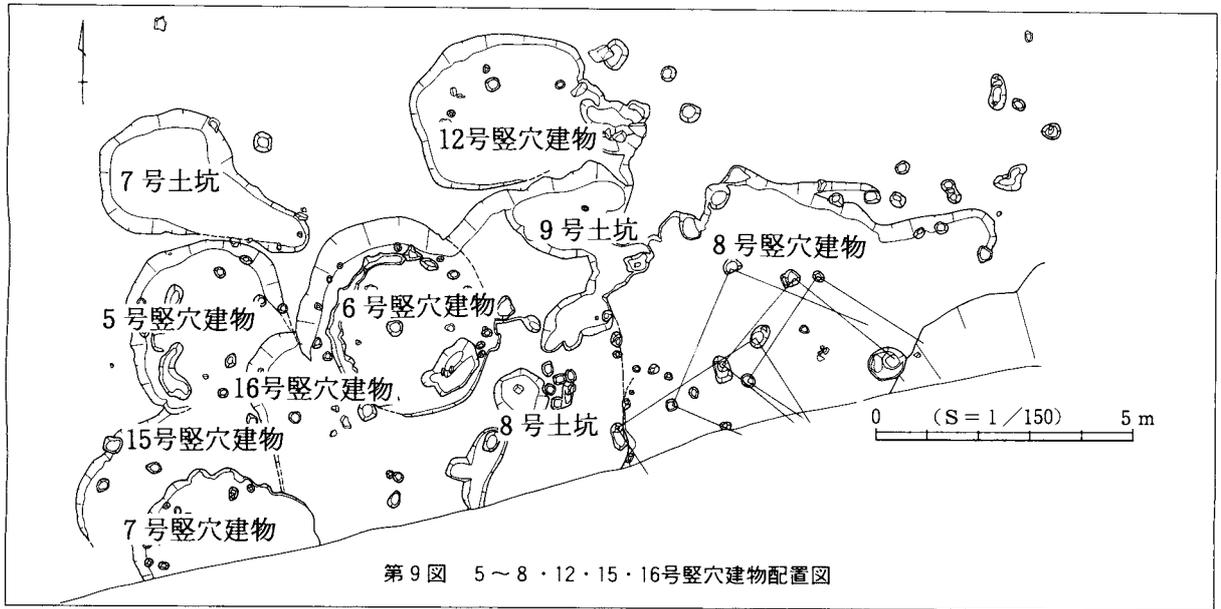
遺物は、覆土から縄文土器、石器（磨製石斧・すり石・凹み石・剝片）が出土している。

4号堅穴建物（第8図、図版5）

調査区の東部で、下段の谷に近接した位置にある。標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面に築かれている。上段側の東半部分しか検出できておらず、西半部分は谷へ流出したと思われる。唯一検出した東辺のラインは両端で丸みを帯びており、楕円形、隅丸四角形等の平面形状が考えられる。規模は、現存する東辺の最大長が約4mであり、少なくともそれ以上であろう。壁は東辺の中央部付近が急傾斜で約40cmの深さがあるが、両端に向かって緩やかで浅くなり、とぎれている。

床面には壁溝、ピットが存在している。壁溝は不整ながら幅20cm前後、深さ数cm程度を測るもので、辺の中央部に部分的に見られるのみである。ピットは、径30～40cmに深さ10cmほどの径のわりに浅いものと、径10～15cmに深さ10～20cmほどの一回り小さいがより深いものに大別される。壁際には集中して見られるが、他では散漫で規則性にも乏しい。壁溝の延長線上にあるピットは前者のタイプで、壁溝とも連続性が高い。壁際のピットは、どれも後者のタイプで、ほぼ全てが斜め外方に掘り込まれている。

遺構覆土は11層に分層される。層1・10が地山質である以外は、暗褐色粘質土を基調とする有機質層で埋没している。層4はそれらをさらに切り込んでおり、新期の遺構覆土の可能性もある。検出できなかった遺構の西半部分には、土層図に表せなかったが近接する谷への流土が堆積していた。基本層序から考えて、谷の埋没は主な遺構の形成された時点ではかなり埋まって浅くなっていたと推定される。よって4号堅穴建物については谷のより古い堆積土が遺構面の一部となって、それを切って掘り込まれていた可能性が高いが、谷堆積土と遺構覆土が質的に似るため、その識別は困難である。



遺物は、覆土から縄文土器が出土している。

5号竪穴建物（第10図、図版7）

調査区のほぼ中央、やや南に寄って位置する。谷の西岸で、標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面で検出した、竪穴建物の密集ブロックの一部である。ブロック中では最も北西に位置する。北辺が7号土坑と接し、南部が6・15・16号竪穴建物と重複している。正確な規模・形状は不明確であるが、遺存する北辺、西辺の状況から1辺3m前後の隅丸四角形と推定する。壁は北辺が比較的傾斜が強くて約30cmの深さを測り、西辺は傾斜が弱くて浅くなっている。

床面にはピットが存在している。ピットは建物中央部には見られず、四方の壁へ寄って分布する傾向がある。西壁に沿って見られる、細長い平面形で深さ10cm程度の浅いピットは、壁溝となる可能性がある。壁際に見られるピットはほぼ全てが斜め外方に掘り込まれている。最も南に見つかったピットについても建物の外側に向かって掘り込まれている。位置的には重複する15号竪穴建物に属する可能性もあるが、掘削方向から、5号竪穴建物に属するものとする。

遺構覆土は図中の層1～3・7～12の9層が相当する。床面に密着して薄い地山質層である層3・9・11・12と、一定の層厚を持つ茶褐色粘質土を基調とする有機質層である1・2・7・8に大別される。層2についてはより古期の遺構覆土となる可能性もあり、また5号竪穴建物の縮小を示すものかもしれない。重複する竪穴建物との先後関係は、層位的には、古い方から7号、15号、5号と判断でき、床面が高いものが新しくなる傾向を示す。先後関係を土層図で確認できていない6号竪穴建物、16号竪穴建物については床面が低くなっており、逆に古い様相を示すものとする、5号竪穴建物は群中で最も新しい段階に属するものと推定される。

遺物は、覆土から縄文土器、石器（石鏃、すり石、剝片）が出土している。

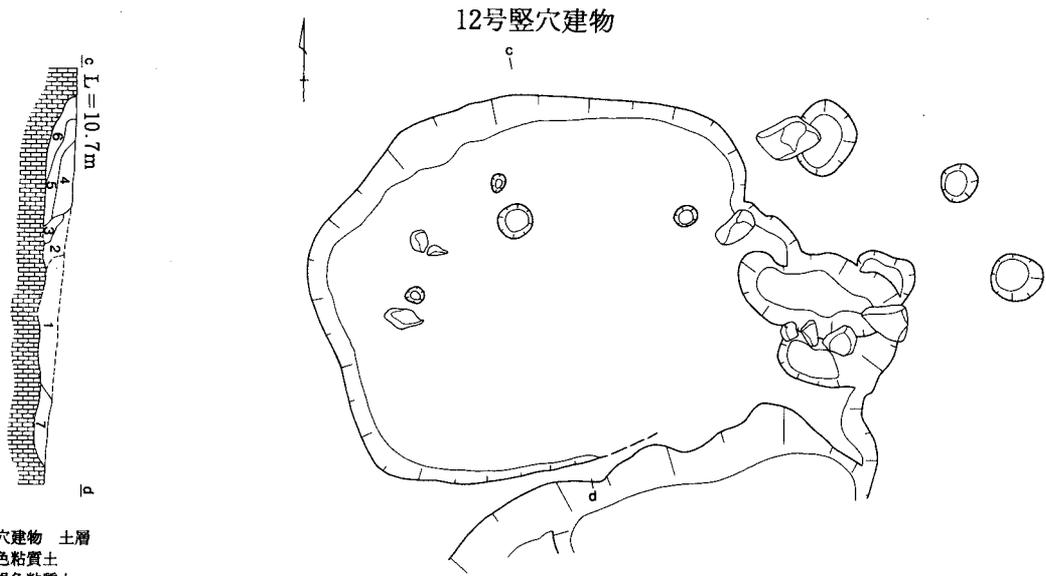
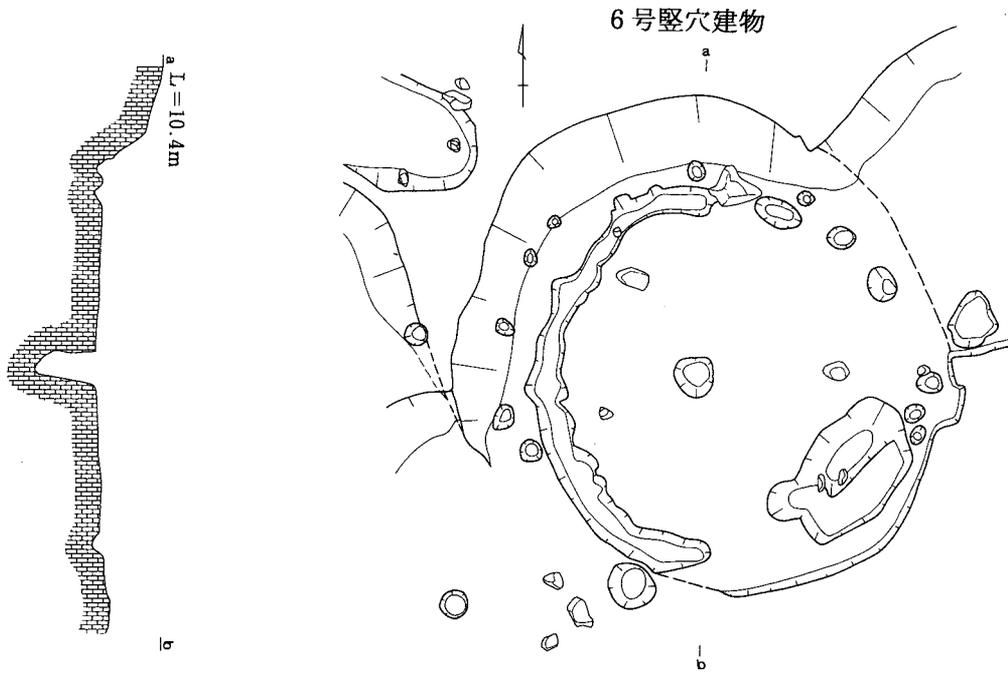
6号竪穴建物（第11図、図版8）

調査区のほぼ中央、やや南に寄って位置する。谷の西岸で、標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面で検出した竪穴建物の密集ブロックの一部であり、ブロックのほぼ中央に位置する。周辺の遺構と重複し錯綜しており、壁面においては削平が著しいが、床面においてはブロック中でも標高が低いレベルにあったためか遺存がよく、大まかな規模・形状は知ることができる。壁は北壁が最も残りがよく、比較的傾斜が強くて約50cmの深さを測る。東・西・南壁は浅く、わずかにその立ち上がりを捉えたに過ぎない。現状で、径4m程度の楕円形の平面形と推定する。

床面には壁溝、ピットが存在している。壁溝は建物西半部に巡っており、幅16～30cm、深さ10cm程度を測り、両端で浅くなって立ち上がり、とぎれている。ピットは建物中央部に径約30cm、深さ約22cmのものが見られる他は、四方の壁へ寄って分布する。南東壁際に見られる大型のピットは木根と思われる。壁溝の南端に近接するピットについては、調査区内で壁と壁溝間にこの規模のピットが位置する例がないため、別の遺構、おそらく16号竪穴建物に属するものと考えている。この他、壁際に見られるピットはひとまわり小径で、ほぼ全てが斜め外方に掘り込まれており、深さ10～15cmほどである。隣り合うこれらピットの間隔は、30cmから1mまでまちまちとなっている。

遺構覆土は記録できなかった。重複する竪穴建物との先後関係は7号、15号、5号竪穴建物が床面が高いものが新しくなる傾向を示している。逆に、床面が低いものが古くなる傾向を示すものとする、6号竪穴建物については16号竪穴建物よりも低くなっており、群中で最も古い段階に属するものと推定される。

遺物は、7・15・16号竪穴建物の覆土から出土したものと厳密に判別できなかったが、縄文土器、石器（すり石、石鏃、軽石、剝片）が出土しており、大半がこの遺構に属するものと考えている。



- 12号堅穴建物 土層
- 1 灰褐色粘質土
 - 2 暗茶褐色粘質土
 - 3 濁茶褐色粘質土
 - 4 暗褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 5 明黄褐色粘質土 (地山土の混入多い)
 - 6 濁黄褐色粘質土 (炭粒少量含む)
 - 7 黄橙褐色粘質土 (地山土が流土化した土層)

0 (S = 1/60) 2 m

第11図 6・12号堅穴建物

7号竪穴建物（第10図、図版7）

調査区のはぼ中央、調査区境界に寄って位置する。谷の西岸で、標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面で検出した竪穴建物の密集ブロックの一部である。ブロック中では最も南西に位置する。遺構の南部が調査区外へ出ており、北部は15号竪穴建物と重複している。正確な規模・形状は不明確であり、現状で最大辺約3.5mを測る。壁は調査区の境界部分で最も立ち上がりが高く、深さは約22cmを測る。これより東へは徐々に浅くなり、最終的にはとぎれている。

床面には壁に寄ってピットが見られる。壁際に見られるピットは径15cm、深さ10cm程度で、斜め外方に掘り込まれているものが多い。

遺構覆土は図中の層13～17の5層が相当する。層13には焼土が含まれている。全般に淡く明るい色調の土で埋没している。重複する竪穴建物との先後関係は、層位から見ると本建物の検出面が15号竪穴建物の床面に相当しており、少なくとも15号竪穴建物が新しいことがわかる。そして15号竪穴建物が築かれるまでには7号竪穴建物がかなり埋まるだけの時間の経過を指摘できる。

遺物は、6・15・16号竪穴建物の覆土から出土したものと厳密に判別できなかったが、縄文土器、石器（すり石、石錘、軽石、剝片）が出土している。

8号竪穴建物（第12図、図版3）

調査区のはぼ中央、調査区境界に寄って位置する。谷の西岸で、標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面で検出した竪穴建物の密集ブロックの一部である。ブロック中では最も南東に位置する。西部は9号土坑と重複しており、南部は調査区外へ出ている。壁は北部でのみ確認した。非常に不整なラインながら、北壁及び両端のコーナー部分と思われる。形状・規模は、辺5mを超える隅丸の四角形と推定するが、これ以外のものも重複している可能性がある。

床面にはピットが見られる。径30cm、深さ20cm程度の規模のピットが主柱となって辺3m前後の四角形に配置される4本主柱構造の建物が、第9図のように数棟重複しているものと推定した。主柱の一部が調査区外へ延びているもの、欠けるものがある等の制約があって、十分に復元できたとは言えず、第9図は復元案の一つと理解してほしい。これらよりやや小規模なピットが壁際に見られる壁東端部、弧状に巡る南西端部はさらに別の構造の竪穴建物が重複している可能性がある。

遺構覆土、層位は記録できなかった。

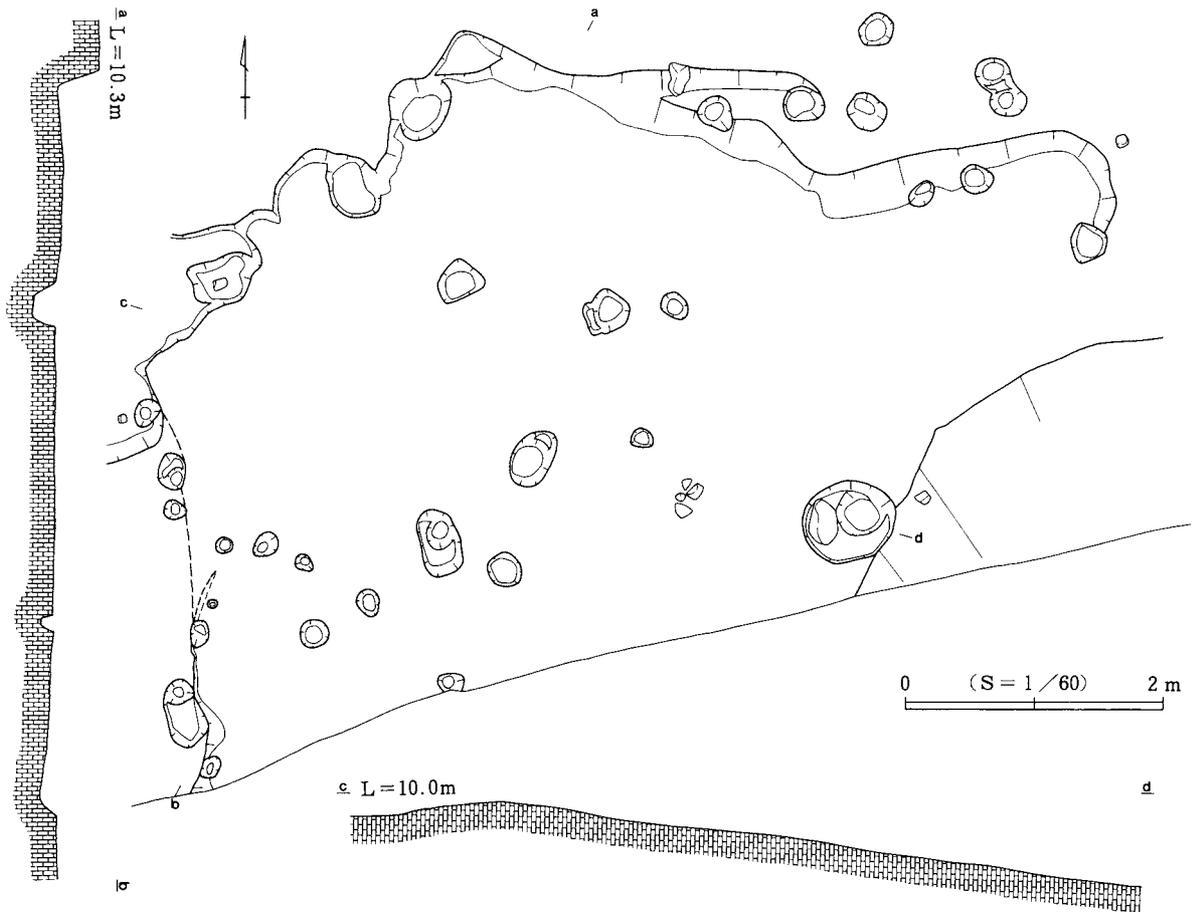
遺物は縄文土器、土師器、石器（剝片、磨製石斧、石錘、石皿、すり石、凹み石、叩き石）が出土している。縄文土器は前期、後期のものが確認される。

8号竪穴建物については、縄文時代前期、後期、古墳時代前期の建物が複合している可能性が高い。また、4本主柱の建物は縄文後期以降の時期に属するものと考えられる。

9号竪穴建物（第13図、図版9・図版10）

調査区のはぼ中央で谷の西岸に位置する。竪穴建物が最も密集するブロックとは北へ約10mの距離をおいて、より高所の標高11.25mと11.5mの等高線間の緩斜面に築かれる。集石と重複しており、集石の除去作業中に検出された。平面形は、軸を方位に対して約45度振って等高線に沿わせた瓢箪形であり、長径は約4.3m、瓢箪の括れ部分の径は約2.7mを測る。壁の掘り込みは全体的に深くはつきりしており、丘陵頂に向かう北側で、深さ約45cmを測る。

床面は括れ部分やや西側に寄って比高差10cmほどの段が見られ、西半部が一段低いテラス状を呈している。ピットの分布は、段を境とする遺構の東西で様相が異なり、西半では北壁際で30cm前後の間隔で巡るものを中心とするのに対し、東半では遺構中央に寄ったものも見られ、逆に壁際のピットは少ない。ピットは概ね径10～15cm、深さも10～15cmの規模である。壁際に見られるピットの大半は斜



第12図 8号竪穴建物

め外方に掘り込まれている。床面の段、瓢箪形の平面形はともに、本遺構において東西に2棟の建物が存在し重複することを示すものである。

遺構覆土は南北間で10層、東西間で15層に分層される。土質では有機質、地山質、その中間的な質に大別される。断面cdでは層15が流土質であるから、地山質・流土質土で埋まる段階（層8～15）、有機質土で埋まる段階（層5～7）、石を多く含む中間質土・地山質土で埋まる段階（層1～4）、と順に整理できる。すなわち、遺構西半が埋没が早く、東半は一段階遅れて埋没していき、最終埋土として集石層が位置している。遺構の変遷過程に置き換えるならば、おそらくは9号竪穴建物は隅丸長方形プランで西半部がまず掘削されて機能し、ある程度埋まった後に東半部が新たに掘削されて西半部を一部取り込んで機能し、その後、最終的に東半部の凹みを中心として集石が形成された、と理解できよう。以降、本遺構については西半を9号竪穴建物（古）、東半を同（新）と表記する。

遺物は覆土から縄文土器、石器（すり石、剝片）が出土している。

10号竪穴建物（第14図、図版9）

調査区のほぼ中央で谷の西岸に位置し、9号竪穴建物の西へ約5mの距離を置いて、標高10.75mと11.5mの等高線間の緩斜面に築かれる。集石と重複しており、集石の除去後に精査した結果、検出された。平面形は、やや不整な楕円形を呈し、南北方向を長径として約5.35m、東西方向を短径として約4.55mを測る。壁の掘り込みは西側が比較的深くてはっきりしており、北側、南側は浅い。深さは北側で約26cm、東側で約32cm、西側で約48cm、南側で約8cmを測る。

床面にはやや北側に寄って比高差10～15cmほどの段が見られ、南半部が一段低いテラス状を呈している。段以北の床面は以南に比べて傾斜が急で、地山中に含まれる自然礫がいくつか露出している。ピットは、段以南で顕著に見られ、遺構中央よりも壁際に圧倒的に多い。ほぼ遺構中央に径20cm、深

さ30cmを測るピットがあるが、その周辺では径が大きいピットでもきわめて浅く不明確である。壁際のピットは概ね径10～15cm、深さも10～15cmの規模で、大半は斜め外方に掘り込まれている。40～80cmの間隔で主に東・西・南壁を巡り、段と北壁ではほとんど見られない。また、段の南に近接して焼土の散布が確認されている。焼土は段に沿うように数ブロックが薄い面的な分布を示し、床面から数cm浮いた状態で検出されている。同様の例は3号竪穴建物にも見られ、遺構がある程度埋まった後の焚火等の小規模な火処によって形成されたと考えられる。

遺構覆土は南北間では9層、東西間では12層に分層される。土質では有機質と地山質に大別される。断面abでは、段以南の床面直上層が地山質土の層6・9で、それら以外は基本的に有機質土という構成となる。層1は礫を多く含み、集石の覆土になる層である。層5は焼土面の下位層にあたり、若干の焼土を含む。本遺構については、隅丸四角形プランで段以南がまず掘削されて機能して段が壁であった段階、層5・6・9が堆積した時点で壁を崩して段以北が掘削されて現況の形状となった段階、層1・4・7・8が堆積し埋没する段階に整理することができる。より詳細に観察すると、層6・9の層厚が薄い点からは、段以南の居住機能がいまだ維持されているうちに以北を掘削する、建物の拡張が想定できる。また、段以北の床面が傾斜し礫が露出している点からは、この部分が床面として機能したかどうか疑問であり、拡張後ほどなく放棄され、最終的な埋没の際に集石が形成された、とする解釈が可能である。

遺物は覆土から縄文土器、石器（石皿、石錘、すり石、砥石、軽石、剥片）が出土している。

11号竪穴建物（第15図、図版11・図版12）

調査区のほぼ中央で谷の西岸に位置し、10号竪穴建物の西に近接し、標高11mと11.5mの等高線間の緩斜面に築かれる。集石、11号土坑と重複しており、集石の除去後に精査した結果、11号土坑と重複して検出された。丘陵頂側の辺は風倒木痕と重複しており、形状ははっきりしない。谷側の辺の形状から、隅丸四角形で1辺か2辺がやや張り出し気味になる平面形を推定している。長径は傾斜に交差し約4.3m、短径は平行し約4mを測る。壁の掘り込みは北東壁が深くてはっきりしており、深さ最大で約40cmを測る。その他の壁は、比較的浅い。

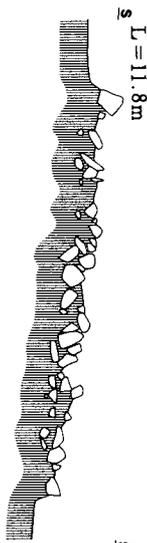
床面にはピットが見られ、遺構中央よりも壁際に寄るものが圧倒的に多い。ほぼ遺構中央に径20cm、深さ10cmを測るピットがあり、その周囲のより大径のピットはきわめて浅く不明確で、より小径のピットにはより深いものが見られる傾向がある。壁際に寄るピットは主に東半部に顕著に見られ、概ね径10～15cm、深さも10～15cmの規模におさまる。これらのうち壁際に位置するピットについては、大半が斜め外方に掘り込まれている。

遺構覆土は南北間では層1～3・13～15、東西間では層8～13の6層に分層される。壁に寄って一部に堆積する地山質層を例外として、基本的には有機質層で構成される。有機質層は基本的に礫を含むが量的には少なく、むしろ横断面図で明確なように11号土坑により多く含まれている。

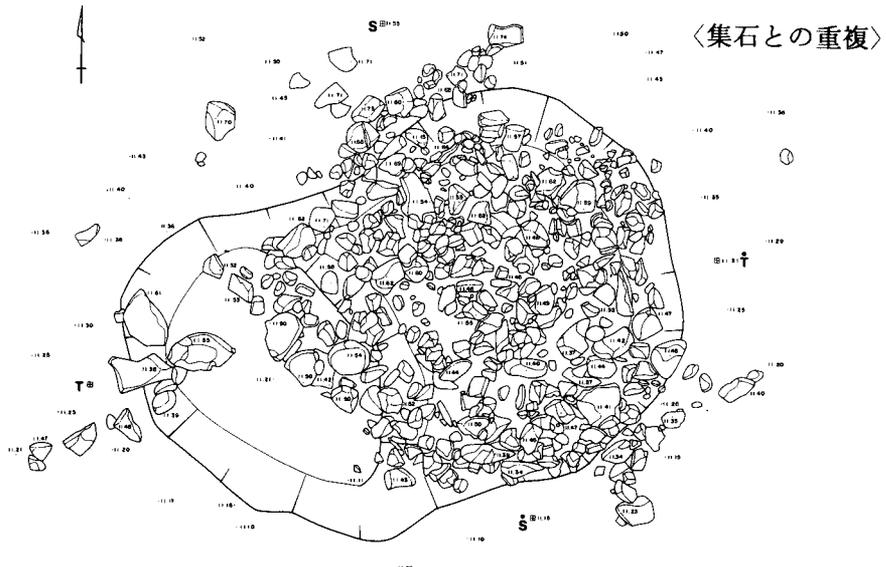
遺物は覆土から縄文土器、石器（磨製石斧、石錘、すり石、剥片）、ドングリ種実が出土している。また、重複する風倒木痕からは弥生土器が出土しており、11号竪穴建物よりも新しい時期である弥生時代以降に生じて、竪穴建物を切ったことが明らかになっている。

12号竪穴建物（第11図、図版8）

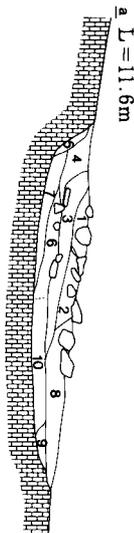
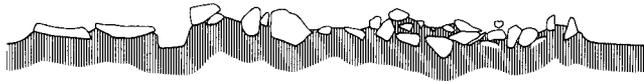
調査区のほぼ中央、やや南に寄って位置する。谷の西岸で、標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面で検出した竪穴建物の密集ブロックの一部であり、ブロック中では最も北に位置する。南東部は9号土坑に接し、また木根で攪乱されているが、その他の部分では遺存が良好である。平面形は隅丸四角形で、傾斜に沿う東西辺が約3.5m、交差する南北辺が約3mを測る。壁は北壁中央部付近が最も残り



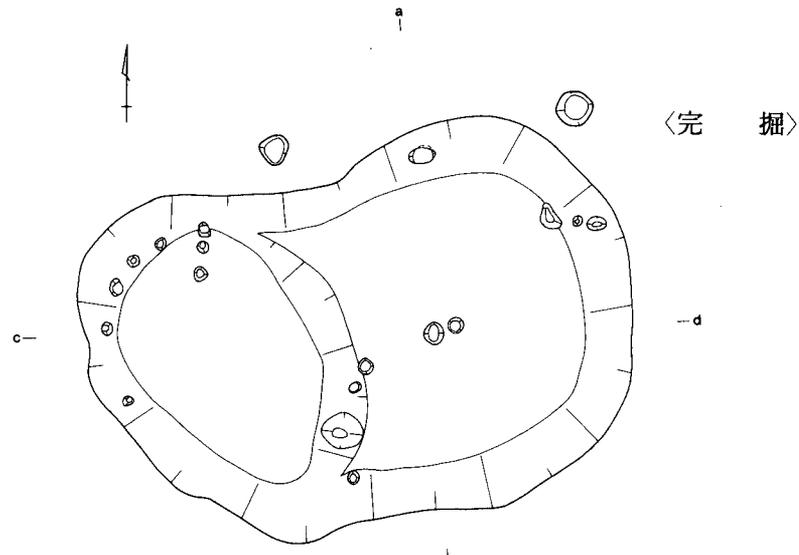
6.



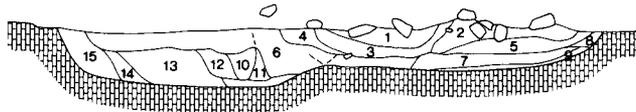
I L=11.8m



a L=11.6m



c L=11.6m



- 9号竪穴建物 a-b間 土層
- 1 赤褐色粘質土 (しまり悪い)
 - 2 明黄褐色粘質土 (しまりよくしめる)
 - 3 黄褐色粘質土 (炭粒少し混じる)
 - 4 暗茶褐色粘質土 (炭粒少し混じる)
 - 5 暗茶褐色粘質土 (地山ブロック少し混じる)
 - 6 暗茶褐色粘質土 (地山ブロック・炭粒多く混じる)
 - 7 暗茶褐色粘質土 (6ほど地山ブロックは多くなく、粘性強い)
 - 8 黒褐色粘質土 (地山ブロック・炭粒・土器含む)
 - 9 黒褐色粘質土 (炭粒含む、地山ブロックは層8ほど含まない)
 - 10 黒褐色粘質土 (炭粒含む、地山ブロックは層8ほど含まない)

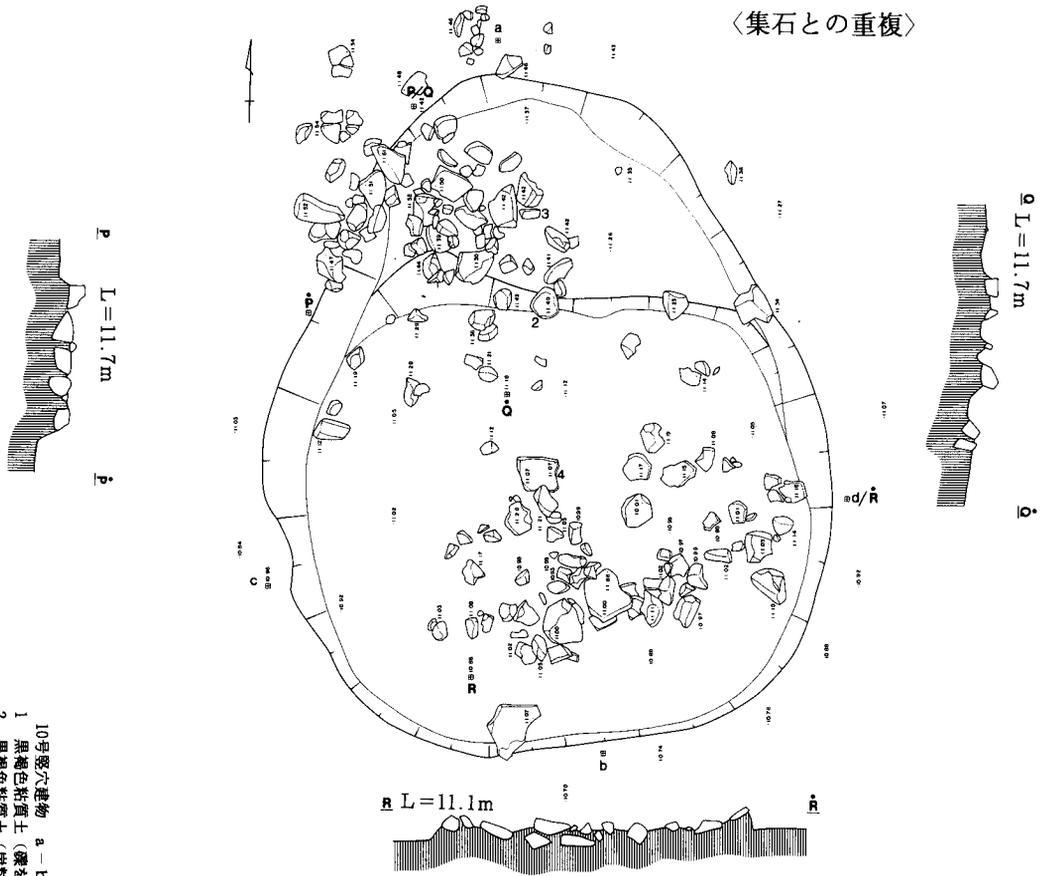
9号竪穴建物 c-d間 土層

- 1 明黄褐色粘質土 (しまり良い)
- 2 明黄褐色粘質土 (炭粒少し混じる、層4と同層か)
- 3 黄褐色粘質土 (炭粒少し混じる)
- 4 明黄褐色粘質土 (粒子細かいが、粘性弱い)
- 5 黒褐色粘質土 (炭粒・土器含む、地山ブロック7ほど含まず)
- 6 黒褐色粘質土 (炭粒含む、地山ブロック7ほど含まず)
- 7 黒褐色粘質土 (地山ブロック・炭粒・土器含む)
- 8 黄褐色粘質土 (黒褐色土多く混じり、濁った感じ)
- 9 黄褐色粘質土 (8ほどではないが、少し濁る)
- 10 黄褐色粘質土 (地山質土、少し濁る。しまり良くない)
- 11 黄褐色粘質土 (黒褐色土多く混じり、濁った感じ)
- 12 黄褐色粘質土 (黒褐色土多く混じり、濁った感じ)
- 13 黄褐色粘質土 (地山質土、少し濁る。しまり良くない)
- 14 黄褐色粘質土 (8と同層か、黒く濁る)
- 15 黒褐色粘質土 (炭粒を含むが、流土的なものか)

0 (S=1/60) 2m

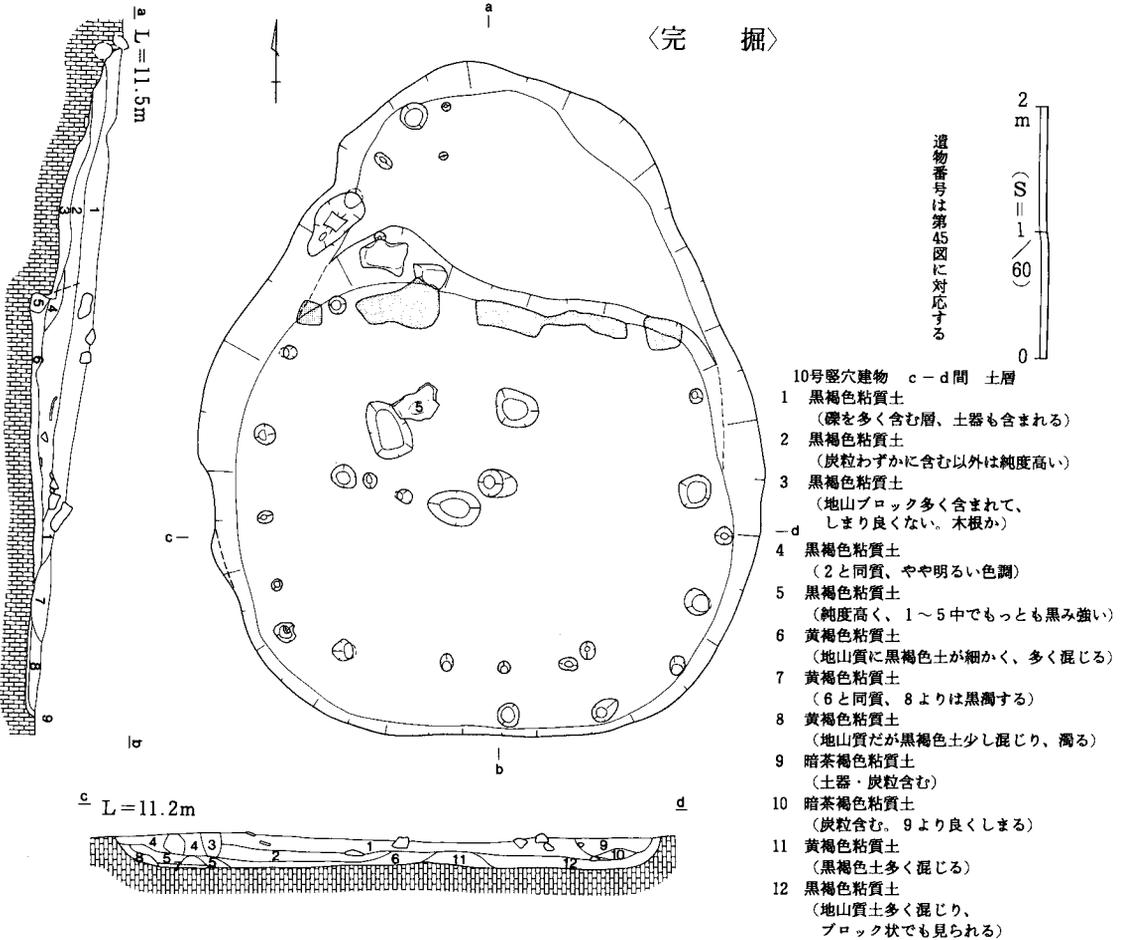
第13図 9号竪穴建物

〈集石との重複〉



- 10号竪穴建物 a-b間 土層
- 1 黒褐色粘質土 (礫を多く含む層、炭粒少し含む)
 - 2 黒褐色粘質土 (炭粒・土器を含む層)
 - 3 黒褐色粘質土 (地山ブロック多量含む、炭粒少し含む)
 - 4 黒褐色粘質土 (地山ブロック大粒のものが入るが、量自体は3より少ない)

〈完掘〉



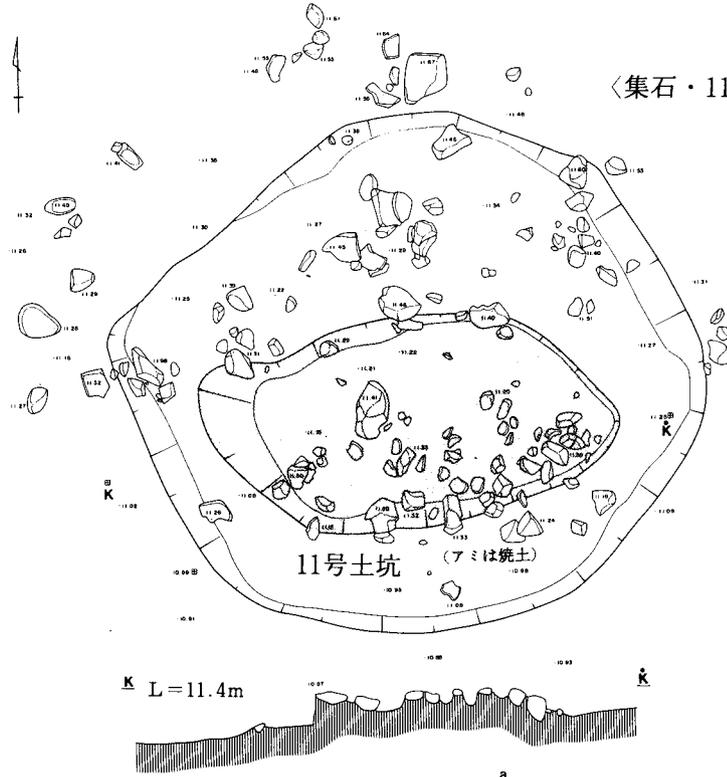
- 5 黒褐色粘質土 (炭粒・礫・土器・地山ブロック含む程度層)
- 6 黄褐色粘質土 (粘性強い、地山質だが黒褐色土混じり、黒濁する)
- 7 暗茶褐色粘質土 (色調は1などに近いが、しまり良くない)
- 8 黒褐色粘質土 (炭粒・地山ブロック少し含まれる。2と同層か)
- 9 黄褐色粘質土 (地山質土だが、黒褐色粘質土混じり、濁る)

10号竪穴建物 c-d間 土層

- 1 黒褐色粘質土 (礫を多く含む層、土器も含まれる)
- 2 黒褐色粘質土 (炭粒わずかに含む以外は純度高い)
- 3 黒褐色粘質土 (地山ブロック多く含まれて、しまり良くない。木炭か)
- 4 黒褐色粘質土 (2と同質、やや明るい色調)
- 5 黒褐色粘質土 (純度高く、1~5中でもっとも黒み強い)
- 6 黄褐色粘質土 (地山質に黒褐色土が細かく、多く混じる)
- 7 黄褐色粘質土 (6と同質、8よりは黒濁する)
- 8 黄褐色粘質土 (地山質だが黒褐色土少し混じり、濁る)
- 9 暗茶褐色粘質土 (土器・炭粒含む)
- 10 暗茶褐色粘質土 (炭粒含む。9より良くしまる)
- 11 黄褐色粘質土 (黒褐色土多く混じる)
- 12 黒褐色粘質土 (地山質土多く混じり、ブロック状でも見られる)

第14図 10号竪穴建物

〈集石・11号土坑との重複〉

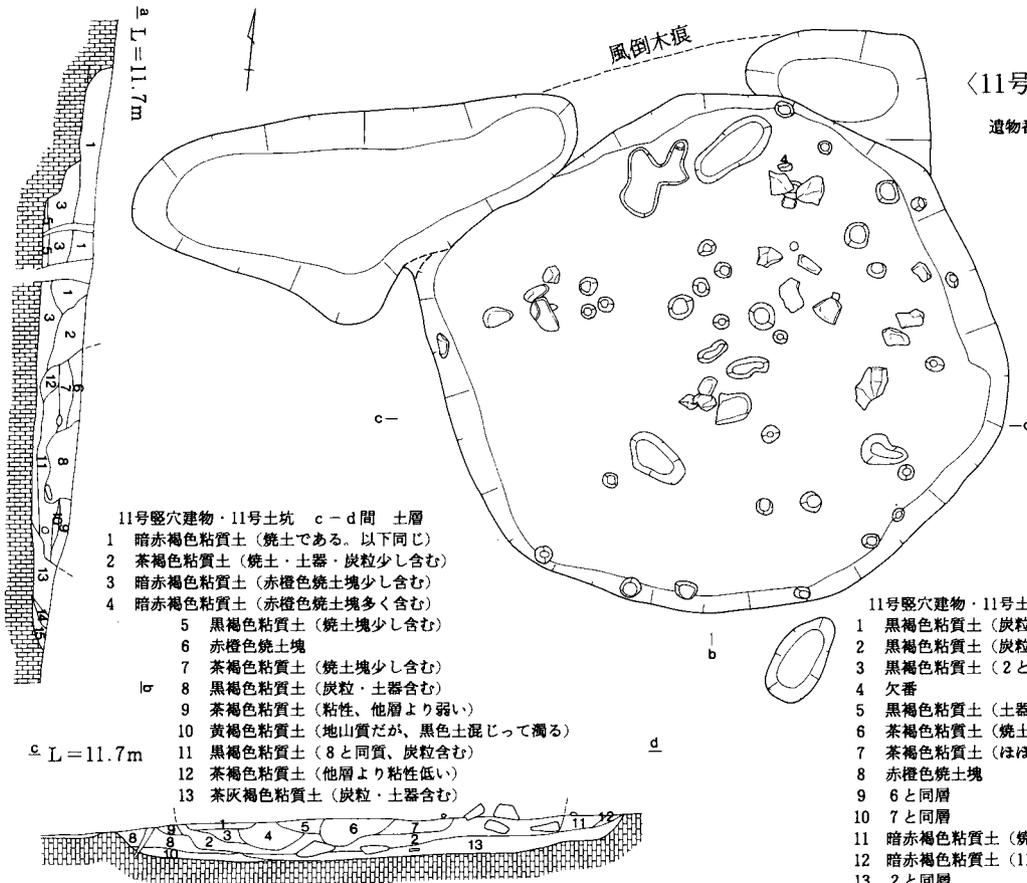


11号土坑 (アミは焼土)

K L=11.4m

〈11号竪穴建物 完掘〉

遺物番号は第38図に対応する



風倒木痕

11号竪穴建物・11号土坑 c-d間 土層

- 1 暗赤褐色粘質土 (焼土である。以下同じ)
- 2 茶褐色粘質土 (焼土・土器・炭粒少し含む)
- 3 暗赤褐色粘質土 (赤橙色焼土塊少し含む)
- 4 暗赤褐色粘質土 (赤橙色焼土塊多く含む)
- 5 黒褐色粘質土 (焼土塊少し含む)
- 6 赤橙色焼土塊
- 7 茶褐色粘質土 (焼土塊少し含む)
- 8 黒褐色粘質土 (炭粒・土器含む)
- 9 茶褐色粘質土 (粘性、他層より弱い)
- 10 黄褐色粘質土 (地山質だが、黒色土混じって濁る)
- 11 黒褐色粘質土 (8と同質、炭粒含む)
- 12 茶褐色粘質土 (他層より粘性低い)
- 13 茶灰褐色粘質土 (炭粒・土器含む)

c L=11.7m

11号竪穴建物・11号土坑 a-b間 土層

- 1 黒褐色粘質土 (炭粒・土器含む。色調茶色みがる)
- 2 黒褐色粘質土 (炭粒含む)
- 3 黒褐色粘質土 (2と同質、地山ブロックわずかに含む)
- 4 欠番
- 5 黒褐色粘質土 (土器・炭粒・地山ブロック含む)
- 6 茶褐色粘質土 (焼土少し含む)
- 7 茶褐色粘質土 (ほぼ6と同層、しまり良い)
- 8 赤橙色焼土塊
- 9 6と同層
- 10 7と同層
- 11 暗赤褐色粘質土 (焼土。赤橙色焼土塊少し含む)
- 12 暗赤褐色粘質土 (11より焼土塊の含み少ない)
- 13 2と同層
- 14 3と同層
- 15 黄褐色粘質土 (地山質だが、黒色土混じって濁る)

0 (S=1/60) 2m

第15図 11号竪穴建物・11号土坑

がよくて、約24cmの深さを測り、南壁に向かって浅くなっている。

床面には、建物中央部やや北に寄って位置する径約28cm、深さ約13cmのピットと、より東西壁に寄ってそれぞれ1基ずつの一回り小さくて浅いピットの、あわせて3基のピットが見られる。

遺構覆土は7層に分層される。浅いが、遺構中央部の埋没が遅いレンズ状の堆積を示す。層5～7の黄褐色粘質土、層4の暗褐色粘質土、層2・3の茶褐色粘質土、層1の灰褐色粘質土の順に堆積したと思われる。層1は遺構中央部で床面に密着して堆積した層であるが、現状では最も後出的な埋土となり、周縁がある程度埋没した段階でも中央部は床面が露出していた状況を示している。

遺物は、覆土から縄文土器、石器（磨製石斧、すり石、石錘）が出土している。

13号竪穴建物（第16図、図版11・図版13）

調査区のほぼ中央で谷の西岸に位置する。竪穴建物が最も密集するブロックとは近接するが、北へ約2mの距離をおいて、やや高所の標高10.75mと11mの等高線間の緩斜面に築かれる。集石と重複しており、集石の除去作業中に検出された。平面形は、軸を方位にはほぼ揃える隅丸四角形であり、長辺である東西は約3.5m、短辺となる南北は約2.7mを測る。壁は全体的に深く掘り込まれており急傾斜で、東壁で深さ約46cm、西壁で約46cm、南壁で約32cm、北壁で50cm前後を測る。

床面は西側に寄って比高差8cmほどの段が見られ、東半部が西半部より広くて一段低いテラス状を呈している。床面の段については9号竪穴建物と同様、2棟の建物の存在と重複を示すものと捉えられる。ピットは、床面、壁、段に見られる。段と西壁際にはややばらついた間隔であるが多く見られ、遺構中央では3基ほど、東壁では大小2基が見られる。ピットは概ね径10～15cm、深さも10～15cmの規模で、壁際、段に位置するこの規模のピットは大半が斜め外方に掘り込まれている。西壁際、東壁際にはそれぞれやや規模の大きいものが1基ずつ見られ、東壁のものは長径約40cm、短径約30cm、深さ約25cmを測り、西壁のものは長径約35cm、短径約13cm、深さ約5cmを測る。

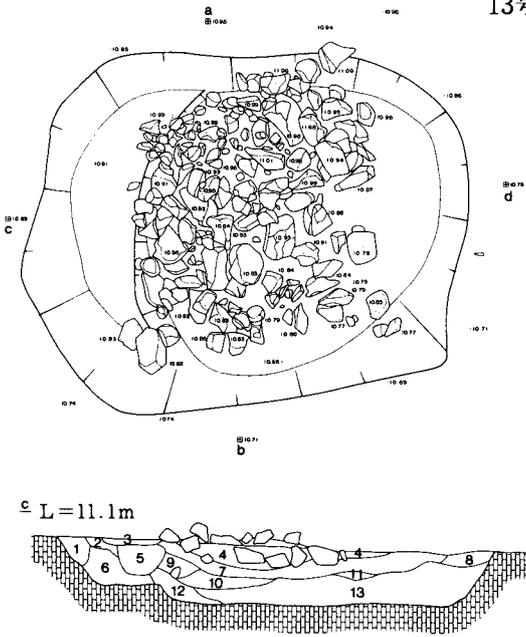
遺構覆土は19層に分層される。基本的には地山質、流土質土層が下位で、有機質土層が上位となり、その最上位層に礫が顕著に含まれる。断面cdで観察すると、西壁を被覆する層6が段を被覆する層12よりも古い堆積層であるため、竪穴建物の壁としては西壁が古く、段が新しいことがわかる。以上から13号竪穴建物の変遷過程は、まず西半部が掘削されて機能した段階、ある程度埋まった後に東半部が新たに掘削されて床面が一段切り下げられ段部分が西壁となって機能した段階、その後埋没していき最終的に遺構中央部の凹みを中心として集石が形成された段階に整理して説明できよう。以降、本遺構については西半を13号竪穴建物（古）、東半を同（新）と表記する。竪穴建物（新）については辺2.5m程度の規模に復元できるが、竪穴建物（古）はその掘削時の東壁が、現状のものと同一であるかどうか判断できない。（古）の竪穴建物が（新）に近い規模とすれば、その東壁はより西に寄って位置することになり、（新）の掘削で失われている可能性もあるので、注意しておきたい。

遺物は覆土から縄文土器、弥生土器、石器（石匙、すり石、石錘、磨製石斧、石製品、剝片）が出土している。第26図29の縄文土器は層13の上部から出土している。また、東壁際の大型のピットからも縄文土器が出土している。石匙と弥生土器は最上位層である集石層（層3）から出土したものであり、弥生土器については後世の攪乱を受けた際に混入したものと判断される。

14号竪穴建物（第16図、図版14）

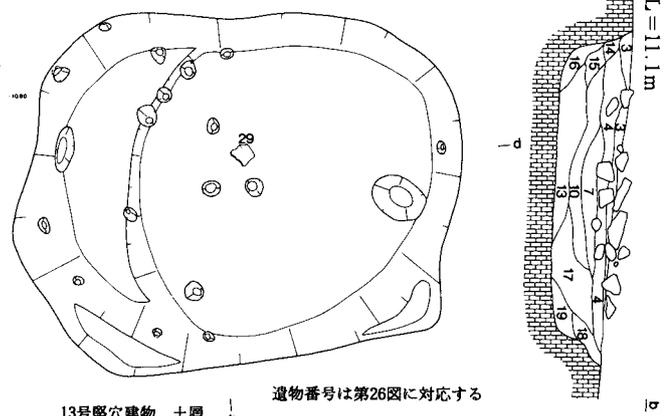
調査区のほぼ中央で谷の西岸に位置し、13号竪穴建物の北に近接し、より高所の標高11mと11.25mの等高線間の緩斜面に築かれる。平面形は北辺がやや長く張り出し気味になるやや不整な隅丸四角形を呈する。長辺は傾斜に交差し約3.4m、短辺は北辺で約3.2m南辺で約2mを測る。南西コーナー部分は木根が入り、少し形が崩れている。壁は丘陵頂側の北壁で約50cmの深さを測り、その他の壁で

〈集石との重複〉



13号堅穴建物

〈完掘〉

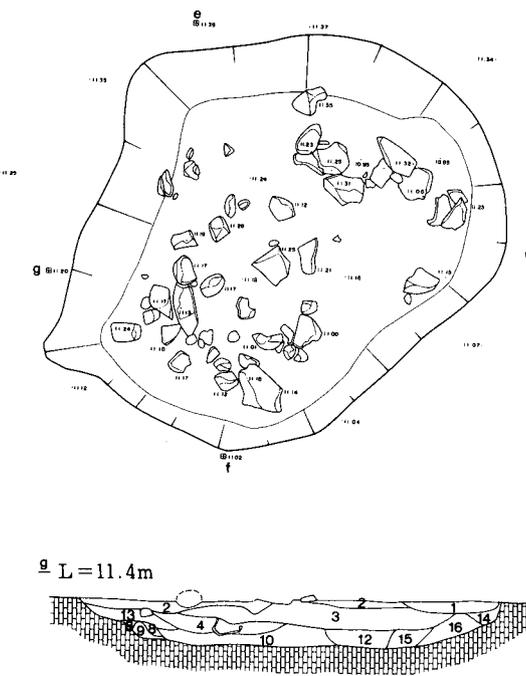


遺物番号は第26図に対応する

13号堅穴建物 土層

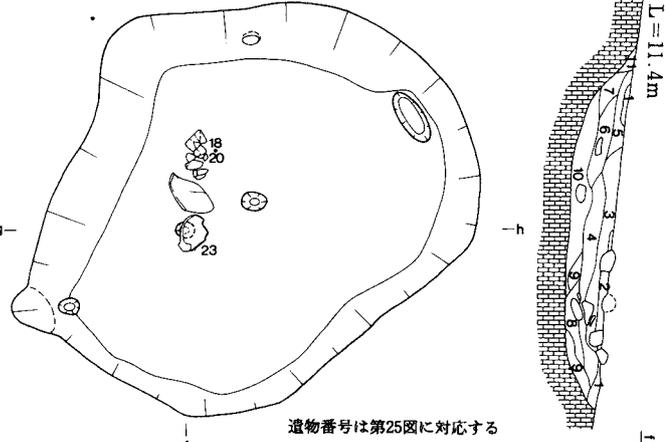
- 1 黄茶褐色粘質土
- 2 暗茶褐色粘質土
- 3 暗茶褐色粘質土 (しまりが悪い)
- 4 暗茶褐色粘質土 (炭粒少し含む)
- 5 暗茶褐色粘質土 (炭粒多く含む)
- 6 暗茶褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 7 暗茶褐色粘質土 (炭粒含む)
- 8 茶褐色粘質土
- 9 茶褐色粘質土 (地山ブロック・炭粒含む)
- 10 暗茶褐色粘質土 (炭粒・地山ブロック含む)
- 11 暗茶褐色粘質土
- 12 茶褐色粘質土 (炭粒含む、地山質土がよく混じり合う)
- 13 黄褐色粘質土 (炭粒・土器を含む。地山質土層、上層の茶褐色土とよく混じり合う)
- 14 暗茶褐色粘質土 (炭粒含む、やや粘性強い)
- 15 茶褐色粘質土 (地山質土が混じる、炭粒含む)
- 16 暗茶褐色粘質土 (炭粒など有機物が多く混じるせいか、暗い色調で、粘性強い)
- 17 黄褐色粘質土 (地山質土だが、茶褐色土がきわめて多く混じる。炭粒含む)
- 18 黄褐色粘質土 (地山にきわめて近い質だが、しまりが悪い)
- 19 黄褐色粘質土 (地山にきわめて近い土質だが、若干しまりが悪く、炭粒含む)

〈集石との重複〉



14号堅穴建物

〈完掘〉



遺物番号は第25図に対応する

14号堅穴建物 土層

- 1 黄茶褐色粘質土
- 2 黄灰褐色粘質土
- 3 灰褐色粘質土
- 4 淡灰褐色粘質土
- 5 茶褐色粘質土
- 6 暗黄茶褐色粘質土
- 7 明黄灰褐色粘質土
- 8 明黄オリブ色粘質土
- 9 濁黄灰色粘質土 (炭粒が多く含まれる)
- 10 濁明黄灰色粘質土 (地山土が多く含まれる)
- 11 黄オリブ色粘質土
- 12 濁明黄灰色粘質土
- 13 黄灰褐色粘質土
- 14 黄茶褐色粘質土
- 15 濁暗黄橙色粘質土
- 16 明黄茶褐色粘質土

0 (S = 1/60) 2 m

第16図 13・14号堅穴建物

は20cm前後の深さである。

床面にはピットが見られ、遺構中央と壁際に散在する。北東コーナーのピットが長径45cm、短径20cmと最も大きい、深さは10cm程度で、浅い。その他のピットは径15cm、深さ10cm前後にはほぼおさまり、壁際に位置するピットについては、大半が斜め外方に掘り込まれている。

遺構覆土は16層、断面efで見ると多くの焼土粒と土器片を含む茶褐色粘質土層5・6を挟んでより後出的な灰褐色粘質土層1～4、先行する明黄褐色土層7～16に大別され、遺構の埋没過程を表している。各層は礫を含んでいるが最上位の層1～4が最も多い。

遺物は覆土から縄文土器、石器（磨製石斧、石鏃、剝片）が出土している。第25図18・19・23の縄文土器は床面近くの層4から出土している。

15号竪穴建物（第10図、図版2）

調査区のほぼ中央、調査区境界に寄って位置する。谷の西岸で、標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面で検出した竪穴建物の密集ブロックの一部である。北に5号竪穴建物、南に7号竪穴建物、東に16号竪穴建物が重複する。検出したのは他遺構と重複していない北西部分のみで、南部については調査区内でおさまっているのかも不明確である。正確な規模・形状は不明確であるが、辺のラインから平面形は隅丸形のものとして推定する。壁は最も立ち上がり強い辺中央部分でも深さ約15cmで、その東西へは徐々に浅くなっていき、東側ではとぎれている。

床面には壁に寄ってピットが見られる。壁と重複するピットは木根と思われる。また、16号竪穴建物と重複する部分において、16号竪穴建物の壁外にあるものはおそらく本遺構に属するものと思われるが、16号竪穴建物の壁内に位置するものについてはどちらに属するかわからない。

遺構覆土は図中の層4～6・12の4層が相当する。層5についてはより古期の遺構覆土となる可能性もあり、また15号竪穴建物の縮小を示すものかもしれない。重複する竪穴建物との先後関係は、7号竪穴建物の検出面に本遺構の床面が相当しており、本遺構の覆土は5号竪穴建物の覆土に切られている。よって、古い方から7号・15号・5号の順で、古い竪穴建物がある程度埋まってから新しい竪穴建物が建てられていることがわかる。

遺物は、6・7・16号竪穴建物の覆土から出土したものと厳密に判別できなかったが、縄文土器、石器（すり石、石錘、軽石、剝片）が出土している。

16号竪穴建物（第10図、図版2）

調査区のほぼ中央、調査区境界に寄って位置する。谷の西岸で、標高10mと10.5mの等高線間の緩斜面で検出した竪穴建物の密集ブロックの一部である。北に5号竪穴建物、南に7号竪穴建物、東に6号竪穴建物、西に15号竪穴建物が重複する。検出したのは北西部分のみで、正確な規模・形状は不明確であるが、辺のラインから平面形は隅丸形のものとして推定する。壁は最も立ち上がり強い辺北部でも深さ約12cmであり、かなり削平されている。

床面には15号竪穴建物と重複する部分において、径約20cm、深さ約13cmのピットが見られるが、本遺構に属するものか15号竪穴建物に属するものかわからない。

遺構覆土は記録できなかった。重複する竪穴建物との先後関係は層位で確認できない。ただし、7号・15号・5号竪穴建物で確認された床面高と新古の対応関係を摘要するならば、16号竪穴建物は床面高が6号よりも高く5号・15号よりも低くなっていることから、16号竪穴建物は6号竪穴建物よりも新相で、5・15号竪穴建物よりも古相に属するものとして推定できる。

遺物は、6・7・15号竪穴建物の覆土から出土したものと厳密に判別できなかったが、縄文土器、石器（すり石、石錘、軽石、剝片）が出土している。

2 土坑

1号土坑（第17図、図版15）

調査区の中ほど、谷の西岸に近接し、標高10.25m前後の緩斜面に位置する。平面形は不整形で、径2.6～2.8m、深さ最大で50cm以上に達するが、掘り込みは比較的緩やかな皿状の土坑である。底面は凹凸が若干見られる。南東隅ではピットが重複しているが、木根の類と思われる。

覆土は6層、黄褐色・黄橙色粘質土（層3・5・6）、灰褐色粘質土（層4）、茶褐色粘質土（層1・2）の順にレンズ状に堆積している。遺物は覆土から土器小破片が出土したのみである。

2号土坑（第17図、図版15）

調査区の中ほど、谷の西岸に近接し、1号土坑の南へ約1mの距離を置き、やや低所の標高9.75m前後の緩斜面に位置する。平面形は不整形で、長軸を南東・北西方向に向ける。長径1.76m、短径約1m、深さは北東側で約36cmを測る。底面は南東部でピット状にさらに約26cm落ち込んでいる。

覆土は記録できなかった。遺物は土器小破片が出土したのみである。

3号土坑（第17図、図版15）

調査区の中ほど、谷の西岸で、13号堅穴建物の東へ約5mの距離を置き、標高10.5～10.75mの緩斜面に位置する。平面形は北半部が辺2m程の隅丸四角形、南半部は長辺3m程の平行四辺形が合一したような形状を呈する。最大径は北東・南西方向に求められ、約4.3mを測る。北部が深さ25cmに達し、底面は凹凸が若干見られるが、全体的には掘り込みが比較的緩やかな皿状の土坑である。

覆土は完全な記録を残せなかった。不備な土層図であるが、現状では8層が確認されており、中央部の埋没が遅いレンズ状の堆積と思われる。遺物は覆土から縄文土器が出土している。

4号土坑（第17図）

調査区の東部、谷の東岸の下段部分で、4号堅穴建物の南へ約4mの距離を置き、標高10.25～10.5mの緩斜面に位置する。平面形は四角形が重複したような不整形で、長径約2.6m、短径約1.5mを測る。底面は凹凸があり、深さは北部で最大で約25cm、その他では10cm前後と浅い。

覆土は記録できなかったが、周辺は礫が散乱した状態であり、覆土にも含まれていたと思われる。遺物は縄文土器が出土している。

5号土坑（第18図、図版15）

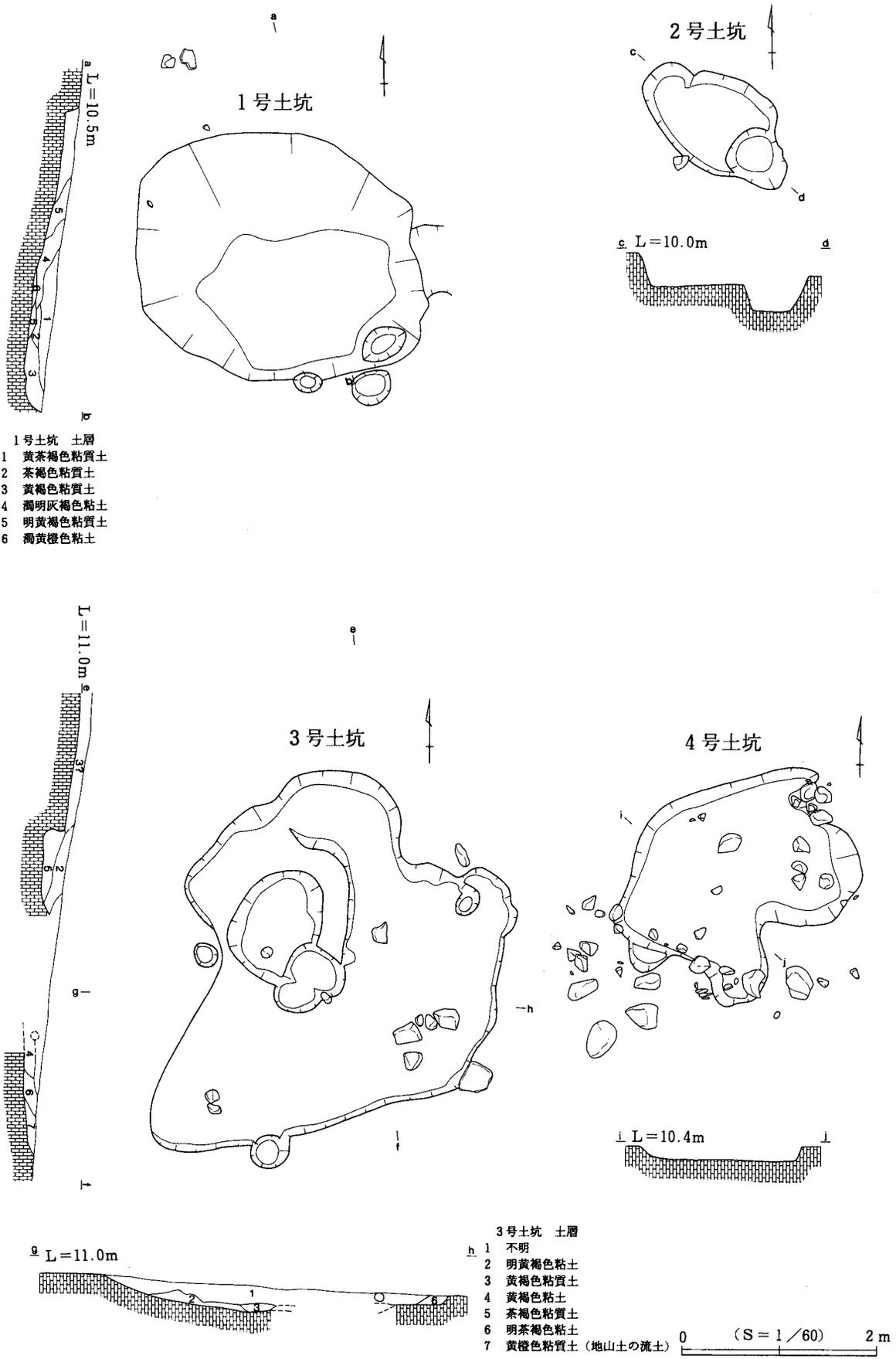
調査区の東部、谷の東岸の上段部分で、北へ寄って位置する。周辺は標高11.5m前後に平坦地化している。平面形は四角形が重複したようなL字形で、東西径4.25mを測り、遺構の北部は調査区外へ伸びる。底面はやや凹凸があり、深さ10～20cmを測る。

覆土は南北断面で12層に分層される。層6～8・12を層1～4・9～11が切っており、東西に長い南側の遺構が北側の遺構を切って作られていることがわかる。南北の遺構とも上位層に礫を多く含み、また地山にも礫が含まれるため、周辺は遺構の内外を問わず礫が散乱した状態であった。遺物は覆土中から土器小破片が出土したのみである。

6号土坑（第18図、図版16）

調査区の東部、谷の東岸の上段部分で、東北端へ寄って位置する。周辺は標高11.5m前後に平坦地化している。平面形は径80cm程の円形で、深さ約16cm、南側が掘り込みがやや緩やかである。

覆土は記録できなかった。遺物は縄文土器底部が遺構底面に正立した状態で出土した。埋設土器の可能性はあるが、縄文土器がきわめて脆弱で残りが悪く、調査時に崩壊してしまい、図化できなかった。時期も不明である。他には石器（剝片）が出土している。



第17図 1~4号土坑

7号土坑（第18図）

調査区のはぼ中央、やや南に寄って位置する。谷の西岸、標高10.5m前後の緩斜面で、竪穴建物が密集するブロックのうち、北西部の5号竪穴建物に接している。5号竪穴建物との先後関係は不明である。平面形は西半部が辺2.5m程の隅丸四角形、東半部は長辺2m程の三角形が合一したような形状を呈する。最大径は東西方向で約4.5mを測る。底面はほぼ平坦で、深さは北側で約40cmを測る、皿状の土坑である。

覆土は7層に分層される。灰褐色粘質土（層1）が最上位層で、以下は黄褐色土（層2・6・7）もしくは茶褐色土（層3～5）が堆積する。遺物は覆土中から土器小破片が出土したのみである。

7号土坑は、南半部が竪穴建物の規模・形状にきわめて近い。また竪穴建物の密集するブロックの一角を占める位置から考えても、竪穴建物と土坑状の遺構が重複している可能性が高い。

8号土坑（第18図、図版16）

調査区のはぼ中央、南に寄って位置する。谷の西岸の標高10m前後の緩斜面で、竪穴建物が密集するブロック内の、6号竪穴建物と8号竪穴建物の間で、9号土坑の南に位置しており、他遺構との明確な重複はない。平面形は径約1mの円形で、ほぼ垂直に掘り込まれており、深さは約50cmを測る、円筒状の土坑である。

覆土は記録できなかった。遺物は縄文土器、石器（すり石、剝片）が出土している。

9号土坑（第18図）

調査区のはぼ中央、やや南に寄って位置する。谷の西岸の標高10m前後の緩斜面で、竪穴建物が密集するブロック内の、6号竪穴建物、8号竪穴建物、12号竪穴建物、8号土坑に囲まれる位置にある。平面形はきわめて不整で、いくつかの遺構が重複しているものと思われるが、詳細は不明である。北側で径は最大約4.8m、最小約40cm、深さは10～30cmと地点によってその差は極端である。

覆土は記録できなかった。遺物は縄文土器、石器（すり石、剝片）が出土している。

10号土坑（第18図）

調査区の東部、谷の東岸の上段部分で、標高13m前後を測る塚の最高所に位置する。平面形は長辺約3m、短辺約1.3m程の隅丸長方形で、塚の盛土を掘り込んでおり、深さ約30cmを測る。

覆土は記録できなかった。遺物は縄文土器、石器（すり石、石核、剝片）が出土している。

10号土坑は現地調査着手時、レーダー探査を行なった際に反応があり、その後の精査で検出された遺構である。塚の盛土は近代以降に行なわれており、塚を掘り込んでいる10号土坑はそれ以降の時期ということになる。

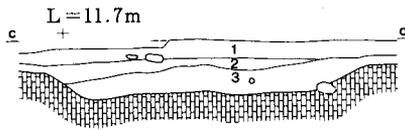
11号土坑（第15図、図版12）

調査区のはぼ中央で谷の西岸に位置する。集石、11号竪穴建物と重複しており、集石の除去後に精査した結果、11号竪穴建物のプラン内に重複して検出された。検出面の標高は11.25mを前後する。平面形は平行四辺形に近く、ほぼ東西を向く長辺が約2.5m、短辺が約1.3mを測る。11号竪穴建物が埋まってから掘り込んでおり、深さ20～30cmの皿状の土坑である。

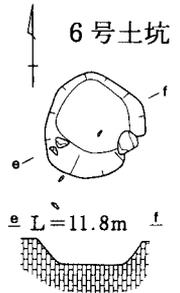
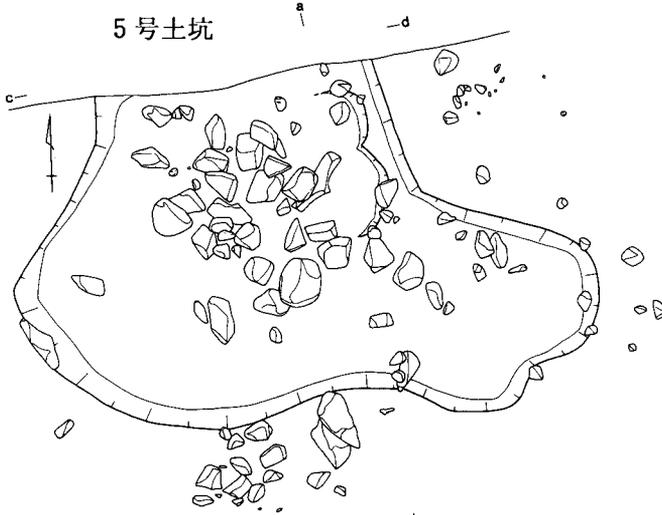
遺構覆土は断面abでは層6～12（断面cdでは層1～7）の7層に分層される。基本的にはすべて焼土を含む層で構成されており、下位から、焼土（層11・12）、焼土混じり粘質土（層6・7・9・10）、焼土塊（層8）の順に堆積している。断面cdの層2（断面ab層6・7・9・10に対応）は礫を多く含んでおり、集石の一部となっている。本遺構の埋没は集石の形成とほぼ同時並行で進んだものと判断できよう。壁面は11号竪穴建物の覆土でもあるが、焼けていない。

遺物は覆土から縄文土器、石器（すり石、剝片）、石製品（小玉）が出土している。

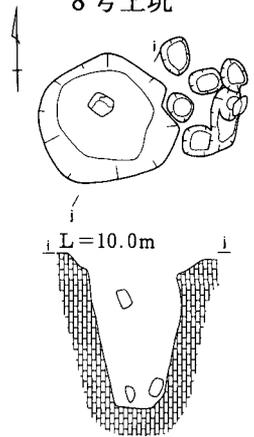
- 5号土坑 a-b間土層
- 1 黄灰褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 2 黄灰色粘土 (炭粒を少量含む)
 - 3 暗黄灰色粘土 (炭粒を少量含む)
 - 4 黄灰色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 5 明黄褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 6 暗黄褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 7 黄灰色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 8 暗黄褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 9 暗黄褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 10 暗黄褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 11 暗灰+リ-ブ色粘質土
 - 12 不明



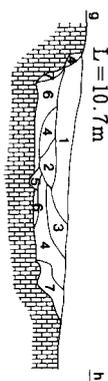
- 5号土坑 c-d間土層 (第6図の地点)
- 1 茶褐色表土
 - 2 黄茶褐色粘質土
 - 3 黄茶褐色粘質土 (炭粒含み、黒みがる)



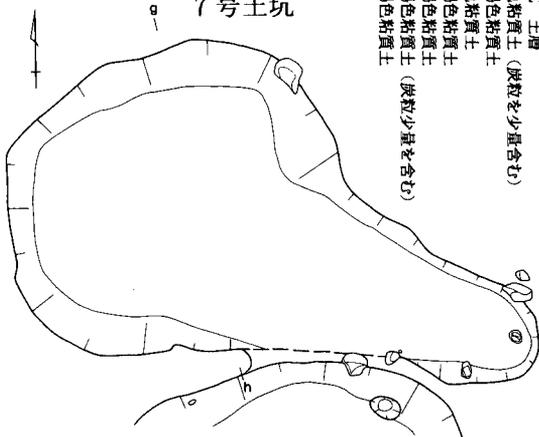
8号土坑



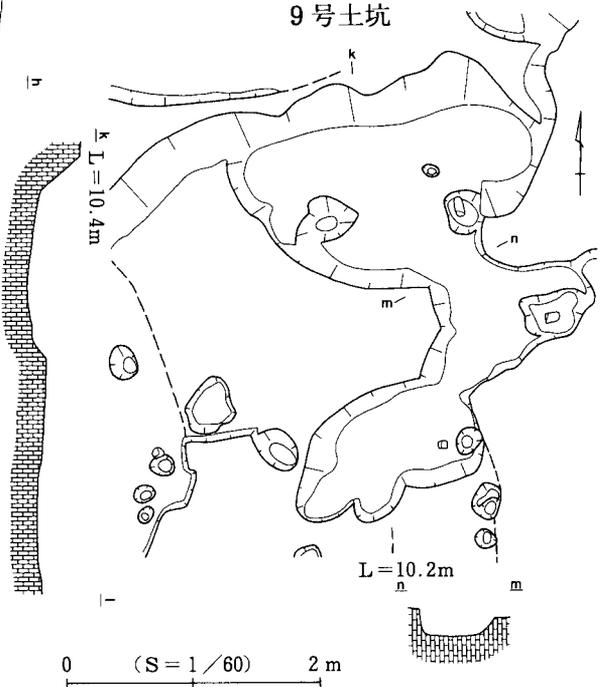
- 7号土坑 土層
- 1 灰褐色粘質土 (炭粒を少量含む)
 - 2 暗黄褐色粘質土
 - 3 茶褐色粘質土
 - 4 黄茶褐色粘質土
 - 5 暗茶褐色粘質土 (炭粒少量を含む)
 - 6 暗黄褐色粘質土
 - 7 暗黄褐色粘質土



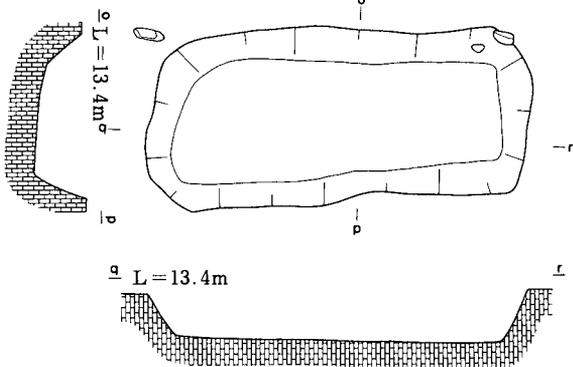
7号土坑



9号土坑

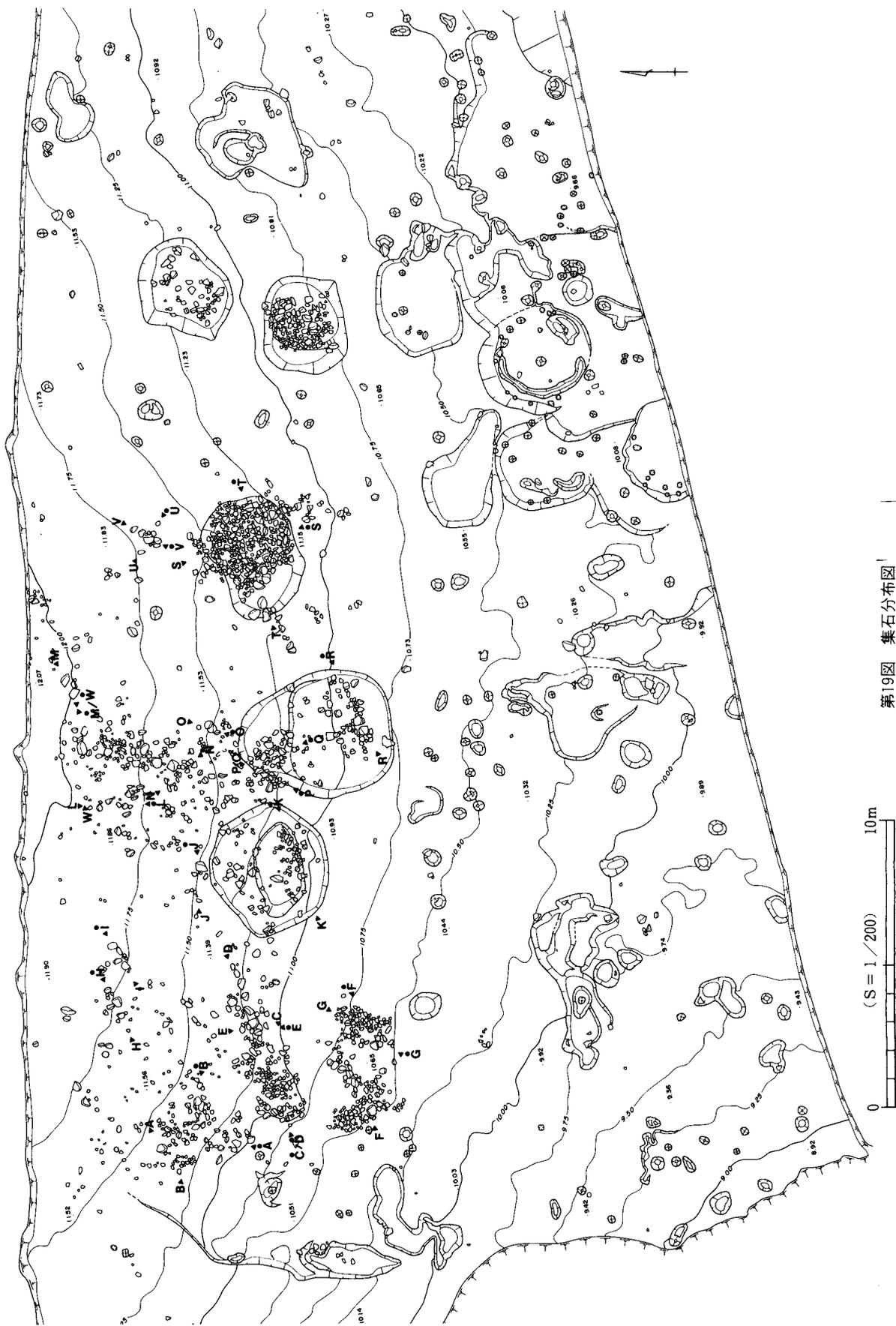


10号土坑

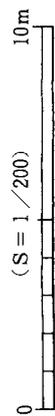


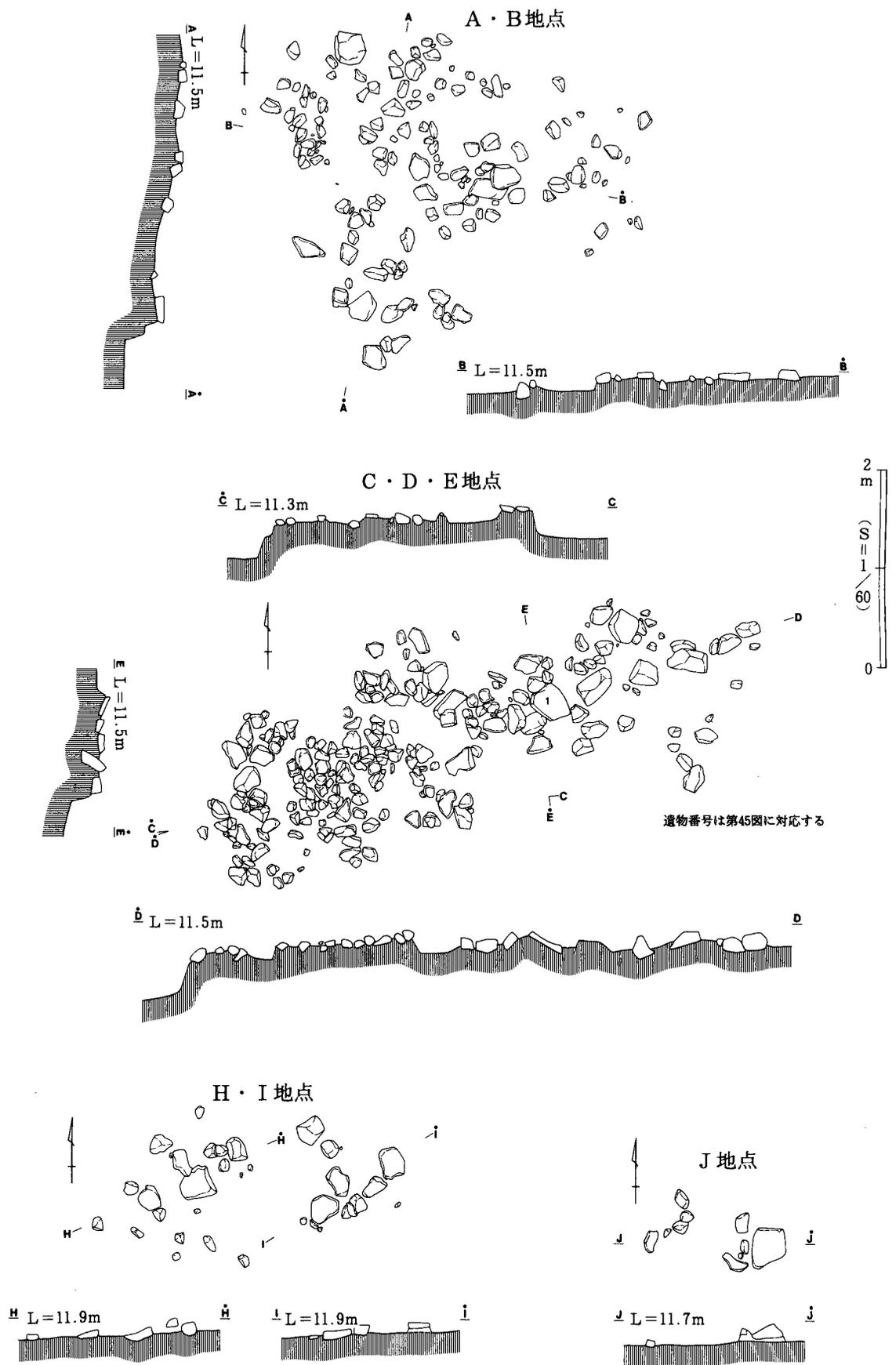
0 (S=1/60) 2m

第18図 5~10号土坑

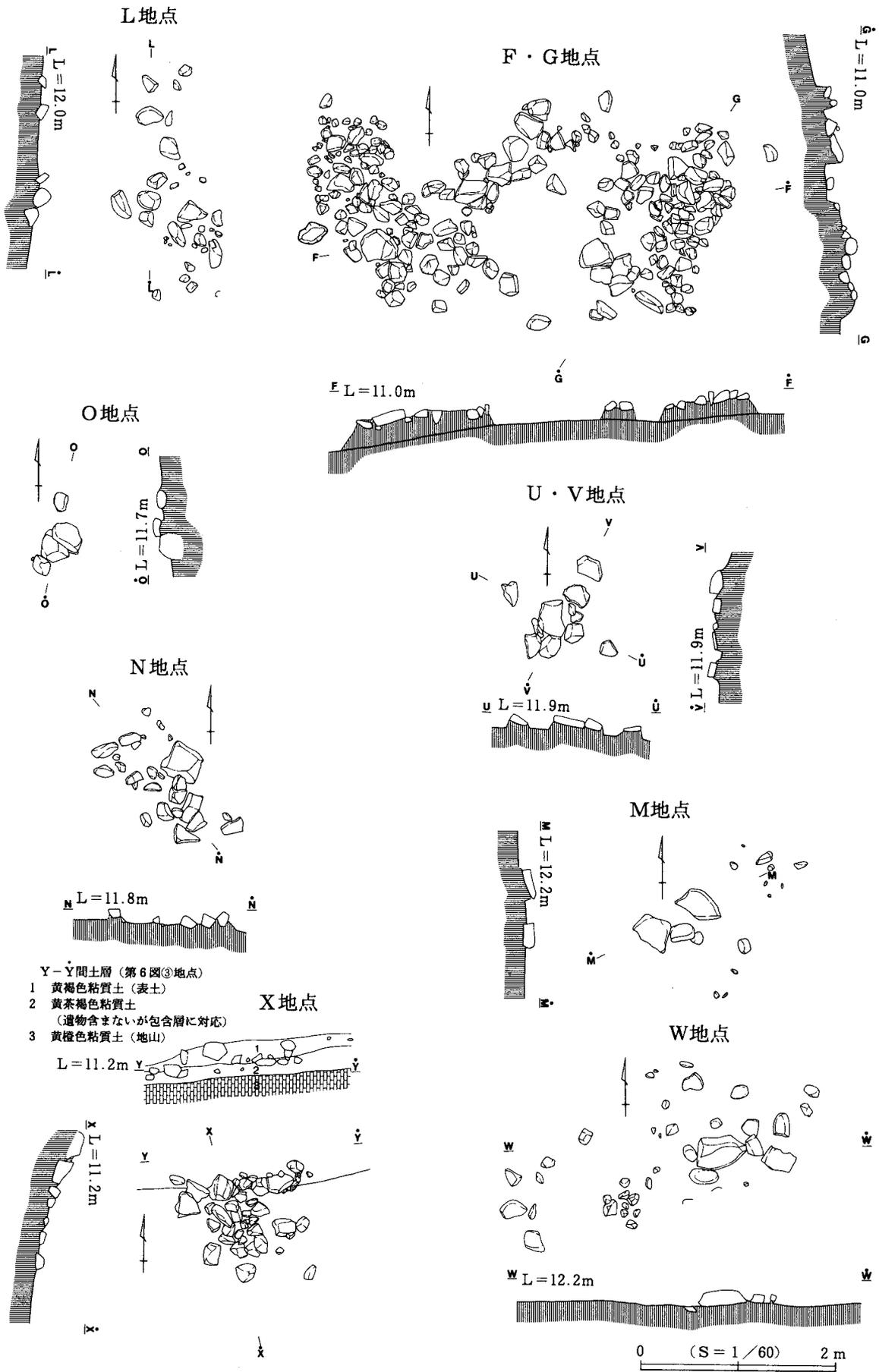


第19图 集石分布图





第20図 集石(1)



第21図 集石(2)

3 集石（第13図～第16図・第19図～第21図、図版17・図版18）

第1節でも述べた通り、集石は礫の疎密にばらつきがあってその範囲を一様に捉えにくい状況にある。ここでは断面図を作成した地点を基準にして、説明を加えることにしたい。

その分布と礫の状況からは、調査区の西部で、遺構の希薄な部分で小さめの多量の礫を中心に展開するもの（A～G地点）、やや高所で少量の大きめの礫で構成されるもの（H・I・U・V・W地点）、堅穴建物と重複して礫の密集度が低いもの（K・P～R地点）、堅穴建物と重複して礫の密集度が高いもの（S・T地点）、調査区外へ伸びて全形が不明確なもの（X地点）等が抽出され、詳細平面図、断面図を作成している。これらの覆土については詳細に記録していないが、A～G地点については流土質のしまりの悪い覆土を持ち、地山からかなり浮いた状態で検出された。2次的に移動した可能性が高いものと考えている。A～G地点以外では遺物包含層及び遺構覆土と同質であり、集石直下が地山となる程度のレベルで検出されており、堅穴建物と近接、重複するものが多い。堅穴建物と重複するものについては、堅穴建物の形成と埋没過程に深く関わるものと考えている。

この他にも、谷央部に展開するもの、塚の裾に見られるもの、調査区各所で非常に不規則かつ散漫に展開するもの数群が存在する。谷央部に展開する集石は、無遺物層中にあり、大部分が自然堆積である可能性が高い。塚の裾に見られる集石は、後述するが塚の盛土の際の土留め石である可能性が高い。その他、調査区各所で見られるものについては、礫が地山に含まれる地点でよく見られるため、それらが露頭したもの、また2次的に移動したものと思われる。

遺物は縄文土器、石器（磨製石斧、剝片、石核、すり石、石皿、石錘、軽石、砥石）、石製品（滑石破片）といった縄文時代のものが多いが、弥生土器、土師器、陶磁器も少量含まれる。すり石、石皿、石錘といった礫石器類は集石の礫と同じ石質であり、ほとんど一体化して出土している。C・D・E地点で第45図1、R地点で第45図2、P・Q地点で第45図3・4の石皿が出土している。

弥生時代以降の遺物が少量出土しているが、集石が表土下かなり浅い地山よりもレベル的に上位に分布し、覆土が遺物包含層と一体化して後世の影響を受けやすい状態にあったものと予想されることから、混入したものと判断している。調査区で確認した地山は礫を含むものであるが、量は少なく、また地点によっても偏りがあると予想される。よって礫が自然に露頭して、検出された集石のようになるとは考えられない。積極的な地山の掘削と移動の結果生じたと考えた方が適切であろう。少なくとも集石のH～X地点での形成は、堅穴建物の構築・廃棄とそう大きくは離れない時期であり、縄文時代の集落の形成と埋没に深く関係しているものと考えている。ただし、現地調査の時点ではここで述べたような認識は小さかった。調査区内に存在した集石の全てを的確に識別できたかどうか自信がなく、一部は見落とされている可能性も明記しておかねばなるまい。

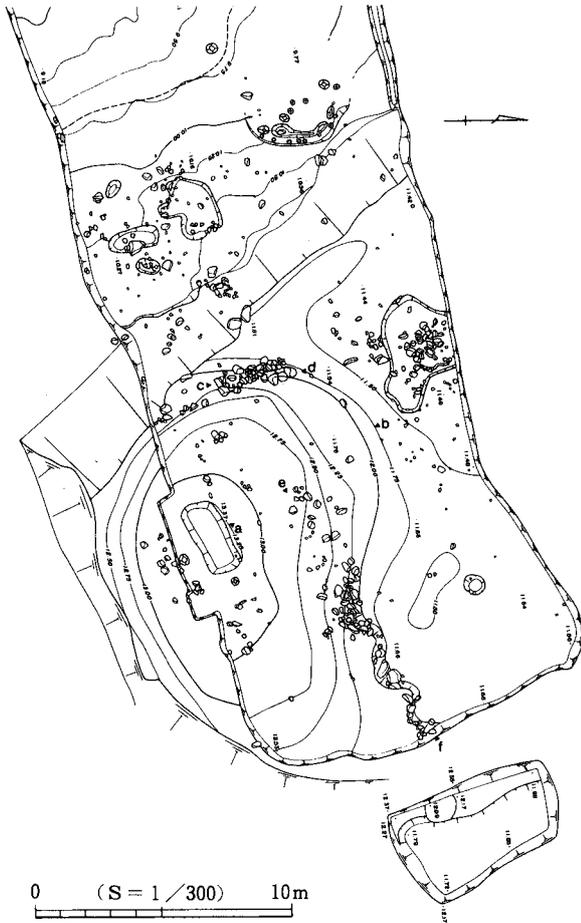
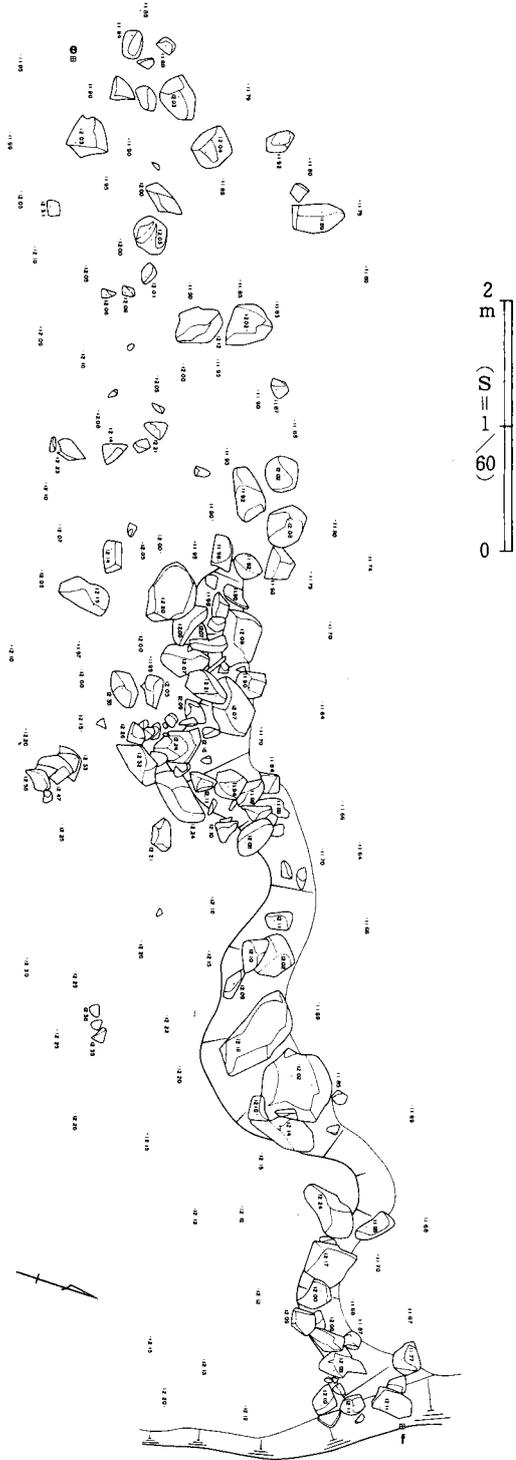
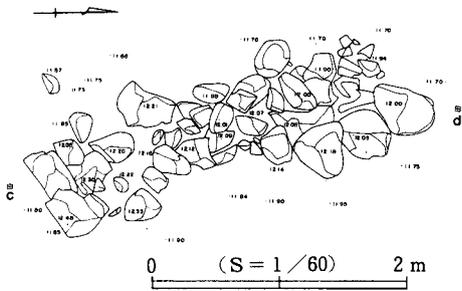
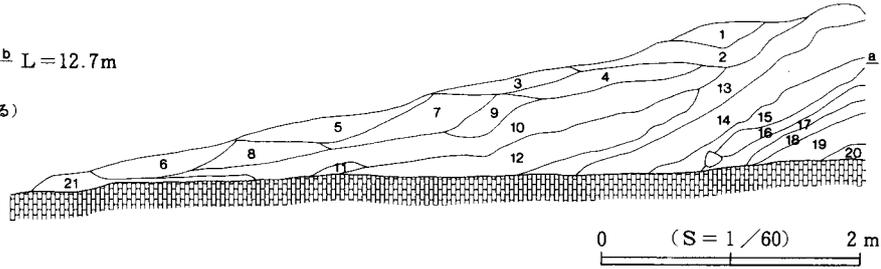
4 塚（第22図、図版19・図版20）

調査区の東部、上段の南側に寄って位置する。塚は約11.5mの標高を測る裾から、同じく13.3mを測る頂部まで、約1.8mの比高をもつ、円丘状の盛土遺構である。平面形は、調査区内では、西半部で見られる丸みを帯びたライン、東半部で見られる直線的なラインが合一した形状を呈する。西裾と北東裾の2箇所には集石が確認されている。どちらの集石も整然とした配置ではなく、礫の大きさも揃っていないが、裾に沿った直線的な並びが確認されている。塚頂部は比較的平坦で、東西に尾根状に伸びており、西部には10号土坑が掘り込まれている。円丘は調査区外の南方、東方へ広がっている。南方については地形測量、東方については調査区の拡張という補足調査を行っており、塚の規模の把握に努めている。その結果、南方については円丘裾が農道によってカットされていることを確認し

塚 盛土層

- 1 暗黄褐色粘質土
- 2 黄橙褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 黄褐色粘質土 (ややわらかい)
- 5 黄褐色粘質土 (やや暗く、しまりがある)
- 6 明黄褐色粘質土
- 7 黄褐色粘質土 (やや明るい)
- 8 黄褐色粘質土 (やや淡い)
- 9 濁灰褐色粘質土
- 10 淡黄褐色粘質土
- 11 黄灰色粘質土
- 12 淡黄褐色粘質土 (やや暗い)
- 13 黄褐色粘質土 (やや褐色が強い)
- 14 濁黄橙褐色粘質土
- 15 黄褐色粘質土 (やや黄色・褐色が強い)
- 16 濁淡赤黄褐色粘質土
- 17 黄灰褐色粘質土
- 18 淡赤黄褐色粘質土
- 19 淡黄灰褐色粘質土
- 20 暗茶褐色粘質土
- 21 淡茶褐色粘質土

b L = 12.7m



第22図 塚

た。東方については拡張した調査区において、円丘の端と集石を確認した。裾で見られた集石は端まで続くようである。塚の規模は現状で南北径約12m、東西径約21mを測る。

塚の盛土は21層に分層される。層20・21を除いてはほぼ全ての層が地山質土で構成されている。層20・21は旧地表の直上に堆積しており、土質的にも近いため、その一部となる可能性もある。土層の堆積状況からは、まず中心部分を小刻みに土盛りして高丘を作り、その後周囲を盛り上げていって、塚が築かれたものと推定できる。

遺物は、盛土から縄文土器、陶磁器、ガラス容器、石器（磨製石斧、石核、剝片、すり石）が出土している。ガラス容器は旧地表面直上から出土しており、器高約6cm、口径約1cmを測る小瓶である。「神薬」の銘があることから、薬瓶であろう。塚の築かれた時期については、現地調査の当初は古墳時代か中世と考えていたが、「神薬」瓶の出土によって近代以降と判明した。付近の老人たちが塚の築成を記憶していないことから、昭和期まで降るものではなかろう。

東半部は裾が直線的、頂部が平坦で、斜面を造成した段々畑に形状に近い。西半部はより形が整った円丘であり、宗教的な意味を持つかもしれない。塚を築いた目的を示す資料がないので、現段階では前記した以外にも多様な可能性を考えておくべきであろう。

5 ピット

調査区内で遺物を出土したピットについて、番号を振った。合計して8基を数え、P1～8と表記している。全体的に記すべき特徴に乏しいピットであり、出土した遺物も少ない。堅穴建物内のピットについては基本的に堅穴建物に属するものであり、ここには含んでいない。

P1・4・8は調査区の西部、やや南に寄って位置する。P2は同じくやや北へ寄って位置する。P3・5・6は調査区のほぼ中央で、谷の東岸に寄って位置する。P7は調査区の東部、下段で南に寄って位置する。

P1は長径約50cm、短径約35cm、深さ約5cmを測る。遺物は縄文土器が出土している。P2は長径約45cm、短径約35cm、深さ約20cmを測る。遺物は弥生土器小片、石器（剝片）が出土している。P3は長径約70cm、短径約27cm、深さ約20cmを測る。遺物は縄文土器が出土している。P4は長径約60cm、短径約50cm、深さは不明である。遺物は土器小片が出土している。P5は径約40cm、深さ約30cmを測る。遺物は縄文土器が出土している。P6は径約20cm、深さ約22cmを測る。遺物は縄文土器、石器（剝片）が出土している。P7は長径約93cm、短径約50cm、深さ約25cmを測る。遺物は土器小片が出土している。P8は長径約90cm、短径約65cm、深さ約25cmを測る。遺物は縄文土器、石器（剝片）が出土している。

6 小結

以上、堅穴建物、土坑、集石、塚、ピットについて述べた。堅穴建物は8号堅穴建物を除いては縄文前期に位置付けられ、最も密集するブロックではさらに何軒か存在した可能性がある。土坑は性格、時期とも明らかなものは少ない。7号土坑や11号土坑が縄文前期に属すると思われるが、他は弥生時代等様々な時期があるのだろう。集石はほぼ斜面全域に広がっていて堅穴建物と重複していたものを捉えきれなかった可能性がある。時期は概ね縄文前期に形成されたもので、一部が二次的に移動しているものとする。塚は近代以降に作られたもので、宗教的な意味をもつかもしれない。ピットについては時期、性格について明言できるものはない。

第3節 遺物

1 名称と記述

出土した遺物は、素材によって、土器・陶磁器・土製品類、石器・石製品類、自然遺物に大別される。記述にあたっては、ごく少量の自然遺物を除いて、その大別分類、部分名称、配列の順序について明記し、それに従って本節が構成されるものとする。

土器・陶磁器・土製品

土器・陶磁器・土製品類は縄文土器、土錘、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、近世陶磁器があり、この順に記述を進める。細部名称については第23図に表した通りである。

このうち縄文土器が圧倒的に多量であり、その他のものはどれも少量である。縄文土器は竪穴建物等遺構から出土したものが多く、器種はほぼ深鉢のみであるが、小破片が多く、器形を復元できる資料はほぼ皆無であった。よって口縁部、胴部、底部の各部位に大別し、口縁部の遺存しているものは口縁部、底部の遺存しているものは底部、それ以外を胴部と表記した。部位毎ではさらに器面の文様で細別している。以上から、縄文土器の配列と記述については第一に遺構（第3章第2節と同じ順）、次に部位（口縁部・胴部・底部の順）、最後に文様（地文を持つもの、沈線や刺突等の文様を持つもの、条痕調整のもの、無文のもの）の属性順に整理されている。

その他の土器・陶磁器については基本的に縄文土器と共通の配列と記述を取っているが、遺構出土のものがほとんどないため、属性の第一を部位、第二を文様として整理した。

観察表中の「胎土」については含まれる砂礫、鉱物、生物遺体等の有無を重視した。砂礫の粒径については統一がとれなかったため表記しなかったが、概ね0.5～1mm程度が一般的である。特徴的な砂礫や細砂の含有、粘土地、焼成、質感等については記述した。「色調」は土色帳に準拠した。

実測図については、径を復元できるものは内外面の両面図を採用し、できないものは断面と拓本で表現した。拓本は原則として外面及び文様について行ない、必要に応じて口縁部端や内面にも行なった。拓本は断面の左に配置するものとし、内外面をあわせて掲載する場合は左側を外面、右側を内面としている。断面は須恵器のみ黒塗りとし、その他は白抜きとした。縮尺は全て1/3で統一した。

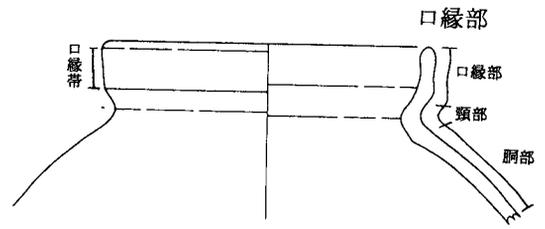
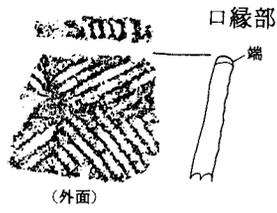
石器・石製品

石器・石製品は石斧、すり石、凹み石、叩き石、石皿、砥石、軽石、石錘、石鏃、石錐、剝片、石核、玉製品があり、この順に記述を進める。量が多い器種についてはそれぞれで分類を行ない、配列した。分類の詳細は各器種の項に記した。すり石、凹み石、叩き石については、出土した石器中でも圧倒的に多量であるため、遺構別に整理した上で、形態で細別し、配列している。主な器種の細部名称については第23図の通りである。

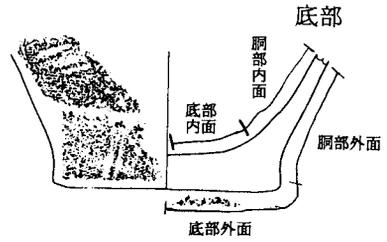
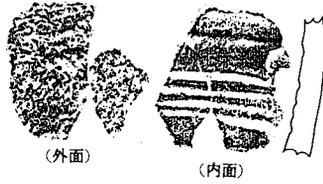
観察表及び記述中の遺物のサイズについては、概ね図の縦軸を長さ、横軸を幅、奥行を厚さとして、器種に応じて計測する部位を追加した。また、欠損などによって使用時のサイズと重量をとどめていないと思われるものについては、数値を（ ）書きして示している。

実測図は原則として平面と断面を並列するものとし、必要に応じて側面、端面、もう一方の平面等を追加して図化した。すり石等のすり面は一点破線、凹みや叩打痕は主にドットで表現した。剝片、石核類の自然面はドットで表現している。縮尺については打製石器類、玉製品類は1/2、石皿は1/6、その他は1/3とした。

土器・陶磁器

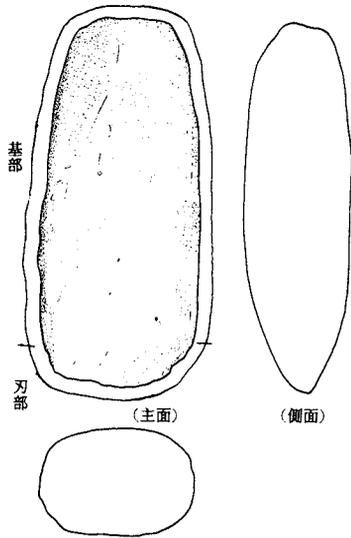


胴部

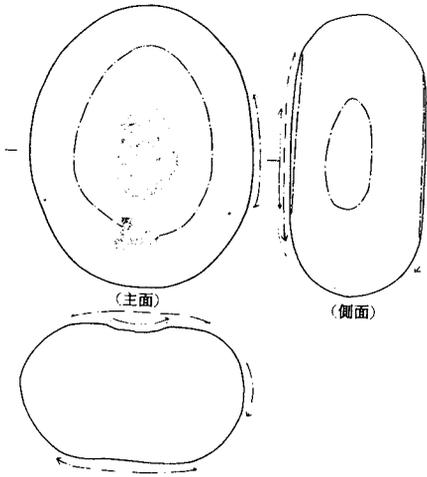


石器・石製品

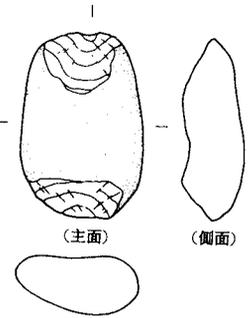
石斧



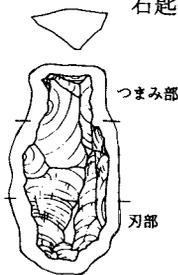
すり石類



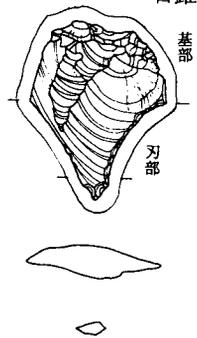
石錘



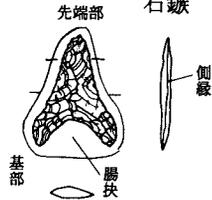
石匙



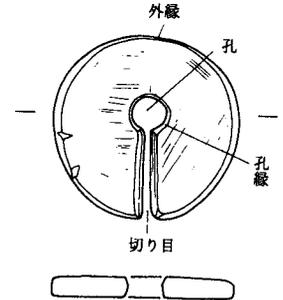
石錐



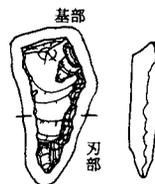
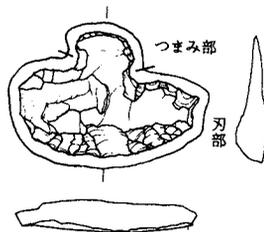
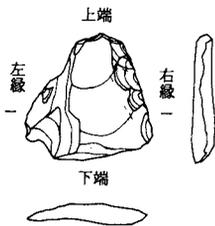
石鏃



球状耳飾



楔形石器



第23図 遺物の名称

2 縄文土器・土製品

竪穴建物出土（第24図～第26図、図版22～図版24）

第24図1～5は1号竪穴建物出土。1・5は周辺の遺構検出面からの出土であるが、関係の深いものとしてまとめた。1～3は深鉢口縁部である。いずれも直立する器形と思われる。1はかなり特異な原体を用いて非常に複雑な地文を施している。0段多条に側面環が付いたような原体を想定している。2の地文も複雑であり、端に環が付く環付文と思われる。3は端に緩やかなカーブが見られ、おそらく突起等を付ける波状気味の口縁と推定する。内外面とも平行沈線文を施すが、外面の沈線はコの字状に連結する細く浅いものである。内面の沈線は、一部に土塊が固着してわかりにくい部分もあるが、間が隆帯状を呈する深いものとなる。胎土は石英、長石、チャート等、珪質の砂礫が目につく。4・5は胴部。4は無文で、胎土、質感から、3と同一個体の可能性が高い。5は口縁部近くと思われる。沈線施文後、沈線内の連続した刺突文によって三角形を区画しているようである。

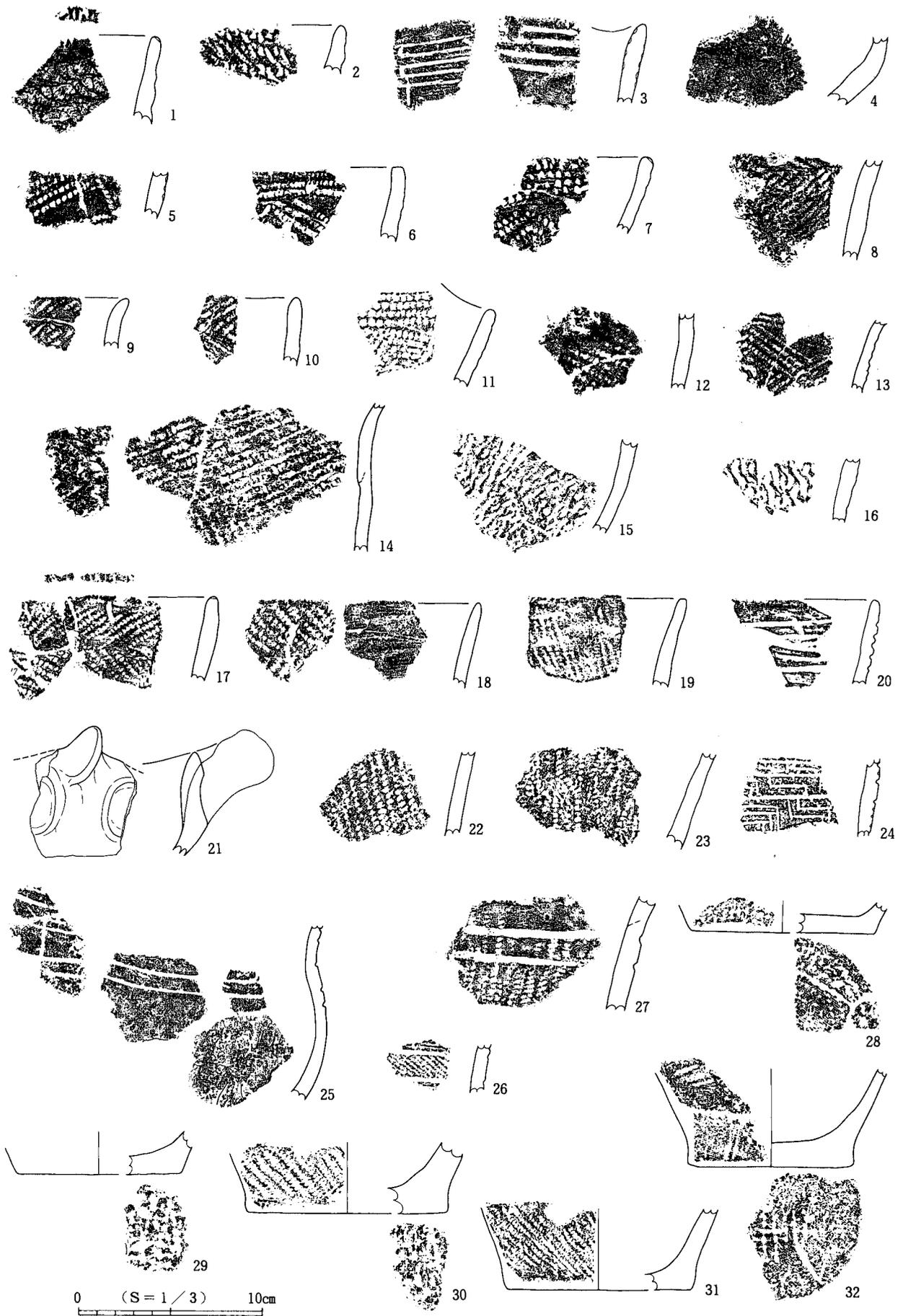
6～8は2号竪穴建物出土。6・7は深鉢口縁部で、ともに直立気味の器形である。6は端部に面を持ち、沈線内の連続刺突文で区画を形成している。円形の窪みも見られるが文様か剝離かは不明である。7は端部を刻むもので、6と同じ構成の文様を施す。原体は6よりやや太く、隅は丸いようである。胎土に明瞭に繊維を含む。8は胴部。地文は非結束の羽状縄文である。

9～14は3号竪穴建物出土。9～11は深鉢口縁部である。9はやや外反気味の器形、地文は無節L R縄文と思われる。10は直立する器形で、羽状縄文を地文とするようである。11は端に緩やかなカーブが見られ、起伏の小さい波状口縁と推定する。先端が長楕円形の棒状の原体により、沈線内の連続刺突文を施す。胎土には白色の風化気味の礫が目につく。12～14は胴部である。12はR L縄文を地文としている。13は11と同じ構成の文様を施し、三角形の区画を形成している。14は非結束の羽状縄文を地文とする。胎土には海綿骨片が顕著に含まれる。

15・16は9号竪穴建物出土。ともになんか特異な原体による複雑な地文を持つ胴部である。15の地文は縄文と思われるが、複雑な上に遺存が悪く、原体は同定できない。16の地文は環付文風であるが、条が細く、網目がほとんど見えない異質な文様である。

17～32は8号竪穴建物出土。17～21は深鉢口縁部である。いずれもほぼ直立する器形と思われる。17・18はともに非結束の羽状縄文を地文とするもの。17は最上段の縄文帯が左下がりとなり、胎土は焼土塊を含む。18の羽状縄文は17と逆で最上段が右下がりとなっている。19は直立気味で粒の細かい斜縄文を地文とし、胎土は雲母を含む。20はおそらく小波状口縁になると思われ、太い沈線文を施している。21は陰刻の区画文が施された間に偏向突起が付けられているようである。22～27は胴部である。22は直立気味のR L縄文を地文とする。胎土はシルト質の地で、脆くて風化しやすい質感を持つ。23は原体を転がさずに押圧のみ行なったかのような、間隔をおいた1条ずつの縄文が見られる。24は横位の沈線を基調として鍵状の短い沈線を加えた四角形の区画文を施している。胎土には金属光沢を持つ細かい石英粒が目につく。25はやや胴が張り出す器形と思われ、沈線文が2条見られる。26は沈線間に細かい斜縄文が見られるもの。27は縦位の縄文を地文とし、2条の沈線文が施されている。28～32は底部である。文様は全て外面のみで見られる。28は底部に胴部下端から連続した刺突文が見られる。29は底部に編み物によると思われる圧痕が見られる。30は胴部下端はR L縄文、底部は網代圧痕が見られる。31は胴部下端はR L縄文、底部は残りが悪いが網み物と思われる圧痕が見られる。32は胴部下端は条痕、底部は網代圧痕が見られる。

第25図1～16は10号竪穴建物出土。1～6は深鉢口縁部である。1・2はやや外傾する器形と思われ、端を刻み、羽状縄文を地文とする。1・2の縄文帯の方向は逆である。3は内湾気味の器形で、



第24図 竪穴建物出土の縄文土器(1)

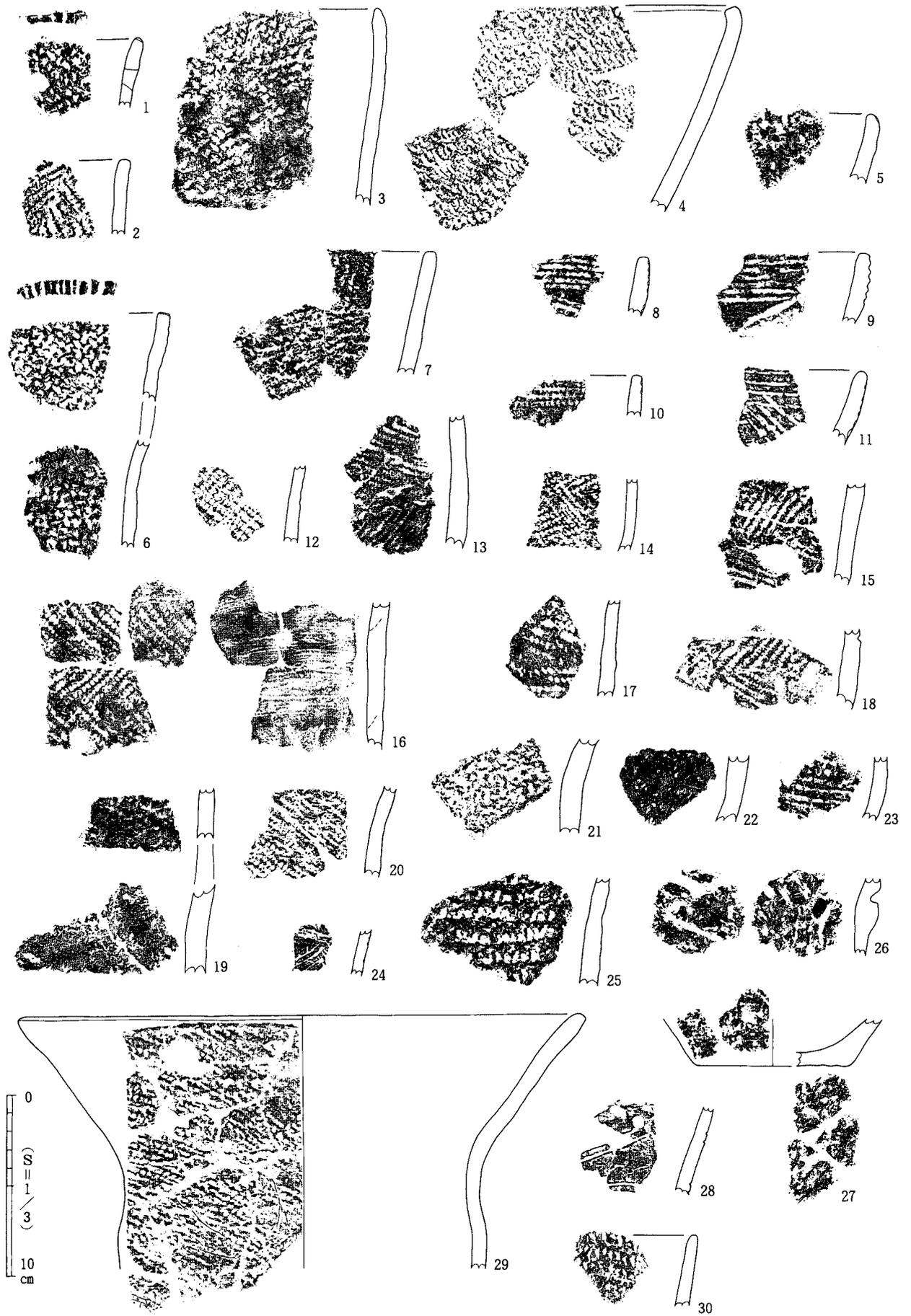


第25図 竪穴建物出土の縄文土器(2)

羽状縄文を地文とするようであるが、摩滅が著しい。4はやや外反気味の器形と思われ、端直下に小突帯を付し、以下は沈線内の連続刺突文で三角形の区画を形成するようである。5は外傾する器形で、端を刻み、直下に横位の沈線帯、以下は沈線帯で三角形の区画、区画内に竹管と思われる工具で円形文を配している。色調は明るい橙色で、胎土は軟らかいシルト地に含まれる砂礫が少ないが、焼成は良い、独特の質感を持つ土器である。6は器面に土塊が固着しており、詳細不明である。7は口縁部、胴部、底部破片であるが、同一個体の可能性が高いものとみて図上で復元を試みた。やや外傾する器形で、胴部は縄目が見られるが、小破片のため、どのような原体によるものかはわからない。底部外面には刺突文がみられる。8～15は胴部である。うち、8～12は羽状縄文を地文とするもの。9は羽状の単位が非常に長いもので、当然原体も長いものと思われる。胎土はシルト質の地で、脆くて風化しやすい質感を持つ。13・14は縄文が見られるが小破片のため、羽状縄文か斜縄文かは不明である。15は焼成が良い硬質な土器で、沈線を施す。胎土には径4mmに達するような大粒の珪質の砂礫が含まれている。16は底部であり、外面中央が丸底状に少し張り出す器形である。外面胴部下端から底部にかけては細かい爪形の連続刺突文が施され、底部は7重の同心円状に配されて、胴部下端の刺突文とも一体化している。内面はナデ調整により平滑で、炭化物が付着している。

17～25は14号竪穴建物出土。17～19は深鉢口縁部である。17・18は外傾する器形と思われる。17は粒が錯綜する複雑な縄文を地文とするもので、一応LR縄文に環が付いたものを想定している。18も縄文地文と思われるが摩滅しており詳細は不明。19は端を厚くして面を取る波状口縁である。端直下に沈線が施されており波状口縁に沿うものと思われる。焼成が良く堅緻な質感を呈し、内面に炭化物が厚く付着している。20～22は胴部である。20は18と同一個体の可能性が高い。21は縄文地文と思われるが条が不明確で、粒の向きもばらついており、複雑な撚りと思われる。22は羽状縄文を地文とする。23は胴部から底部であり、全体の器形を把握できる好資料である。外傾して開く胴部と、中央が丸底状に少し張り出す底部からなる。胴部はRL縄文を地文とする。底部は細かい爪形の連続刺突文が4重の同心円状に配される。胎土には雲母が含まれる。24・25は底部である。24は底部外面に同心円状に4重の沈線を施してガイドラインとし、沈線内に爪形の刺突を加えたものと思われる。25は摩滅著しく、文様の有無等の詳細は不明である。

第26図1～27は11号竪穴建物出土。12・18・20については遺構に接する風倒木から出土しており、関係の深いものとしてここにまとめた。1～11は深鉢口縁部。概ね少し外傾して開く器形で、胴部の屈曲も小さいものと思われる。1は羽状縄文を地文とする。径外面で1cm、内面で6mmを測る、外面から穿孔したと思われる補修孔が確認される。2も1と同様の地文と思われるが摩滅しており不明確である。3は縄文と思われる地文を持つが、粒の方向が不揃いで錯綜しており、多段撚りの縄文と想定している。内外面とも黒色化しており、胎土は海綿骨片を含む。4は端が軽く内屈する口縁部。地文は複雑で、環付きの縄文原体を想定している。5の地文も4と同様に考える。胎土はシルト質の地で、脆い。6には同一個体と思われる胴部がある。地文は組紐文である。7は地文縄文と思われるが器面に煤と土が固着しており、詳細は不明である。8は小波状口縁になるものと思われる。連続刺突文が施される。9は端直下に横位の沈線帯が見られるが、沈線内に土が固着しており、刺突があるかどうかは不明である。10は端直下に沈線3条、沈線内に連続刺突文を施している。11は縁の緩いカーブのラインから見て、小波状口縁になるものと思われる。沈線で区画が構成されるようである。12～26は胴部。12は文様が施されており、連続刺突文か羽状縄文になると思われるが、残りが悪いため、不明確である。13～16は羽状縄文を地文とする。13の胎土は細砂を多く含み、ざらついた質感を呈する。15は長径2.4cm、深さ4mmの長楕円形の凹みが見られ、堅果等の圧痕と思われる。胎土は



第26図 竪穴建物出土の縄文土器(3)

シルト質の地で、脆い。16の胎土には雲母が含まれる。17は縄文と思われる地文を持ち、多段撚りの複雑な原体と思われる。18の文様は連続刺突文による区画の一部であろう。胎土はシルト質地で、脆い。19～22は地文を持つと思われるが、摩滅しており詳細が不明なものである。20は羽状縄文と思われるが、確実にはいえない。22はまばらに縄目が見える。23の文様は沈線内の連続刺突文であろう。24の文様は沈線の区画の一部であろう。焼成が良く、硬質な土器である。25の文様は連続刺突文であるが、8などに比べると大振りで粗っぽい印象を与え、より太く先が丸い原体で施文しているようである。26は太細2種の沈線が見られる。円盤状に残っており、把手もしくは土製品の可能性があるが、摩滅が激しくてよくわからない。27は底部である。摩滅が激しいが、刺突文が外面胴部下端から底部にかけて見られ、おそらく一連の文様帯と思われる。

28は12号堅穴建物出土。胴部であり、文様は、沈線による区画の一部と思われる。焼成は良好で硬質な土器である。

29・30は13号堅穴建物出土。29・30は深鉢口縁部である。29は胴部上位で屈曲してハの字に直線的に広がる器形であり、口径30cm程に復元できる。地文は縄文であるが、粒が重なっており、多段撚りの縄文と推定している。胎土には海綿骨片を多量に含み、径3mm大の大粒の珪質の砂礫も見られる。30は摩滅しているが刺突文が施されているようである。

堅穴建物出土の縄文土器は、前期に属するものと後期に属するものとに大別される。量的には前期が圧倒的に多く、しかも前期前葉の時期に集中している。後期の縄文土器は前期の土器と混在して1・8・10～14号堅穴建物から出土している。8号堅穴建物では第24図19～27、29～32など一定量まとめて出土しており、時期的には後期中葉、加曽利B1式¹⁸を中心とする時期に比定できる資料である。その他の堅穴建物からは第24図3、第25図15・19、第26図28などごく少量ずつ出土しており、概ね8号堅穴建物に近い時期の土器と考えている。

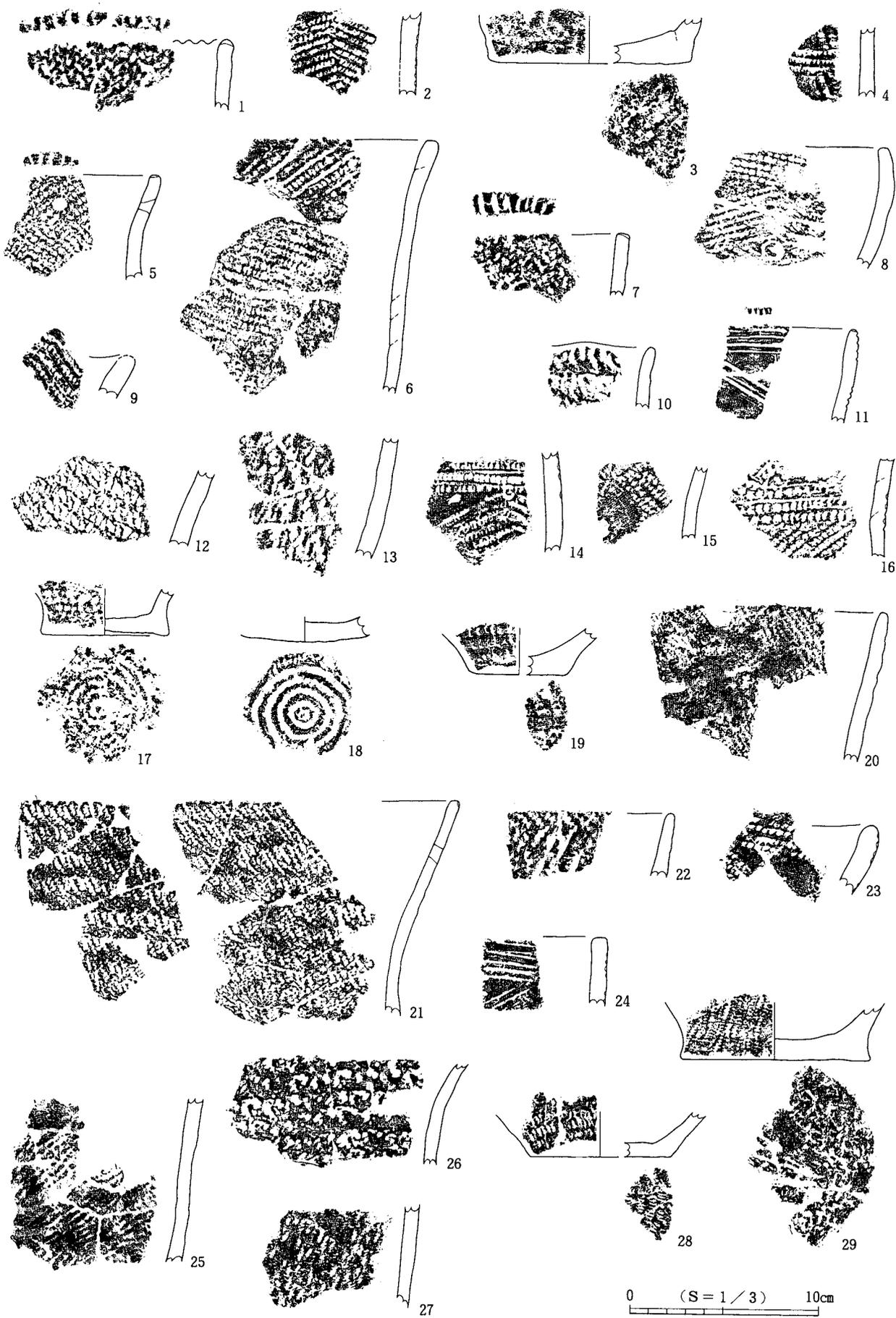
土坑出土（第27図1～4、図版25）

第27図1・2は11号土坑から出土した。1は口縁部である。端に深い、幅広い刻みを行なう。地文は組紐文である。胎土はシルト質地で、脆く、摩滅が激しい。2は胴部である。文様は沈線内の連続刺突文による区画が交差する部分である。3は3号土坑から出土した。底部である。摩滅しているが、外面胴部下端に縄文、底部に網代圧痕が確認される。4は9号土坑から出土した。胴部で、文様は爪形の刺突文を連続して施している。

土坑出土の縄文土器は、11号土坑の1・2、9号土坑出土の4が前期前葉、3号土坑出土の3が後期頃に属する。

集石出土（第27図5～19、図版25）

第27図5～11は口縁部である。5・6は羽状縄文を地文とするもの。5は補修孔が確認され、外面径1.8cm、内面径5mmを測る。7は組紐文を地文とするもの。8は内湾気味の器形で、沈線内の連続刺突文の区画内に、円形竹管文を配するものと思われる。胎土に海綿骨片を多く含んでいる。9は波状口縁で、波頂部に小突起を付けるものである。外面は黒色化している。10は摩滅が激しく、端に刻みが確認されること以外は不明である。11は細い沈線文で三角形の区画を行なっているもの。12～16は胴部である。12・13は複雑な地文を持つもので、多段の縄文か、さらに環が付く原体を想定している。14～16は連続刺突文を持つもの。14は沈線内の連続刺突文による区画であるが、上段の横位のものに対して下段の斜位のものは一回り単位が小さく、原体も異なるものであろう。15も区画の交差部分である。16は細い沈線間を連続刺突するもので、本遺跡では小数例となる。下半は縄文が入っており、地文になるものと思われる。17～19は底部である。17はほぼ全存しており、径約7cmを測る。摩滅が



第27図 土坑・集石・谷出土の縄文土器

激しいが、外面に6重の同心円状の沈線内の連続刺突が確認される。18は17と同じく、底部に6重の同心円状の沈線内の連続刺突が確認される。19は外面胴部下端から底部にかけて連続して細かい爪形文が巡り、底部外面では同心円状になるものと思われる。なお、7・9についてはA・B地点から、18・19についてはC・D・E地点から出土している。

集石出土の縄文土器は、ここに掲載したものを中心にして大半が前期前葉に属する。この他、図化していないが後期に属するものも少量存在している。

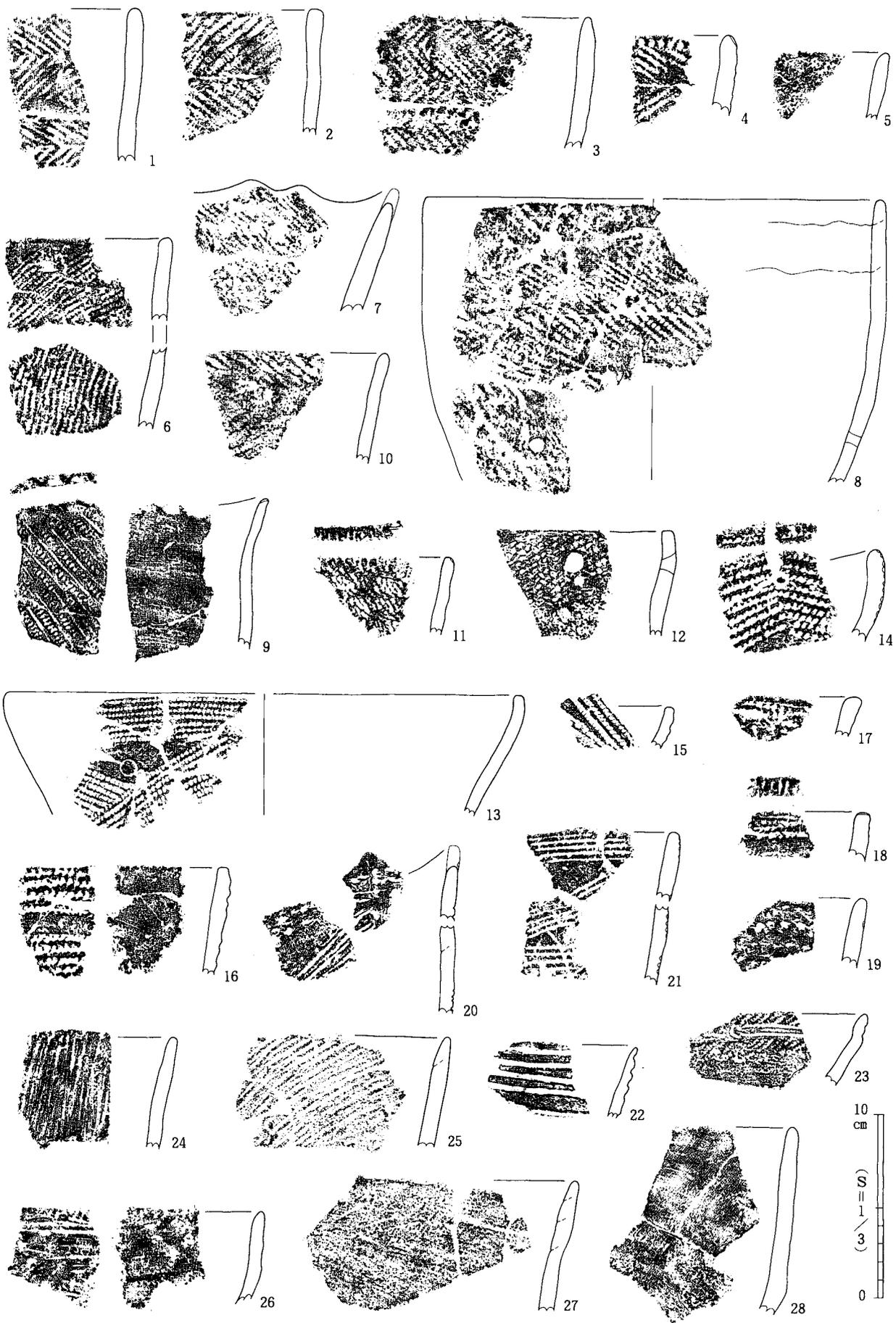
谷出土（第27図20～29、図版25）

第27図20～24は口縁部である。20はやや外傾する器形である。縄文と思われる地文を持つが、土塊と煤が器面を覆っており、詳細は不明である。21は胴部中位から外傾して開く器形。地文は複雑で、側面環付きのRL縄文と想定している。補修孔が確認され、外面径8mm、内面径7mmを測る。20と質感、器形が似ており、同一個体の可能性がある。22は地文を持つようであるが、不明確である。内外面とも黒色化した土器である。23は内湾気味の器形で、やや厚手、波状口縁と思われる。沈線内の連続刺突文による区画を行なっている。24は直線的に立つ器形と思われ、端はきれいに面を取っている。文様は沈線による区画である。25～27は胴部である。25は羽状縄文を地文とするもの。26・27は複雑な地文を持つものであり、26は端環付文、27は多段の縄文と想定している。28・29は底部である。28は外面胴部下端から底部にかけて連続して細かい爪形文が巡り、胴部下端では3段、底部では同心円状になるものと思われる。29は径が大きく、底部外面がフラットで安定感が高い。胴部の地文はLR縄文と思われ、かなり直立気味の条で、粒が細かい。外面には網代圧痕が見られる。胎土には白色の砂礫がよく見られる。なお、21・24・26・27については北岸寄り出土している。

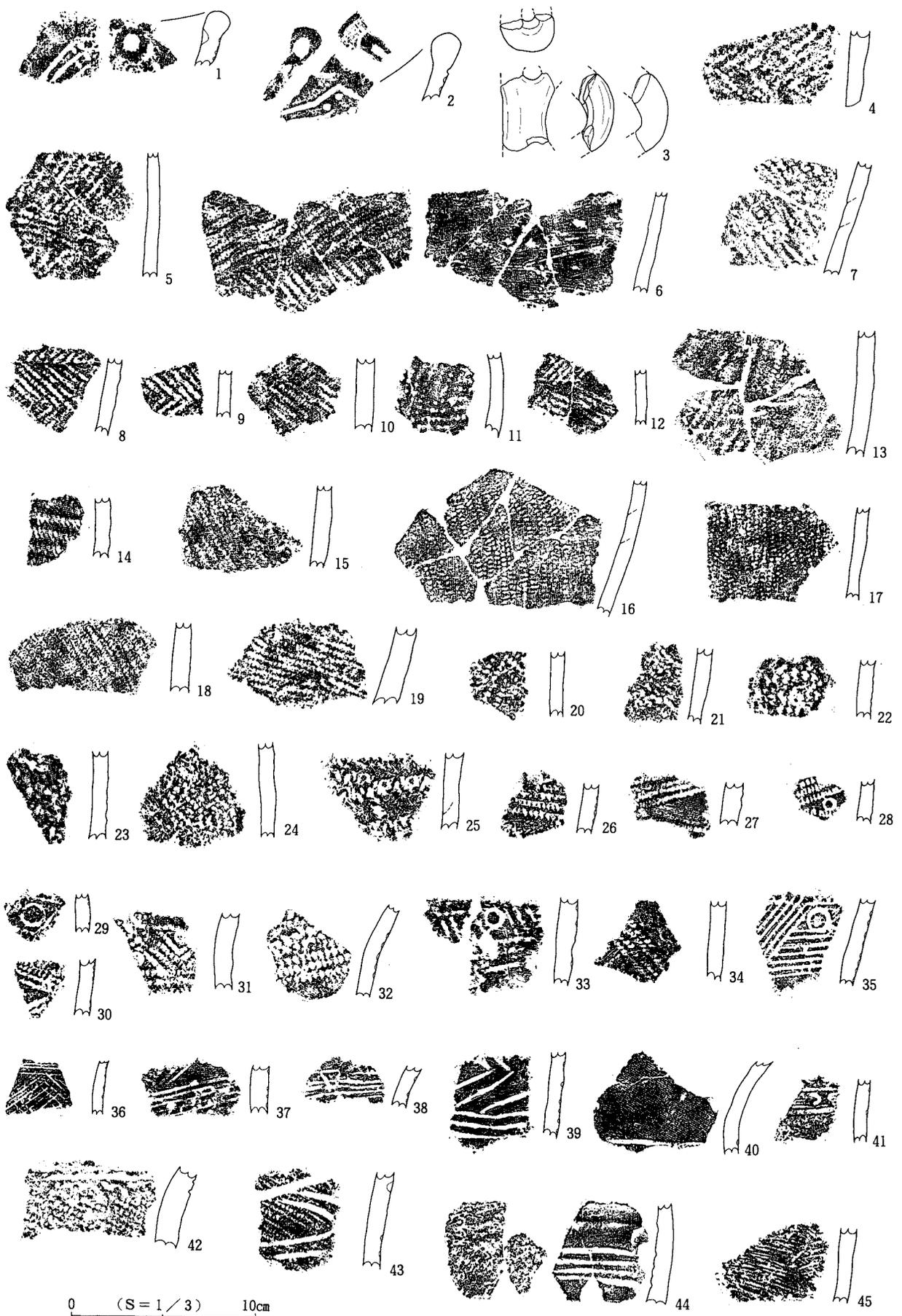
谷出土の縄文土器は大半が前期前葉に属するが、29のように後期頃と思われるものも少量見られる。

包含層他出土（第28図～第31図、図版26～図版28）

第28図、第29図1・2は口縁部である。23以外は深鉢であり、大半はほぼ直立する器形になると思われる。1～4は羽状縄文を地文とするもの。5は摩滅が激しくて詳細は不明。胎土には焼土塊と海綿骨片が含まれる。6～8は斜縄文を地文とするもの。6はLR縄文が地文となる。補修孔が確認される。7は双頭の突起を付ける波状口縁である。縄文が地文と思われるが、摩滅が激しく詳細は不明である。8は外面径7mm、内面径6mmの補修孔が確認される。胎土には海綿骨片が多く含まれる。9～12は複雑な構成の地文をもつもの。9は端を押圧しひねった口縁部であり、地文は直前段合燃と思われる。どちらも本遺跡では希少例である。10は摩滅が激しくて地文の詳細は不明。11の地文は多段縄文と想定している。14号竪穴建物出土の第25図17とは同一個体の可能性がある。12は端をきれいに面とりしている。地文は組紐文と思われるが、摩滅しており確実には言えない。外面径1.1cm、内面径6mmの補修孔が確認される。13～19は刺突文を施すもの。13は内湾気味の器形。沈線内の連続刺突文によって三角形の区画を構成し、区画内に円形竹管文を配している。胎土には雲母が含まれる。14・15は波状口縁となるもの。14は厚手、刺突文の上から円形竹管文を施している。16は沈線内の連続刺突文であるが、ガイドラインとなる沈線の痕跡がはっきり残っている。18については、接合しないが同一個体と思われる破片が多く存在する。19は端直下に刺突文を巡らす。3段確認されるが、段間が広く、本遺跡の刺突文中でも小数例となる。20～23は沈線文を施すもの。20は、接合しないが同一個体と思われる破片が確認されているものである。小突起が付く波状口縁で、端直下は刺突文を巡らす。その下は斜位の沈線が見られ、おそらく区画になるものと思われる。21の文様は沈線による三角形区画の一部である。22は起伏は小さいが波状口縁と思われ、太い沈線を1本ずつ引いたと思われる。23は浅鉢の可能性があり、端で軽く屈曲する器形であり、縄文地文に沈線を2条施し、沈線間はすり



第28図 包含層他出土の縄文土器(1)



第29図 包含層他出土の縄文土器(2)

消して弧文で区画している。24～26は条痕調整の土器。24は縦位条痕、25は斜位条痕である。26は摩滅が激しく、条痕かどうかはっきりしない。27・28は無文で内外面ともナデ調整の土器。27は胎土に海綿骨片を多く含むためか、脆くて摩滅が激しい。第29図1・2は波頂部に刺突を入れ、沈線文を巡らす波状口縁。1は内面に玉状刺突を行ない、外面は平行沈線と突起直下に刺突を施している。胎土に風化した白色の礫が目立って含まれる。2は偏向突起が付くもので、突起には側面両方向から円形、四角形の刺突が加えられる。突起直下は沈線を三角形に曲げ、刺突を行なっている。

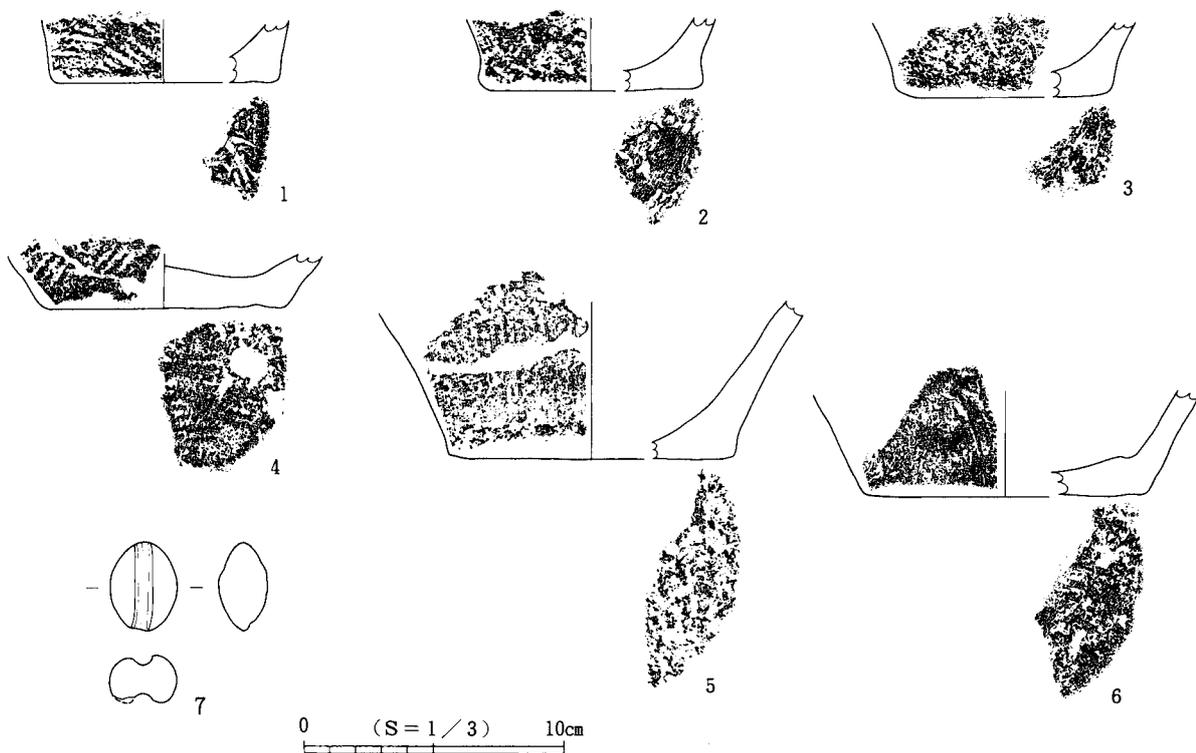
第29図3は環状を呈し、一方の端に焼成前の穿孔が認められる。孔を持つ側が上位となり縦に貼りつく突起、もしくは土製品の類と推定している。

第29図4～45は胴部である。4～12は羽状縄文を地文とするもの。4は器面がやや摩滅している。7は外面に厚く煤が付着する。胎土に焼土塊が含まれる。11の胎土には粒径2mm大の石英・長石が目立って含まれる。13～19は斜位もしくは縦位の縄文を地文とするもの。14～19は焼成良好で堅緻な質感を持つ土器。地文は、14が長径6mm、短径2mmの大粒のRL縄文である。16は縦位に近い直立気味のRL縄文、17は縦位の縄文、18は粒の細かいRL縄文、19はRL縄文である。20～24は複雑な地文を持つもの。地文は20～22が環が付く縄文、23は組紐文、24は多段縄文と推定するが、残りが悪く、明らかにできなかった。25～34は連続刺突文を持ち、区画文様帯を構成するもの。25は粗っぽい大振りな刺突文であり、下位の刺突文列は交互刺突である。胎土には雲母、石英、長石が目立って含まれる。28・29・31・33は刺突文区画内に円形竹管文が配されている。29・30は接合しないが同一個体と考えている。31の刺突文列は縄文に酷似するが、区画帯の通りに縄文原体を転がすことはまず不可能であることから刺突と判断した。32は上位の刺突文列が細い爪形であるのに対して、下位は25のように太い交互刺突となっており、複数の原体で刺突文を施していることがわかる。33は長径1.6cm、短径9mm、深さ5mmを測る堅果類等の圧痕が見られる。34は刺突文列の下位にコンパス文のような沈線の痕跡が見られるが、はっきりしない。35～44は沈線が見られるもの。35～37は三角形もしくは菱形の区画を形成している。35は区画内に円形竹管文を配している。38は平行沈線を楔形の沈線で区切っているものと思われる。39の沈線は1本ずつ引いたと思われる太いもので、上位は斜位の矢羽根状、下位は横位平行に施されている。40は丁寧なナデで仕上げられた器面の下端に1本の沈線が見られる。39・40は胎土に雲母が含まれている。41は沈線内に弧文を配し区切っているものと思われる。42は厚手、縄文地文で、上端に沈線が1本見られる。43は細かい縄文を地文とし、上位の沈線は深く直線的で、下位の沈線は浅いが強い弧状を呈する。おそらくは自在の沈線文で文様帯を形成する土器と思われる。44は内面に平行沈線が見られるものである。45は条痕調整の土器である。

第30図・第31図1～6は底部である。第30図1～6は外面に刺突文を施すもの。1は底部がほぼ完存しており、径8.5cmを測る。5重の同心円状の沈線内に爪形の刺突文を連続して巡らしている。同様に2は7重以上の同心円状の沈線内に爪形の刺突文が巡っている。また、摩滅しており明確でないが、外面胴部下端にも刺突の痕跡が残り、底部・胴部一連の文様が施されていた可能性が高い。3は沈線、刺突とも非常に細かいもので、径が小さいわりに9重以上の同心円状の沈線、爪形の連続刺突文が施されている。4は外面胴部下端に3段の連続刺突文が見られ、底部の同心円状の連続刺突文と一体的な文様を構成している。胎土はシルト質地で、軟らかく、脆い。5・6は同心円状の沈線内に土が固着しており、刺突の有無は不明であるが、おそらく1～4と同様の文様と思われる。第31図7～15は外面に網代圧痕が見られるもの。8・9は底部が半存しており、8は径9.2cm、9は径8cmを測る。11～15は胴部の地文に縄文を持つ。11は斜縄文がかなりナデ消されている。12はRL縄文が地文である。角ばった折り込みを持つ網代痕が鮮明に残る。16・17、第31図1・2は外面がナデ調整され無文



第30図 包含層他出土の縄文土器(3)



第31図 包含層他出土の縄文土器(4)・土製品

のもの。16は胴部上位までの同一個体破片があり、図上で復元を試みた。胴部は摩滅しており、縄文らしい地文、上端の刺突文らしい痕跡が見られるがはっきりしない。底部外面は周縁がわずかに突き出し、凹み底ふうである。17の胴部も縄文地文らしいが不明確である。胎土はシルト質地で、軟らかく、脆い。1・2は外面無文であるが、第30図15と質感、色調が同じで、同一個体の可能性がある。とすれば、1・2は網代圧痕の範囲から外れた部分と言うことになるだろう。1は胴部の地文がRL縄文である。第31図3～6は摩滅して外面の状況がはっきりしないものをまとめた。3の胎土はシルト質地で、軟らかく、脆い。4は胴部地文がLR縄文で、底部外面には長径1.6cm、短径1cm、深さ4mmを測る堅果類等の凹みが見られる。

第31図7は土錘である。完存しており、長さ3.5cm、幅2.6cm、厚さ1.8cm、重さ14.2gを測る。縦軸に幅7～8mmの溝が表裏一周する、有溝土錘である。胎土には雲母、焼土塊が含まれる。

包含層他出土の縄文土器は、前期に属するものと、後期に属するものとに大別される。量的には前期が圧倒的に多く、概ね前期前葉の時期に位置付けられる資料である。後期の縄文土器は口縁部では第28図22・23・27・28・第29図1～3、胴部では第29図16・17・38～44、底部では第30図7～15などが相当する。時期的には後期中葉、加曾利B1式⁸の前後に比定できる資料である。また、土錘第31図7は金沢市米泉遺跡、富山県朝日町境A遺跡等に例があり、後期以降の時期と推定している。

第1表 縄文土器観察表(1)

図No	出土遺構	層位	器種	部位	調整・文様	色調	胎土	実測No	備考
24-01	1号竪穴建物	検出面	深鉢	口縁部	外面環付文?、内面ナデ、端キザミ	黒褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-4	
24-02	1号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面環付文、内面ナデ	褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-2	
24-03	1号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面沈線文、内面沈線文・ナデ	外面にぶい黄褐色、内面黒褐色	砂礫含む	B-1	
24-04	1号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外内面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面褐色	砂礫含む	B-3	
24-05	1号竪穴建物	検出面	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-5	
24-06	2号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ、端面取り	にぶい褐色	砂礫含む	B-6	
24-07	2号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ、端キザミ	にぶい褐色	砂礫含む	B-8	
24-08	2号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-7	
24-09	3号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文(RL無節)、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-11	
24-10	3号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-13	
24-11	3号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-14	
24-12	3号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文(LR)、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-9	
24-13	3号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-12	
24-14	3号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	黒褐色	砂礫含む	B-10	
24-15	9号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-30	外部に煤付着
24-16	9号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面環付文?、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-31	
24-17	8号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ、端キザミ	外面黒褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫、焼土塊含む	B-17	
24-18	8号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面工具ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-16	
24-19	8号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文(RL)、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、雲母含む	B-23	
24-20	8号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-27	
24-21	8号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面ナデ・陰刻、内面ナデ、偏向突起	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-211	
24-22	8号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文(RL)、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-25	
24-23	8号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文押圧?、内面ナデ・ケズリ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-24	
24-24	8号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面に四角形の区画文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-26	
24-25	8号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面沈線、内面ナデ	浅黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-15	
24-26	8号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面斜縄文・沈線、内面不明	外面黄褐色、内面黒褐色	砂礫含む	B-28	
24-27	8号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縦縄文・沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-18	
24-28	8号竪穴建物	覆土	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-20	
24-29	8号竪穴建物	覆土	深鉢	底部	外面網物疋痕、内面ナデ	外面浅黄褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-22	
24-30	8号竪穴建物	覆土	深鉢	底部	外面網代・縄文(RL)、内面ナデ	外面褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-21	
24-31	8号竪穴建物	覆土	深鉢	底部	外面編物疋痕・縄文(RL)、内面ナデ	外面褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-29	
24-32	8号竪穴建物	覆土	深鉢	底部	外面網代疋痕・条痕、内面ナデ	外面褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-19	
25-01	10号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ、端キザミ	にぶい褐色	砂礫含む	B-37	
25-02	10号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ、端キザミ	暗褐色	砂礫含む	B-39	煤付着
25-03	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-46	
25-04	10号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面凸帯・刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-40	
25-05	10号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面沈線、内面ナデ、端キザミ	褐色	砂礫含む	B-32	内面炭化物付着
25-06	10号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	土塊が固着し、不明	褐色	砂礫、焼土塊、海綿骨片含む	B-35	
25-07	10号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部 ~底部	地文不明、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-38	
25-07	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	地文不明、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-38	
25-07	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-38	黒斑あり
25-08	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-41	
25-09	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面工具ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-44	
25-10	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	外面にぶい褐色、内面褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-34	
25-11	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	外面にぶい褐色、内面褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-33	
25-12	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面工具ナデ	褐色	砂礫含む	B-45	
25-13	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	外面明褐色、内面にぶい褐色	砂礫含む	B-43	
25-14	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面工具ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-47	
25-15	10号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面沈線、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-42	
25-16	10号竪穴建物	覆土	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-36	
25-17	14号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-84	
25-18	14号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文?、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-87	P-1
25-19	14号竪穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面沈線・ミガキ、内面ミガキ	にぶい褐色	砂礫含む	B-82	内面に炭化物付着
25-20	14号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文?、内面工具ナデ	外面明褐色、内面にぶい褐色	砂礫含む	B-88	P-1
25-21	14号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-83	
25-22	14号竪穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面工具ナデ	褐色	砂礫含む	B-86	
25-23	14号竪穴建物	覆土	深鉢	胴~底部	外面縄文(RL)・爪形文、内面工具ナデ	褐色	砂礫、海綿骨片、雲母含む	B-80	P-2
25-24	14号竪穴建物	覆土	深鉢	底部	外面爪形文、内面不明	にぶい褐色	砂礫含む	B-81	

第2表 縄文土器観察表(2)

図No	出土遺構	層位	器種	部位	調整・文様	色調	胎土	実測No	備考
25-25	14号堅穴建物	覆土	深鉢	底部	外面不明、内面ナデ	外面褐色、内面明赤褐色	砂礫含む	B-85	
26-01	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ、端キザミ	にぶい褐色	砂礫含む	B-54	補修孔、外面煤付着
26-02	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-62	
26-03	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ	黒褐色	砂礫含む	B-48	
26-04	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ	褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-73	外面に煤付着
26-05	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ、口縁キザミ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-57	
26-06	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁～胴部	外面組紐文、内面ナデ、端キザミ	にぶい褐色	砂礫含む	B-59	
26-07	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面縄文?、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-60	摩滅が激しい
26-08	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-63	
26-09	11号堅穴建物	覆土	浅鉢	口縁部	外面沈線・ナデ、内面ナデ	浅黄褐色	砂礫含む	B-56	
26-10	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-61	
26-11	11号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面沈線、内面ナデ	褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-51	
26-12	風倒木	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-70	
26-13	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-69	
26-14	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-66	
26-15	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	橙色	砂礫含む	B-67	堅果大の圧痕あり
26-16	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面工具ナデ	暗褐色	砂礫、雲母含む	B-49	
26-17	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	外面にぶい褐色、内面にぶい橙色	砂礫、海綿骨片含む	B-64	
26-18	風倒木	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	外面にぶい褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-74	外面煤付着
26-19	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面不明、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-50	
26-20	風倒木	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-72	
26-21	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外内面とも不明	外面黄褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-71	摩滅が激しい
26-22	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	外面橙色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-58	摩滅が激しい
26-23	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-68	
26-24	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面沈線、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-53	
26-25	11号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-65	
26-26	11号堅穴建物	覆土	?	胴部	外面沈線、内面不明	にぶい褐色	砂礫含む	B-55	摩滅が激しい
26-27	11号堅穴	覆土	深鉢	底部	外内面とも不明	外面橙色、内面浅黄褐色	砂礫含む	B-51	摩滅が激しい
26-28	12号堅穴建物	覆土	深鉢	胴部	外面沈線・ミガキ、内面ナデ	黄褐色	砂礫含む	B-75	
26-29	13号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁～胴部	外面縄文、内面工具ナデ	にぶい橙色	砂礫、海綿骨片含む	B-77	P-1
26-30	13号堅穴建物	覆土	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	明褐色	砂礫含む	B-78	
27-01	11号土坑	覆土	深鉢	口縁部	外面組紐文、内面ナデ、端キザミ	にぶい橙色	砂礫含む	B-195	
27-02	11号土坑	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	黄褐色	砂礫含む	B-193	
27-03	3号土坑	覆土	深鉢	底部	外面縄文・網代瓦痕、内面工具ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-89	
27-04	9号土坑	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-90	
27-05	集石	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ、端キザミ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-188	補修孔有り
27-06	集石AB地点	覆土	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-189	
27-07	集石AB地点	覆土	深鉢	口縁部	外面組紐文、内面ナデ、端キザミ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-197	
27-08	集石	清掃時	深鉢	口縁部	外面刺突文・円形竹管文、内面ナデ	暗赤褐色	砂礫含む	B-194	
27-09	集石AB地点	覆土	深鉢	口縁部	外面刺突文・小突起、内面ナデ	外面黒褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-198	
27-10	集石	覆土	深鉢	口縁部	外面不明、内面ナデ、端キザミ	外面黒褐色、内面橙色	砂礫、海綿骨片含む	B-157	
27-11	集石	覆土	深鉢	口縁部	外面沈線、内面工具ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-158	
27-12	集石	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	灰黄褐色	砂礫含む	B-196	
27-13	集石	覆土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	橙色	砂礫含む	B-172	
27-14	集石	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	黄褐色	砂礫含む	B-192	
27-15	集石	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	黄褐色	砂礫含む	B-159	
27-16	集石	覆土	深鉢	胴部	外面刺突文・沈線、内面ナデ	外面黒褐色、内面明黄褐色	砂礫含む	B-187	
27-17	集石	覆土	深鉢	底部	外面刺突文	外面褐色、内面灰褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-186	
27-18	集石CDE地点	覆土	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-190	
27-19	集石CDE地点	覆土	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-191	
27-20	谷	堆積土	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ、端キザミ	外面黒色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-203	補修孔、外面煤付着
27-21	谷	堆積土	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ、端キザミ	黒褐色	砂礫含む	B-206	20と同一個体?
27-22	谷	堆積土	深鉢	口縁部	外面縄文?、内面ナデ	黒色	砂礫含む	B-201	
27-23	谷	堆積土	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	暗褐色	砂礫含む	B-208	
27-24	谷	堆積土	深鉢	口縁部	外面沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-207	
27-25	谷	堆積土	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-205	
27-26	谷	堆積土	深鉢	胴部	外面環付文?、内面工具ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-210	
27-27	谷	堆積土	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	黒褐色	砂礫含む	B-204	

第3表 縄文土器観察表(3)

図No	出土遺構	層位	器種	部位	調整・文様	色調	胎土	実測No	備考
27-28	谷	堆積土	深鉢	底部	外面爪形文、内面ナデ	外面にぶい橙色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-202	
27-29	谷	堆積土	深鉢	底部	外面縄文・網代圧痕、内面工具ナデ	にぶい褐色	砂礫、白色の砂礫多	B-76	
28-01	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ	黄褐色	砂礫含む	B-104	
28-02	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-105	外面煤、内面炭化物付着
28-03	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ	外面黒褐色、内面にぶい橙色	砂礫、海綿骨片含む	B-135	外面煤付着
28-04	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面羽状縄文、内面ナデ、端キザミ	黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-140	
28-05	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面縄文(LR)、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-134	内面炭化物付着、補修孔
28-06	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫、焼土塊、海綿骨片含む	B-137	
28-07	取付道調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面不明、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-165	
28-08	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ	外面黒褐色、内面橙色	砂礫、海綿骨片含む	B-144	外面に煤、内面に炭化物付着、補修孔
28-09	取付道調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面縄文(直前段合燃)、内面工具ナデ、端ヒネリ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-171	
28-10	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ	黒褐色	砂礫含む	B-149	
28-11	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面縄文、内面ナデ、端キザミ	外面橙色、内面にぶい褐色	砂礫含む	B-180	
28-12	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面組紐文?、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-138	補修孔
28-13	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面刺突文・円形竹管文、内面ナデ	橙色	砂礫、雲母含む	B-143	
28-14	調査区外北	表面採集	深鉢	口縁部	外面刺突文・円形竹管文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-200	
28-15	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	黄褐色	砂礫含む	B-160	
28-16	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	黄褐色	砂礫含む	B-92	
28-17	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、焼土塊含む	B-96	
28-18	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-91	
28-19	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-122	
28-20	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面沈線、内面ナデ、小突起	黒褐色	砂礫含む	B-153	
28-21	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面沈線、内面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面黄褐色	砂礫含む	B-79	
28-22	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面太沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-184	
28-23	西調査区	包含層	浅鉢?	口縁部	外面沈線・縄文・弧文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-156	
28-24	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面条痕、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-183	
28-25	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面条痕、内面不明	にぶい褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-163	外面煤付着
28-26	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面条痕、内面工具ナデ	外面灰褐色、内面黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-100	
28-27	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面不明、内面ナデ	褐色	砂礫、海綿骨片多く含む	B-164	
28-28	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	ナデ	褐色	砂礫含む	B-99	外面煤付着
29-01	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面沈線・刺突文、内面刺突文・ナデ、小突起	外面にぶい橙色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-145	
29-02	西調査区	包含層	深鉢	口縁部	外面沈線・刺突文、内面ナデ、端刺突	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-209	
29-03	西調査区	包含層	?		ナデ、透孔?	浅黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-182	突起か土製品
29-04	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-114	
29-05	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-126	
29-06	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面工具ナデ	外面黒褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-98	
29-07	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	外面黒褐色、内面にぶい褐色	砂礫、海綿骨片、焼土塊含む	B-136	外面煤付着
29-08	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面工具ナデ	外面にぶい黄褐色、内面橙色	砂礫含む	B-133	
29-09	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-102	
29-10	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-108	
29-11	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面黒褐色	砂礫含む	B-103	
29-12	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面羽状縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-130	
29-13	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文(LR)、内面ナデ	浅黄褐色	砂礫含む	B-112	外面煤付着
29-14	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文(RL)、内面ナデ	褐色	砂礫含む	B-120	
29-15	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	外面にぶい褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-109	
29-16	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文(RL)、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-173	
29-17	取付道調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-178	
29-18	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文(RL)、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫多く含む	B-123	
29-19	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文(RL)、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-118	底部に近い
29-20	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-117	
29-21	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-155	
29-22	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-128	
29-23	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面組紐文?、内面ナデ	外面黄褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-121	
29-24	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文、内面ナデ	浅黄褐色	砂礫含む	B-131	

第4表 縄文土器観察表(4)

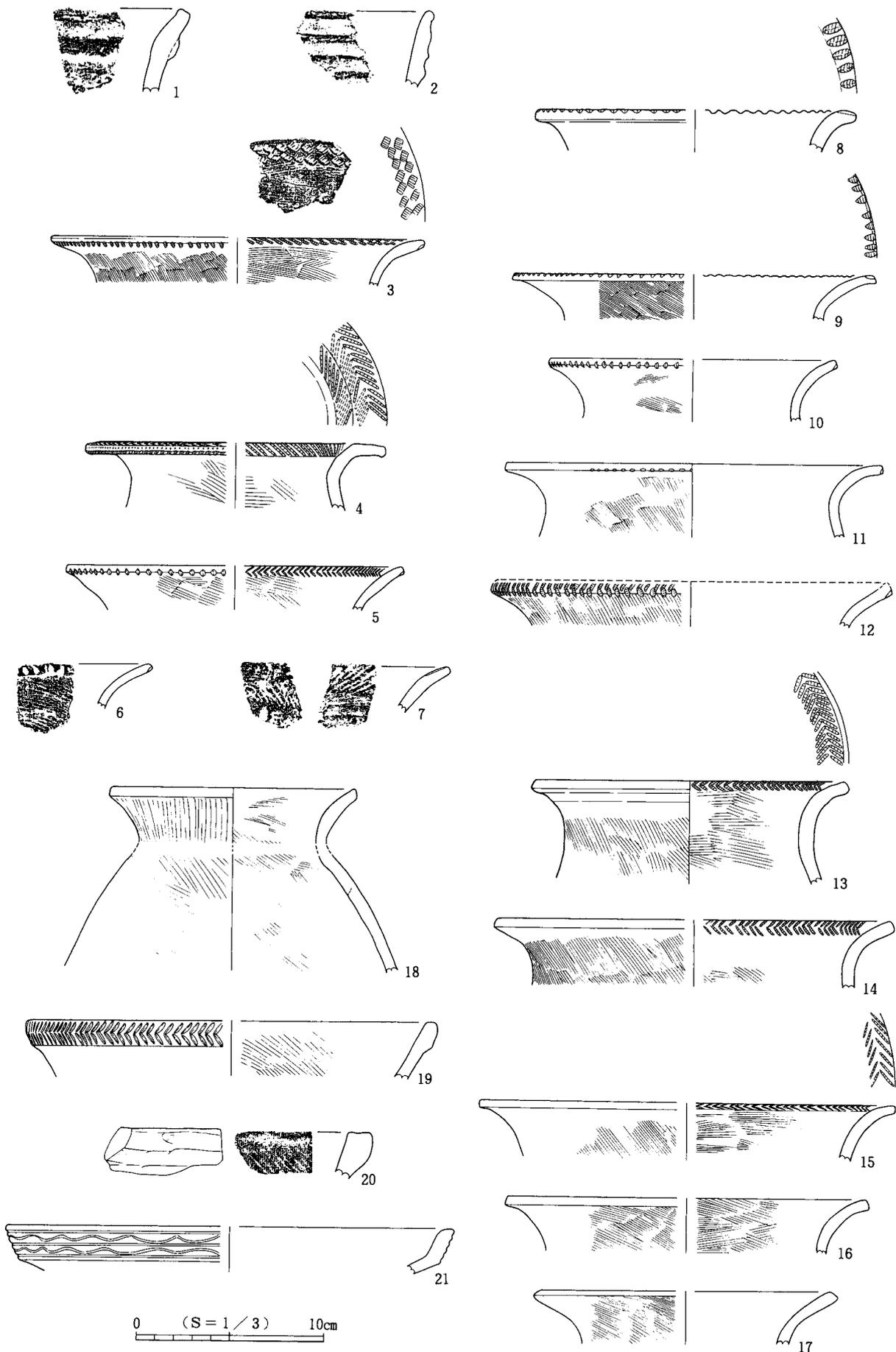
図No	出土遺構	層位	器種	部位	調整・文様	色調	胎土	実測No	備考
29-25	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄橙色	砂礫、雲母含む	B-107	
29-26	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄橙色	砂礫含む	B-101	
29-27	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-132	
29-28	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文・円形竹管文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-97	
29-29	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文・円形竹管文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-116	30と同一個体
29-30	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-116	29と同一個体
29-31	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文・円形竹管文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-152	
29-32	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-154	
29-33	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文・円形竹管文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫含む	B-181	堅果類圧痕
29-34	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文・コンパス文?、内面ナデ	暗褐色	砂礫、海綿骨片、焼土塊含む	B-125	
29-35	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面沈線・円形竹管文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-151	
29-36	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-95	
29-37	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-139	
29-38	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-119	
29-39	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、雲母含む	B-185	外面煤付着
29-40	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面沈線・ナデ、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、雲母含む	B-148	
29-41	取付道調査区	包含層	深鉢	胴部	外面沈線・弧文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-168	
29-42	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文・沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-127	
29-43	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面縄文・沈線、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-147	
29-44	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面ナデ、内面沈線	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-175	外面煤付着
29-45	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面条痕、内面工具ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-129	外面煤付着
30-01	西調査区	包含層	深鉢	胴部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-179	
30-02	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい橙色	砂礫、海綿骨片を含む	B-161	
30-03	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-162	
30-04	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-146	
30-05	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面刺突文、内面ナデ	褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-176	
30-06	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面沈線文、内面ナデ	にぶい褐色	砂礫含む	B-115	
30-07	取付道調査区	包含層	深鉢	底部	外面網代圧痕、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-170	
30-08	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面ナデ・網代圧痕、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-174	堅果類圧痕
30-09	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文・網代圧痕、内面ナデ	明褐色	砂礫含む	B-93	
30-10	取付道調査区	包含層	深鉢	底部	外面網代圧痕、内面ナデ	外面暗褐色、内面黄褐色	砂礫含む	B-177	
30-11	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文・網代圧痕、内面ナデ	外面浅黄褐色、内面黒褐色	砂礫含む	B-113	
30-12	取付道調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文(LR)・網代圧痕、内面ナデ	黒褐色	砂礫、海綿骨片含む	B-199	
30-13	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文・網代圧痕、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-111	
30-14	取付道調査区	包含層	深鉢	底部	外面網代圧痕、内面ナデ	浅黄色	砂礫、海綿骨片を多く含む	B-167	
30-15	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文・網代圧痕、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-150	
30-16	西調査区	包含層	深鉢	胴~底部	外面縄文?、内面ナデ	外面赤褐色、内面橙色	砂礫含む	B-141	
30-17	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文、内面ナデ	橙色	砂礫、焼土塊含む	B-142	
31-01	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文(RL)、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-106	第30図15と同一個体?
31-02	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-124	第30図15と同一個体?
31-03	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面不明、内面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面浅黄褐色	砂礫含む	B-110	
31-04	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文(LR)・網代圧痕、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-94	堅果類圧痕
31-05	取付道調査区	包含層	深鉢	底部	外面縄文?・網代圧痕、内面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫含む	B-166	
31-06	西調査区	包含層	深鉢	底部	外面不明、内面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面にぶい黄褐色	砂礫含む	B-169	
31-07	分布調査	表面採集	土 鍾		表裏溝あり	にぶい褐色	砂礫、雲母、焼土塊含む	B-212	

3 その他の土器・陶磁器

いずれも小さな破片であり、また包含層出土遺物・表採資料がほとんどであるため、詳しい時期を確定できる資料は少なかった。

弥生土器・土師器（第32図・第33図1～31、図版29・図版30）

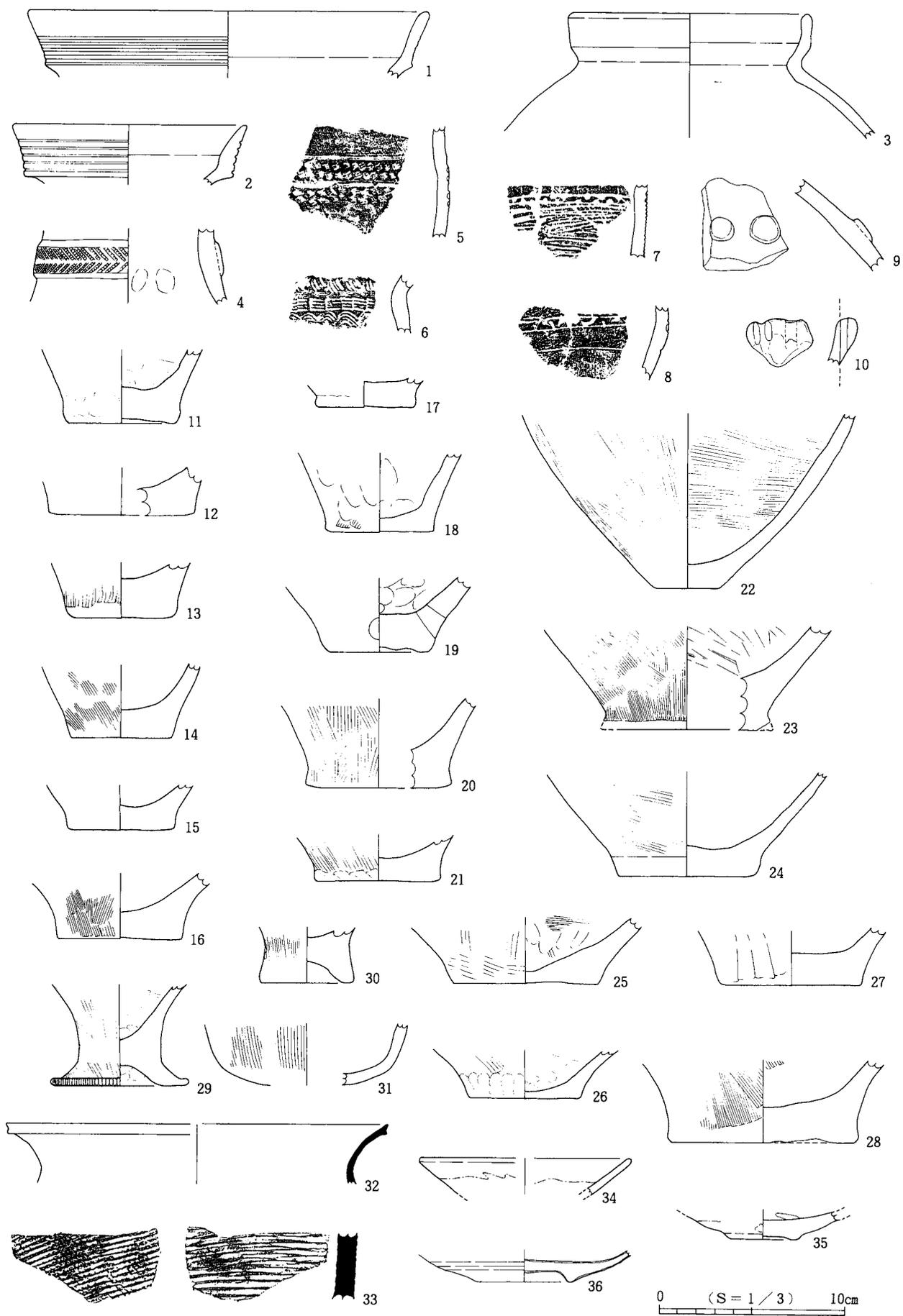
第32図1～21は弥生土器の口縁部である。1は壺である。口縁部がやや外傾し、頸部に貼付突帯をめぐらす。内外面にナデ調整を行なっている。器面には赤彩を施している。おそらく弥生前期のものであろう。2～17は甕である。2はやや直立に立ち上がる口縁部をもち、内外面にナデ調整を行なっている。煤の付着を確認することができなかつた。外面に多条の指ナデ凹線を施すことから、弥生中期初頭のものであると考えることができる。3～5は口縁の外面に刻みを施し、内面を各種文様で飾るものである。3は外反する口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なっている。口縁外面に刻みを施し、口縁内面を斜行短線文で飾っている。施文具は4条1単位の櫛状施文具である。外面には炭化物が付着している。4は口縁部を強く屈曲させるタイプのものである。内外面にハケ調整を行なっている。口縁外面に沈線を施した後で、刻みを行なっている。口縁内面は綾杉状刻みで飾っている。外面には煤の付着をわずかに確認できる。5は外反した口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なっている。口縁外面に刻みを施し、口縁内面を綾杉状刻みで飾る。外面には煤が付着している。6・10～12は口縁外面に刻みを施すものである。6は外反した口縁部をもち、外面にハケ調整、内面にナデ調整を行なっている。外面には煤が付着している。10は外反した口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なった後、ナデ調整を行なっている。外面には炭化物が付着している。11は外反した口縁部をもち、外面にハケ調整を行なっている。内面は磨耗が激しいため、調整を確認することができなかつた。外面には炭化物が付着している。12は外反した口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なった後で、内面にはナデ調整を行なっている。口縁外面には綾杉状に刻みを施している。口縁端部は破損しているが、面取りをしていると考えられる。外面には煤が付着している。8・9は口縁内面に刻みを施し、小波状口縁にするものである。8は外反した口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なった後、ナデ調整を行なっている。煤の付着は確認できなかつた。9は外反した口縁部をもち、内外面ともにハケ調整を行なった後、内面にナデ調整を行なっている。外面に煤の付着をわずかに確認できる。7・13～15は口縁内面に刻みを入れ、飾るものである。7は外反した口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なっている。口縁内面を連続で刻んで飾っている。外面には煤の付着をわずかに確認できる。13は外反した口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なった後で、口縁部の外面にナデ調整を施している。口縁内面を綾杉状刻みで飾っている。外面には煤の付着をわずかに確認できる。14は外反した口縁をもち、内外面ともにハケ調整を行なった後、口縁外面と内面にナデ調整を行なっている。口縁内面を綾杉状刻みで飾る。外面には煤が付着している。15は外反した口縁部をもち、内外面にハケ調整を行なった後で、口縁部にナデ調整を行なっている。口縁内面を綾杉状刻みで飾っている。内外面ともに煤が付着する。16・17は刻みを施さない無文の甕である。16はやや外反した胴部をもち、内外面にハケ調整を行なっている。外面に煤が付着している。17は外反した口縁部をもち、おそらく鉢に近い形態の胴部をもつものであろう。外面にハケ調整を行なっている。内面は磨耗が激しいため、調整を確認することができなかつた。外面には炭化物が付着している。18は壺である。口縁部は外反し、やや細長い胴部をもつものと考えられる。内外面ともにハケ調整を行なった後、口縁部内面にナデ調整、胴部内面にナデアゲ調整を行なっている。19・20は鉢である。19は口縁部は直線的に外反し、口縁外面に貼付？突帯をめぐらし、その突帯上を綾杉状刻みで飾っている。内外面ともにハケ調整を行なった後、外面にナデ調整を行なっている。20は口縁部は直線的に外反し、口縁外面に貼付突帯をめぐらす。外面にハケ



第32図 その他の土器・陶磁器(1)

調整、内面に粗いハケ調整を行なった後、内外面ともにナデ調整を行なっている。21は甕か鉢と考えている。弥生土器と考えているが、縄文土器の可能性も考えられる。付加状口縁をもち、磨耗が進行しているため、調整が確認しづらいが、内外面ともにナデ調整を行なっていることをわずかに確認できる。口縁外面にはへら状の施文具で沈線と連弧文を交互に施している。

第33図1～3は土師器の口縁部である。1は有段口縁をもち、口縁帯に7条の擬凹線文が施されている。擬凹線の条と条間の幅がほとんど等しいのが特徴である。口縁帯は直線的に外傾する。内外面ともにナデ調整を行なう。外面には炭化物の付着が著しい。2は有段口縁をもち、口縁帯に7条の擬凹線文が施されている。擬凹線の条が細く、条間が広い。比して、条間が非常に広いのが特徴である。口縁帯は先細りにしており、端部を尖らせておさめている。内外面ともにナデ調整を行なう。内外面に煤が付着している。3は有段口縁であり、擬凹線をもたない無文の口縁帯をもつタイプである。口縁帯は直線的に立ち上がる。内外面の口縁部・頸部にはナデ調整を行なっている。胴部外面に関しては磨耗が激しいため調整を確認することができなかった。胴部内面はケズリ調整を行なっている。煤の付着は観察できない。第33図4～8は弥生土器の胴部である。4は壺の頸部である。やや細い頸部外面に貼付突帯をめぐらし、その突帯上を綾杉状刻みで飾る。外面はハケ調整後、ナデ調整を行なっており、内面はナデ調整を行なっている。5・6は甕である。5は内外面ともにハケ調整を行なった後、ナデ調整を行なっている。外面に3条1単位の櫛状施文具で直線文・斜行短線文を交互に描いている。6は外面はハケ調整後、ナデ調整を行なっており、内面はナデ調整を行なっている。外面に4条1単位の櫛状施文具で現存している範囲においては、斜行短線文・簾状文・波状文を描いている。7・8は天王山式土器である。7は壺と考えられる。内外面ともにナデ調整を行なっている。外面を交互刺突文と重菱形文とを組み合わせて飾っている。交互刺突文は2条の平行沈線間に施文しており、その施文具は細い円形の棒状具である。重菱形文の施文具はへら状具である。外面に煤が付着している。8は器種不明である。外面は縄文で調整を行い、内面はナデ調整を行なっている。外面に交互刺突文・沈線を確認できる。交互刺突文は2条の平行沈線間に施文しており、その施文具はへら状具である。外面に煤が付着している。10は弥生土器の鉢の把手部である。2つの孔があり、口縁部の近くであると推測できる。調整は磨耗のため不明である。第33図9は土師器の壺の胴部である。外面は磨耗が激しく調整を確認することができない。内面はナデ調整を行なう。外面に円形浮文をめぐらすと思われる。第33図11～30は弥生土器の底部である。11は外面がやや凸凹しており、胴張りの小さそうな胴部が付くと考えられる。やや厚手の円盤底。12は外面が平坦で、底部の円盤状の部位のみ遺存している。13は外面が平坦で、極めて厚手の円盤底である。14は外面が平坦な底部で、胴張りの小さそうな胴部が付くと考えられる。底部外面のナデ調整痕はやや明瞭である。15はやや凸凹した外面をもつ。16はやや凸凹した外面をもつ。内面を挿り鉢状になだらかにくぼませ、やや薄手の底部を作りだしている。17は中心がわずかに凹む以外は平坦な外面をもつ。底部の円盤状の部位のみ遺存している。18は外面が平坦で、胴張りの小さそうな胴部が付くと考えられる。極めて薄手の底部。19はかなり凸凹した外面をもつ。極めて厚手の円盤底。底部近くに1孔の穿孔が認められるが、焼成前の穿孔と考えられる。ここでは底部と考えているが、脚台になる可能性も考えられる。20は平坦な外面をもち、張りの小さそうな胴部が付くと考えられる。極めて厚手の円盤底。21は平坦な外面をもち、ナデ調整痕が明瞭である。底部の円盤状の部位のみ遺存している。22は平坦な外面をもつ。底径が小さい。円盤状を呈さずに、底部からなめらかに胴部に広がる形態をもつ。外面の底部からやや離れたところから煤の付着が明瞭である。23はやや凸凹した外面をもち、張りの強い胴部が付くと考えられる。極めて厚手の円盤底で、底径が大きい。24は平坦な外面をもち、張りの強い胴部が付くと考えられる。外



第33図 その他の土器・陶磁器(2)

面のナデ調整痕はやや明瞭である。胴部の器壁はきわめて薄手である。25はやや凸凹した外面をもち、張りの強い胴部が付くと考えられる。内面を掘り鉢状になだらかにくぼませ、薄手の底部を作りだしている。26はやや凸凹した外面をもち、やや張りの強い胴部が付くと考えられる。極めて薄手の底部をもつ。27は平坦な外面をもつ、やや厚手の円盤底。28はかなり凸凹した外面をもつ、極めて厚手の円盤底。底径が極めて大きい。かなりの大型品であろう。29は扁平であり、外反して広がる台をもつ。台の端を刻んでおり、残りが悪いため施文具を特定できないが、おそらくハケ状具であろう。底部内面は平坦でなく凹んでいる。30は底部外面が深くくぼんでおり、脚台状の底部をもつ。器壁は非常に厚く胴部に連なるようである。底部内面は整形後に円盤充填を行なった痕跡がある。第2図31は土師器碗の底部付近であろうか。薄手で丸底と考えられる。

第32図3～20、第33図4～6は形態・文様構成から判断して、概ね増山編年の4～5期（小松式～磯部式）の範疇で捉えることができよう。第33図7・8の時期も県内出土の天王山式土器の類例から考えて、同様の位置付けができるかと考える。第33図1～3は口縁形態から判断して、月影式以降白江式の範疇で考えておきたい。第33図9は時期を特定するのが難しいが、ここでは土師器と覚えておきたい。第33図10は鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡に類例があり、弥生中期後半のものとする。第33図29・30は弥生中期、第33図22は弥生後期のものであろう。

当遺跡の弥生土器・土師器の胎土は、海綿骨片の含有率が高く、1～1.5mm前後の砂礫を含むことが多い。また2～3mm前後の大きい砂礫を含むものもある。砂礫は石英・長石といった硬質のものが多い。ほかに赤色粒を含むものも数点あった。天王山式土器は大きな砂礫を含むことが少なく、細かい胎土であることが観察できた。系譜と胎土が相関をもつものとする。また器種別でも同じ様なことが観察できた。壺・鉢と甕と比較すると、壺・鉢がより砂礫の少ない胎土であることを観察できた。弥生中期から古墳前期にかけての胎土の変化は観察できなかった。

須恵器・陶磁器（第33図32～36、図版30）

第33図32・33は須恵器である。32は口縁部で、壺瓶の類と思われる。頸の短い広口の器形で、器壁はひじょうに薄く、端は面取りしている。33は甕の胴部である。外面平行叩き、内面平行当て具痕が見られる。32・33の時期はどちらも9世紀代以降に属するものと推定される。胎土は32・33とも白色の細かい砂礫を含み、焼成が良好で断面セピア色を呈する点で共通しており、同一の産地の可能性が高い。想定される生産地は、9世紀代の良好な資料が少ないが、鳥屋窯跡群となろう。33の甕については花見月H地点、瀬戸F地点など鳥屋窯跡群の西群に類例がある¹⁹。

34・35は陶器である。34は越中瀬戸で、皿である。口縁部の内外面に褐色の釉薬がかかり、おそらく鉄釉であろう。35は唐津で、皿である。見込みに砂目が観察される。外面は一部、内面はほぼ全面に灰オリーブ色の釉薬がかかるようである。36は磁器で、皿である。高台端に重ね焼の際に熔着したと思われる別個体破片と砂が観察される。青みがかった灰白色を呈し、ややくすんだ釉調から、初期伊万里系の製品と推定する。34～36の陶磁器はいずれも17世紀代に属するものと考えて大過ない資料である。

第5表 その他の土器・陶磁器観察表(1)

図No	出土遺構	層位	遺物種	器種	部位	調整・文様	色調	胎土	実測No	備考
32-1	西調査区	包含層	弥生土器	壺	口縁部	外内面ナデ、頸部外面貼付突帯	赤橙色	砂礫を多く含む	C-31	赤彩
32-2	塚	盛土	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、指ナデ凹線	橙色	砂礫を多く含む	A-21	
32-3	集石	覆土	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ後一部ナデ、内面ハケ、口縁外面連続刺突文、口縁内面斜行短線文	褐色	砂礫、海綿骨片を含む	A-12	外面に煤附着
32-4	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ、口縁外面刻み・沈線、口縁内面綾杉状刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	A-5	外面に煤附着
32-5	集石	覆土	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ、口縁外面刻み、口縁内面綾杉状刻み	橙色	砂礫を含む	A-7	外面に煤附着
32-6	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ、内面ナデ、口縁外面刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	A-9	外面に煤附着
32-7	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ、口縁内面連続刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	A-4	外面に煤附着
32-8	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ後ナデ、口縁内面刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	A-10	
32-9	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ、内面ハケ後ナデ、口縁内面刻み	黄橙色	砂礫、海綿骨片を含む	A-3	外面に煤附着
32-10	集石	覆土	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ後ナデ、口縁外面刻み	黄橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	A-16	外面に煤附着
32-11	集石	覆土	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ、口縁外面刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	A-17	外面に煤附着、内面磨耗
32-12	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ、内面ハケ後ナデ、口縁外面刻み	外面にふい黄橙色、内面黒褐色	砂礫を含む	A-15	外面に煤附着
32-13	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ後口縁外面ナデ、口縁内面綾杉状刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	A-6	外面に煤附着
32-14	集石	覆土	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ後口縁部ナデ、内面ハケ後ナデ、口縁内面綾杉状刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	A-11	外面に煤附着
32-15	集石	覆土	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ後口縁部ナデ、口縁内面綾杉状刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	A-13	外内面に煤附着
32-16	西調査区	包含層	弥生土器	甕	口縁部	外内面ハケ	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	A-2	外面に煤附着
32-17	集石	覆土	弥生土器	甕	口縁部	外面ハケ	橙色	砂礫を含む	A-8	外面に煤附着、内面磨耗
32-18	西調査区	包含層	弥生土器	壺	口縁部	外面口縁部ハケ、内面口縁部ハケ後ナデ、体部ハケ後ナデ	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	C-16	外面体部磨耗
32-19	西調査区	包含層	弥生土器	鉢	口縁部	外面ハケ後ナデ、内面ハケ、口縁外面貼付突帯上に綾杉状刻み	外面橙色、内面褐色	砂礫、海綿骨片を多く含む	C-15	
32-20	西調査区	包含層	弥生土器?	鉢	口縁部	外面ハケ後ナデ、内面粗いハケ後ナデ、口縁部貼付突帯	橙色	砂礫、海綿骨片を少量含む	C-14	
32-21	東調査区	包含層	弥生土器?	甕か鉢	口縁部	外内面ナデ	赤橙色	砂礫を含む	C-17	内面磨耗
33-1	取付道調査区	包含層	土師器	甕	口縁部	外内面ナデ、口縁外面縦凹線	にふい黄褐色	砂礫、海綿骨片を多く含む	C-9	外面に煤附着
33-2	8号堅穴建物	覆土	土師器	甕	口縁部	外内面ナデ、口縁外面縦凹線	にふい黄褐色	砂礫、海綿骨片を含む	C-2	外内面に煤、炭化物附着
33-3	調査区外北	表面採集	土師器	甕	口縁部	外面口縁部・頸部ナデ、内面口縁部・頸部ナデ・体部ケズリ	にふい橙色	砂礫を多く含む	C-22	外面に黒斑有り、外面体部磨耗
33-4	西調査区	包含層	弥生土器	壺	胴部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、頸部貼付突帯上に綾杉状刻み	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	A-18	
33-5	西調査区	包含層	弥生土器	甕	胴部	外内面ハケ後ナデ、外面直線文・斜行短線文	橙色	砂礫を含む	A-20	
33-6	集石	覆土	弥生土器	甕	胴部	外面斜行短線文・簾状文・波状文、内面ナデ	黄橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	A-14	
33-7	西調査区	包含層	弥生土器	壺	胴部	外内面ともナデ	橙色	砂礫を含む	A-1	外面に煤附着、天王山式土器

第6表 その他の土器・陶磁器観察表(2)

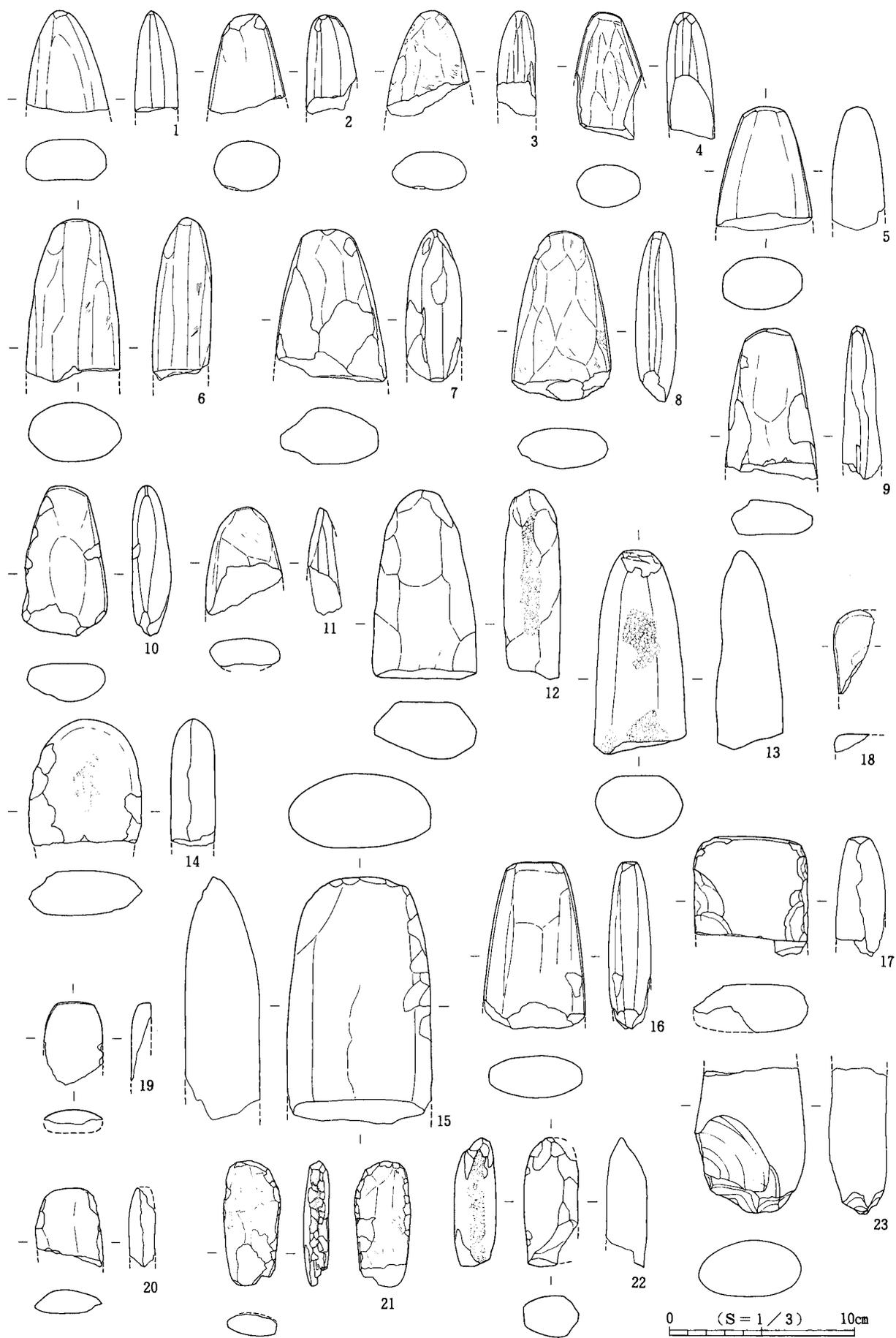
図No	出土遺構	層位	遺物種	器種	部位	調整・文様	色調	胎土	実測No	備考
33-8	西調査区	包含層	弥生土器	壺?	胴部	外面縄文、内面ナデ、外面交互刺突文・沈線	橙褐色	砂礫を含む	A-22	外面に煤付着、天王山式土器
33-9	集石	覆土	土師器	壺	胴部	内面ハケ、外面円形浮文	橙色	砂礫を含む	C-19	
33-10	調査区外北	表面採集	弥生土器	鉢	把手		浅黄橙色	砂礫、海綿骨片を含む	C-26	二孔一対、摩滅
33-11	8号土坑	覆土	弥生土器	甕	底部	外内面ハケ後ナデ、底面ナデ	にぶい橙色	砂礫、海綿骨片を含む	C-4	内面の一部に黒斑
33-12	西調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外内面ナデ、底面ナデ	橙色	砂礫を多く含む	A-19	
33-13	西調査区	包含層	弥生土器		底部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、底面ナデ	外面灰褐色、内面浅黄橙色	砂礫を含む	C-8	外面に黒斑
33-14	集石	覆土	弥生土器	甕	底部	外面ハケ、内面ハケ後ナデ、底面ナデ	外面黒色、内面黄橙色	砂礫を多く含む	C-13	外面に黒斑
33-15	西調査区	包含層	弥生土器		底部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、底面ナデ	にぶい黄橙色	砂礫を含む	C-6	
33-16	西調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外内面ハケ後ナデ、底面ナデ	外面橙色、内面黒色	砂礫、海綿骨片を含む	C-18	内面に黒斑
33-17	西調査区	包含層	弥生土器		底部	外内面ナデ、底面ナデ	浅黄橙色	砂礫を多く含む	C-5	
33-18	集石	覆土	弥生土器	甕	底部	外内面ハケ後ナデ、底面ナデ	外面橙色、内面橙・黒褐色	砂礫、海綿骨片を多く含む	C-10	内面の一部に黒斑
33-19	西調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外内面ナデ、底面ナデ	にぶい橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	C-28	外面の一部に黒斑、穿孔
33-20	2号ピット	覆土	弥生土器	甕	底部	外面ハケ、内面ナデ、底面ナデ	黄褐色、外底面黒色	砂礫を含む	C-1	
33-21	取付道調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、底面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫を含む	C-12	
33-22	取付道調査区	包含層	弥生土器	甕	底部	外面ハケ、内面ハケ後ナデ、底面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫を多く含む	C-11	外面に煤付着
33-23	調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外面ハケ、内面ハケナデ、底面ナデ	外面橙色、内面黒色	砂礫、海綿骨片を含む	C-29	内面に黒斑
33-24	西調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、底面ナデ	浅黄橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	C-7	内面の一部に黒斑
33-25	集石L・N地点	覆土	弥生土器	壺	底部	外内面ハケ後ナデ、底面ナデ	橙色	砂礫、海綿骨片を含む	C-20	P-1
33-26	調査区外	表面採集	弥生土器		底部	外内面ハケ後ナデ、底面ナデ	にぶい黄褐色	砂礫を多く含む	C-24	
33-27	西調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、底面ナデ	橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	C-25	
33-28	西調査区	包含層	弥生土器	壺	底部	外面ハケ、内面ハケ後ナデ、底面ナデ	橙色	砂礫、海綿骨片を多く含む	C-27	内面の一部に黒斑
33-29	調査区外北	表面採集	弥生土器	甕か鉢	底部	外面ハケ、内面ハケ後ナデ、底面ナデ	外面浅褐色、内面黒褐色	砂礫、海綿骨片を含む	C-23	内外面の一部に黒斑
33-30	集石	覆土	弥生土器	甕	底部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、底面ナデ	外面にぶい黄褐色、内面黒褐色	砂礫、海綿骨片を含む	C-21	内面の一部に黒斑
33-31	8号堅穴建物	覆土	土師器	碗	胴~底部	外面ミガキ一部ハケ、内面ナデ	にぶい黄褐色、底面黒色	砂礫を含む	C-3	
33-32	調査区外南	表面採集	須恵器	壺瓶?	口縁部	外内面クロナデ	青灰色	砂礫を含む	D-4	
33-33	塚	盛土	須恵器	甕	胴部	外面平行タタキ、内面平行当て具	外面暗褐色、内面灰色	砂礫を含む	D-5	
33-34	西調査区	包含層	越中瀬戸	皿	口縁部	外内面クロナデ、釉薬	素地暗茶褐色、釉褐色		D-3	
33-35	取付道調査区	包含層	唐津	皿	底部	外内面クロナデ、釉薬	素地にぶい黄褐色、釉灰オリブ色		D-1	
33-36	西調査区	包含層	磁器	皿	底部	外内面クロナデ、釉薬	灰白色		D-2	初期伊万里系?

4 石器・石製品

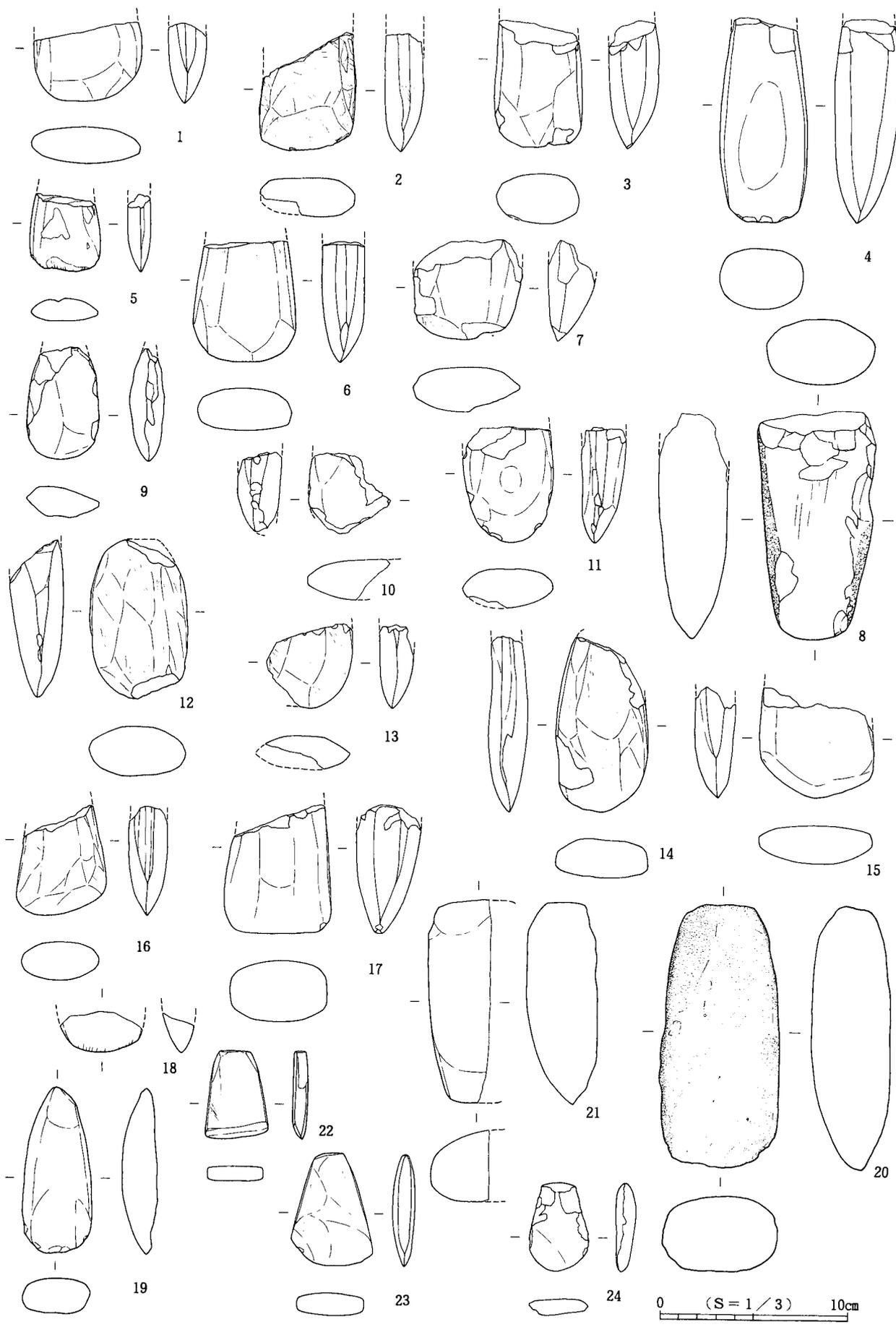
磨製石斧（第34図・第35図、図版31・図版32）

第34図1～17は基部である。1～5は尖基形態。1は側面、主面間に弱いながらも稜を持つ。一方の主面には打撃によって生じたと思われる凹みが見られる。2は頂部の大半が剝離しており、叩き石的な使用が窺われる。4は非常に硬質な石材が丁寧に研磨されている。側面、主面間に弱いながらも稜を持つ。5も側面、主面間に弱いながらも稜を持つ。6～13は狭基形態。7は粒子の粗い、砂っぽい質感の石材を使用している。主面の広い範囲で剝離が見られる。8は主面、側面の中央に鎬状の直線的な稜を持つ。9は左右両側面からの打撃による剝離が見られる。10は刃部端をわずかに欠くものである。12は主面、側面のあちこちに打撃を行なっているものと思われるが、風化してはっきりしない。13は一方の主面に打撃による凹みが2箇所見られ、凹み石として利用されている。14は円基形態で、打撃による側面の剝離、一方の主面の浅い凹みが見られる。15～17は平基形態。15は刃部に鋭さを欠き、基部側へ幅が広がっている。風化しているが、主面、側面に打撃による凹み、剝離が見られる。16・17は主面の隅が強く角ばっており、主面、側面間にはっきりした稜を持って面を取るものであり、いわゆる定角式石斧と思われる。17は16よりも大型で、長方形板状志向が強い。縁に打撃による剝離が見られる。18～22は基部と思われるが詳しい形態が不明なもの。18は欠損が大きく、隅部分のみ残る。19も欠損が大きく、一方の主面、縁も残っていない。21は基部・刃部とも端を欠くのみと思われるが、小型品で詳しい形態はよくわからない。側面は狭いが面を取っている。22は非常に硬質な石材が丁寧に研磨されている。幅が狭そうなのに、厚手である。23は基部、刃部とも欠損が大きく、詳しい形態がわからない。器面がきれいに研磨されているので、磨製石斧に含める。下位に打撃による広範囲の剝離痕を認める。

第35図1～19は刃部である。1～8は弱い弧刃形態。2は非常に硬質な石材を研磨しており、器面の痕跡から研磨の方向が知られる。主面に縁よりも一回り小さい四角形の稜が鎬状に見られる。3は器面のほぼ全面が黒色もしくは赤色化し、風化による小孔が無数に見られる。被熱痕跡と思われる。4は基部端のみを欠いている。幅のわりに厚手で、断面は隅丸四角形を呈する。5は小型の石斧と思われ、側面が尖り、ほぼ面をもたない。6は側面の中央に鎬状の直線的な稜を持つ。8は風化しているが、主に側面に打撃による剝離が見られる。9～14は円刃形態。9は小型の石斧と思われ、一方の主面の大半が剝離している。10は残りが悪く、刃部形態がよくわからないが、一応円刃とした。基部へ向かってはかなり厚みを増している。11は刃部の中央の突き出しがきわめて強く、靴べら状を呈する。12は基部・刃部端を欠く。基部端が最も厚みを持ちそうである。14～16は刃が縁の左右どちらか一方に偏る偏刃形態。14・15は刃部中央が突き出すもので、14より15のほうが突き出しが強い。16は非常に硬質な石材で、研磨の結果、光沢を有している。17は直線的な平刃、換言するなら直刃形態。主面の隅が強く角ばり、主面、側面間にはっきりした稜を持って幅の広い面を取る、定角式石斧と思われる。18は刃部端のみ残るもの。19～24は基部、刃部とも遺存し全形を知ることができるもの。19は両方の主面で傾斜が異なり、反り返り気味の側断面形を呈する。風化が激しい。20は風化著しいが、小型の石斧以外では唯一完存する製品。基部は平基、厚みがあり、隅丸四角形の断面形を呈する。21は長軸に沿って真っ二つに折損している。基部は平基で、長さ、幅のわりに厚みがあり、刃部は蛤刃形状を呈する。22～24は小型の石斧。22・23はほぼ完存している。22は四角形板状で、端、側面とも扁平ながらフラットな面を持つ。刃部は片刃で、7mmの長さがある。23は弱い扇形で、扁平な両刃石斧である。24は23と似た形態であるが、22～24中最も小型である。刃部は摩滅していることもあるが、鋭さを欠いており、石斧以外の石器となる可能性もある。側面からの打撃による剝離痕が見られる。



第34圖 磨製石斧(1)



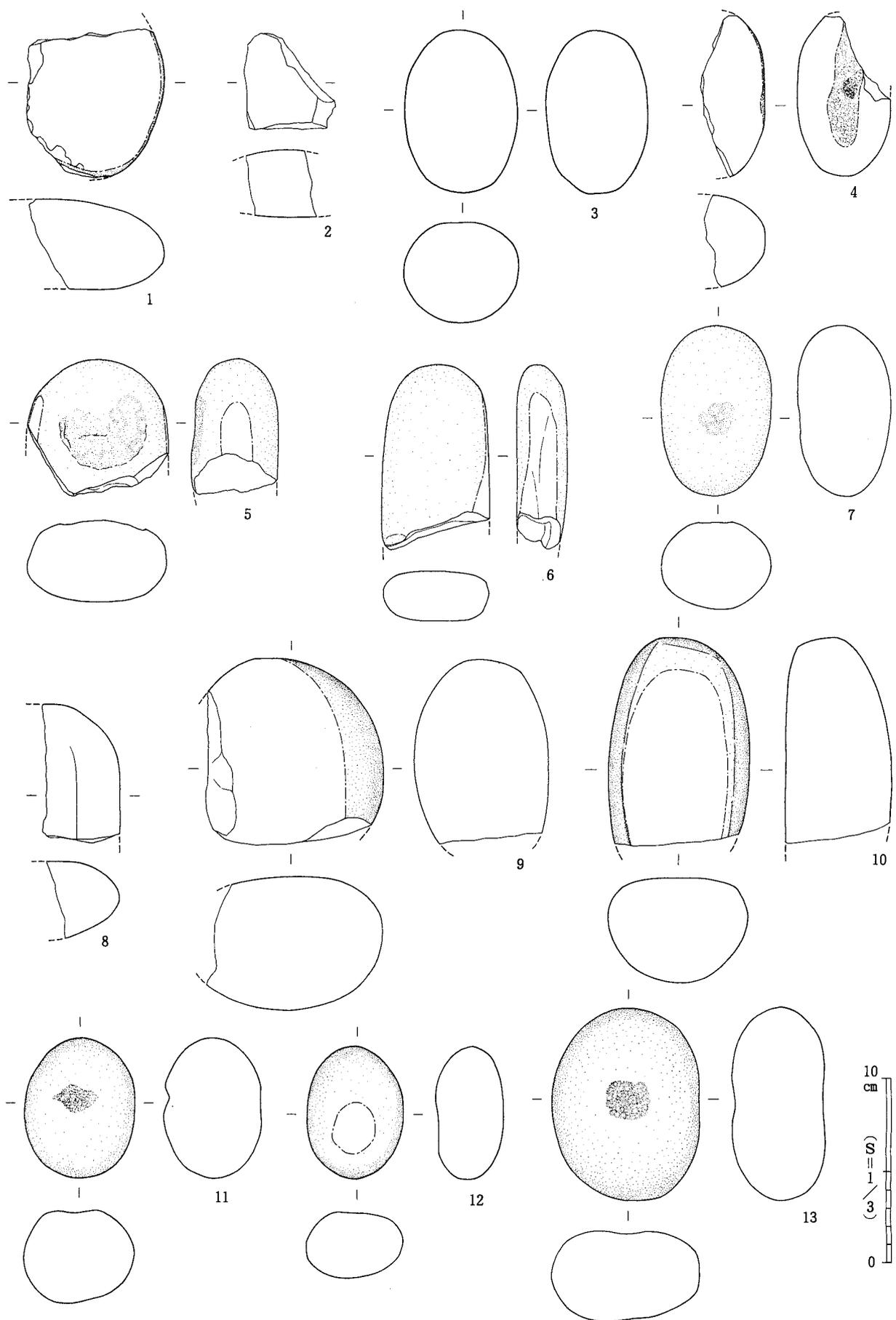
第35图 磨製石斧(2)

磨製石斧は折損したものが大半で、全形を知ることができる資料はきわめて少ない。出土した縄文土器、弥生土器の量から考えると、石斧についても大半は縄文前期の製品で、縄文後期の製品も少量含まれるものとする。縄文前期の石斧については、第34図16・17、第35図17など定角式の石斧、また第35図20・21など蛤刃石斧を除外して考えることができよう。前者の群は縄文後期、後者の群は弥生中期の時期を考えている。第35図22の片刃石斧については、類品として弥生時代の大陸系石器の一つ、扁平片刃石斧の存在がよく知られるところである。一方、縄文前期の片刃石斧についても、地域的に九州西北部に偏在するもののほぼ同じ形態であり、無視できない。現在までのところ、北陸における類例は弥生時代が圧倒的に多く、縄文前期にはほとんど確認されていない。そして本遺跡からは弥生時代中期の土器や、同じ大陸系石器の一つである大型蛤刃石斧も出土していることから、弥生時代に属する可能性が高いものとしておく。将来的に縄文時代に属する片刃石斧の類例が多くなれば、この項も再考を迫られることになろう。また、使用痕に関して、全体的に打撃による剝離、凹みが見られるものが多い傾向があり、石斧用途以外の使用、おそらくは破損後の叩き石、凹み石等への積極的な転用と考えられよう。磨製石斧の石材は硬い、良質なもので大半が占められるため、破損してもそのまま破棄されることは少なかったものと想定している。

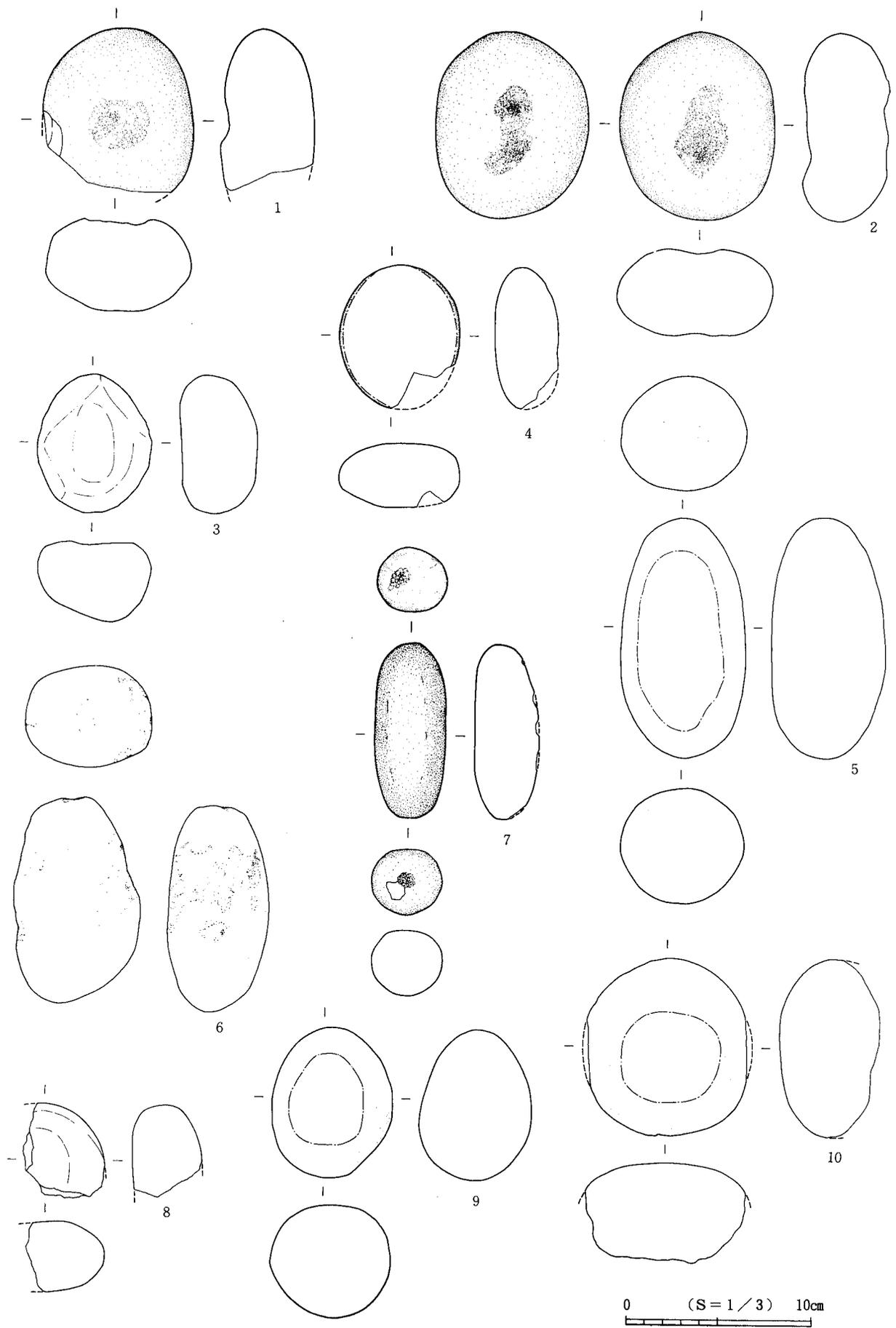
すり石・叩石・凹み石（第36図～第44図、図版33～図版37）

すり石・叩石・凹み石については、「すり石」は器面に擦痕が見られるもの、「叩き石」は端に叩打痕が見られるもの、「凹み石」は主面に堅果大の凹みが見られるもの、と形態的に定義でき、それぞれが別個の機能と使用方法を持つと思われる。しかし、実際には、原材や形態もほぼ共通する上に、前記した特徴が複合しているものや、表面が著しく摩滅したものが多く、識別することは困難である。よってここでは全体を「すり石類」としてまとめて表記し、複合が見られず専用器として特定が可能なものについてのみそれぞれの名称を用いることにしたい。

第36図～第38図8は堅穴建物出土。第36図1・2は1号堅穴建物出土のすり石である。2は検出面での出土であるが、関係の深いものとしてまとめた。2は欠損が大きい、器面が平滑であり、たとえ叩打痕等が複合したとしても、主にすり石として使われたものと捉えた。3・4は2号堅穴建物出土。4は側面に叩打痕が見られる。5～7は2号堅穴建物もしくは3号堅穴建物出土であるがどちらか特定できない。7は叩打による浅い凹みが見られ、凹み石と思われる。8は3号堅穴建物出土で、欠損が大きい、器面が平滑であり、2と同じ理由からすり石とする。9は4号堅穴建物出土。10～13、第37図1・2は6号堅穴建物出土と思われるが、調査時の認識不足から、周囲の堅穴建物出土遺物とは厳密には区別できない。10は細長い形で、端が平坦になっているが、擦痕か叩打痕か摩滅してよくわからない。11の主面の凹みは使用によるものかどうか摩滅してわからない。12は主面に「擦る」行為によって浅い凹みが生じたものと思われ、一応凹み石としておく。13は凹み石である。第37図1は主面に凹みが見られるが、第36図11と同じ理由から、器種の特定は避ける。2は凹み石で、主面の表裏両面に凹みが見られる。3～8は8号堅穴建物出土。5～7は叩き石にほぼ特定できる。5は端の一方のみ、6は端の一方と側面の広範囲に、7は両端に、それぞれ叩打痕が見られる。8・9は9号堅穴建物出土。8は被熱している資料。10は10号堅穴建物出土、主面の一方は剝離が激しい。第38図1～6は11号堅穴建物出土。1は片面が赤化しており、確実な被熱資料である。4・5はすり石、器面の残りが良く、平滑である。6は主面に凹み、両端に叩打痕が見られ、叩き石、凹み石が複合しているもの。7は12号堅穴建物出土、端にわずかながら叩打痕を残し、叩き石と思われる。8は5号堅穴建物出土。両側面が直線的で平坦な整った面をなし、平面形は整った楕円形状を呈する。触った感じでは両側面がざらついているのに対し、それ以外の面ではきわめて平滑であり、すり石に



第36図 堅穴建物出土のすり石類(1)



第37図 竪穴建物出土のすり石類(2)



第38図 竪穴建物・土坑出土のすり石類

特定できる。硬質な石材に、整った特徴的な形態、質感を持っているものであり、すり石類の中でも優品の一つと思われる。

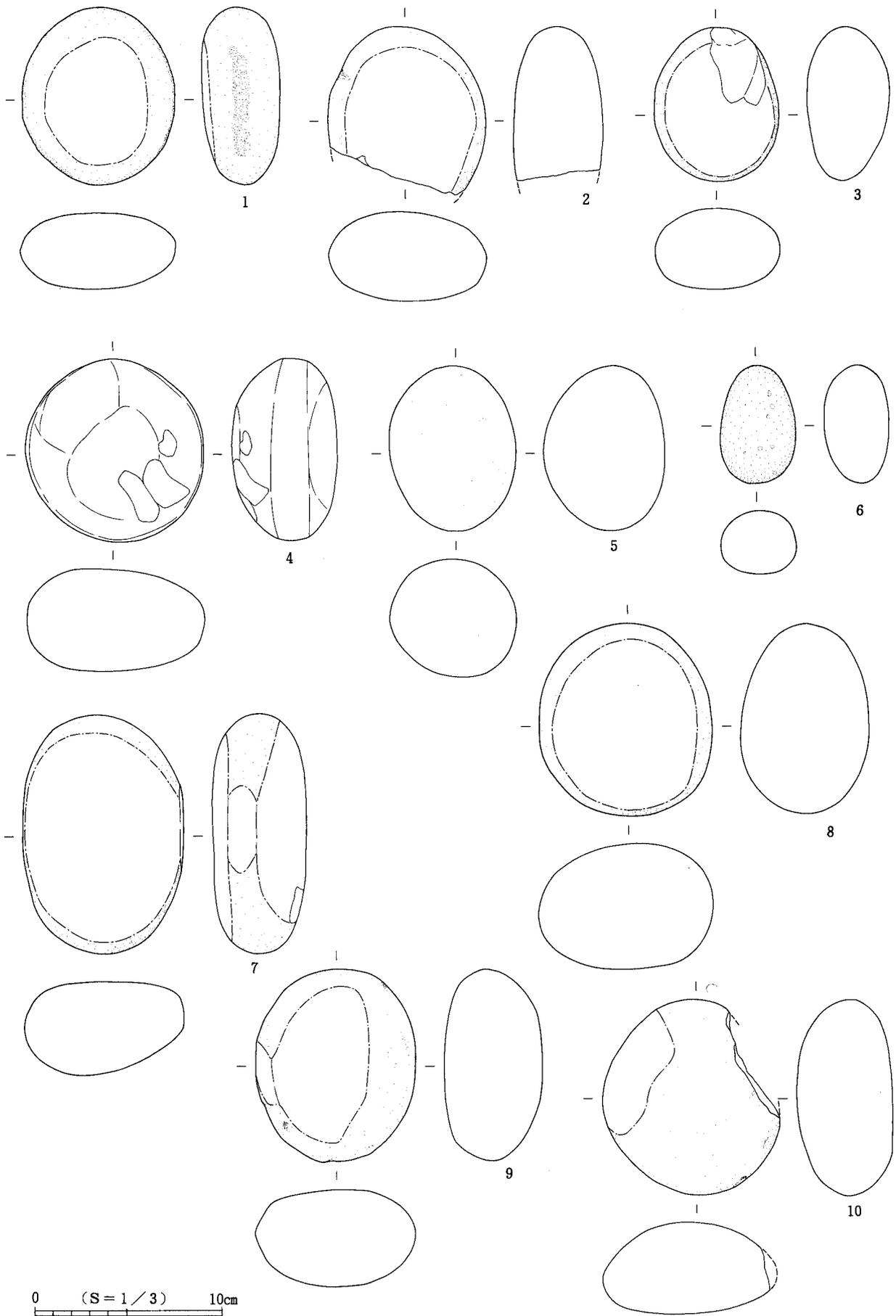
第38図9は9号土坑出土である。摩滅しているが主面の一部に擦痕が残り、すり石と思われる。

第39図～第41図2は集石出土。第39図1・2は器面が平滑で、すり石と思われる。5・9は側面に浅い凹みが見られるが、摩滅しており不明確である。第40図1は端にわずかに叩打痕が見られるが、器面が平滑であり、主にすり石として使われたものと推定する。2は主面、側面に凹みが見られ、おそらく叩打痕と思われるが、摩滅しておりはっきりしない。4は器面が平滑であるが、端に叩打痕がはっきりと認められ、すり石と叩き石が複合しているものと思われる。5～7は凹み石。5は主面の一方が剝離しているが、もう一方に「擦る」行為によって生じたい凹みが認められる。6は不整形な礫を素材としており、主面と側面の別が明確でなく、最もフラットな面に二連の凹みが見られる。7は主面の一方に浅い凹みが見られる。9・10も凹み石である。9は偏平な礫を素材として主面表裏に浅い凹みが見られる。10は小型ながら主面の表裏両面に深い凹みが見られる。第41図1も凹み石。断面が隅丸三角形を呈する細長い礫を素材とし、最も狭い面に二連の凹みが見られる。2は主面の表裏に浅く広範囲の凹み、端に叩打痕らしいものが見られるが、摩滅しており不明確である。

第41図3～第42図2は谷出土。第41図3・4はあちこちに凹みが見られるが、摩滅しており不明確である。5は被熱が確実な資料で、ほぼ全面が赤化している。6は主面に浅い凹みがあるが、全面が薄く剝離しており、凹み石かどうか不明確である。7は被熱が確実な資料で、片面が赤化している。8は主面に浅い凹みが見られるが、器面は平滑であり、主にすり石として使われたものと推定する。11も欠損が大きい、8と同様な形状であり、主にすり石として使われたものであろう。第42図1は主面の表裏と側面に凹みが見られ、主に凹み石として使われたものと考えられる。2は凹み石であり、主面に浅いながらもはっきりと凹みが認められる。

第42図3～第44図は包含層その他出土。第42図3はすり石である。4は被熱して、赤化した資料である。5は全面にわたって薄く剝離しており、「一皮向けた」状態になっている。よって浅い凹みがあるが、詳細は不明である。6も被熱し、赤化した資料である。10は偏平な礫を素材としているもの。11は偏平な礫を素材とし、器面が平滑になっていることから、すり石と思われる。第43図1は側面の一部がざらついた感触を示す他は平滑であり、すり石であろう。4は主面の一方が平滑であるが、端・側面に叩打痕、主面に浅い凹みが見られる。すり石、叩き石、凹み石が複合している可能性がある。6は主面の一方が平滑であるが、端の一方が叩打により平坦化しているもの。すり石と叩き石が複合していると思われる。7は凹み石、主面の表裏両面に凹みが見られる。8は主面が平滑で、端・側面に叩打痕、主面に浅い凹みが見られ、すり石、叩き石、凹み石が複合しているものと思われる。9は凹み石で、浅いが主面の凹みははっきりしている。第44図1・2は両端に叩打痕を持つ叩き石である。2は中ほどで真っ二つに折れており、器面は風化が著しいが、割れ面は風化しておらず、珪質の硬い石材が素材であることがわかる。3はすり石であり、主面の一方が平滑である。4は直線的に整った両側面がざらついた感触を示しており、第38図8のすり石と同様の形状の優品である。主面にわずかな凹みが見られるが、主にはすり石として使われたものと推定している。

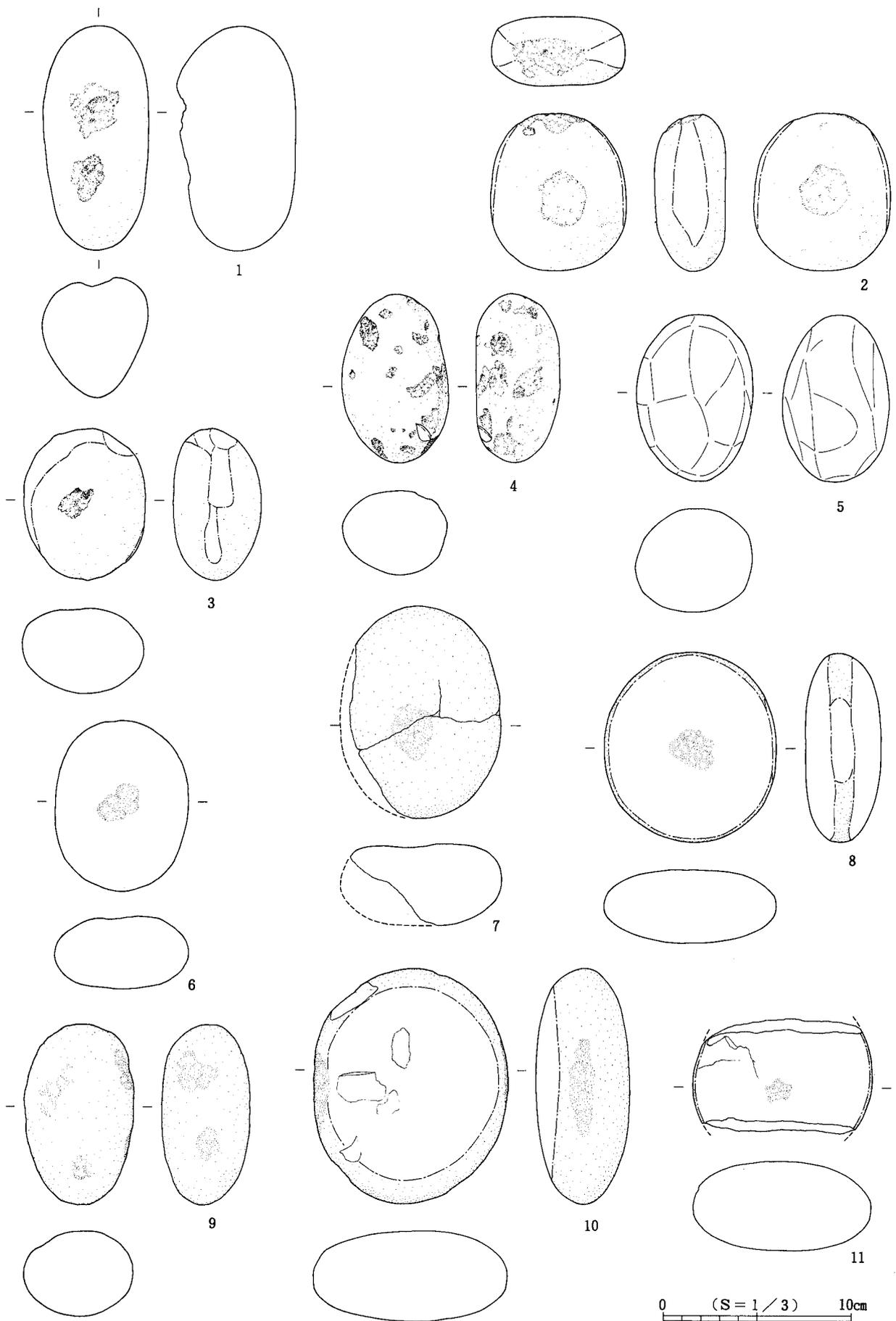
すり石・叩石・凹み石はそれぞれの特徴的な使用痕が1個の礫に複合したものが多く、専用器として特定できたものはわずかである。石材は軟質な安山岩や凝灰岩の類と、硬質な花崗岩や石英班岩の類に大別できるが、前者が圧倒的に多く、後者はわずかである。前者はその材質ゆえに摩滅、風化が進んだものが大半であり、使用痕の複合と相乗して、すり石・叩石・凹み石の分類を困難にしているものと思われる。組成比については同じ理由から算出が困難であるが、専用器と特定しえたもので比



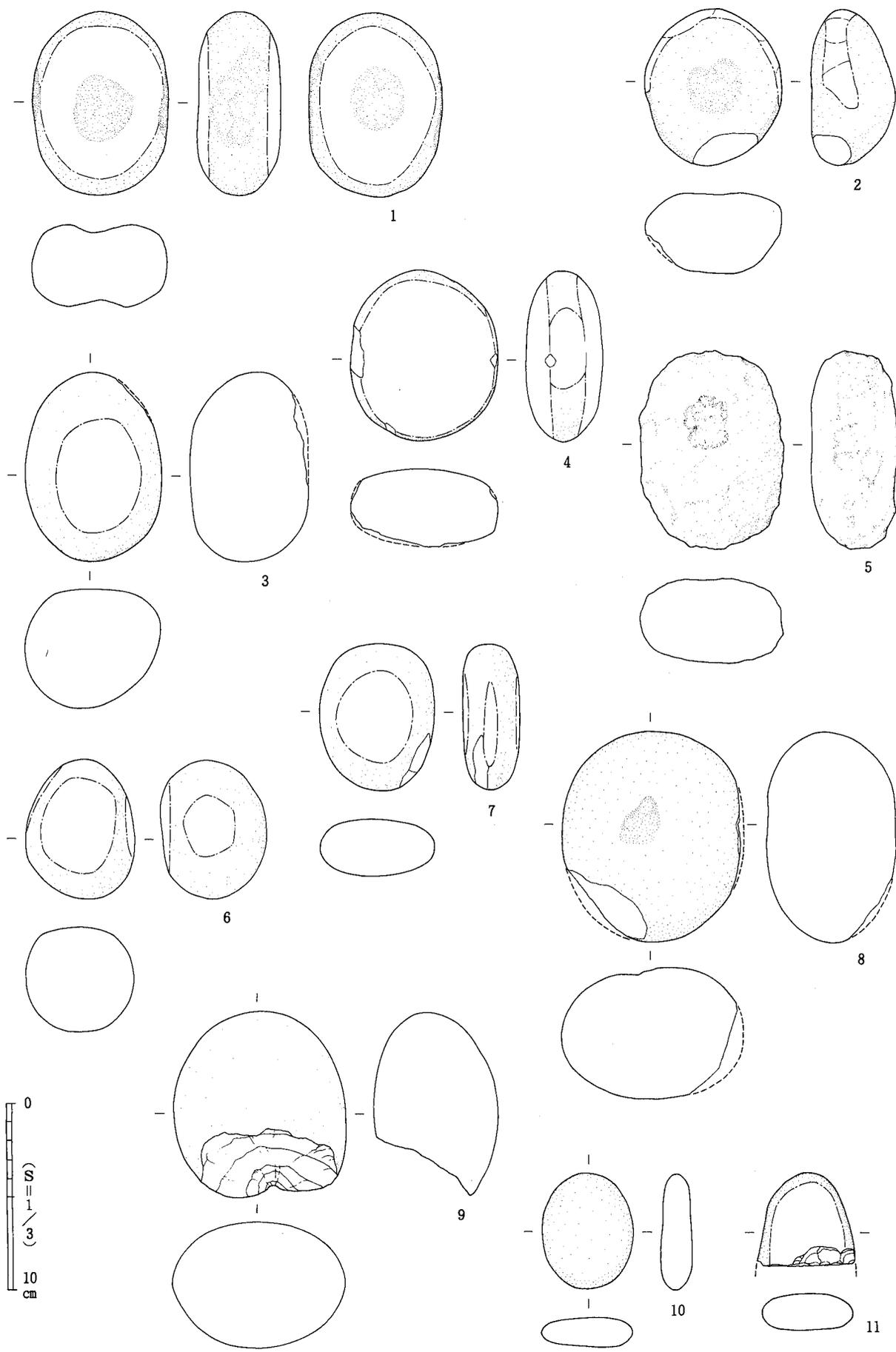
第39図 集石出土のすり石類(1)



第40図 集石出土のすり石類(2)



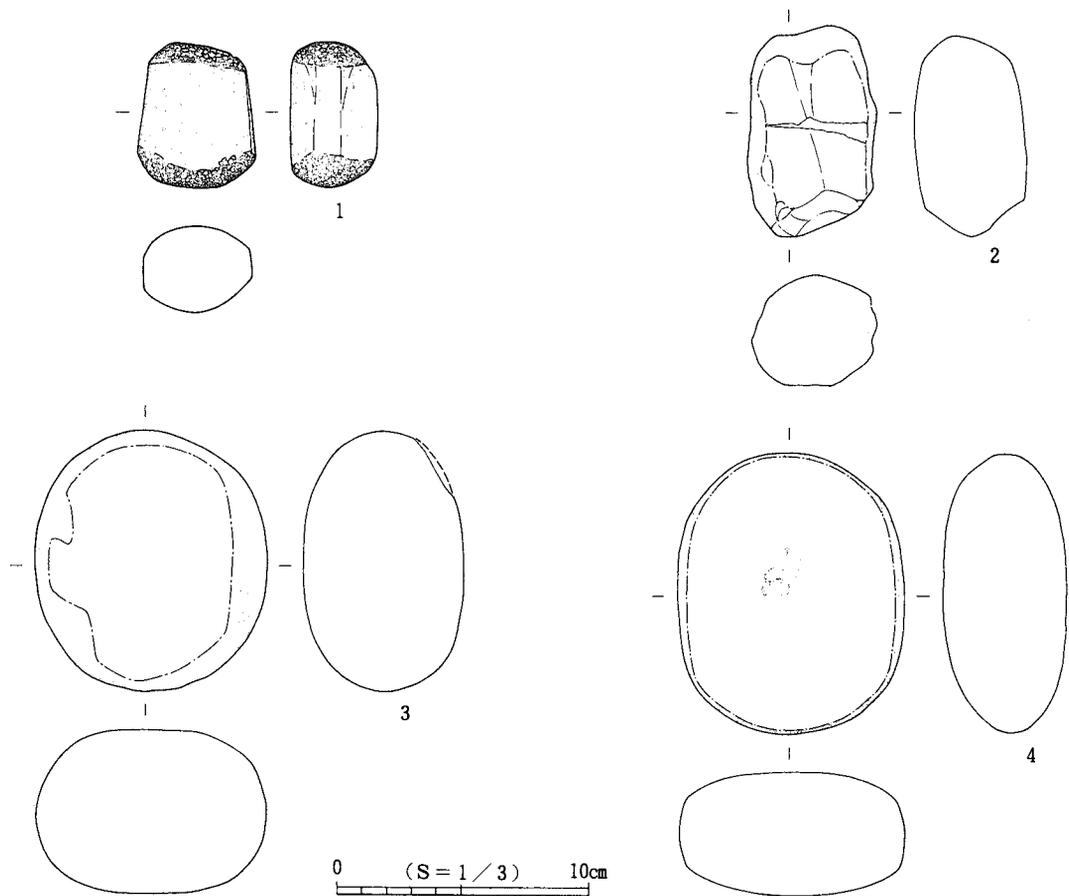
第41図 集石・谷出土のすり石類



第42図 谷・包含層出土のすり石類



第43図 包含層その他出土のすり石類(1)



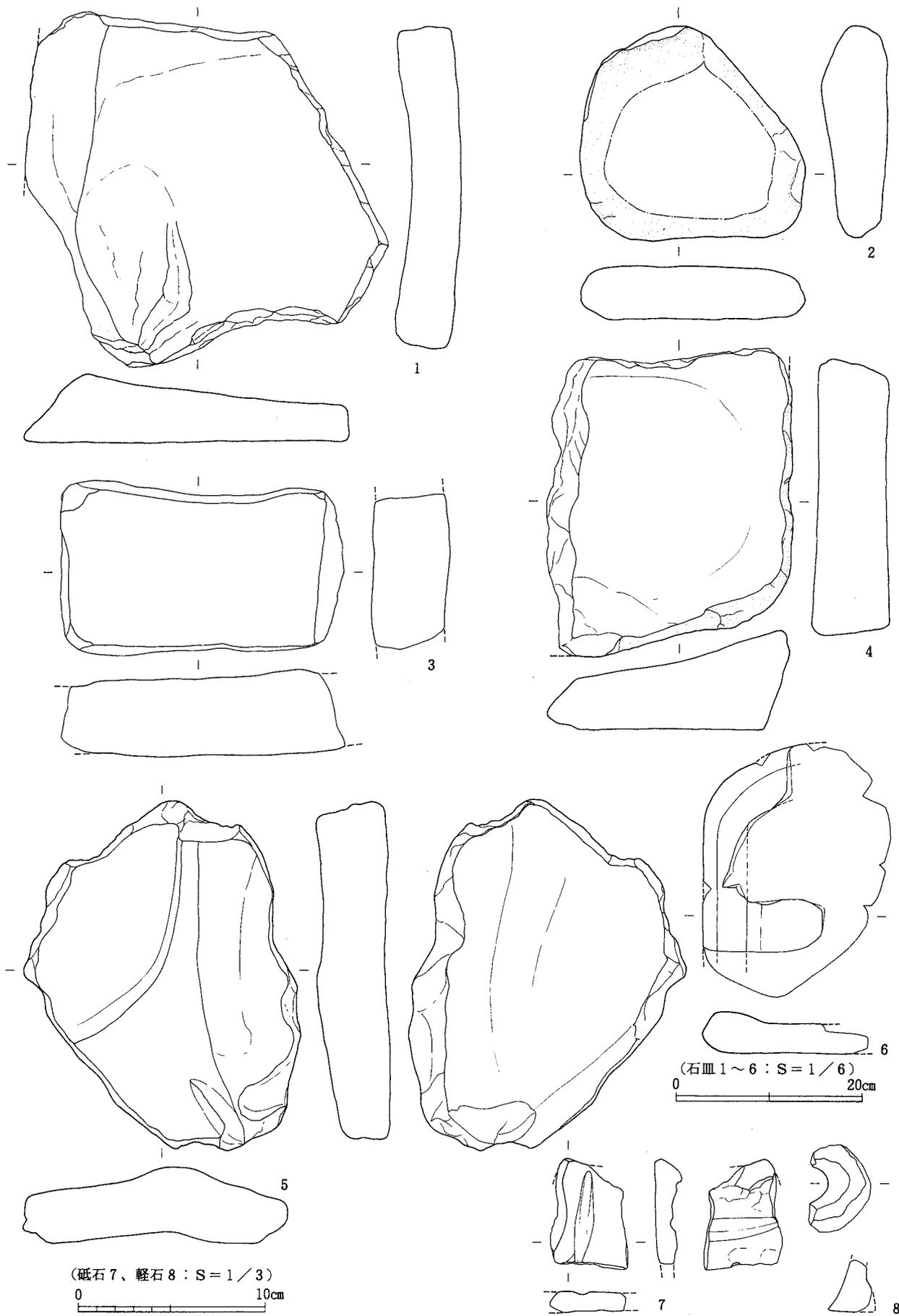
第44図 包含層その他出土のすり石類(2)

較すると、すり石が圧倒的に多く、凹み石がそれに次ぐ量で、叩き石は極端に少ないものとなる。また、器面の残りのよいものを観察したところでは、やはり複数種の使用痕が複合するものが多く、併用か転用かは切り合いからは判断しがたいが、専用器の存在から、基本的には転用であり、転用された結果、万能的な加工具として併用される場合も十分に生じ得たものと考えたい。転用については使いやすさから考えるとすり石から凹み石、叩き石へのパターンが多かったのではないかと推定している。すり石類の時期は縄文前期が主で、他に縄文後期、弥生時代に属するものもあると思われる。ただし、その間に形態がどう変化するかを検討できる資料ではなく、明らかではない。

石皿（第45図1～6、図版37）

5 kgを超えるかなりの重量とそれに見合う大きさの石材に、広い平坦面を持つものを石皿とした。台石と呼ばれる石器とはほぼ同義、同機能であろう。板状の安山岩もしくは砂岩を石材とし、不整形なものが多い。石質上、摩滅が著しく進んでいる。第45図1～4は集石から出土した。1は出土した石皿中で最大の規模、重量を測るものである。3・4はやはり不整形ながら、直方体に近い形状を呈する。4は表裏面及び側面の一面が平坦になっている。5は10号竪穴建物から出土した。板石であるがきわめて不整な形状を呈する。一面では最も高い面が帯状に細くなる部分を境にして別の2面が生じており、あわせて3面の平坦面が連なる。もう一面では2面の平坦面が段をなして上下に連なっている。6は8号竪穴建物から出土した。摩滅、欠損が激しいが、隅が丸みを持つ平面形で、縁は中央よりも帯状に盛り上がっているようである。比較的整った形状の石皿と思われる。全面黒色化して脆くなっており、被熱しているようである。

石皿は集石あるいは竪穴建物からのみ出土した。他の石器に比べて点数も少ないが、竪穴建物等の遺構に付随する頻度がきわめて高い石器と言えよう。総じて不定形で、軟質な石材を多用する傾向が



第45図 石皿・砥石・軽石

ある。石皿の時期は出土した遺構や共伴する縄文土器から考えて、縄文前期に属するものが多いと思われる。6は唯一の定形的な石皿と思われ、8号竪穴建物からの出土であり、縄文後期以降の可能性が高い。6のような石皿が縄文前期に伴うかどうかは、佐波遺跡に包含層出土の類例がある²⁰ものの、確実とはいえない状況にある。

砥石・軽石（第45図7・8、図版37）

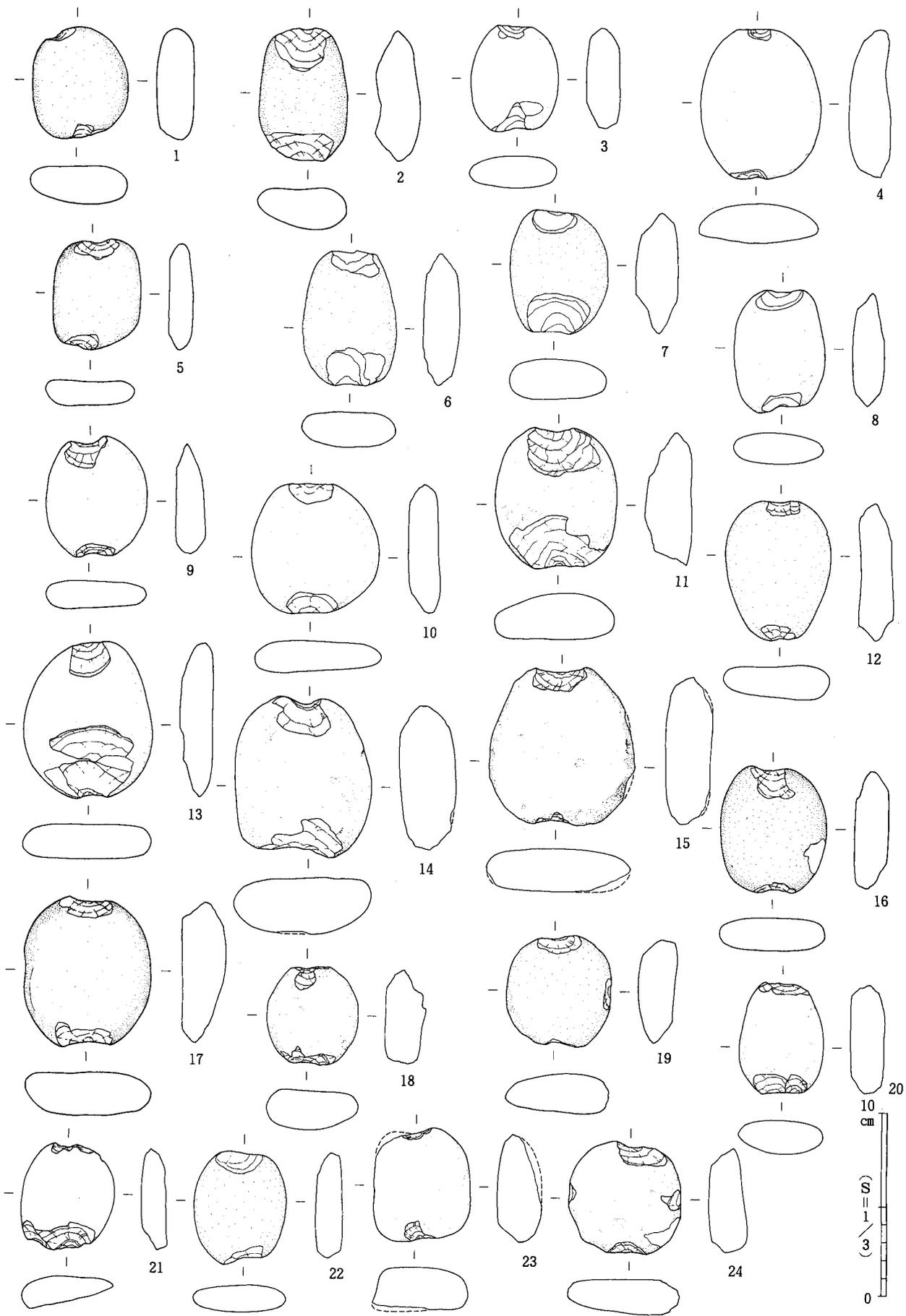
7は10号竪穴建物から出土した。板状の砂岩の表裏に浅い溝状の凹みが見られる。風化が進んでいるが、凹み内は残りがよく、平滑になっており、砥石と考えた。10号竪穴建物からは同様の品がもう1点出土している。8は集石から出土した。環状を呈する軽石と思われるが、風化して、欠損が激しい。底はフラットな面を持っている。

石錘（第46図～第48図、図版38～図版40）

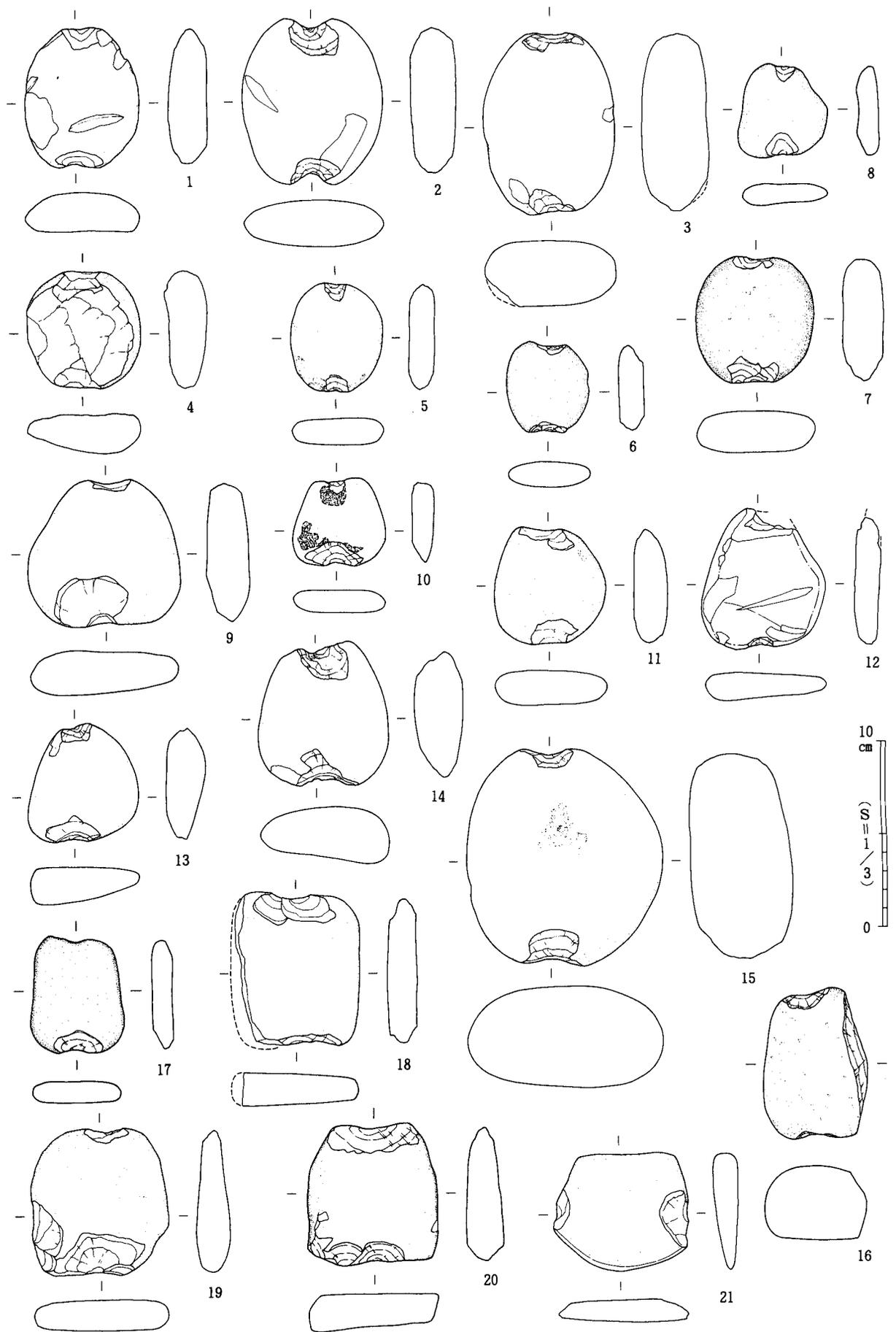
出土した石錘は全て端の糸掛け部を打ち欠きによって形成する、打欠石錘あるいは礫石錘と呼ばれるタイプである。素材となる礫の形状によって、A類（扁平な長楕円形の礫を素材とするもの）、B類（扁平な下ぶくれ状の隅丸三角形の礫を素材とするもの）、C類（厚みを持った円礫もしくは角礫を素材とするもの）、D類（薄い板状の長方形の礫を素材とするもの）、E類（不整形な礫を素材とするもの）の5種に大別した。A類が最も多く、E類がこれに次ぎ、B・C・D類はわずかである。ただしE類については、A～D類に分類しがたいものも一括したため、数が多くなったと思われる。

第46図1～第47図7はA類に分類される。第46図1～5は竪穴建物出土。1は小型で、両端の打ち欠きの幅が1～2cmと比較的小さいもので、打ち欠きは一端が主面の両面、もう一方の端が片面のみに及ぶ。2は主面の片面のみに広い範囲の打ち欠きが及ぶものであり、同じ面から加撃していると思われる。また、打ち欠きの間に浅い凹みが見られるが、礫のもともとの形状のようであり、使用によるものではない。4はやや反り返る扁平な礫を素材とする。5は円礫を素材とするが、平面形が隅丸の長方形に近いもの。打ち欠きは一端が主面の両面、もう一方の端が片面のみに及ぶ。6～14は集石出土である。10は打ち欠きがほぼ片面のみに見られるものである。11の打ち欠きは一端が主面の両面、もう一方の端が片面に及ぶが、打ち欠かかれた範囲はきわめて広がっている。12は両端の打ち欠きの幅が1～2cmと比較的小さいもの。13は主面の片面のみに打ち欠きが及ぶもので、その範囲は広く、一方の端では2段に打ち欠かれている。被熱していると思われる。15～17は谷出土。15は主面の片面で縁の欠損が激しいが、摩滅しており、使用によるものかどうかはわからない。18～24・第47図1～7は包含層その他出土。18の打ち欠きは一方の端から主面の片面へ大きく広がっている。19は両端の打ち欠きの広がる面が逆になっており、主な加撃面も異なるものと思われる。また、側面の一方にも浅い凹みが見られ、三方を打ち欠いた石錘の可能性はあるが、摩滅しており明確でない。21は主面の片面が平坦で表面がざらついており、加撃によって剝離したものと思われる。23は一方の端の打ち欠きが主面の片面に大きく広がっており、加撃時に剝離したものと思われる。24は側面の両面に浅い凹みが見られ、四方を打ち欠いた石錘の可能性はあるが、摩滅しており明確でない。第47図2は緩V字の深い打ち欠きが両端で明確である。一部で赤化が見られ、被熱している可能性があるが、摩滅しており明確でない。3は主面の片面に浅い凹みが見られ、また、一部で赤化している。石錘のA類ではかなり厚みを持つ異質なタイプであることから、凹み石等から転用されている可能性が高く、また被熱している可能性もあるが、摩滅しており明確でない。4は端の打ち欠きは浅いが、加撃の際に主面の片面が剝離したと思われる。6はきわめて扁平な礫を素材としている。

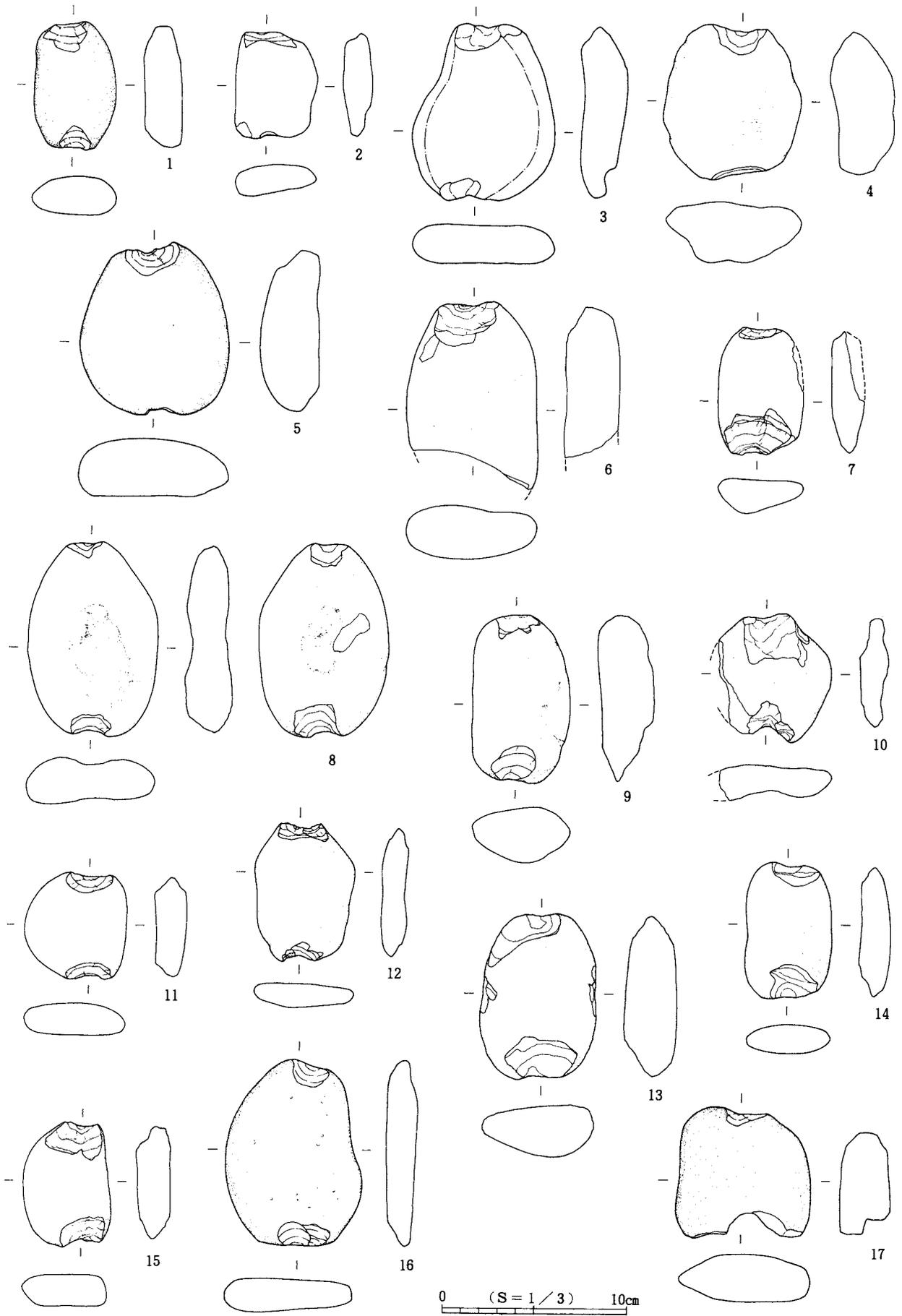
第47図8～14はB類に分類される。8は主面のほぼ片面のみに打ち欠きが及ぶものであり、同じ面から主に加撃していると思われる。被熱し、黒色化している。10は主面の片面に黒色の油脂状の被膜



第46図 石錘(1)



第47図 石錘(2)



第48图 石锤(3)

が部分的に見られる。12は平面形は下ぶくれであるが、板状に近い偏平な礫を素材としている。13は主面のほぼ片面のみに打ち欠きが及ぶものであり、同じ面から主に加撃していると思われる。14は両端の打ち欠きが深く、両主面に広がっている。被熱している可能性がある。

第47図15・16はC類に分類される。15は出土した石錘中で最も大きく、重いもの。主面の片面に浅い凹みが見られ、かなり厚みを持ち、礫素材ではすり石類との区別は難しいことから、凹み石との併用もしくは転用が想定される。使いやすさから考えると凹み石から石錘に転用されたものとなる可能性が高い。16は厚みのある礫素材を使用している。側面の一方を欠損し、角柱状を呈する。

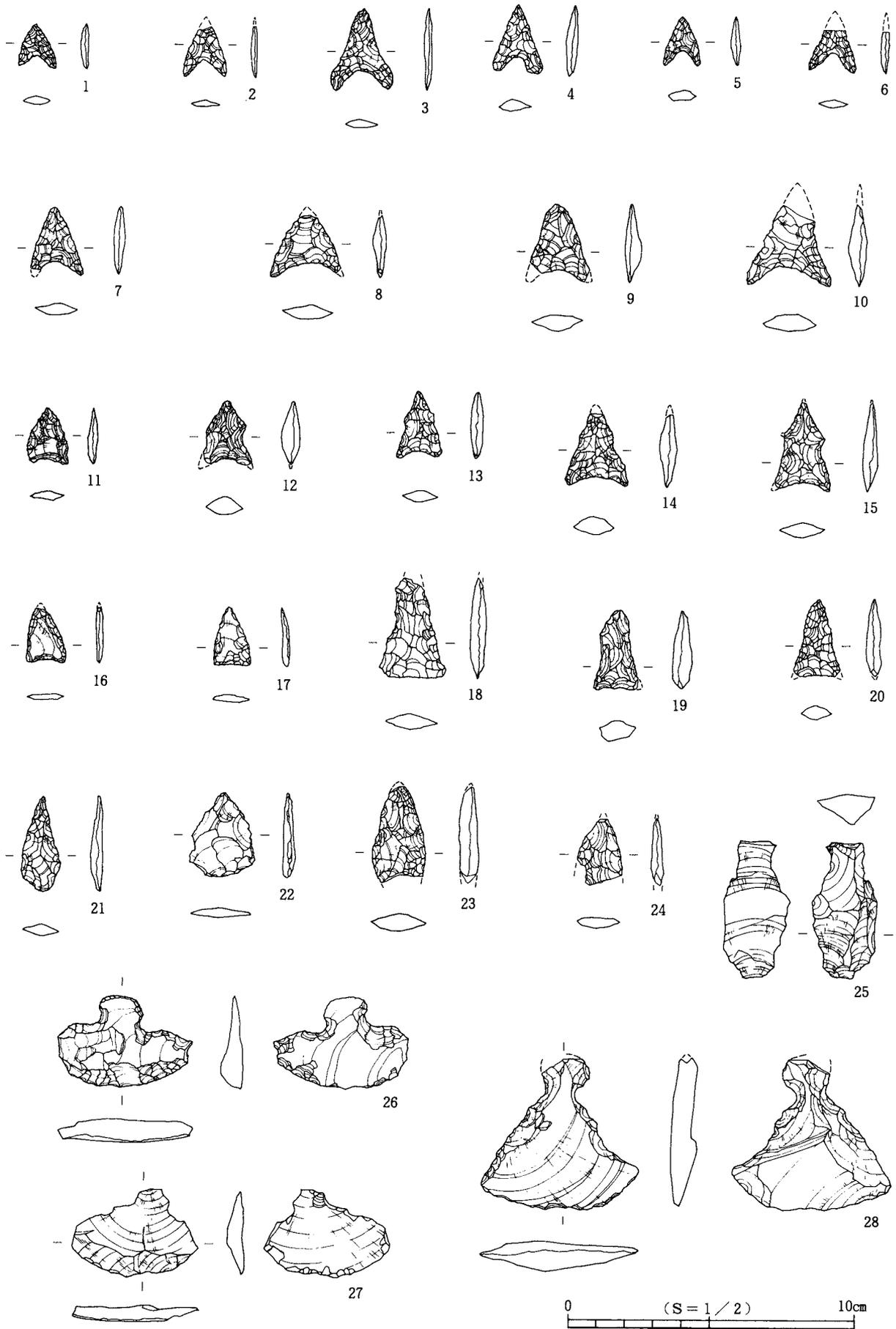
第47図17～21はD類に分類される。17は両端の打ち欠きの広がる面が逆で、面を逆転させて主に加撃していると思われる。18は打ち欠きの一方がわずかに凹む程度で、浅いもの。19は一方の打ち欠きの幅がきわめて小さく、もう一方との差が極端なものである。20は両端の打ち欠きがともに幅は広いがわずかに凹む程度で、浅いもの。21は主面のほぼ片面のみに打ち欠きが及ぶものであり、同じ面から主に加撃していると思われる。

第48図はE類に分類される。1は主面のほぼ片面のみに打ち欠きが及ぶものであり、同じ面から主に加撃していると思われる。2・4・9は摩滅が激しく、打ち欠きの痕跡も明確でなくなっている。3は湾曲が大きい素材を使用したものである。5は両端の打ち欠きの広がる面が逆で、面を逆転させて主に加撃していると思われる。6は一方の端を欠損している。7は一方の端の打ち欠きが主面の片面に大きく広がっており、加撃時に剝離したものと思われる。8は両主面に凹みがはっきりと認められ、片面では二箇所の凹みが重複しているように見える。両面凹み石との併用もしくは転用が想定されるが、使いやすさから考えると凹み石から石錘に転用された可能性が高い。10は全体としては薄手ながら、主面の片面に凹凸が激しい、きわめて不整形な礫を素材としている。11・15は小型のわりに打ち欠きの範囲が大きい。13は側面の両面に浅い凹みが見られ、四方を打ち欠いた石錘の可能性はあるが、摩滅しており明確でない。16は不整な平面形であるが、板状に近い偏平な礫を素材としている。17は一方の打ち欠きがきわめて深くV字に切れ込んでいるが、割れ面が直線的であることから、成形時の原形をとどめたものではなく、後の破損により生じたものと思われる。

石錘についてはすり石類とほぼ共通の石材から構成されており、軟質な安山岩や凝灰岩の類多数と、硬質な花崗岩や石英班岩の類少数からなる。前者に摩滅、風化が進んでいるものが多いことも同様である。しかしすり石類と異なり、欠損するものが少なく、大半が規模、重量を知りえる資料であった。重量別では、第13表の通り、20g台から1kg近くのものまでが散布し、40～120gのものが中心的な存在となる。また、他器種との併用もしくは転用については、第47図15・第48図8などですり石類、特に凹み石の使用痕が複合するものが少数ながら見られた。実際の使用を考えると併用できるものではなく、また紛失しやすいものへ転用した方が効率が良く、かつ使いやすいと考えると、凹み石から石錘へ転用することが多かったのではないかと推定している。すり石としての使用痕については、摩滅したものが多かったため失われている可能性もある。石錘の時期は、縄文前期が主で、他に縄文後期に属するものもあると思われる。ただし、形態、出土状況から後期に特定できる資料は皆無である。

石鏃（第49図1～24、図版41）

石鏃は全て打製石鏃であり、基部の形態で、凹基、平基、凸基に大別できる。茎を持つものは出土していない。第49図1～15は凹基である。1～11は側縁が三角形をなすもの。1・2は逆V字状の深く鋭い脹挾を持つもので、石材は黒曜石である。1の石質はやや濁りが見られて半透明である。2は先端を欠損している。石質は半透明であるが、黒色の色素が石の筋目に沈着して縞状に見える。3～6は丸みをもった深い脹挾を持つもの。3は側縁が基部端で幅広くなって湾曲する。4は側縁が直線



第49図 石鏃・石匙

的なもの。逆U字に近い深い脹袂と幅の広い基端部を持つ。6は先端を欠損している。黒曜石製で、透明度がきわめて高いものである。7～11は弧状の浅い脹袂を持つもの。7は基部端の一方を欠く。8は刃部と基部端の一方を欠くが、全長に対して全幅が大きい横長の形状で、先端角度の鈍いものと推定する。9は基部端を両方とも欠く。10は先端を欠く。欠損部は滑らかでほとんど面をなしていない。11は側縁がわずかに湾曲気味である。12～15は両側縁に肩状の突き出しが見られ、五角形状をなすもので、いずれも弧状で浅い脹袂を持つ。肩状の突き出しは左右不揃いで対称にはならない。12は基部端を両方わずかに欠く。14は先端を欠く。側縁の肩状の突き出しはごくわずかなものであり、ほとんど三角に近い。15は基部端の一方をわずかに欠く。16～20は平基である。16・17は非常に薄手で扁平なもの。16はごく浅い凹基と区別しがたい基部形状であるが、脹袂とは認めがたいのでここに含めた。18・19は軸方向に対して鏃が曲がって見えるもの。18は先端と基部端の一方をわずかに欠く。比較的大型で、丁寧な調整がなされている。19は基部端の一方をわずかに欠損する。全体に風化が進んでいるが、側縁の一方は弧状に剝離したものであると思われる。20は基部端の両方がわずかに欠損する。21・22は凸基である。21は軸方向に対し鏃がやや曲がって見える。22は大型、扁平で幅が広いもの。側縁が整っておらず、未製品の可能性もある。23・24は基部の欠損が大きく、全体の形状が不明のものである。23はかなり大型品と推定される。24は基部端に加えて、先端も欠いた状態である。

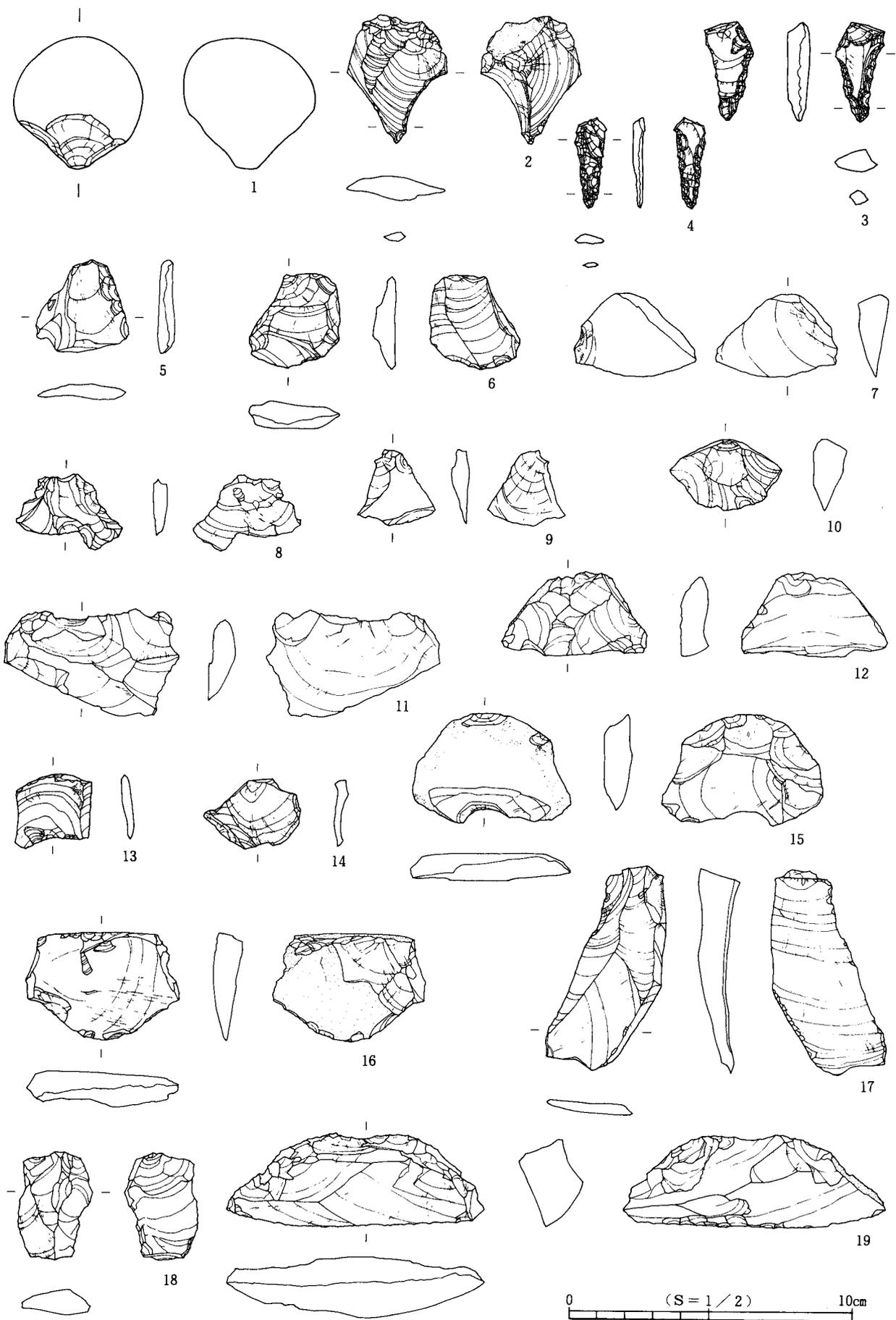
石鏃は形態別では凹基が圧倒的に多い。石材では近隣地産と思われる珪質頁岩が最も多い。遠隔地産の代表である黒曜石は4点である(巻頭図版7)。出土した土器から、石鏃についても縄文前期に属するものが主で、縄文後期以降に属するものも少量あるものと推定される。第49図4などが類似する、逆U字形の脹袂は、縄文早期から前期にかけて全国的にも盛行する形態である。この他にも、全長の20%かそれ以上のある程度深みのある脹袂を持つものについては、中期以前に属する可能性が高からう。一方脹袂がきわめて浅いもの、平基のものについては縄文後期以降に属する場合が多い。12～15のような五角形状の側縁で浅い脹袂を持つものは縄文晩期以降によく見られるようである²¹。この形態は調査区内からは出土しておらず、調査区外の北方、丘陵のより高所で数多く表面採集されている。調査区内では確認できなかった時期的なまとまりを示しているようで、興味深い分布の傾向と言えよう。

石匙(第49図25～28、図版41)

石匙は縦匙と横匙がある。不定形なものでもつまみ部が見られるものは石匙に含めた。25は定形的でないが、縦匙と推定した。刃部はやや弧状に反っており、端をわずかに欠くようである。珪質成分の多い、硬い石材を用いており、器面は光沢がある。26～28は横匙である。26は片面が凸レンズ状に張り出す、厚みがある刃部を持つ。珪質成分の多い、硬い石材を用いており、器面は光沢がある。27は26より全体に扁平であり、調整も粗く、自然面の側はほとんど手を加えられていない。28は4点中で最大の石匙。付け根を強く剝離させて作りだしたつまみ部、かなり整った扇形の刃部からなる。

石錐(第50図1～4、図版42)

石錐は、素材となる礫材あるいは剝片の端を細く尖らせて刃部としている石器を捉えた。1は円礫素材の端をまず加撃して剝離させて作業面とし、次に交差する方向に螺旋状に加撃していき、円錐状の剝離面を作りだしている。剝離面の端は狭小ながらも面をなしており、擦痕が見られることから、自然面ではない。形態からみて石錐としたが、機能的には穿孔よりも小範囲の叩打等に適するものと考えられる。剝離面形成の過程である程度の量の剝片を得ることも可能と思われ、小型の石核となる可能性もあろう。2・3は弧状に尖らせた刃部を持つもの。2は刃部端をさらに絞り込んで長さ3mm程のドリル部分を形成している。刃部は縁を細部調整によって薄く、鋭く仕上げられており、刃器的な使用も



第50図 石錐・剥片

想定できる。複合した機能を持つ石器となる可能性もあろう。石材はきわめて硬質であるが、刃部の付け根には質の悪い部分もくっついて見られる。3は2よりも細身で、刃部に細部調整を行なっているが、2ほどの薄さ、縁の鋭さ、端のドリル部分は見られない。4は直線的に伸びる刃部を持つもの。刃部は細部調整を行なっており、薄く仕上げられている。

剥片・石核（第50図5～第51図、図版42）

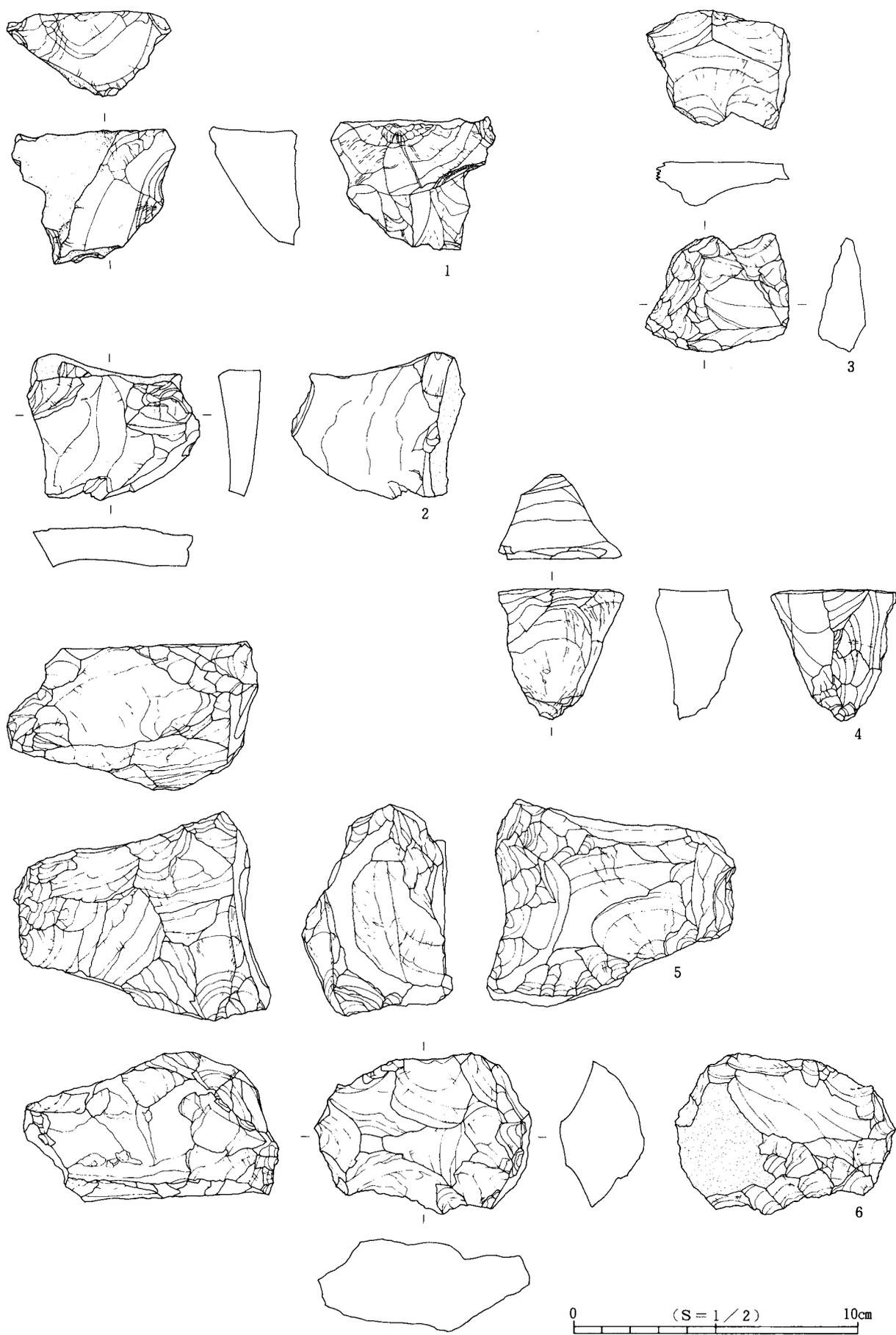
剥片は多く出土している。図化できなかったものも多いが、その性格を類推できたものはごくわずかで、楔形石器と刃器を抽出した程度である。

第50図5～第51図2は剥片である。5は実測図で見る上端に範囲が狭く規模も小さい剥離痕、下端に範囲が広い剥離痕が見られる。下端の剥離痕は小規模なものが重複しているものと思われる。側縁は右縁は細部調整され薄く仕上げられているが、左縁は剥離面のままほぼ未調整である。剥片の相対する端で対照的な剥離痕が見られることから、楔形石器と考える。6も上下端に剥離痕が見られるが、5ほど明瞭ではない。側縁は片面から円周状に剥離され、なおかつ細部調整されている。一応楔形石器と考えているが、刃器等と複合する可能性もある。7～11は縁を刃部状に薄く尖らせているが、細部調整が見られないもの。7～10は弧状の縁を持つもの。8は薄手で、きわめて不整形な剥片である。11は弧状、直線状の縁の大半が薄く、鋭くなっているが、細部調整は見られない。12～14は縁が面をなすものであり、刃部状の鋭利な部分は見られない。15は図の上端の縁と、下端の縁をそれぞれ別の面から主に加撃して剥離させ、薄くしている。縁の剥離から剥片を得ることが可能と思われ、小型の石核となる可能性もあるが、刃器としての成形剥離と考えることもでき、また複合している可能性もあろう。下端の縁は抉れている部分の両面ともに黒色の油膜状の付着物があり、石核以外の利器としての使用を示すと言える。16～19は縁を鋭く尖らせており、確実に刃部をもつもの、刃器と見ている。16は細部調整かどうか不明確ながら、刃部縁に細かい剥離痕が見られる。17は弧状の刃部をもち、きわめて硬質な石材を用い、細部調整されて、薄く、鋭く仕上げられている。18は17の小型品といった形状であるが、「刃」とするには縁がやや鋭さに欠ける。19は鯉節状の、比較的形態の整った剥片である。直線的な縁の方が刃部にあたるものと思われ、薄く、鋭くなっており、細部調整が見られる。第51図1・2は石核に似た大きさ、厚みを持つものであるが、剥片を剥離した痕跡が見られないため、剥片に含めた。1は一面のみ激しい風化面が見られ、他は剥離面である。原石から剥離されたままの剥片と思われる。2は扁平で、縁が面をなすものである。

第51図3～6は石核である。3は剥片と区別しがたい形状であるが、細かい剥離痕を多く観察でき一部では階段状を呈する。石鏃等の小型の打製石器の素材を獲得した石核と考えた。4は三角錐状の形態で、全面やや風化しているが全て自然面でなく剥離面と思われ、うち1面からは確実に剥片剥離の痕跡が見られる。5はやや大型で厚みがある石核。平坦な面を作業面として加撃、それによってできた別の平坦面に加撃し剥片を獲得するといった連鎖的な剥片剥離を行なっている。6も5と同様な作業を行なった石核である。

玉製品（第52図、図版42）

第52図1・2は玦状耳飾である。1は欠損が激しく、一方の切り目と一部の外縁、孔の縁しか残っていないが、平面形は円形であろう。2は円形の玦状耳飾で、ほぼ完存する。切り目方向に長い円形の平面形で、断面は扁平、孔が小さく対照的に切り目が長く伸びる形状である。表面には研磨痕が筋状に残り、切り目部の縁では軸に沿った方向に見られる。また、孔から切り目部の縁では端を研磨して斜めの面を両面から取り、中央に山形の稜を設けて仕上げている。3・4は板状の石材片であり、折れていない端は薄く処理されている。4は片面に多孔の質の悪い部分がくっついて見られる。3・



第51图 剥片·石核

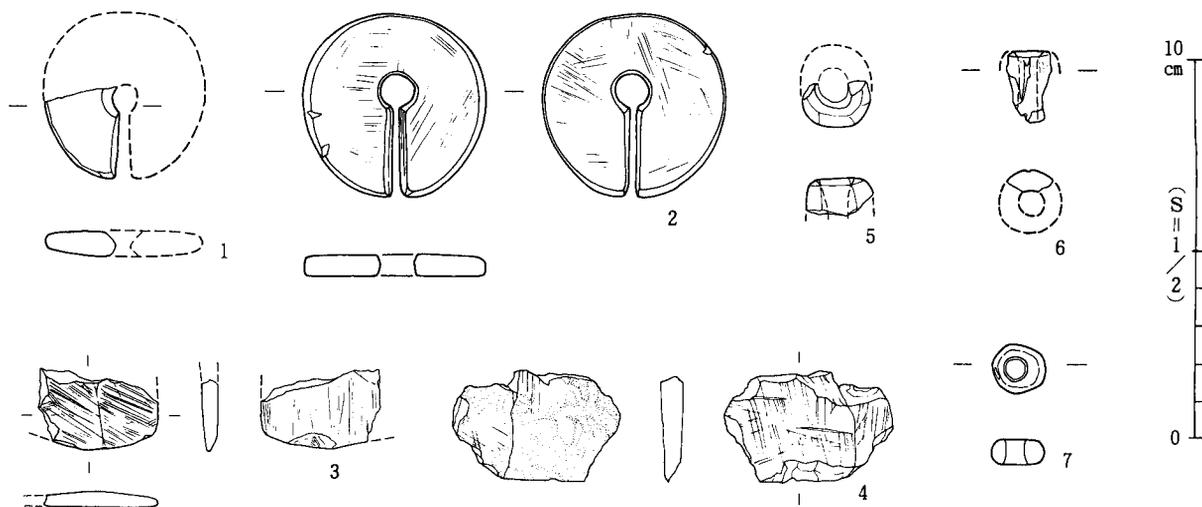
4ともに1と似た軟質の石材の板状の破片であり、表面に2と同様の研磨痕が見られることから、玦状耳飾もしくはその未製品と推定する。5～7は貫孔を持つ玉製品である。5・6は環の約半分、一方の端を欠損している。6は細長い形態が予想され、管玉となる可能性が高い。7は扁平な丸玉であり、完存する。硬質な石材を使い、丁寧に研磨されている。

玉製品の石材は1・3～6のように軟質なものと、2・7のように硬質なものにはっきり分けられる。軟質の石材は爪でも傷が付くほどであり、タルク片岩、一般に滑石あるいは鑑石とよばれている類で、すなわち軟玉に相当するものと思われる。この他、図化はしていないが同様の石材片が数点出土しており、うち板状の材が2点、原石から剥がれたままの材が1点確認されている。板状の材は3・4と同じ理由から玦状耳飾の類と考えている。硬質の石材については剥片1点の出土であるが、その形態から垂玉の可能性のあるものと考えている。

玉製品が全国的に普遍化する時期は縄文早期末の段階とされており、以降の時期はそれぞれの特徴を持って推移する。玦状耳飾は縄文前期に最も盛行する器種であり、通ジゾハナ遺跡例は1～4に未図化品も含め全て縄文前期に属すると考えて大過ない。2は穴水町甲・小寺遺跡や佐波遺跡で見られるような管状で孔が大きく切り目が小さいタイプよりも時期的に後出するタイプとして位置付けられる。1・3・4についても断面が扁平な板状を呈する事から2とほぼ同様の理解が可能であろう。完存品2が集落域と想定される調査区では得られず、調査区外北方で表面採集されたことから、未調査区域に特殊な性格をもつ場が存在する可能性がある。管玉、丸玉については時期的な消長が捉えにくく形態、石材も多様である。7については出土遺構から縄文前期に属するものと判断できるが、5・6については中期以降に降る可能性も否定できない。5・6は調査区全体から出土した縄文土器の様相から考えるならば縄文前期もしくは後期のどちらかに属する可能性が高いものと見なしておきたい。

5 その他

自然遺物として、11号竪穴建物の覆土からドングリ種実が2点出土している（図版37）。1は長径1.6cm、短径1.1cmを測る。2は長径1.5cm、短径0.9cmを測る。2について、名古屋大学年代測定資料研究センターで放射性炭素年代を測定したところ、 5470 ± 150 yBPの ^{14}C 年代値を得ている。



第52図 玉製品

第7表 石器観察表(1)

図No	出土遺構	層位	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	実測No	備考
34-01	西調査区	包含層	磨製石斧	(5.5)	(4.5)	(2.3)	(63.6)	流紋岩	石188	
34-02	西調査区	包含層	磨製石斧	(5.4)	(4.2)	(2.75)	(76.1)	流紋岩	石162	
34-03	谷	堆積土	磨製石斧	(5.73)	(4.53)	(2.18)	(65.0)	流紋岩	石211	
34-04	調査区外	表面採集	磨製石斧	(6.9)	(3.6)	2.5	(82.9)	安山岩	石248	
34-05	不明		磨製石斧	(6.75)	(5.2)	(2.9)	(118.7)	流紋岩	石238	
34-06	8号堅穴建物	覆土	磨製石斧	(8.85)	5.1	3.7	(203.5)	安山岩	石45	
34-07	集石	覆土	磨製石斧	(8.3)	(6.01)	(3.08)	(186.4)	砂岩	石202	
34-08	谷	堆積土	磨製石斧	(9.22)	(5.35)	(2.22)	(156.9)	流紋岩	石213	
34-09	西調査区	包含層	磨製石斧	(8.2)	(5.0)	2.1	(110.2)	流紋岩	石148	
34-10	調査区外北	表面採集	磨製石斧	(8.2)	4.6	2.1	(72.2)	流紋岩	石244	
34-11	西調査区	包含層	磨製石斧	(5.8)	(4.2)	(1.9)	(43.6)	変成岩	石165	
34-12	取付道調査区	包含層	磨製石斧	(10.3)	5.8	3.1	(263.5)	安山岩	石233	
34-13	排土		磨製石斧	(11.05)	5.02	3.6	(274.1)	安山岩	石71	
34-14	取付道調査区	包含層	磨製石斧	(6.9)	(6.2)	(2.4)	(160.6)	流紋岩	石197	
34-15	12号堅穴建物	覆土	磨製石斧	(13.4)	7.9	4.1	(712.3)	安山岩	石60	
34-16	東調査区	包含層	磨製石斧	(9.0)	5.6	2.3	(190.1)	流紋岩	石115	
34-17	8号堅穴建物	覆土	磨製石斧	(6.5)	6.2	2.7	(145.8)	安山岩	石43	
34-18	13号堅穴建物	覆土	磨製石斧	(4.59)	(2.34)	(0.9)	(8.0)	流紋岩	石32	
34-19	1号堅穴建物	検出面	磨製石斧	(4.5)	(3.3)	(1.05)	(17.0)	流紋岩	石4	
34-20	谷	堆積土	磨製石斧	(4.4)	(3.7)	1.45	(32.6)	流紋岩	石225	
34-21	西調査区	包含層	磨製石斧	(6.9)	(3.13)	1.35	(45.6)	流紋岩	石137	
34-22	14号堅穴建物	覆土	磨製石斧	(7.1)	(3.0)	2.3	(63.0)	安山岩	石73	
34-23	集石	覆土	磨製石斧	(8.0)	(5.9)	(3.1)	(214.5)	流紋岩	石100	
35-01	西調査区	包含層	磨製石斧	(4.3)	6.0	2.1	(65.4)	流紋岩	石180	
35-02	谷	堆積土	磨製石斧	(6.47)	5.16	2.08	(86.0)	安山岩	石219	
35-03	西調査区	包含層	磨製石斧	(7.0)	4.8	2.7	(126.4)	安山岩	石161	被熱痕跡あり
35-04	調査区外北	表面採集	磨製石斧	(11.3)	4.7	3.4	(289.9)	安山岩	石251	
35-05	西調査区	包含層	磨製石斧	(4.14)	(3.82)	1.32	(29.5)	流紋岩	石139	
35-06	西調査区	包含層	磨製石斧	(6.7)	5.6	2.3	(145.9)	流紋岩	石172	
35-07	西調査区	包含層	磨製石斧	(5.5)	5.9	(2.5)	(101.2)	流紋岩	石193	
35-08	取付道調査区	包含層	磨製石斧	(12.6)	(6.3)	(3.75)	(422.5)	安山岩	石232	
35-09	西調査区	包含層	磨製石斧	(6.2)	4.0	1.9	(58.9)	流紋岩	石168	
35-10	谷	堆積土	磨製石斧	(4.4)	(4.5)	(2.4)	(48.4)	流紋岩	石231	
35-11	谷	堆積土	磨製石斧	(6.4)	4.9	2.2	(87.0)	流紋岩	石229	
35-12	西調査区	包含層	磨製石斧	(8.7)	5.5	(2.9)	(189.2)	流紋岩	石170	
35-13	西調査区	包含層	磨製石斧	(4.6)	(4.7)	(1.8)	(35.3)	流紋岩	石167	
35-14	塚	盛土	磨製石斧	(9.7)	5.0	2.1	(159.5)	流紋岩	石114	
35-15	西調査区	包含層	磨製石斧	(6.1)	6.1	2.2	(93.3)	流紋岩	石153	
35-16	調査区外北	表面採集	磨製石斧	(6.1)	4.9	2.1	(81.2)	安山岩	石252	
35-17	塚	盛土	磨製石斧	(7.1)	5.8	3.5	(192.6)	安山岩	石113	
35-18	2・3号堅穴建物	覆土	磨製石斧	(2.2)	(4.5)	(1.7)	(13.7)	流紋岩	石13	
35-19	8号堅穴建物	覆土	磨製石斧	9.2	2.8	(1.9)	(87.1)	安山岩	石44	
35-20	不明		磨製石斧	14.5	5.5	4.2	645.1	安山岩	石239	
35-21	取付道調査区	包含層	磨製石斧	11.2	(3.4)	3.9	(225.9)	安山岩	石235	
35-22	西調査区	包含層	磨製石斧	4.8	3.4	0.8	23.6	流紋岩	石173	
35-23	西調査区	包含層	磨製石斧	6.2	4.4	1.25	40.4	流紋岩	石187	
35-24	取付道調査区	包含層	磨製石斧	4.9	3.2	1.1	22.4	流紋岩	石194	
36-01	1号堅穴建物	覆土	すり石	(8.15)	(7.45)	(5.0)	(387.6)	花崗岩	石1	
36-02	1号堅穴建物	検出面	すり石	(8.4)	(4.9)	(3.7)	(122.3)	安山岩	石3	
36-03	2号堅穴建物	覆土	すり石類	8.9	6.2	5.5	324.1	安山岩	石7	摩滅
36-04	2号堅穴建物	覆土	すり石類	(8.75)	(3.05)	(5.05)	(114.5)	花崗岩	石14	すり面
36-05	2・3号堅穴建物	覆土	すり石類	(7.4)	(7.57)	4.66	(372.7)	安山岩	石143	摩滅
36-06	2・3号堅穴建物	覆土	すり石類	(10.15)	6.0	2.78	(233.9)	安山岩	石144	摩滅
36-07	2・3号堅穴建物	覆土	凹み石	9.35	5.95	4.95	376.9	安山岩	石142	
36-08	3号堅穴建物	覆土	すり石	(7.6)	(4.2)	(4.2)	(167.0)	石英斑岩	石5	
36-09	4号堅穴建物	覆土	すり石類	(10.2)	(9.5)	7.3	(1018.2)	安山岩	石15	摩滅
36-10	6号堅穴建物	覆土	すり石類	(11.5)	7.6	5.7	(687.5)	凝灰岩	石17	摩滅
36-11	6号堅穴建物	覆土	すり石類	7.7	6.0	5.2	235.9	安山岩	石22	凹み、摩滅
36-12	6号堅穴建物	覆土	凹み石	7.2	5.2	3.7	181.2	安山岩	石23	
36-13	6号堅穴建物	覆土	凹み石	10.5	7.8	5.0	547.5	凝灰岩	石18	摩滅
37-01	6号堅穴建物	覆土	すり石類	(9.0)	(8.3)	5.2	(482.3)	安山岩	石21	凹み
37-02	6号堅穴建物	覆土	凹み石	10.3	8.5	4.7	427.1	安山岩	石25	両面凹み、摩滅
37-03	8号堅穴建物	覆土	すり石類	7.6	6.3	4.4	267.1	安山岩	石41	摩滅
37-04	8号堅穴建物	覆土	すり石類	(7.9)	6.75	3.5	(200.0)	凝灰岩	石10	摩滅
37-05	8号堅穴建物	覆土	叩き石	13.2	6.7	6.3	771.5	安山岩	石40	
37-06	8号堅穴建物	覆土	叩き石	11.3	7.0	5.5	442.6	安山岩	石42	側面にも叩打痕
37-07	8号堅穴建物	覆土	叩き石	11.5	3.9	3.55	160.0	安山岩	石46	

第8表 石器観察表(2)

図No	出土遺構	層位	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	実測No	備考
37-08	9号竪穴建物	覆土	すり石類	(5.2)	(4.5)	3.9	(92.4)	安山岩	石48	摩滅
37-09	9号竪穴建物	覆土	すり石類	8.3	6.65	6.2	423.9	安山岩	石47	摩滅
37-10	10号竪穴建物	覆土	すり石類	9.7	(8.8)	(5.5)	590.8	安山岩	石53	摩滅
38-01	11号竪穴建物	覆土	すり石類	(8.75)	(7.6)	(4.7)	(442.8)	安山岩	石57	摩滅
38-02	11号竪穴建物	覆土	すり石類	8.4	7.0	5.8	365.2	安山岩	石62	摩滅
38-03	11号竪穴建物	覆土	すり石類	10.6	7.95	(6.6)	(484.2)	安山岩	石61	摩滅
38-04	11号竪穴建物	覆土	すり石	(9.8)	9.2	4.4	(540.7)	安山岩	石66	
38-05	11号竪穴建物	覆土	すり石	11.45	8.6	4.4	602.9	花崗岩	石63	
38-06	風倒木	覆土	すり石類	7.8	7.85	(5.9)	(492.5)	石英斑岩	石58	叩打痕、凹み
38-07	12号竪穴建物	覆土	叩き石	(8.5)	5.8	4.8	(294.4)	ひん岩	石59	摩滅
38-08	5号竪穴建物	覆土	すり石	10.5	8.6	3.1	556.1	石英斑岩	石16	
38-09	9号土坑	覆土	すり石類	11.3	8.76	(5.66)	(752.0)	安山岩	石51	摩滅
39-01	集石	覆土	すり石	9.7	8.46	4.2	488.1	花崗岩	石128	
39-02	集石	覆土	すり石	(9.3)	8.6	4.9	(596.5)	花崗岩	石107	
39-03	集石	覆土	すり石類	8.5	6.7	4.4	313.0	安山岩	石105	摩滅
39-04	集石	覆土	すり石類	10.0	9.8	4.7	749.9	安山岩	石109	摩滅
39-05	集石	覆土	すり石類	9.0	6.9	6.5	468.0	安山岩	石111	摩滅
39-06	集石	覆土	すり石類	6.52	4.1	3.5	129.4	安山岩	石117	摩滅
39-07	集石	覆土	すり石類	13.2	8.7	5.1	846.3	安山岩	石95	摩滅
39-08	集石F・G地点	覆土	すり石類	11.6	9.3	6.9	940.0	安山岩	石91	摩滅
39-09	集石	覆土	すり石類	10.5	8.7	5.4	509.0	安山岩	石102	摩滅
39-10	集石	覆土	すり石類	10.7	(9.5)	5.2	(617.0)	凝灰岩	石99	摩滅
40-01	集石	覆土	すり石	(9.5)	8.2	4.5	(262.5)	安山岩	石96	
40-02	集石	覆土	すり石類	10.0	8.45	5.17	578.6	安山岩	石129	摩滅、凹み
40-03	集石	覆土	すり石類	(6.8)	6.2	5.5	(277.7)	安山岩	石98	叩打痕
40-04	集石	覆土	すり石類	(10.2)	(9.0)	5.1	(730.1)	花崗岩	石242	叩打痕
40-05	集石A・B地点	覆土	凹み石	8.8	8.3	(3.6)	(362.4)	安山岩	石82	摩滅
40-06	集石	覆土	凹み石	(8.9)	(6.8)	(4.9)	(284.4)	安山岩	石104	摩滅、二連凹み
40-07	集石	覆土	凹み石	8.2	5.8	3.55	200.4	安山岩	石243	
40-08	集石	覆土	すり石類	(13.4)	(11.6)	5.9	(1083.3)	凝灰岩	石106	摩滅
40-09	集石	覆土	凹み石	8.7	6.9	2.35	159.6	安山岩	石103	二面凹み、摩滅
40-10	集石	覆土	凹み石	8.5	6.2	4.4	219.7	安山岩	石110	二面凹み、摩滅
41-01	集石	覆土	凹み石	12.3	5.1	6.5	523.8	凝灰岩	石97	二連凹み、摩滅
41-02	集石L地点	覆土	すり石類	8.7	7.3	5.8	367.4	安山岩	石90	凹み、叩打痕、摩滅
41-03	谷	堆積土	すり石類	8.3	6.6	4.7	314.8	安山岩	石228	凹み、摩滅
41-04	谷	堆積土	すり石類	9.3	5.8	4.6	273.9	安山岩	石226	凹み、叩打痕、摩滅
41-05	谷	堆積土	すり石類	9.13	6.15	5.71	386.9	安山岩	石215	被熱、摩滅
41-06	谷	堆積土	すり石類	9.34	7.2	4.02	387.5	石英斑岩	石223	凹み、摩滅
41-07	谷	堆積土	すり石類	11.58	(8.27)	(4.64)	(459.0)	安山岩	石217	被熱
41-08	谷	堆積土	すり石類	10.25	9.17	4.05	554.3	安山岩	石214	凹み、すり面
41-09	谷	堆積土	すり石類	9.88	5.9	4.8	340.4	安山岩	石221	摩滅
41-10	谷	堆積土	すり石類	12.83	10.57	5.1	1000.6	安山岩	石210	摩滅
41-11	谷	堆積土	すり石類	(6.03)	9.5	4.93	(458.9)	花崗岩	石216	凹み、すり面
42-01	谷	堆積土	すり石類	9.8	7.32	4.4	433.9	安山岩	石218	二面凹み、叩打痕
42-02	谷	堆積土	凹み石	8.24	7.3	4.51	323.9	安山岩	石222	摩滅
42-03	西調査区	包含層	すり石	10.1	7.4	6.4	(678.9)	安山岩	石182	
42-04	西調査区	包含層	すり石類	9.2	8.1	4.15	401.4	安山岩	石178	被熱、摩滅
42-05	西調査区	包含層	すり石類	10.6	7.8	4.6	568.1	花崗岩	石154	全面剝離
42-06	西調査区	包含層	すり石類	7.5	5.9	5.7	315.7	安山岩	石185	被熱、摩滅
42-07	西調査区	包含層	すり石類	7.8	6.3	3.1	177.9	安山岩	石166	摩滅
42-08	西調査区	包含層	すり石類	11.3	9.6	7.1	(1018.7)	安山岩	石126	凹み、摩滅
42-09	西調査区	包含層	すり石類	(10.0)	9.3	6.8	(806.1)	安山岩	石150	摩滅
42-10	西調査区	包含層	すり石類	6.3	4.95	1.68	81.2	安山岩	石121	摩滅
42-11	西調査区	包含層	すり石	(5.2)	(5.28)	(2.05)	(78.4)	流紋岩	石135	
43-01	西調査区	包含層	すり石	10.4	9.3	4.5	732.9	花崗岩	石176	
43-02	取付道調査区	包含層	すり石類	10.3	7.5	5.0	468.7	安山岩	石236	摩滅
43-03	西調査区	包含層	すり石類	9.18	8.14	4.4	442.1	安山岩	石131	摩滅、凹み
43-04	西調査区	包含層	すり石類	9.4	7.9	4.7	506.1	花崗岩	石151	凹み、叩打痕、すり面
43-05	西調査区	包含層	すり石類	8.06	5.33	4.6	268.1	安山岩	石133	摩滅
43-06	西調査区	包含層	すり石類	13.1	8.7	6.85	988.9	凝灰岩	石169	敲打痕、すり面
43-07	西調査区	包含層	凹み石	10.3	9.5	5.8	652.9	安山岩	石171	二面凹み、摩滅
43-08	西調査区	包含層	すり石類	8.21	7.38	4.38	424.2	花崗岩	石134	二面凹み、叩打痕、すり面
43-09	西調査区	包含層	凹み石	11.1	9.0	5.3	634.0	安山岩	石158	
44-01	西調査区	包含層	叩き石	5.8	4.70	3.50	156.3	安山岩	石260	
44-02	調査区外南	表面採集	叩き石	8.4	5.15	4.9	231.7	珪質頁岩	石249	
44-03	調査区外	表面採集	すり石	10.4	9.3	6.5	(895.9)	安山岩	石246	
44-04	調査区外南	表面採集	すり石類	11.1	9.0	4.9	766.9	花崗岩	石250	凹み、すり面

第9表 石器観察表(3)

図No	出土遺構	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	実測No	備考
45-01	集石C・D・E地点	覆土	石皿	38.1	39.5	7.5	14450.0	安山岩	石79	
45-02	集石P・Q地点	覆土	石皿	23.1	24.2	7.1	5650.0	安山岩	石78	
45-03	集石P・Q地点	覆土	石皿	9.6	15.4	4.8	1119.2	安山岩	石89	
45-04	集石R地点	覆土	石皿	34.05	26.4	10.9	13000.0	安山岩	石76	
45-05	10号竪穴建物	覆土	石皿	38.35	30.5	8.4	12350.0	安山岩	石77	
45-06	8号竪穴建物	覆土	石皿	(28.0)	(20.0)	4.5	(1819.5)	砂岩	石27	被熱
45-07	10号竪穴建物	覆土	砥石	(6.2)	(4.2)	1.75	(28.8)	砂岩	石55	
45-08	集石	覆土	軽石	(4.95)	(2.26)	(2.93)	(23.6)	軽石凝灰岩	石206	
46-01	6号竪穴建物	覆土	石錘	6.1	5.3	2.2	92.5	安山岩	石24	
46-02	6号竪穴建物	覆土	石錘	7.3	4.8	2.4	110.2	花崗岩	石19	
46-03	8号竪穴建物	覆土	石錘	5.8	4.7	1.9	67.8	安山岩	石39	摩滅
46-04	8号竪穴建物	覆土	石錘	8.2	6.4	2.2	160.2	安山岩	石38	摩滅
46-05	11号竪穴建物	覆土	石錘	6.1	4.8	1.4	40.1	凝灰岩	石65	
46-06	集石	覆土	石錘	7.38	5.08	1.95	92.9	凝灰岩	石203	摩滅
46-07	集石	覆土	石錘	6.72	5.3	5.31	104.1	安山岩	石201	摩滅
46-08	集石A・B地点	覆土	石錘	6.8	4.9	1.7	68.1	凝灰岩	石84	摩滅
46-09	集石R地点	覆土	石錘	6.7	5.6	1.6	89.1	花崗岩	石88	
46-10	集石	覆土	石錘	7.1	6.9	1.8	125.3	安山岩	石94	摩滅
46-11	集石C・D・E地点	覆土	石錘	7.8	6.6	2.5	177.1	花崗斑岩	石87	
46-12	集石	覆土	石錘	7.65	5.65	1.88	110.1	安山岩	石130	摩滅
46-13	集石A・B地点	覆土	石錘	8.7	7.1	1.9	133.4	安山岩	石86	被熱、摩滅
46-14	集石A・B地点	覆土	石錘	8.8	7.4	3.1	230.9	安山岩	石83	摩滅
46-15	谷	堆積土	石錘	8.7	7.9	2.4	(166.3)	安山岩	石224	摩滅
46-16	谷	堆積土	石錘	6.9	5.5	1.8	101.3	安山岩	石240	摩滅
46-17	谷	堆積土	石錘	8.25	6.9	2.5	183.9	安山岩	石241	
46-18	西調査区	包含層	石錘	6.4	4.8	2.2	84.3	花崗岩	石147	
46-19	西調査区	包含層	石錘	6.17	5.78	2.14	94.0	安山岩	石122	摩滅
46-20	西調査区	包含層	石錘	6.1	4.5	1.95	74.8	安山岩	石177	摩滅
46-21	西調査区	包含層	石錘	5.9	5.1	1.85	62.7	花崗岩	石189	
46-22	西調査区	包含層	石錘	6.22	5.01	1.50	64.4	凝灰岩	石119	摩滅
46-23	西調査区	包含層	石錘	6.3	5.55	2.65	(117.6)	流紋岩	石181	
46-24	西調査区	包含層	石錘	6.3	5.5	2.25	(106.8)	安山岩	石160	摩滅
47-01	西調査区	包含層	石錘	7.6	6.25	2.15	112.8	安山岩	石159	摩滅
47-02	西調査区	包含層	石錘	9.1	7.7	2.5	264.3	安山岩	石149	被熱、摩滅
47-03	西調査区	包含層	石錘	9.9	7.2	3.65	304.1	安山岩	石183	浅い凹み、摩滅
47-04	取付道調査区	包含層	石錘	6.4	6.22	2.38	125.7	砂岩	石200	
47-05	西調査区	包含層	石錘	5.9	5.1	1.5	69.8	安山岩	石195	摩滅
47-06	取付道調査区	包含層	石錘	5.0	4.5	1.4	42.5	凝灰岩	石234	
47-07	排土		石錘	6.9	6.4	2.3	123.4	安山岩	石72	摩滅
47-08	3号竪穴建物	覆土	石錘	5.15	4.85	1.23	26.9	安山岩	石12	被熱
47-09	集石A・B地点	覆土	石錘	8.1	8.4	2.6	224.8	安山岩	石85	被熱
47-10	集石F・G地点	覆土	石錘	4.8	5.1	1.25	43.0	流紋岩	石92	被熱
47-11	谷	堆積土	石錘	6.4	6.08	1.86	78.0	流紋岩	石212	摩滅
47-12	谷	堆積土	石錘	7.7	6.75	1.5	96.8	流紋岩	石230	摩滅
47-13	西調査区	包含層	石錘	6.4	6.1	2.2	94.0	安山岩	石163	摩滅
47-14	西調査区	包含層	石錘	7.8	7.2	3.1	179.3	安山岩	石179	被熱?
47-15	集石	覆土	石錘	11.8	11.7	5.6	897.0	安山岩	石93	凹み、摩滅
47-16	6号竪穴建物	覆土	石錘	8.15	(5.7)	4.17	(250.3)	安山岩	石261	
47-17	3号竪穴建物	覆土	石錘	6.4	5.2	1.2	65.2	安山岩	石6	摩滅
47-18	13号竪穴建物	覆土	石錘	8.16	6.9	1.85	159.0	安山岩	石34	摩滅
47-19	西調査区	包含層	石錘	8.05	7.53	1.92	149.0	安山岩	石204	摩滅
47-20	排土		石錘	7.9	7.2	2.1	170.2	凝灰岩	石74	
47-21	西調査区	包含層	石錘	6.55	7.4	1.5	91.5	凝灰岩	石120	摩滅
48-01	6号竪穴建物	覆土	石錘	7.1	4.55	2.1	90.6	安山岩	石20	
48-02	10号竪穴建物	覆土	石錘	5.9	4.5	1.8	47.0	凝灰岩	石54	摩滅
48-03	10号竪穴建物	覆土	石錘	9.8	7.8	3.1	254.5	安山岩	石52	
48-04	11号竪穴建物	覆土	石錘	8.5	7.5	3.5	200.4	安山岩	石56	摩滅
48-05	11号竪穴建物	覆土	石錘	9.5	8.1	3.2	223.9	凝灰岩	石64	摩滅
48-06	集石	覆土	石錘	(10.3)	7.2	3.0	(244.1)	砂岩	石108	摩滅
48-07	集石	覆土	石錘	7.1	4.6	1.9	(47.7)	安山岩	石112	
48-08	集石A・B地点	覆土	石錘	10.7	7.1	3.1	210.5	安山岩	石81	両面凹み、摩滅
48-09	谷	堆積土	石錘	9.3	5.4	3.0	152.8	凝灰岩	石227	摩滅
48-10	谷	堆積土	石錘	7.04	(6.06)	1.90	(63.9)	凝灰岩	石209	
48-11	西調査区	包含層	石錘	5.9	5.6	1.75	59.2	凝灰岩	石164	
48-12	西調査区	包含層	石錘	7.69	5.5	1.6	68.7	凝灰岩	石124	
48-13	西調査区	包含層	石錘	9.26	6.24	3.0	190.5	安山岩	石199	摩滅
48-14	西調査区	包含層	石錘	7.51	4.65	1.62	77.3	凝灰岩	石118	摩滅

第10表 石器観察表(4)

図No	出土遺構	層位	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	実測No	備考
48-15	西調査区	包含層	石 錘	6.9	4.8	1.8	69.5	凝灰岩	石196	
48-16	排土		石 錘	10.3	7.4	1.9	171.3	安山岩	石75	摩滅
48-17	不明		石 錘	(7.2)	7.2	2.8	(153.6)	凝灰岩	石237	摩滅
49-01	14号堅穴建物	覆土	石 鎌	1.58	1.36	0.31	0.4	黒曜石	石49	
49-02	西調査区	包含層	石 鎌	(1.72)	1.51	0.23	(0.4)	黒曜石	石132	
49-03	調査区外北	表面採集	石 鎌	1.9	2.2	0.3	1.1	珩質頁岩	石257	
49-04	西調査区	包含層	石 鎌	2.4	1.76	0.45	1.0	珩岩	石138	
49-05	2・3号堅穴建物	覆土	石 鎌	1.71	1.27	0.30	0.4	安山岩	石140	
49-06	谷	堆積土	石 鎌	(1.48)	1.62	0.29	(0.5)	黒曜石	石207	
49-07	西調査区	包含層	石 鎌	2.4	(1.9)	0.4	(0.9)	珩質頁岩	石156	
49-08	調査区外北	表面採集	石 鎌	(2.2)	(2.5)	0.5	(2.0)	珩質頁岩	石253	
49-09	塚	盛土	石 鎌	(2.8)	(2.1)	0.6	(2.3)	珩質頁岩	石116	
49-10	西調査区	包含層	石 鎌	(2.83)	2.90	0.64	(3.0)	珩質頁岩	石205	
49-11	調査区	包含層	石 鎌	2.00	1.46	0.33	0.86	安山岩	石264	
49-12	調査区外北	表面採集	石 鎌	(2.3)	(1.7)	0.65	(1.6)	珩岩	石258	
49-13	調査区外北	表面採集	石 鎌	2.4	1.6	0.45	1.3	珩質頁岩	石256	
49-14	調査区外北	表面採集	石 鎌	(2.6)	2.2	0.65	2.3	珩質頁岩	石255	
49-15	調査区外北	表面採集	石 鎌	3.2	(2.0)	0.5	2.4	珩質頁岩	石254	
49-16	西調査区	包含層	石 鎌	2.0	1.5	0.2	0.8	珩質頁岩	石174	
49-17	集石	覆土	石 鎌	2.07	1.33	0.27	0.7	珩質頁岩	石175	
49-18	西調査区	包含層	石 鎌	(3.59)	(2.38)	0.55	(3.5)	珩質頁岩	石123	
49-19	西調査区	包含層	石 鎌	1.8	(1.6)	0.7	(3.0)	珩質頁岩	石259	
49-20	塚	盛土	石 鎌	(2.75)	(1.63)	0.46	(1.5)	珩岩	石50	
49-21	西調査区	包含層	石 鎌	3.4	1.4	0.4	1.6	珩質頁岩	石192	
49-22	5号堅穴建物	覆土	石 鎌 ?	3.05	2.38	0.38	2.5	珩質頁岩	石198	未製品?
49-23	調査区外北	表面採集	石 鎌	(3.5)	1.9	0.7	(4.4)	流紋岩	石247	
49-24	8号土坑	覆土	石 鎌	(2.47)	(1.64)	0.43	(1.4)	珩岩	石37	
49-25	8号堅穴建物	覆土	石 匙	(4.9)	2.25	1.05	(8.9)	珩岩	石8	
49-26	13号堅穴建物	覆土(集石)	石 匙	3.34	4.79	0.82	11.4	珩岩	石30	
49-27	調査区外南	表面採集	石 匙	3.05	4.5	0.6	6.4	珩質頁岩	石70	
49-28	集石	堆積土	石 匙	5.4	5.6	1.1	19.4	珩質頁岩	石101	
50-01	西調査区	包含層	石 錐 ?	4.8	4.85	4.7	103.1	安山岩	石190	
50-02	西調査区	包含層	石 錐	4.7	3.6	1.35	11.9	珩岩	石69	
50-03	東調査区	包含層	石 錐	3.64	1.6	0.80	4.34	珩岩	石263	
50-04	谷	堆積土	石 錐	3.32	1.14	0.38	1.2	安山岩	石262	
50-05	13号堅穴建物	覆土	石 剝片	3.32	3.3	0.51	6.3	珩質頁岩	石33	クサビ
50-06	西調査区	包含層	石 剝片	3.3	3.4	2.0	8.4	珩質頁岩	石146	クサビ
50-07	1号堅穴建物	覆土	石 剝片	3.05	4.35	1.05	9.8	珩質頁岩	石2	
50-08	8号堅穴建物	覆土	石 剝片	2.8	3.83	0.54	3.6	珩岩	石9	
50-09	8号堅穴建物	覆土	石 剝片	2.8	2.8	0.6	2.5	珩質頁岩	石11	
50-10	西調査区	包含層	石 剝片	2.6	4.0	1.2	10.1	珩質頁岩	石191	
50-11	風倒木	覆土	石 剝片	3.91	6.27	1.2	19.2	珩岩	石29	
50-12	9号土坑	覆土	石 剝片	3.01	5.20	1.0	15.3	珩岩	石67	
50-13	西調査区	包含層	石 剝片	2.7	2.8	0.7	3.6	珩岩	石184	
50-14	西調査区	包含層	石 剝片	2.5	3.5	1.8	4.5	珩岩	石186	
50-15	西調査区	包含層	石 剝片	4.0	5.7	1.0	25.8	珩質頁岩	石145	刃器、油膜?
50-16	2・3号堅穴建物	覆土	石 剝片	3.92	5.5	1.18	24.2	珩岩	石141	刃器
50-17	西調査区	包含層	石 剝片	7.5	4.2	1.45	25.7	珩岩	石152	刃器
50-18	13号堅穴建物	覆土	石 剝片	4.0	2.58	0.93	7.7	珩質頁岩	石31	刃器
50-19	谷	堆積土	石 剝片	3.49	9.3	2.31	62.8	珩岩	石208	刃器
51-01	集石A・B地点	覆土	石 剝片	4.1	5.9	3.1	57.7	珩質頁岩	石80	
51-02	西調査区	包含層	石 剝片	5.3	6.2	1.92	57.0	珩岩	石127	
51-03	風倒木	覆土	石 核	5.05	4.16	1.69	30.5	珩質頁岩	石28	
51-04	6号堅穴建物	覆土	石 核	4.71	4.39	3.05	34.8	珩質頁岩	石26	
51-05	7号土坑	覆土	石 核	7.5	9.0	5.3	367.8	珩岩	石68	
51-06	西調査区	包含層	石 核	5.92	7.74	3.2	136.7	珩岩	石136	
52-01	13号堅穴建物	覆土	球状耳飾	(2.42)	(1.93)	0.68	(4.1)	流紋岩?	石35	軟玉
52-02	調査区北	表面採集	球状耳飾	4.8	4.9	0.55	20.7	流紋岩	石245	研磨痕、孔径0.9cm
52-03	西調査区	包含層	球状耳飾?	(1.6)	(3.2)	(0.4)	(4.4)	珩岩?	石155	軟玉、研磨痕
52-04	西調査区	包含層	球状耳飾?	(2.95)	(4.5)	(0.66)	(10.0)	流紋岩?	石125	軟玉、研磨痕
52-05	谷	堆積土	不明	(0.9)	(1.8)	(1.8)	(2.3)	真珠岩?	石220	軟玉、孔径0.66cm
52-06	西調査区	包含層	管玉	(1.9)	(1.2)	(1.2)	(2.2)	真珠岩?	石157	軟玉
52-07	11号土坑	覆土	丸玉	1.37	1.4	0.68	1.6	真珠岩?	石36	孔径0.55cm

第4章 考 察

第1節 縄文前期の土器

1 はじめに

通ジゾハナ遺跡から出土した遺物のうち、土器・陶磁器については、その大半が縄文時代前期の土器であることは第3章で既に述べた通りである。この節では出土した縄文前期の土器について形態、文様を分析し、他の遺跡及び他の地域と比較することによって、縄文前期における時間的な位置と、東西日本に対しての地域的・空間的な意義について考えてみたい。

検討の中で提示する点数と量比については、図化した縄文土器のうち、第3章で確実に縄文前期以外の時期と指摘した個体以外を全て対象にして算出した。但し、図化の基準によって偏差が生まれることが考えられるため、未図化品の観察成果で随時補足するものとする。

2 通ジゾハナ遺跡の様相

(1) 形 態

出土した縄文土器（以下、通ジゾハナ遺跡資料）は小破片が多いため、全体的なプロポーションやサイズについて知り得る資料はほぼ皆無である。破片から類推すると、底部から器壁が外傾して立ち上がって胴部へ至り、径に比して圧倒的に身が深くなるという、縄文土器に源を発する伝統的な煮沸形態であることは言えよう。胴部から口縁部へはそのまま緩やかに広がるもの（第54図27）、屈曲して広がるもの（17）、ほぼ直立するかやや内湾気味になるもの（14・15）などが見られる。

部位別で見ると口縁部は平縁と波状縁の二形態に大別でき、口縁部64点中で9点（14%）が波状縁、残りが平縁であった。9点の波状縁のうち1点は双頭波状縁（18）と思われる。波状縁は起伏が小さいタイプのものであり、小破片では平縁と判別できないものも一部予想されるが、それでも口縁形態の主体は平縁と思われる。口縁の端は丸みを持たせた自然な形態が主体で、他にははっきりと面を取る形態（19・22）、先細らせる形態（15）も見られる。

底部は全て平底であり、尖底や丸底は出土していない。底径は個体によって5～10cmの間でばらつきがあるが、6～8cmのものが最も多く、5cm前後がやや小型として捉えられる。形態は外面の縁が輪状に突き出す上底風（29）、中央部が突き出す丸底風（34）、縁・中央部とも突き出す上丸底風（35）、外面が平坦な普通の平底、と細かい差が見られる。なお、後述するが底部は大半が外面に独特の文様を持ち、特徴的である。

(2) 文 様

文様については器面調整を兼ねる地文と、その他の文様を区別して分類した。

地文は基本的に出土した縄文土器の全てに見られ、縄紐状の原体の回転によって施されるものがほぼ全てである。原体比率は口縁部・胴部で見える限り、地文が判別できた76点のうちで単節の縄文が50点（65.8%）、環付・多段・合燃など複雑な燃りの縄文が21点（27.6%）、組紐が5点（6.6%）、であった。条痕地文や、地文を持たない無文土器はほとんど確認できず、存在しないか、存在したとしてもごくわずかの量と思われる。そして細片が多いため数量化を控えたが単節縄文の大半はLR・RLの非結束の羽状に施されているようである。

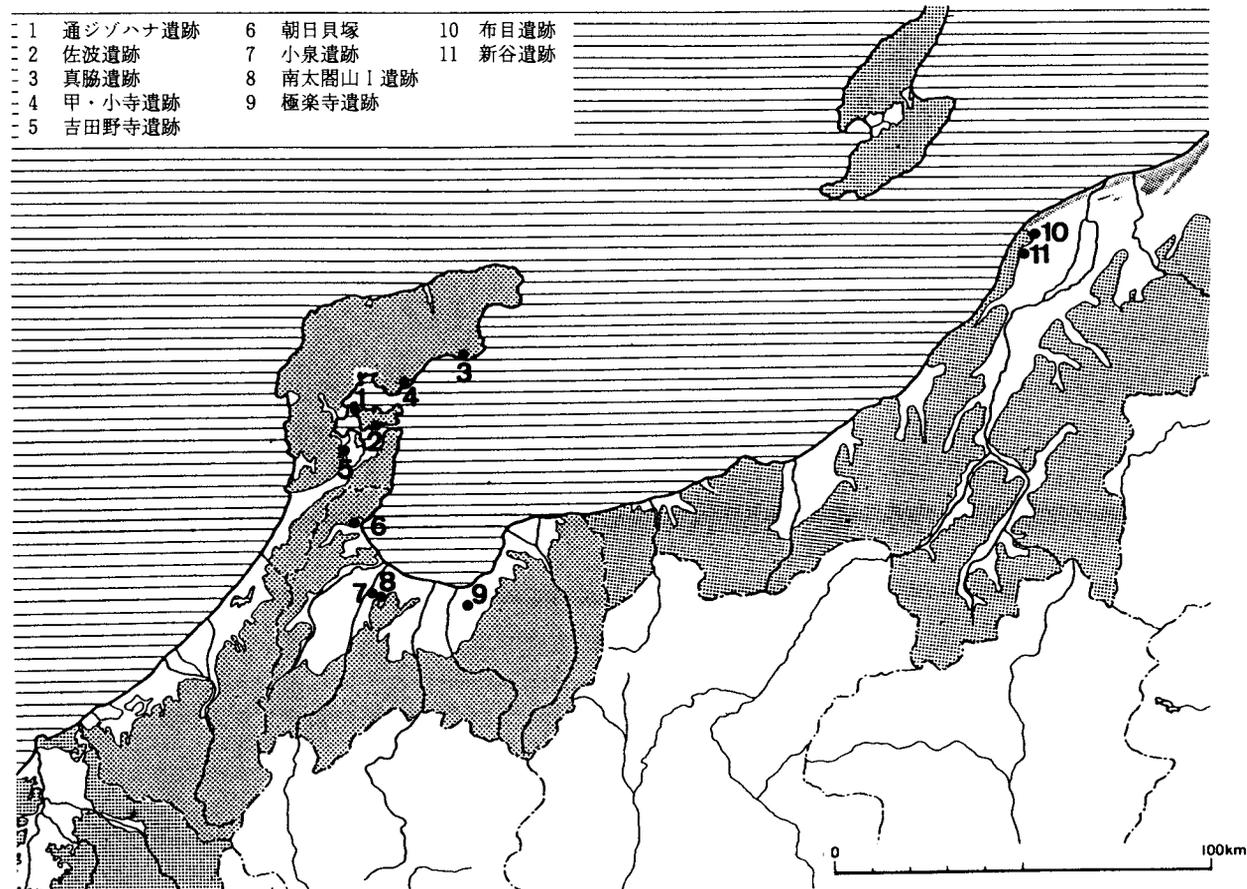
その他の文様については、施文部位が外面の口縁部と底部に集中する。文様種は基本的に刺突文、

沈線文の二種類しかない。刺突文は先行して器面に引いた沈線内を連続刺突する手法が大半と思われる。そして刺突文、沈線文とも施文によって三角もしくは菱形の区画を形成し、区画内に竹管文を配するモチーフが共通している。これら以外のパターンは、胴部での両種の組み合わせ例(28)、確實でないコンパス文(第29図34)の2点のみであるから、このモチーフの文様がほとんどすべてと言ってもよく、文様のバリエーションには驚くほど乏しい。口縁部では施文率が文様の有無が判別できた57点中25点(43.9%)と高率を示した。但し、整理時に有文品の図化を無文品よりも優先していることに起因する数字であり、実際のところは20%を前後する程度と予想している。種類別では施文品25点中刺突文は19点(76%)、沈線文は6点(24%)と、刺突文の方が圧倒的に多く主体文様種となっている。底部では16点中14点に文様が見られ、87.5%と高い施文率が確認できた。文様種はすべて同心円状に配される連続刺突文であり、口縁部で見られたものと同じ手法である。胴部下端にも連続刺突が見られ、底部と一体的な施文として確認される個体が多く、特徴的である。また、刺突原体が半環状を呈する例(33)が見られ、おそらく半截竹管による施文と思われる。口縁部文様と底部文様、そして地文の相関については残念ながら検証できる資料が存在しなかった。

口縁部端の刻みについては前述した刺突文、沈線文の有無とは関わりなく施されており、手法的には刺突ながら、異趣の装飾と見るべきであろう。口縁部64点中18点(28.1%)に見られる。

(3) 組成

(1)(2)から、通ジゾハナ遺跡資料の様相については、羽状縄文を地文とする平縁・平底の深鉢を基本器種として、地文以外の文様は口縁部と底部に集中し、刺突・沈線による区画文で占められている、とまとめられる。非常にシンプルな組成の土器群と評価できよう。但し、地文原体については単純なものから複雑なものまで多種多様であり、土器組成とは対照的である。



第53図 主要な遺跡の位置

(4) 胎 土

通ジゾハナ遺跡資料の胎土はやや粗い粘土地に砂礫を多く混和して構成されている。砂礫は径0.5～1mm程度の粒が最もよく見られるが、個体によってかなり大小にばらつく。砂礫種では石英、長石が圧倒的に多い他、種は不明であるが風化して脆い白色の粒がよく見られ、基本的にこの三種で構成される。石英・長石の含有は地質的に見て花崗岩地帯である能登地方の特質をよく表すものと言えるが、特に石英については大粒の礫から結晶形を持つ微粒子まで多様な含有状況を示す。

また、雲母²²、海綿骨片、焼土塊の含有が観察できる個体があった。含有に至る背景はそれぞれ異なるであろうが、海綿骨片が含まれる個体は縄文前期と判断できた171点中36点(21.1%)、雲母は同8点(4.7%)、焼土塊は同7点(4.1%)であった。

縄文前期の土器に特徴的と言われる繊維の含有については、器面・断面の風化が進んでいるものが多いため、観察は困難をきわめた。ただし、土器断面に繊維の痕跡をとどめるものが見られたことから、量比は提示できないが、含有する個体は確実に存在するものと見なしておきたい。

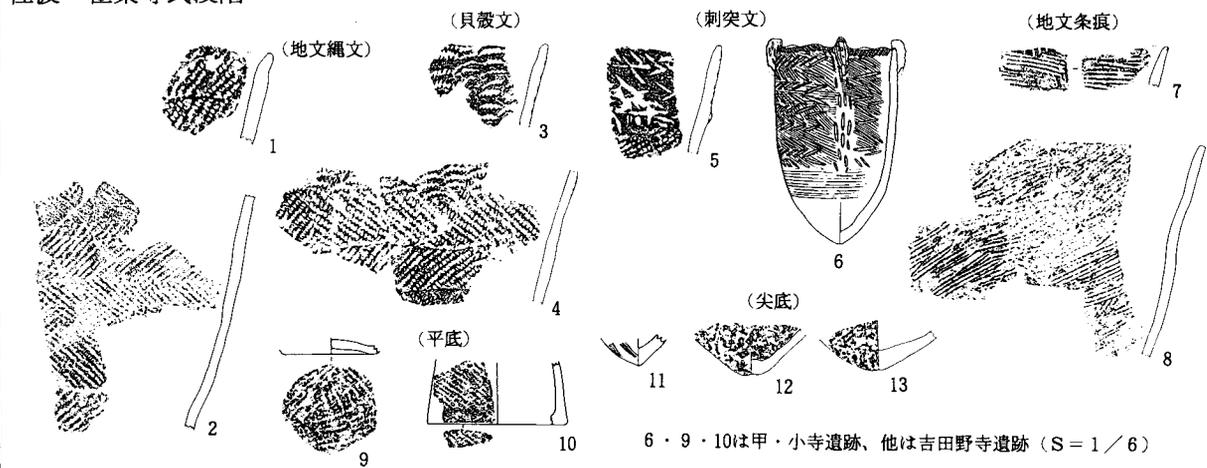
3 編年的位置

通ジゾハナ遺跡資料は、調査区全域で遺構内外から出土しているが、シンプルな組成と文様種から、かなり時期を限定できる資料であろう。また、組成的には、縄文前期に東日本一帯に展開した羽状縄文系土器群に属するものと判断できる。以下、各地の縄文前期資料と比較することによって通ジゾハナ遺跡資料の時間的、空間的な位置付けを試みる。

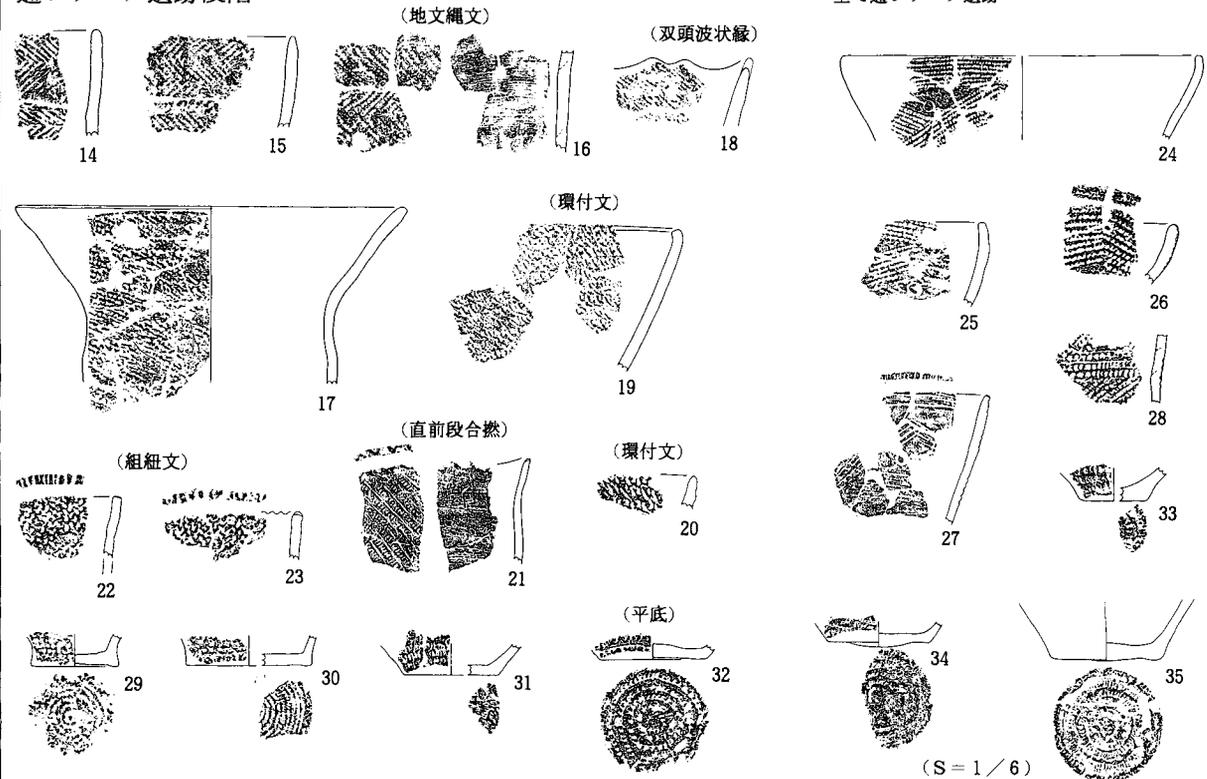
まず、石川県と富山県の資料で、古い段階から比較、検討する。早期末～前期前葉に位置付けられる佐波式・極楽寺式²³の段階の資料は田鶴浜町吉田野寺遺跡、穴水町甲・小寺遺跡の資料を引用する。組成的には条痕文系土器が縄文地文土器と混在しており、吉田野寺遺跡では45.4%を占めている。文様は燃糸圧痕文、貝殻腹縁文が主体である。縄文地文はほぼ単節のみであり、複雑な燃りは認められない。底部は尖底を基本としている。この段階は羽状縄文を中心とする縄文地文土器の北陸での成立期にあたり、通ジゾハナ遺跡資料は組成的に見てより後出するものと考えられる。よって、これより古い段階には類縁は求められない。後続する朝日C式以降は平底形態で、縄文地文土器を基本とする組成が展開するようになり羽状縄文が盛行、文様も刺突文や沈線文に爪形文や浮線文が加わって多様化し、前期後葉に位置付けられる福浦上層式の段階では文様帯が拡大し胴部にまで及んでいる。このうち前期中葉に位置付けられる朝日C式段階の資料は能都町真脇遺跡第2群土器²⁴、富山県大門町小泉遺跡下部包含層出土土器を引用する。平底形態、文様では連続刺突文と沈線文、地文に環付縄文等複雑な燃りが見られ、最も通ジゾハナ遺跡資料に近似する型式である。しかし、主体となる文様はコンパス文、爪形文であり、両文様が以降の段階へ受け継がれて行くことから、通ジゾハナ遺跡資料がより先行するものと考えられる。以上から時間的な上下限が設定され、通ジゾハナ遺跡資料は佐波式・極楽寺式と朝日C式の間の段階として位置付けることができよう。この段階の存在については四柳嘉章氏が既に指摘するところであった²⁵が、石川県・富山県に良好な資料が存在しなかった²⁶ため、土器型式の空白期となっていた。通ジゾハナ遺跡の土器群はその空白期を埋め、前後の型式をつなぐ資料となるものであろう。

ところで、新潟県においては縄文前期前葉の土器資料が近年急速に充実してきている²⁷。新潟県は北陸のうちで最も関東、東北地方に近接しており、縄文時代においても東日本的な様相を強く示す地域である。そうした地理条件から生じる地域差を考えると、石川県と同一の縄文土器型式で扱えない時期もあるが、通ジゾハナ遺跡資料を東日本地域において位置付けるために、あえて対比を行なって

佐波・極楽寺式段階

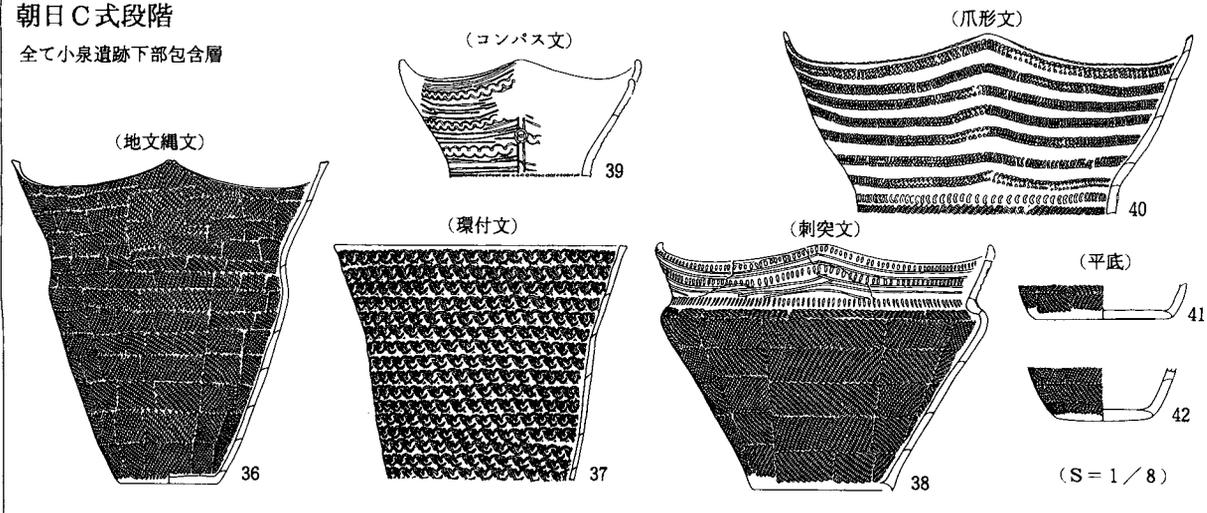


通ジゾハナ遺跡段階



朝日C式段階

全て小泉遺跡下部包含層



第54図 通ジゾハナ遺跡資料の編年的位置付け

おきたい。前期前葉の時期は新潟県巻町布目遺跡、同町新谷遺跡の資料がよくまとまっており、期的には布目遺跡に新谷遺跡が後続する。そして関東地方との対比では布目遺跡が花積下層式～二ツ木式の過渡段階、新谷遺跡が二ツ木式～関山式古段階並行に位置付けられている²⁸。新谷遺跡の資料は基本的に平底形態、地文は縄文が主体で羽状縄文が過半を超え、環付縄文等特殊な縄文原体が定量、組紐文がごく少量ある。文様は三角か菱形の区画性の高い連続刺突文が主で、口縁部と底部外面に施され、底部については同心円状を呈する。先行して引いた沈線内を刺突する施文手法は通ジゾハナ遺跡と同一である。すなわち形態、文様、組成の細かいレベルまで通ジゾハナ遺跡資料にきわめて近い様相であり、ほぼ同時期の土器群と理解して大過ないであろう。

他の地域との並行関係については新谷遺跡の検討に準じて関東地方に求めたい。二ツ木式は過渡的でやや中途半端な内容の型式であるため、ここでは関山式の最古段階と理解して、ほぼ関山式に並行するものと捉えておきたい。関山式土器²⁹は埼玉県蓮田市関山貝塚を標式遺跡とする関東地方の縄文前期前葉段階の土器型式である。平底、縄文地文、口縁部・底部への施文等、通ジゾハナ遺跡、新谷遺跡と強い類縁関係を示しており、位置付けは妥当なところであろう。石川県・富山県においても佐波式・極楽寺式は花積下層式、朝日C式は関山式に後続する黒浜式に比定されており³⁰、両型式間に位置する通ジゾハナ遺跡資料が関山式に並行することに矛盾はないものと考えられる。

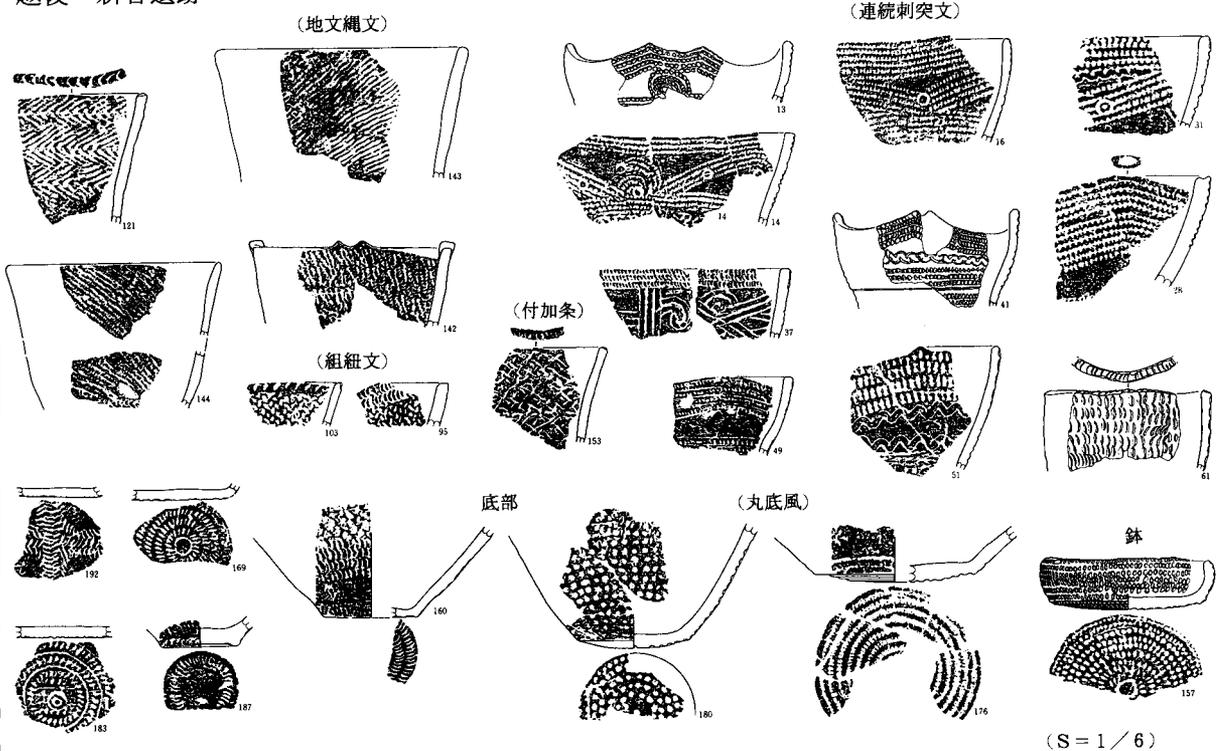
4 様相差の存在

ここまでの検討で、通ジゾハナ遺跡資料は縄文前期前葉、佐波式・極楽寺式と朝日C式の間に入る型式で、新潟県新谷遺跡資料とはほぼ同じ内容であり、関東地方の関山式に並行することが明らかになった。しかし、各資料をさらに詳しく比較すると、看過できない様相差が認められ、全く同一の内容とはなりえないことも同時に指摘できる。縄文土器の膨大なタイムスケールや数百kmに及ぶ遺跡間の距離を考えると、当然に時間差、地域差の存在は考えられるところである。よってここでは確認できた様相差について詳しく述べておきたい。

まず北陸内部で比較する。新谷遺跡においては、口縁部・底部に施される文様に差異を見出すことができる。新谷遺跡のコンパス文、底部のランダムな刺突文や中央に配される竹管文は通ジゾハナ遺跡ではほとんど見られない。また通ジゾハナ遺跡の沈線文による区画は新谷遺跡では見られない。すなわち遺跡間で相互に欠落する文様が見られるのである。また連続刺突文については新谷遺跡が先行する沈線がはっきりと残るものが多く単位も粗いのに対して、通ジゾハナ遺跡はほとんど残らず非常に細かいと言う差異も見られる。こうした文様の差異について、遺跡間の時期差とする解釈、例えば連続刺突文が祖型的なものから完成されたものへ、そして刺突文から沈線文へ簡略化・置換されるという流れで捉えることも可能かもしれない。しかし富山県の小杉町南太閤山I遺跡では沈線文と細かい連続刺突文³¹が確認でき、通ジゾハナ遺跡に近い様相が見られることから、呉羽丘陵あたりを境界とする地域差とも考えられよう。どちらの解釈が適切かは現行の資料で判断することは早急に過ぎ、今後の資料の増加とその検討に結論を委ねるものとした³²。

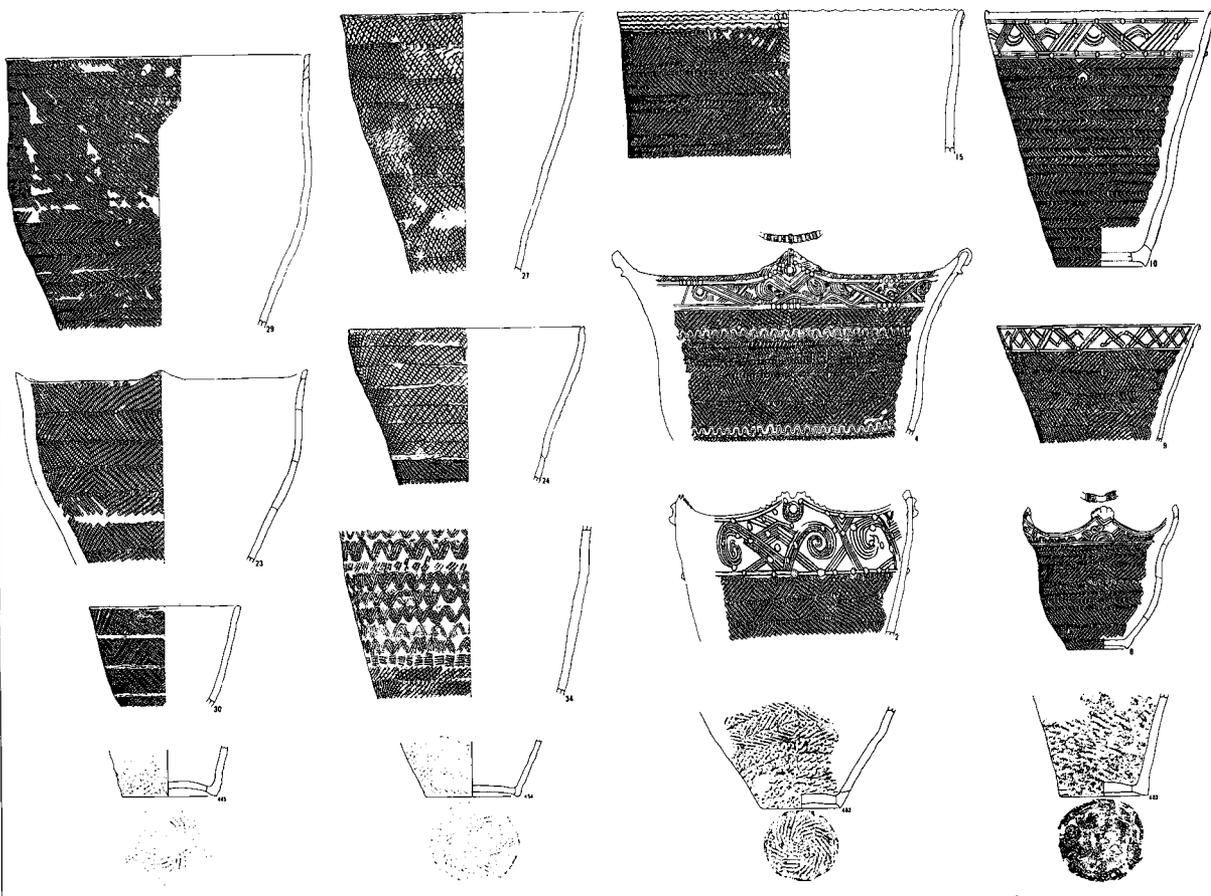
次に北陸以外の地方で比較する。関東の関山式土器については、やはり文様に差異が見られる。関山式の基本地文は縄文であるが、中でも組紐文を多用することに大きな特徴がある。またその文様でも口縁部に突起や貼付文、底部には縄文が多用されるのが一般的である。ともに通ジゾハナ遺跡ではほとんど認められない様相である。同じことは関山式と新谷遺跡についても言えるところであり、北陸と関東の地域差と捉えることが妥当であろう。両地域の様相差を検証するため、関東と北陸の両地域に接する東北と中部高地についても述べる。この段階の東北の土器型式は南部の上川名式の後半段

越後・新谷遺跡



関東・関山式土器

全て関山貝塚1号住出土 (S = 1 / 8)



第55図 越後・関東の資料

階から大木1式までを比定する³³。平底、縄文地文とその多様さ、口縁部・底部への施文等の基本要素は関東、北陸と共通し、このうち、口縁部・底部への刺突文等に北陸との類縁が示される。中部高地の土器型式は神ノ木式土器が相当するとされる³⁴。隣接する東海地方、関東地方の系譜に連なる土器が組成に定量含まれる多様な土器群である。このうち在地系とされる土器は地文縄文、口縁部への施文と言う点では北陸・関東と共通するものの、文様の中心は櫛状具による刺突、沈線、曲線等となり異なる。底部については不明確である。また、胎土に繊維が含まれない点でも異質であろう。

以上から、この段階は羽状縄文系平底土器群という大枠的な範型の下で、特に文様に地域色を持った土器群が東日本各地に展開するように思われる。通ジゾハナ遺跡資料もまた羽状縄文系土器群の一翼を担いつつも北陸の地域性が加わっている土器群と理解することが適切であろう。一方で同心円状の底部施文が、縄文前期を通して尖底土器が卓越する地域である北海道南部の石川野式³⁵で確認されており、個別要素ではより広域に分布するようである。おそらくそれは石器石材でも窺い知ることができるような、日本海を介した物資の交易圏と近似するようなあり方と推定している。

5 意 義

ここでの検討から、通ジゾハナ遺跡出土の縄文前期土器の段階には、佐波式・極楽寺式で見られた縄文早期的な要素、東海・近畿以西の西日本的な様相がほぼ払拭される。同時に、佐波・極楽寺式の段階に生じて以降の段階へ継承される縄文前期的な要素が確立され、東日本的な様相を顕示する段階として、北陸、特に能登から越後西南部の地域において認識できよう。

この段階の土器の変化のうちで、尖底から平底への底部形態の変化については、胴部下端と一体化した底部文様、上底風平底、丸底風平底の存在はまさに過渡期の様相を表している。底部形態の転換にはやはり炉形態や調理方法をはじめとする実生活の変化が大きく関与しているものと思われ³⁶、特に重視し、竪穴建物、集落等の構造とも絡めて議論を深める必要性を感じている。



第56図 石川野式土器（縮尺不同）

第2節 通ジゾハナ遺跡の石器石材に関する一考察 ——輝石安山岩を中心に——

はじめに

通ジゾハナ遺跡から出土した石器石材をめぐる二・三の問題について、若干の考察をくわえるものである。まず出土した石器石材のなかでも、とくに小型の打製石器につかわれている石材について分析をくわえ、つぎにそのなかでも多用されている輝石安山岩をとりあげ、輝石安山岩が遺跡へどのように供給されたか、そのあり方に焦点をしばってのべていくことにする。

1 小型打製石器の石質と石材組成

ここでいう小型打製石器とは、通ジゾハナ遺跡から出土した小型の打製石器である石鏃・石錐・不定形刃器をさすものであり⁽¹⁾、それらが製作された石材の種類と組成についてみていくことにする。この場合、いくつかの前提条件があり、以下にのべるような条件下で調査をすすめていることを明記しておきたい。

まず石器の石質を同定するにあたっては、考古資料であることから非破壊的な方法で石質同定しなければならず、表面の肉眼観察によっている。しかし肉眼観察だけでは判断のつきにくいものもあり、そのため石質名をまちがえてつけている場合も考えうる。

つぎに石器組成を論ずる場合、発掘調査現場で遺構の覆土や遺物包含層を水洗選別するとしないのでは、小型の石器や剥片・碎片の検出率が大きくかわってくるのがあきらかになっている。筆者が調査を担当した石川県能美郡辰口町岩内遺跡ハチマンダ地区では、二つの目的をもって水洗選別作業を実施している⁽²⁾。その一つは小型石器の検出ということであり、総数40点出土した石鏃のうち60%弱をしめる23点が水洗選別により検出された。また宮城県気仙沼市田柄貝塚では、石鏃が1704点出土しており、そのうち発掘調査時のとりあげはわずか291点（17%）にしかすぎず、のこり1413点（83%）は排土の水洗によって検出されている⁽³⁾。一方通ジゾハナ遺跡では水洗選別はおこなわれていないが、小型石器も剥片もほぼ同じ大きさであることから、同じ割合でとりあげられ、同じ割合でみのがされていると推定されるので、出土している資料を数値化し、石材組成に言及してもさしつかえないと考えられる。

調査の結果、小型の打製石器につかわれている石質には14種類が確認された（第11表）。それを列挙すると、安山岩A、安山岩B、安山岩C、黒曜石、凝灰岩A、凝灰岩B、凝灰岩C、鉄石英A、鉄石英B、石英、玉髓、フリント、流紋岩質A、流紋岩質Bである。このうち安山岩はおなじ岩石名でも種類にちがいがみられることから、3類に細分され、A～Cと仮称を付している。同様に凝灰岩ではA～C、鉄石英ではA・B、流紋岩質ではA・Bにわけている。

これらの石材の表面の特徴を記述すると、安山岩Aは、われ口がまっ黒で、風化した自然面には階段状の平行線がみられる。安山岩Bは灰色で、ガラス質である。安山岩Cはにぶい灰色で、あまり良質ではなく、自然面は礫皮となっている。凝灰岩Aは表面が白色で、われ口が珪化質で、微細なガラスがみられる。凝灰岩Bは灰褐色～黄褐色で、やや光沢がある。凝灰岩Cはにぶい灰色を呈し、ガラス質で光沢がある。鉄石英Aは表面に光沢があり、黄褐色～褐色を呈する。鉄石英Bも表面に光沢があり、赤色～あずき色を呈する。黒曜石の剥片は透明感が強く、黒曜石製の石鏃はまっ黒である。フリントは光沢がひじょうに強く、色調は乳白色・褐色・赤褐色・黒褐色・黄緑褐色を呈する。流紋岩質Aはやや光沢があり、白色～暗青灰色・灰色を呈する。

第11表 小型打製石器の石材組成表

種類	製品		剥片		原石・石核		合計			
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	%	重量(g)	%
安山岩 A	22	81.54	525	2963.65	6	771.46	553	67.94	3816.65	43.99
安山岩 B	2	0.84	30	264.79	4	153.97	36	4.42	419.60	4.84
安山岩 C			7	31.57			7	0.86	31.57	0.36
黒曜石	1	1.10	1	1.18			2	0.25	2.28	0.03
凝灰岩 A	3	4.51	14	91.28	2	262.00	19	2.30	357.79	4.12
凝灰岩 B			10	86.15			10	1.23	86.15	0.99
凝灰岩 C	2	29.78	2	10.24	1	13.89	5	0.61	53.91	0.62
鉄石英 A	1	11.62	13	180.95	4	2268.90	18	2.21	2461.47	28.37
鉄石英 B	1	0.59	17	91.44	4	264.96	22	2.70	356.99	4.11
石英			4	23.10	3	139.12	7	0.86	162.22	1.87
玉髓			2	3.87	3	77.78	5	0.61	81.65	0.94
フリント	2	16.24	105	566.07	2	145.89	109	13.39	728.20	8.39
流紋岩質 A	1	2.05	18	106.58	1	3.77	20	2.46	112.40	1.30
流紋岩質 B	1	5.97					1	0.12	5.97	0.07
合計	点数・重量	36 154.24	748 4420.87	30 4101.74	814 99.96	8676.85	100.00			
	%	4.42 1.78	91.89 50.95	3.69 47.27	100.00			100.00		100.00

筆者が実見した小型の打製石器は36点で、その内訳は石鏃26点、石錐4点、不定形刃器6点である。これらの石器器種と石材の関係について言及するものである。

最初に器種ごとに石材と点数をみていくと、石鏃では安山岩A18点、安山岩B2点、凝灰岩A3点、鉄石英B1点、黒曜石は石鏃1点、流紋岩質A1点である。石錐では安山岩A2点、鉄石英A1点、フリント1点である。不定形刃器では安山岩A2点、凝灰岩C2点、フリント1点、流紋岩質B1点である。

つぎに石材ごとに器種と点数をみていくと、安山岩Aでは石鏃18点、石錐2点、不定形刃器2点である。安山岩Bでは石鏃2点である。凝灰岩Aでは石鏃3点である。凝灰岩Cでは不定形刃器2点である。鉄石英Aでは石錐1点である。鉄石英Bでは石鏃1点である。黒曜石では石鏃1点である。フリントでは石錐1点、不定形刃器1点である。流紋岩質Aでは石鏃1点である。流紋岩質Bでは不定形刃器1点である。

さらに製品・剥片・原石・石核のくみあわせについては、黒曜石では製品と剥片が1点ずつ出土し、流紋岩Bでは製品が1点、安山岩Cでは剥片のみが出土しており、さらに石英と玉髓は剥片と原石・石核が出土している。のこりの8種類の石材では製品・剥片・原石・石核がすべて出土している。

石材のうち安山岩Aがもっとも多く、点数では553点(67.94%)、重量では3816.65g(43.99%)をしめる。これにつぐのがフリントで、109点(13.39%)、728.20g(8.39%)となっている。鉄石英Aの点数は18点で、全体の2.21%でしかないにもかかわらず、重量では2461.47g(28.37%)をしめている。その理由は、原石・石核4点のうちの3点が1510g・368g・330gと、1点1点が重いからである。このように原石・石核は点数的には少数であっても、重量的にはかなり大きな割合をしめている。

2 石材の偏光顕微鏡写真による観察

本稿で安山岩Aとした石材は、現状では研究者や発掘調査報告書によってさまざまな石質名がつけられている。こうした背景には、考古資料であることから非破壊的な方法で石質同定しなければならず、そのため表面の肉眼観察によって石質を判断せざるをえないという事情があるためと考えられる。そしてこの石材を、藤則雄氏は「輝石安山岩」⁽⁴⁾とよび、藁科哲男・東村武信の両氏は「S-A群」⁽⁵⁾と仮称し、本報告書をはじめとして「珪質頁岩」と報告されている場合もある⁽⁶⁾。

基本的には表面観察という立場をとりながらも、それだけでは現状から一步も前へすすめないため、本遺跡から出土した原石・石核の試料3点（巻頭図版8写真1～3）から岩石薄片をつくり、それを偏光顕微鏡で観察した⁽⁷⁾。なお使用した3点の試料のうち、試料1は凝灰岩A、試料2はフリント、試料3は安山岩Aと本稿で仮称しているものである。以下に、偏光顕微鏡写真の観察結果を報告するものである。

これらは第三紀（今から6500～200万年前）に形成された火山岩で、試料1・2は酸性の火山岩、試料3は中性の火山岩であることがあきらかになった。このうちの試料2はマグマが急冷し、ガラスがかたまっただけのものである。写真4A・4Bは試料1（凝灰岩A）の偏光顕微鏡写真で、ガラス破片と結晶がみられる。写真5A・5Bは試料2（フリント）で、石英とカルセドニがみられる。写真6・7は試料3（安山岩A）で、写真6には輝石と班晶が、写真7には斜長石と班晶が確認される。写真8・9は宇ノ気町気屋遺跡の輝石安山岩製剥片の偏光顕微鏡写真で、参考資料としてのせたものである⁽⁸⁾。写真8には輝石と斜長石、写真9には斜長石がみとめられる。また試料3の写真7・9では層状の平行線がみられ、その薄片をみると、肉眼でも何本もの平行線が層状になっている状態が確認された。層状の平行線はマグマの流れをあらわしており、マグマにそって結晶が晶出していったためにできたものである。風化面に層状の平行線がみられるのも、もろいところがくぼんで、凹凸ができた結果である。

ここで問題にしている安山岩Aの石質については、従来からの研究成果や偏光顕微鏡写真の観察結果から、「輝石安山岩」の用語を使用するのが現在のところもっとも適切であると判断される。しかし石質を断定するためには、蛍光X線分析法などで成分分析をする必要があり、さらに石材を産出する産地の状態を明確にする必要もあることをつけくわえておきたい。

3 輝石安山岩の原石産地

能登地方の縄文時代から古墳時代の集落遺跡を発掘していると、石鏃などの小型の打製石器にまっ黒でわれ口の鋭い石材がつかわれ、この石材の原石や剥片が多数出土することが、経験的に知られている。この傾向は口能登から中能登の地域にかけてよくみられ、羽咋郡北部の富来町や志賀町あたりがとくに顕著であることも、発掘調査での経験から知られている。この石材がサヌカイトににているものの、サヌカイトとは少しちがうことが直感的に知られ、まして下呂石でないことも感覚的にわかっていることである。しかしながらこれはあくまで直感的・感覚的なものであって、明確な根拠をしめすにいたっておらず、サヌカイトににているから安山岩であるとしているのが、考古学的な立場での現在の見解である。

一方、石器に使用される石質とその石材の原石産地の関係については、これまでに地質学・岩石学の立場から藤則雄氏により精力的におこなわれた研究成果の蓄積がある。しかしながら原石産地が広範囲におよび、それが特定されていないという研究状況は、サヌカイトや下呂石のような他の安山岩や黒曜石の原石産地やそれらの交易の実態とは齟齬をきたしており、なにかはっきりしない部分があ

ることも確かである。このような問題点は、原石の産地が特定されていないことや、原産地からの石材の供給のあり方が究明されていないことに原因があると考えられる。

そこでまず最初に、石材の原産地の特定という問題について言及するものである。さきにものべたように、羽咋郡志賀町から富来町あたりに原産地があるであろうという見当は、集落遺跡における輝石安山岩の出現頻度をもとにした経験的な直感から、考古学の研究者のあいだでは共通した理解となっている。しかしあくまでこれは経験にもとづく直感であり、第三者に明示できるようなかたちできちっと原産地があきらかにされているわけではない。

また一方、富来町の地質については藤則雄氏による研究があり、それによると富来町には福浦安山岩類と黒崎火山岩類が分布するという⁹⁾。そのうち福浦安山岩類の「安山岩類は、概して輝石安山岩よりなり、岩色は黒色を呈している。分布域としては、前浜の玄徳崎、関野山、木尾嶽城跡の南側の谷、七海～日用への谷筋などでは良く露出している。中でも、前浜から玄徳崎への波蝕洞穴のある付近では、数枚の安山岩質溶岩の流れが識別できる。」とされている。その後、新第三紀中新世初頭～前期の福浦安山岩類は、「その岩相から輝石安山岩類・安山岩質集塊岩・安山岩質火砕岩類」の3類に区分され、この火砕岩類に挟在された溶岩に「類似の穴水累層に属する輝石安山岩類は(中略)石鏃に多く使用されている。」と報告されている¹⁰⁾。また黒崎火山岩類は「大佛寺・深谷・黒崎・前浜にかこまれた地区に分布し、岩質的には、玄武岩質安山岩～安山岩の溶岩、集塊岩、安山岩質火砕岩類よりなる。」とされている。このうちの黒崎火山岩類については、大佛寺地内の安山岩の石切場¹¹⁾、玄徳崎¹²⁾、深谷の採石場¹³⁾、笹波地内の鴨池¹⁴⁾の現地踏査から、遺跡から出土する輝石安山岩とは異なることを再確認したにとどまり、現在の段階では筆者自身は原産地をまだ特定するにはいたっていない。

4 輝石安山岩の石材供給

本稿の目的は、本遺跡から出土した輝石安山岩の製品・剝片・石核・原石の分析をとおして、輝石安山岩という石材が原産地から遺跡へどのようにして供給されたか、そのあり方の一つを考究することである。このような課題を究明するためには、輝石安山岩の原産地を特定することが必要となる。しかしながら上記にのべたように核心部分となる原産地をいまだに明確にできていないので、これ以上供給のあり方については言及することはできない。ただ本遺跡における輝石安山岩の原石・石核・剝片・製品の出土状況を考慮すると、通ジゾハナ遺跡では大量の原石が遺跡内に供給され、そして遺跡内で石器が製作されたものと推測される。

おわりに

縄文時代の経済基盤のなかで交易がしめた割合やはたした役割を究明していくうえで、一つのアプローチの方法として石器や石製品につかわれている石材を利用する方法がある。本稿では輝石安山岩を中心にとりあげたが、まだ問題点も多く、今後にのこされた課題をいくつか指摘しておきたい。

第一に、小型の打製石器につかわれている石材は輝石安山岩のみではなく、他の石材もつかわれており、それらについても研究をすすめる必要があるということである。考古学で石器石材の交易といった場合、黒曜石やガラス質の安山岩については研究はすすんでいるが、現状では他の石材についてはあまりすすめられていないといっても過言ではなからう。このような状況を打開するには、他の石材についても同様な研究をすすめる必要もあろう。

第二には、小型の打製石器につかわれている石材の原産地の特定ということである。この点は上記に指摘した問題とも関連するが、輝石安山岩はもちろんのこととして、フリントや凝灰岩などにつ

いてもいえることである。とくに本稿でとりあげた輝石安山岩についていえば、小型の打製石器に使用される穴水累層に属する輝石安山岩類が広い範囲に分布するのならば、その分布範囲を確定しなければならぬし、狭い範囲にしか分布しないのならば、それはそれで分布範囲を確定しなければならない。そのためには露頭をさがしだし、それが遺跡から出土する石器石材と一致するかどうか確認をとる作業が必要となる。とにもかくにも原石の産地を明確にすることがどうしても必要とされる。

第三には、能登半島地域での石器石材の交易の解明ということである。能登地方の他の遺跡でも本遺跡でおこなった調査とおなじことがこころみられ⁽¹⁵⁾、比較研究をすすめていけば、能登半島という地域のなかでの石器石材の供給のあり方や交易の実態が解明されるものと考えられる。

注

- (1) 石錐は頭部のつまみ部分が定形化せず、錐部のみがつくりだされているものが多いという傾向にある。不定形刃器には二次加工のある剝片或使用痕のある剝片もふくめている。
- (2) 山本直人、1986、「考察」『石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書』、78～80頁、石川県立埋蔵文化財センター・金沢。
- (3) 阿部 恵、1986、「室内整理」『田柄貝塚Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第111集、14～19頁、宮城県教育委員会・仙台。
- (4) 藤 則雄、1981、「能登半島穴水町曾福遺跡出土石器の石材と“石器圏”に関する研究」『石川考古学研究会々誌』第24号、29～42頁、金沢。
藤 則雄・平元悦子、1982、「金沢近郊縄文後～晩期御経塚遺跡の石器圏」『石川考古学研究会々誌』第25号、39～56頁、金沢。
- (5) 藁科哲男・東村武信、1986、「石川県下遺跡出土のサヌカイト、および黒曜石遺物の石材産地分析」『石川県能美郡辰口町岩内遺跡発掘調査報告書』、81～94頁、石川県立埋蔵文化財センター・金沢。
藁科哲男・東村武信・山本直人、1987、「真脇遺跡出土のサヌカイト、黒曜石製遺物の石材産地分析結果」『石川考古学研究会々誌』第30号、55～62頁、金沢。
- (6) 西野秀和、1995、「小牧大杉谷内遺跡」『中島町史』資料編上巻、113～195頁、石川県中島町。
上記文献では、「珪質頁岩・頁岩（珪質化）」と表記されている。この遺跡の珪質頁岩・頁岩（珪質化）製とされる製品・剝片・原石・石核を筆者自身はまだ実見していないが、小型打製石器の石質・石材に関する記載内容や、注(5)藁科・東村1986文献で小牧大杉谷内遺跡の剝片を分析していることから、同一の石材であると考えられる。
- (7) 岩石薄片の作製および写真撮影・観察にあたっては、名古屋大学大学院理学研究科の大場穂高君と長谷川智則君の協力をえた。観察結果も両君のご教示をもとに、筆者がまとめたものである。当然のことながら、文責は筆者にある。
- (8) 注(5)藁科・東村1986文献93頁の試料番号13082（気屋・1）を使用している。
- (9) 藤 則雄、1974、「富来町の地質」『富来町史』資料編、3～18頁、石川県富来町。
- (10) 藤 則雄、1987、「自然環境」『富来町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告Ⅰ』、19～22頁、能登ダイヤモンド・ゴルフ場（予定地）内埋蔵文化財調査委員会・石川県富来町。
- (11) 富来町社会教育課に勤務する藤井専さんより、同町大福寺地内で石器の石材となる黒い石を産出し、地元では「大福寺の石」とよばれているというご教示をうけた。それと大福寺地内には石切り場があり、その黒い石をきりだしたところかどうかは、わからないというご教示もうけた。1995年11月18日(土)に現地調査を実施した。
- (12) 1995年11月19日(日)に現地調査をおこなっている。
- (13) 1995年11月19日(日)に現地調査をおこなっている。
- (14) 石川県立埋蔵文化財センターの三浦純夫氏らが、1986年12月17日に富来町に分布調査にでかけたさい、鴨池の奥で礫石錘・磨石とともに安山岩の原石4点を表面採集してきている。1995年11月25日(土)に現地調査をおこなっている。
- (15) 以下のような文献で、平口哲夫氏らによってすでにおこなわれている。
平口哲夫・山田晃弘ほか、1984、『富来町福浦港ムカイヘラソ遺跡・アワガタニ遺跡発掘調査報告』、能登ダイヤモンド・ゴルフ場（予定地）内埋蔵文化財調査委員会・石川県富来町。
平口哲夫ほか、1987、『富来町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告Ⅰ』、能登ダイヤモンド・ゴルフ場（予定地）内埋蔵文化財調査委員会・石川県富来町。
平口哲夫ほか、1988、『富来町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告Ⅱ』、能登ダイヤモンド・ゴルフ場（予定地）内埋蔵文化財調査委員会・石川県富来町。
平口哲夫ほか、1991、『富来町福浦港ヘラソ遺跡発掘調査報告Ⅲ』、能登ダイヤモンド・ゴルフ場（予定地）内埋蔵文化財調査委員会・石川県富来町。

第3節 石器の組成—器種組成と礫石器の石材について—

1 はじめに

通ジゾハナ遺跡から出土した石器の点数は、定型的な器種だけでも400点を超え、刃器等不定形な石器や剝片・石核、原石まで含めると総数1200点を超える量が存在する。時期的には縄文前期を中心としており、北陸ではかなりまとまった良好な資料と思われる。これら石器の諸様相のうち、石器の石材については本章第2節で詳しく検討が加えられている。ここでは石器の器種組成について検討し、また礫石器の石材と産地にふれることによって、通ジゾハナ遺跡において石器を使用して行なわれたであろう生活の実態について考えてみたい。

石器組成の検討は定型的な石器のみを対象とし、分類は第3章に準拠する。刃器も含めた剝片や石核については本章第2節で詳しく述べられており、圧倒的に点数が多いことが明白であるため省略する。また、検討の中で提示する各器種の点数と量比については、出土品の全てを対象にして計量し、算出した。但し、第13表で示した石錘については、完存品の数値のみを採用している。

2 石器の用途

石器の器種組成を検討するにあたり、その用途についてはある程度規定しておきたい。ここでは大きくは自然資源からの食糧の獲得と、自然資源の加工とに大別する。食糧獲得の手段、すなわち生業には狩猟、漁撈、植物採集の三種が考えられる。よって石器の用途を大まかではあるが、狩猟具、漁撈具、植物採集具、加工具に分類し、各器種への適用を試みる。

狩猟具には石鏃、漁撈具には石錘を特定することについてはほぼ問題なかろう。植物採集具については、打製石斧を欠如する本遺跡においては確実なものを抽出しにくい。加工具については前述した以外の石器をあてることことができるが、きわめて多様な機能が包括されることになる。磨製石斧、石錐、砥石、軽石については非食糧加工具と特定できる。すり石類のうち、すり石、凹み石については植物食糧の加工、叩き石については石器の製作と一般に理解されている。石皿については叩打痕が見られず平滑な器面の状況から、すり石とセットで使用されるものと大まかに考えることにしたい。石匙、不定形刃器については機能と加工の対象を十分に特定しきれないであろう。

3 器種組成

(1) 通ジゾハナ遺跡の様相

通ジゾハナ遺跡出土の石器の時期は出土土器の量比から、縄文後期以降の品も含まれるがごく少ないものと思われ、大半は縄文前期に属しよう。石鏃、石斧、石皿など一部に形態で区別可能な器種もあるが、ここでは縄文前期の石器組成への影響は小さいものとして、一括して扱うものとする。

石器の器種別の総数は449点であり、その内訳は磨製石斧64点（14.3%）、すり石類220点（49%）、砥石3点（0.7%）、軽石10点（2.2%）、石錘88点（19.6%）、石鏃46点（10.2%）、石匙4点（0.9%）、石錐5点（1.1%）、石皿9点（2.0%）である。すり石類が全体のほぼ半数を占め、圧倒的に多い器種となっており、これに次ぐ石錘、磨製石斧、石鏃とは大きな量差が見られる。その他の器種についてはさらに少量となる。

石器の出土状況は調査区全域の遺構の内外で認められるが、出土地点別では包含層その他からの出土が241点（53.7%）で最も多く、次いで堅穴建物の78点（17.4%）、集石の66点（14.7%）、谷の58点（12.9%）と続き、土坑は6点（1.3%）と最も少ない。堅穴建物出土の78点の器種を見ると、すり石

類が40点(51.3%)、石斧が9点(11.5%)、石錘は17点(21.8%)と、石器全体で見た量比とほぼ同程度であるが、石鏃は3点(3.8%)と低頻度で、砥石、軽石、石皿については全体量が少ないながら高頻度となっている。

(2) 生業の検討

各器種のうちで最も多かったすり石類についてはすり石、凹み石、叩き石の三種の使用痕が複合した個体が多いことから、用途を厳密には区別できない。使用痕及び専用器の量比ではすり石が最多で叩き石がきわめて少ないことから、大半が植物食糧の加工具として使用されたことを窺わせる。なお、材料を獲得するための植物採集具は確実なものが認められないが、翻って、不定形な石器や兼用器が使われているであろう実態を示唆するものとも言える。次いで多かった石錘は漁撈具、石斧は全て磨製石斧であり非食糧の加工具、石鏃は狩猟具である。よって、器種の用途別では多い順に植物食糧加工具、漁撈具、非食糧加工具、狩猟具となる。

さて、前に想定した狩猟、漁撈、植物採集等の複数手段の生業が、通ジゾハナ遺跡においてどのように営まれていたかについては、各種の生業に使用された器種の点数の比較では論じることができない。なぜなら、利器を用いた食糧獲得の実態、例えば、同等の栄養量を確保するために必要な石器の単体量や、耐久性、骨角など異素材の利器との関係などが生業種ごとに明らかにならない限り、同一遺跡内での点数の比較は意味をなさないからである。但し、別遺跡との組成の比較は、石器の意図的な遺棄・廃棄がほぼ見られない前提に立つならば、重視された生業をある程度想定するには有効であろう。また、時期、地域によっての変化も生じうるので、ここでは対象を北陸の縄文前期遺跡に限定した石器組成の比較を行ない、相対的ながら、生業の評価を試みることにしたい。

まず、特徴的な器種組成をとる遺跡を2例、モデル的に提示する。穴水町の甲・小寺遺跡は穴水湾岸の低位丘陵に立地し、石錘が石器全体の約80%を占めるほど多量で、その他の石器、特にすり石類がきわめて少ない。富山県立山町の吉峰遺跡³⁷は立山山麓の高位河岸段丘に立地し、石錘が極端に少なく、すり石類が50%を超えるほどに多い。両遺跡はかなり極端であるが、立地を背景とする特定の生業への依存が強く反映された好例であろう。通ジゾハナ遺跡の石器組成を両遺跡と比較するならば、甲・小寺遺跡よりも漁撈への依存度は低い、吉峰遺跡と同程度に植物採集への依存度は高いと捉えることができる。但し立地という点では通ジゾハナ遺跡はむしろ甲・小寺遺跡にきわめて近似した状況であり、石鏃の量比は比較的近似したものとなっている。この他、石鏃・石槍が60%超、すり石類が30%近くで石器の大半を占め、イルカ漁を含む多様な生業が想定される能都町真脇遺跡の例³⁸、またほとんど石器を出土していない田鶴浜町の吉田野寺遺跡の例などが周辺にある。よって、大別した三種の生業はそれぞれ多様であり、また立地のみに規定されないことは明確であろう。おそらくは遺跡の立地に加えて、性格³⁹、また遺跡内の調査地点の性格、陸海の交通面での位置、獲得される資源の種類等が関係して生業に差が生じるものと思われる。

4 礫石器の石材

通ジゾハナ遺跡では礫石器としてすり石類と石錘が相当する。その石材については第3章で述べたとおり両器種とも安山岩、凝灰岩、花崗岩、石英斑岩から構成されている。前述したようにすり石類は最も量が多かった器種、石錘はそれに次ぐ器種であり、両器種で石器全体の70%近くに達することから、本遺跡の石器の主体を占める器種、石材といえよう。石材のうち、安山岩・凝灰岩は軟質で風化や摩滅したものが多く共通し、花崗岩・石英斑岩は硬質で風化したものが少ないことで共通することから、石質という側面から前者の群を安山岩群、後者の群を花崗岩群として扱うことが可能

である。ここでは両群の組成から石器の石材獲得、使用実態について考えてみたい。

安山岩群、特に安山岩質岩石は能登の山地や丘陵地に広く分布しており、七尾湾岸でもよく見られる⁴⁰。能登島にも露頭地があり、通ジゾハナ遺跡の地山石ともほぼ同質であることから、その産地は遺跡の近隣と思われる。花崗岩群、特に花崗岩質岩石については石動山など呂知地溝帯の東岸の山地に県下有数の露頭地があり、また眉丈山など西岸の山地にも点的に岩石帯が分布するようである⁴¹。すなわち呂知地溝帯の両岸の山地に産地が求められよう。

通ジゾハナ遺跡の礫石器の石材群の内訳はすり石220点中に安山岩群166点（75.5%）、花崗岩群54点（24.5%）、石錘88点中に安山岩群79点（89.5%）、花崗岩群9点（10.5%）となる。安山岩群が圧倒的に主体で花崗岩群が非主体となるが、その比率はすり石類で3対1、石錘で9対1という器種間の差が見られる。安山岩群の採取は遺跡近隣で容易であったと思われる、石材の主体となり得たのであろう。花崗岩群の採取は遺跡の近隣では考えにくく、半島の呂知地溝帯地域から七尾南湾地域を経て搬入されていた可能性が高い。よって通ジゾハナ遺跡の礫石器は遺跡近隣の岩石を素材としているが、それに加えて島外の内陸部から一定量を搬入しているものと理解できよう。現時点では搬入の背景や実態を明らかにすることは難しいが、硬質で、高密度、器面が整美な性質をもつ花崗岩は、近隣産の石材よりも礫石器の素材に適し、特にすり石類に好適なことから、すり石類あるいはすり石類素材⁴²が積極的に通ジゾハナ遺跡に搬入されたものと類推しておきたい。

5 意 義

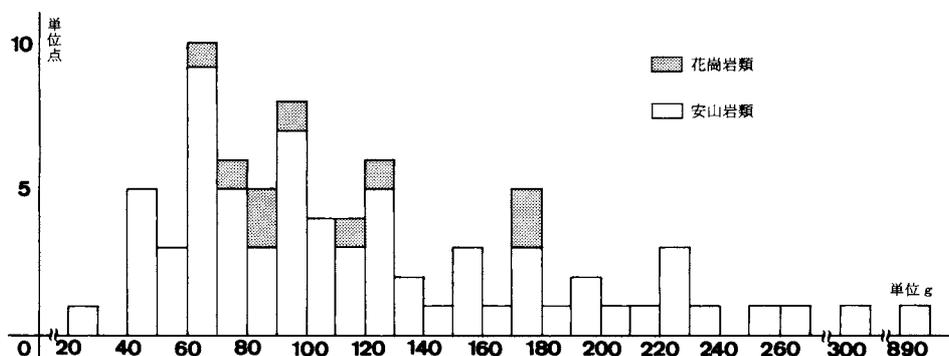
ここでは、通ジゾハナ遺跡の石器組成を検討することによって、遺跡における生業を相対的に評価し、また、礫石器の半島内陸部からの搬入を指摘した。しかし、北陸の縄文前期においては比較すべき資料がまだまだ少なく、その意義付けについては今後に期する部分が多い。将来的に増加するであろう資料と比較、検討されることによって、逆に通ジゾハナ遺跡の石器組成もより適切に評価されるものと思われる。そのための基礎的な資料化を今回行なったものと理解いただければ幸いである。

第12表 通ジゾハナ遺跡出土石器の器種組成表

地点	石 斧	すり石類	砥 石	軽 石	石 錘	石 鎌	石 匙	石 錐	石 皿	器種別総計
竪穴建物	9	40	1	4	17	3	2	0	2	78(11.4)
土 坑	0	4	0	0	1	1	0	0	0	6(1.3)
集 石	2	35	2	3	15	2	1	0	6	66(14.7)
谷	7	36	0	3	10	1	0	1	0	58(12.9)
包含層その他	46	105	0	0	45	39	1	4	1	241(53.7)
地点別総計	64	220	3	10	88	46	4	5	9	449
	(14.3)	(49.0)	(0.7)	(2.2)	(19.6)	(10.2)	(0.9)	(1.1)	(2.0)	(100.0)

単位は点、()内の数値は%を示す

第13表 石錘の重量分布



第4節 竪穴建物の構造

1 はじめに

通ジゾハナ遺跡の発掘調査で検出された遺構の中心的な存在は16軒の竪穴建物であった。竪穴建物のほとんどは縄文前期の時期に属しており、建物遺構の検出例がきわめて少ないこの時期の北陸地方においては希少で、同時に最古の部類に含まれる資料である。通ジゾハナ遺跡の竪穴建物は、遺跡の性格や生活様式を窺い知ることができる遺構であるばかりでなく、時期的にも、地域的にもきわめて重要な存在であろう。ここでは今回検出されたものを中心に竪穴建物の構造についての検討を行なう。具体的にはまず、竪穴建物を構成するいくつかの要素をまとめ、次に既往の研究成果との照合、同時期の北陸の資料との比較を試みて、構造的、地域的、時期的な特質を考えるものとした。

検討に際しては対象とする時期を縄文前期に限定する。よって8号竪穴建物については縄文後期以降の時期であるため、対象に含めない。また、1号竪穴建物については他の竪穴建物とよく似た構造が予想されるため、検討の対象とするが、前期前葉かそれ以降の時期と思われる縄文土器が出土しており、後出する可能性があることは予め明示しておく。

2 通ジゾハナ遺跡の様相

(1) 平面形・規模（第14表）

竪穴建物の平面形は隅丸四角形と楕円形に大別できる。隅丸四角形の平面形は1号、2号、5号、11号、14号竪穴建物で明確である。また、9号、10号、13号竪穴建物についても隅丸四角形の竪穴建物が重複しているのであろう。楕円形の平面形は全形のわかるものがほとんどないが、3号、6号などが相当しよう。但し、隅丸四角形と楕円形の平面形は、どちらも辺・径の長短比が小さく球形度が低いいため、方形に近い形状を呈している。両者の差異は四隅が確認できるかどうかといった程度であり、基本的にはよく似た形状と思われる。

規模では辺・径が3mを前後する群と、4～5mの群にまとまりが見られる。小さい群には1号、2号、12号、14号が相当する。また、9号、13号についてもこの規模が重複していると思われる。大きい群には6号、10号、11号が相当し、他に3号と4号についても可能性がある。

以上の平面形と規模を組み合わせると、隅丸四角形で小さい群に1号、2号、5号、9号、13号、14号、隅丸四角形で大きい群に10号、11号、楕円形で大きい群に3号、4号、6号をあてることができる。楕円形で小さい群の竪穴建物は不明確である。

(2) 柱・壁・床

竪穴建物内のピットで、径、深さから支柱穴と判断できたものは6号、12号竪穴建物にのみ存在

第14表 通ジゾハナ遺跡竪穴建物一覧表

番号	調査状況	掘方平面形	規模(m)	時期
1号	全掘	隅丸四角形	3.1×2.75	縄文前期以降
2号	全掘	隅丸四角形	2.8×復元2.8	縄文前期
3号	部分掘・重複	楕円形	5.3×?	縄文前期
4号	全掘・遺存悪	不明	現存4×?	縄文前期
5号	全掘・重複	隅丸四角形	現存3×?	縄文前期
6号	全掘・重複	楕円形	現存4×現存4	縄文前期
7号	部分掘・重複	不明	現存3.5×?	縄文前期
8号	部分掘・重複	隅丸四角形	復元5×復元5	縄文後期以降
9号	全掘・重複	隅丸四角形	4.3×2.7	縄文前期
10号	全掘	隅丸四角形	5.35×4.55	縄文前期
11号	全掘	隅丸四角形	4.3×4	縄文前期
12号	全掘・重複	隅丸四角形	3.5×3	縄文前期
13号	全掘・重複	隅丸四角形	3.5×2.7	縄文前期
14号	全掘	隅丸四角形	3.4×3.2	縄文前期
15号	部分掘・重複	不明	不明	縄文前期
16号	部分掘・重複	不明	不明	縄文前期

し、その他の堅穴建物では径がごく小さいか浅いピットしか見つけられなかった。6号、12号の主柱穴についても堅穴中央部の付近に1本見られるのみであり、他に存在するピットは他の堅穴建物と変わらない状況であった。これら堅穴建物内のピットのうち、小径ながら一定の深さを持つピットは壁際の付近でよく見られ、上位が内傾する方向で確認できたものが実に多かった。2号、3号、4号、6号、10号堅穴建物などはそうしたピットが壁に沿って巡っていることが明確にわかる例である。他の堅穴建物のピットについても疎密の差はあるが概ね似た傾向にあり、不明確な主柱に代わる柱の存在を示すものと思われる。

堅穴の壁は2号、3号、6号、9～11号、13号、14号堅穴建物では比較的深く掘り込まれており、最大で深さ50cmに達するものもある。その他の堅穴建物は浅いが、それ以外の特徴では変わるところがないので、後世の遺存状況による差と理解すべきであろう。本来は深い方の堅穴建物の程度には掘り込みを持っていたものと考えたい。

堅穴建物の床は比較的フラットで、貼床は認められない。また、1号、3号、5号、6号堅穴建物では壁に寄って細く浅い溝が掘り込まれている。全周せず、部分的に見られるもので、弥生時代以降の堅穴建物のように壁材が置かれたものとは思われない。おそらくは柱を受ける横木を安置するため、もしくは湿気を除くために掘削されたものと思われる。

(3) 付属施設その他

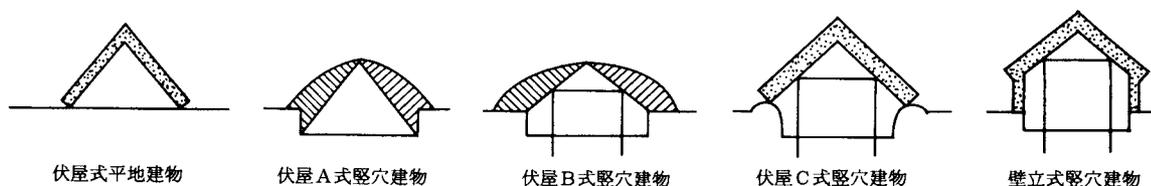
堅穴建物内の炉、貯蔵穴などの付属施設は、确实と言えるものは床面上に認められなかった。ただし、炉は3号堅穴建物や10号堅穴建物の埋没後の焼土、11号土坑の例から、屋外には存在した可能性がある⁴³。貯蔵穴は13号堅穴建物内のピットが唯一該当する可能性がある程度である。

屋根、天井、棚、周堤等の堅穴建物の地上部分については直接には一切確認できなかった。最近類例が増えている周堤についても、遺構面が後世の削平を受けているので、その有無は不明である。

3 堅穴建物の構造復元

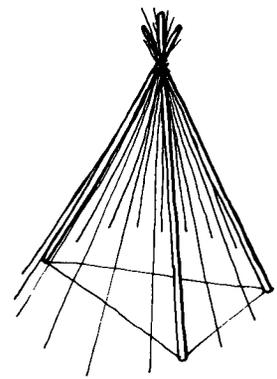
前項で述べた様相から考えると、通ジゾハナ遺跡の堅穴建物は壁際に非常に細い柱が数本打ち込まれ、その上端を堅穴建物の中央付近に集めて組み上げる、棟木をもたない円錐形あるいは四角錐形の屋根を葺いた簡易な構造が想定される。主柱を1本持つ堅穴建物についても、堅穴建物中央に直立する主柱に細い柱が集まることになるので、外見上は無主柱の堅穴建物とほとんど変わらないことになりそう。この構造は通ジゾハナ遺跡の大半の堅穴建物できわめて共通性が高いものと思われる。

堅穴建物の構造については宮本長二郎氏が全時代、地域を通じた集成と分類、復元を行なっている⁴⁴。宮本氏の論考に対しては批判がないわけではないが⁴⁵、現時点では堅穴建物の構造を最も明快に説明しているので、通ジゾハナ遺跡の堅穴建物の構造を考える上でも主要な論拠としたい。宮本氏は屋根の垂木が接地する堅穴建物を「伏屋式」、壁が存在して垂木を受ける堅穴建物を「壁立式」と定義した上で、伏屋式を垂木が接地する位置によってA～C式に細別している。そのうちの伏屋A式は



第57図 平地建物・堅穴建物構造模式図（宮本1996を改変）

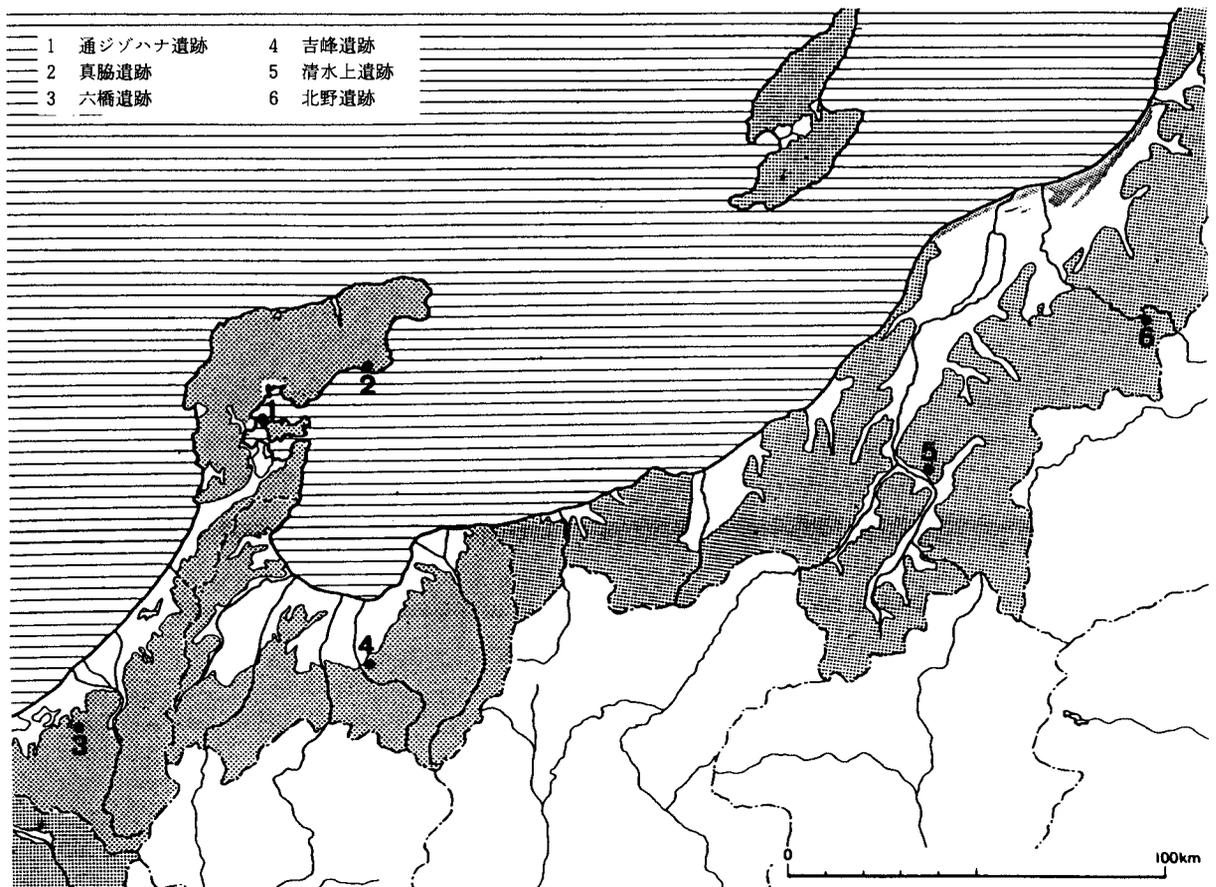
「堅穴の側壁下端部から堅穴壁面の途中にかけて垂木尻を据え付けて屋根をかけ、屋根に土を葺く形式」と説明している。宮本氏はさらに「屋根の裾部が地中に埋まった形になるので、草を葺くと雨水が堅穴内に入るため土で屋根を覆う形式以外には考えられない」と壁構造を想定し、長所は「屋根架構が簡単にでき土を厚く盛ることが可能なことから寒冷地向きである」、短所は「屋内空間を広くとることができず」と述べている。伏屋B式、同C式とは、屋根構造が異なる他、宮本氏は言明していないが大半が複数の主柱によって棟木を受ける屋根となるため、柱配置でも異なり、区別が可能と思われる。また、伏屋A式には小型のものが多いこともあって、炉・貯蔵穴等を内部に持つものがほとんどない点でも区別できよう。壁立式は壁際にピットが巡る点で伏屋A式に似るが、壁の一部となる存在のため鉛直方向に密な間隔で巡る点と、別に複数の主柱を持つ点で明確に異なるであろう。



第58図 テント式住居構造概念図
(宮本1988から転載)

以上の各形式を通ジゾハナ遺跡の堅穴建物と照合するならば、伏屋A式が最も共通点が多い。しかし、通ジゾハナ遺跡では側壁の柱をそれほど多く見い出せず、垂木が堅穴外に接地して屋根が葺かれる構造も考えられること、関連して堅穴外に垂木を受ける周堤が存在した可能性や壁構造が異なる可能性を否定できないことから、伏屋A式と完全に同一の構造とは言えない。

一方、通ジゾハナ遺跡の堅穴建物の簡易な構造については、下部構造を異にする伏屋式平地建物⁴⁶と共通点が非常に多い。伏屋式平地建物は旧石器時代から存在するとされる最も古式で、「テント式」の簡易な構造の建物であるが、主柱が明確でなく、内傾する支柱を一点に集中させる、錐形の屋根を



第59図 主要な遺跡の位置

持つという上屋の基本的な構造はほぼ同一と思われる。両者は堅穴の有無を除けばきわめて類縁の強い建物構造と言えよう。以上から、通ジゾハナ遺跡の堅穴建物は、平地建物の上屋に、堅穴建物の下屋を採用し、簡易さと堅牢さを併合した折衷的な建物と理解するのが適切と考える。そうした構造からは、耐寒性は高いが、狭いため屋内での作業には適さない性格が予想される。

4 縄文前期の北陸の堅穴建物

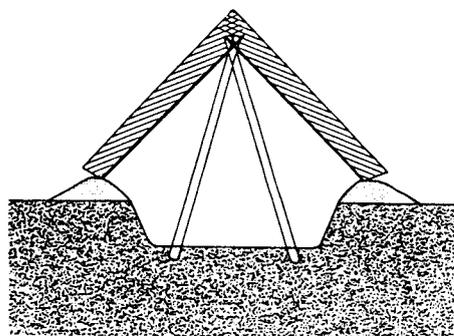
北陸地方において縄文前期の堅穴建物の類例は少なく、石川、富山、新潟各県の数遺跡で確認されているに過ぎない⁴⁷。縄文早期以前の確認例は皆無であるから、実質的には北陸の最古段階の堅穴建物ということになる。実際には、その特徴や実態が不明確であったため、堅穴建物と認識されず見落とされている遺構もあろう⁴⁸。ここでは北陸各地の確実な類例を紹介し、堅穴建物の様相について、できる限り客観的にまとめ、今後に備えるものとした。

県内では通ジゾハナ遺跡の他に、小松市六橋遺跡⁴⁹で2軒、能都町真脇遺跡で1軒が確認されている。六橋遺跡例は早期末、真脇遺跡例は前期中葉に位置付けられる。六橋遺跡例は現状では北陸最古である。どちらもやや不整形ながら、通ジゾハナ遺跡の隅丸四角形で小型の群に相当するものと思われる。主柱は六橋遺跡では不明確で、真脇遺跡では1本のようなものである。炉はどちらも確認されていない。

富山県では中新川郡立山町吉峰遺跡で多数報告されており、前期中葉で10軒、前期後葉で11軒が確認されている。前期中葉の堅穴建物を見ると、平面形は方形、円形、楕円形があり、規模的には辺・径3～5mのものに加えて、第61号住居跡など6～8mに達する大型の堅穴建物が存在している。柱は明確な多主柱配置をとる群と、主柱が不明確な群が見られ、前者に大型で地床炉を持つものが含まれ、後者に小型で炉を持たないものが多く含まれる傾向がある。前期後葉の堅穴建物は形態そのものは前期中葉とそう大きく変わらないが、後者の群の堅穴建物は著しく減少している。

新潟県では北魚沼郡堀ノ内町清水上遺跡に1軒、東蒲原郡上川村北野遺跡⁵⁰に9軒が確認されている。清水上遺跡の例は集落4において、3軒の掘立柱建物と共に検出されており、時期は前期前葉である。小型で不整な隅丸四角形、主柱が不明確で、炉を持たない堅穴建物である。北野遺跡の例は2軒の掘立柱建物と共に検出されており、時期は前期後葉～末葉である。規模と平面形にはっきりした相関が見られ、円形で辺・径3.5～4mの小型の群と、隅丸長方形で6～16mの大型の群に分かれている。小型の群では主柱が不明確であるのに対して、大型の群では多主柱配置となる。炉はこれらのうち4軒で地床炉が確認されており、その頻度は低い。大型の5軒と小型の2軒の計7軒の堅穴建物については周堤が確認されており、前述の伏屋C式構造であることが判明している。小型の堅穴建物S I 1027は柱が内傾して壁寄りに位置し、円錐形屋根の垂木尻が周堤に接する構造と推定されている。

以上が北陸各地の遺跡の概要である。通ジゾハナ遺跡の堅穴建物と比較すると、完全な同一形態は見出し難い⁵¹が、六橋遺跡、真脇遺跡、清水上遺跡の例は比較的近似しており、基本的に共通する構造と思われる。吉峰遺跡、北野遺跡では、通ジゾハナ遺跡よりもやや規模が大きく、伏屋B式あるいは同C式構造と思われる多主柱で地床炉を持つ堅穴建物が主体であるが、非主体的存在の堅穴建物には類縁を見ることができる。吉峰遺跡では平面形や主柱が不明確で炉を持たない第11号、第35号、第38号住居跡などが相当してくる可能性がある。北野遺



第60図 北野遺跡S I 1027構造模式図

跡ではS I 1027をはじめとする小型竪穴建物の群が、周堤の有無を比較できないが、ほぼ共通する構造となるようである。

さて、ここまで述べてきた竪穴建物は家屋を構成する諸要素を組み合わせることによって、大まかに二つの類型を設定することができる。一つは通ジゾハナ遺跡で主体的な存在の竪穴建物の類型である（以下、通タイプ）。特徴は概ね小型で、棟木を持たず内傾する支柱でテント形の屋根を構成し、屋内に炉や貯蔵穴は基本的に持たない簡易な構造である。通ジゾハナ遺跡の他、六橋遺跡例などを典型とし、周堤が存在し時期的には新しい北野遺跡S I 1027・1036なども含めておきたい。もう一つは吉峰遺跡、北野遺跡で主体的な存在の竪穴建物の類型である（以下、吉峰タイプ⁵²）。特徴は通タイプより概ね大型で、多支柱で棟木を受けて屋根を構成し、基本的に屋内に炉や貯蔵穴を持つ、住居としてより整った構造である。現状では両遺跡以外では確認されていないが、中期の竪穴建物にきわめて近似した特徴であり、確実に連続していく類型と言えよう。

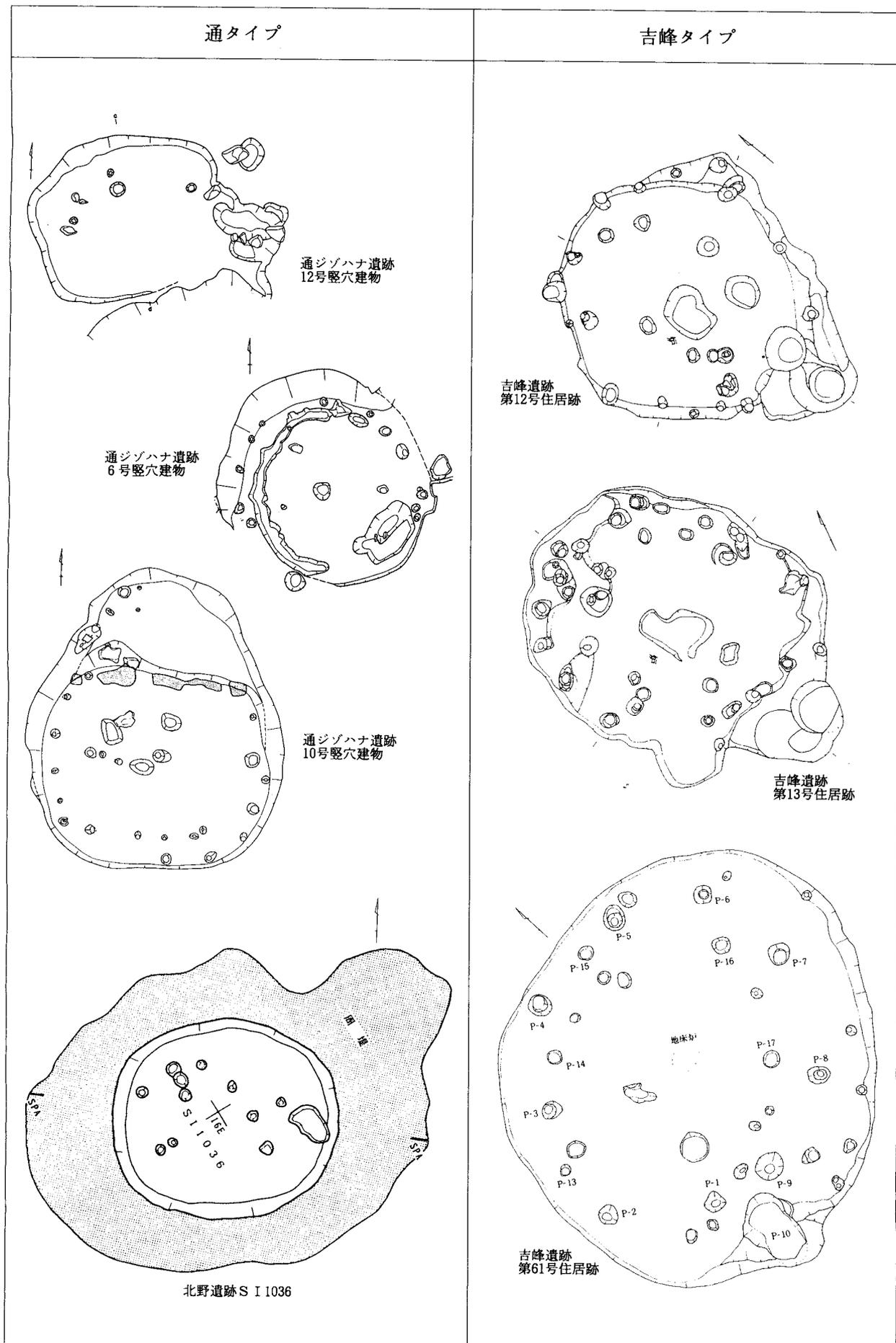
両類型の消長を概観すると、通タイプが早期末葉に、吉峰タイプが前期中葉に確認されており、現状では前者が先行し、後者はやや遅れて出現することになる。しかし全国的に見ればどちらも縄文早期以前にまで遡って確認されており、今後の新資料の追加によって時期的な上限に修正が加わる可能性は大いにあろう。吉峰タイプはその出現以降、中期に至る間に普及して一般的な竪穴建物となっていく。吉峰タイプの出現と普及は、屋内を本格的に使用した生活が恒常化したことを示しており、生活史的に見ても大きな画期と思われる。これに対して、通タイプは吉峰タイプの出現以降は量的に急減していくようである。しかし北野遺跡S I 1027の例もあり、完全に消滅するのではなく、潜在化して確認されにくくなりつつも後の時期へ存続している可能性があるだろう。おそらくは伏屋式平地建物と同様に、その必要に応じて集落内に設けられる存在となっていくものと考えている。

最後に、集落構造についての予察も兼ねて竪穴建物とそれ以外の構造の建物の関連について補足しておきたい。竪穴建物以外の建物遺構としては、掘立柱建物が確認されており、さらに通タイプに近似する建物として平地建物の存在も予想されよう。その構成は、通ジゾハナ遺跡のように竪穴建物の1タイプのみが多数集中するもの、吉峰遺跡のように竪穴建物2タイプが併存するもの、北野遺跡のように竪穴建物2タイプと掘立柱建物が併存するもの、清水上遺跡のように竪穴建物がほぼ単独で存在するものや掘立柱建物のみが存在するもの⁵³など、様々な組み合わせ例がある。一概には言えないが、例えば、季節を限定して使用するかどうかといったような、それぞれの集落の様々な性格を強く反映しているように思われる。

5 意 義

以上から、通ジゾハナ遺跡の竪穴建物は縄文早期以前の建物と類縁を持つ、きわめて簡易な構造の竪穴建物として類型化され、従来我々が「竪穴住居」と認識してきたタイプの竪穴建物と縄文前期において併存することが北陸でも明らかになったと言えよう。少ない資料から類型化を試み、不明確な要素について推測も加えて論を進めた点は問題であろうが、竪穴建物の構造面で、縄文前期という時期、北陸という地域の様相についての、一応の整理はできたものと感じている。

今後には資料が増補され、ここでの問題点が是正されることを願う。その時点で、竪穴建物のより具体的な構造・機能が解明されるであろう。また、従来性格付けが曖昧であった既往の遺構資料についても新たな視点でもって再検討が進むことを切に願う次第である。



第61図 縄文前期竪穴建物の類型 (S = 1/100)

第5節 縄文前期集落の変遷

1 はじめに

通ジゾハナ遺跡の発掘調査では、縄文前期の竪穴建物が数多く検出されたことから、その時期の集落が中心的な性格となる遺跡であることが明らかになった。類例が少ない竪穴建物の形状や構造については前節までに述べたとおりである。しかし、竪穴建物には重複があり、非常に多い軒数はあくまでも集落の存在した期間内で設けられた総数に過ぎない。集落の成立から廃絶に至るまでの数々の局面を分解して浮き出させるためには、個々の遺構の詳細な時期や先後関係について明らかにする作業が不可欠と思われる。よって本節では考察の最後として、竪穴建物を中心とする遺構間の新古関係について検討して、通ジゾハナ集落の構造と変遷過程の復元を試みる。

遺構間の新古を判断する方法としては、出土遺物の年代観による時期比定と、切り合いによる先後関係の特定が最も一般的と思われる。しかし、前者は遺物が皆無かごく少量な場合、または編年観の上で時期的に細分が難しい資料である場合、効力を失う。後者は切り合いがないか少ない場合に同様のことが言える。これらの方法で全ての遺構を判定しきれない遺跡は現実的にかなり多く存在すると思われ、その場合、また別の視点から様々な方法が用いられる⁵⁴。通ジゾハナ遺跡でもまずこの2つの視点から分析し、不十分な場合、別の視点を組み合わせて考えることにしたい。

2 通ジゾハナ遺跡の様相

(1) 分布と切り合い

通ジゾハナ遺跡の竪穴建物は16軒以上が存在し、うち8号竪穴建物を除く15軒が形態と出土遺物から縄文前期の時期と推定した。その分布は調査区の中央部の緩斜面に最も密集し、その東西に等高線に沿うように領域を広げる。これらの竪穴建物は湧水のある谷筋に面した南向きの斜面に選地したものと思われ、やや標高の高い箇所では集石が重複している。

遺構間の切り合いは比較的顕著であり、竪穴建物の半数以上で認められる。最も密集するブロックでは5・7・15・16号竪穴建物が中心をずらして重複しており、位置的に見てこの5軒が併存することはあり得ない。しかし、このうち、切り合いで先後関係を確認できたものは、5・7・15号竪穴建物の3軒のみであり、層位(第10図)では、古い方から7号、15号、5号の順に築かれている。

この他のブロックでは、最も西に位置する2・3号竪穴建物も切り合っているが、層位で先後関係は確認できなかった。また9号竪穴建物と13号竪穴建物は、層位からほとんど同一地点で古・新の段階の2軒が重複し、さらにその廃絶後に投棄によって集石が形成されたことが判明している。

切り合いでは、竪穴建物の先後関係をこれ以上追及することは不可能である。

(2) 出土遺物の状況

通ジゾハナ遺跡においては、比較的遺存が良好と思われる一定の深さをもつ竪穴建物では覆土が上部と下部で明瞭に異なっており、大まかに2段階の埋没を想定することができる⁵⁵。出土した遺物の大半は上部の覆土に含まれており、下部の覆土や床面にはきわめて少ないかほとんど含まれない傾向がある。14号竪穴建物は完形に近い縄文土器(第25図)を出土しているが、層位的にはやはり上部の覆土に含まれている。これらは竪穴建物の下半が埋没して形成された窪地に遺物が入るといふ、縄文時代の竪穴建物には普遍的な様相で、「吹上パターン」⁵⁶の範疇で捉えられるものと言えよう。

なお、出土した縄文前期の土器については、本章第1節で述べたように、前期前葉型式に比定できる一群のみとあってよく、今回は時期的な細分を保留している。

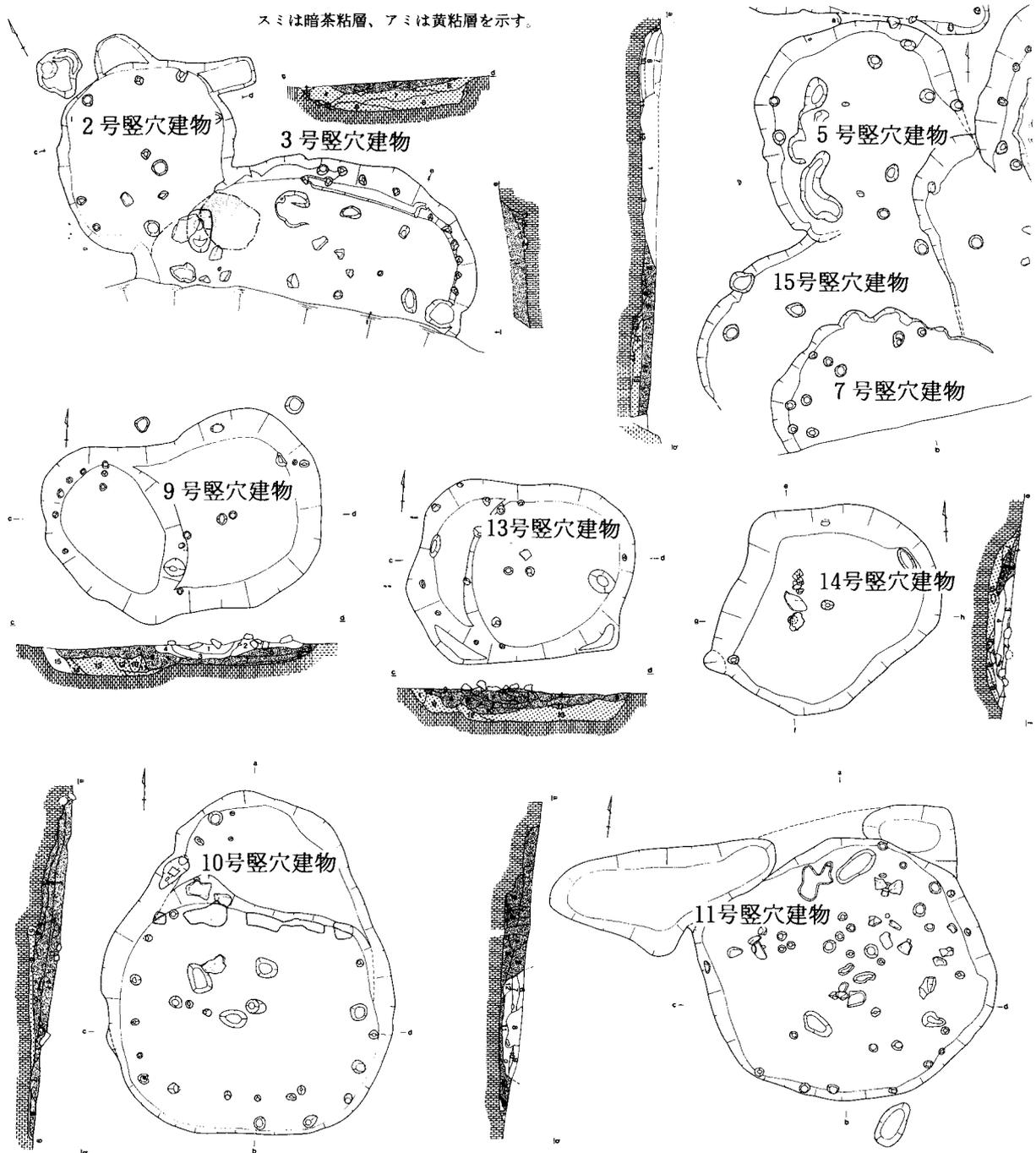
3 視点と分析

(1) 覆土パターン (第62図)

以上から、切り合い、出土遺物ともに、本論の目的に近付くためには不十分な資料であることがわかった。そこで、本遺跡で非常に特徴的である竪穴建物の覆土の質とその堆積状況が手がかりとならないものかと考え、今回注目してみた。

竪穴建物の覆土の質のうちで、一定量の堆積が見られる種類は①明黄～黄褐色で地山質の粘質土(以下黄粘と表現する)、②黒～茶褐色で有機質の粘質土(暗茶粘)、③黄茶～灰褐色でやや粘性が低い粘質土(灰粘)である。

竪穴建物の覆土については、廃棄後に辿る過程にも特徴がある。まず、竪穴建物が廃棄されると、



第62図 竪穴建物覆土パターン模式図 (S = 1/100)

堅穴の下半が埋没するが、この段階では遺物はほとんど含まれない。そして下半が埋没してからの堅穴建物は二つのパターンで推移する。一つは遺物が多く含まれる覆土が堆積するパターンで、おそらくは窪地を捨場として使用したと推定できる。9～11・13・14号堅穴建物の内部、特に9号と13号で顕著な上部覆土の集石も同様のパターンで理解できよう。もう一つは新たに堅穴が掘削されるパターンで、やはり窪地を利用することで作業量を軽減したと推定できる。両パターンは方法は異なるが、廃棄された堅穴建物を下半埋没の後に、再び生活に利用するという概念では共通すると言える。

(2) 分析

では、覆土パターンが、どのように堅穴建物の変遷に関係するのかを具体的に説明したい。まず、切り合いで先後が確認された5・7・15号堅穴建物は、覆土の下部しか遺存していないが、古い方から7号が黄粘、15号が暗茶粘、5号が灰粘となる。また、2・9号(古)・13号(新)堅穴建物では覆土の上部が黄粘で下部が暗茶粘、14号堅穴建物ではさらにその上位に灰粘という堆積が確認できている。下部の堆積が薄い10号堅穴建物も相当しよう。3号堅穴建物では上部は不明であるが、下部が暗茶粘の覆土である。同様の例は、4号、9号(新)、11号堅穴建物でも認められる。1号・5号堅穴建物は上部は不明であるが、下部は灰粘の覆土となっている。すなわち、堅穴建物の切り合いと層序から、最も古い段階が黄粘、次いで暗茶粘、最後に灰粘と、各種覆土の堆積に遺跡内で前後関係があるものとして捉えられるのである。

この3段階の区分を基本とすると、前述した以外の堅穴建物についても調査状況から相対的な新古関係を示すことができる。覆土が失われている13号堅穴建物の(古)は、重複して覆土下部が黄粘である(新)よりも、当然さらに1段階以上遡ることになる。6号堅穴建物は数軒が重複するブロックで最も床面高が低く、遺跡内では新しい堅穴建物の床面を古い堅穴建物の床面より深く掘り下げた例がほとんど見られない⁵⁷ことから、ブロック中で最も古くなる可能性がある。よって、両堅穴建物については黄粘覆土よりもさらに古い段階が想定される。また、下部に黄粘覆土、上部に暗茶粘覆土を持つ群のうち、10号、12号、14号堅穴建物など黄粘の堆積が薄いものは、より後出的で、下部暗茶粘覆土の堅穴建物よりも先行的という位置付けを考えた。特に、10号堅穴建物については拡張痕跡が認められるものの、完遂されておらず、近接して併存し得ない11号堅穴建物とのわずかの時間差を示すものとするなら、居住者が10号の拡張に失敗し、隣接地に新たに11号を掘削した行動が想定できる。

このように覆土が変化する原因については定かでないが、上屋や埋め戻しの有無、季節、気候など、堅穴建物の廃棄以降の状況が大きく関わっているものと考え⁵⁸。さらに溶脱化等の経年変化も考慮に入れなければなるまい。2号堅穴建物のように覆土の上下間が水平に近いものと12号堅穴建物のように堆積がレンズ状に近いものなどが、そうした状況の差異を表しているかもしれない。また、段階毎に堅穴建物の廃棄の状況が異なっている可能性を示すものとして⁵⁹、興味深い動向と言える。

4 段階設定と変遷(第63図)

ここまでの検討から、通ジゾハナ遺跡の堅穴建物については、合計して5段階の変遷が想定できる。これは前述した最も密集する群の5軒をはじめとして、通ジゾハナ遺跡の堅穴建物の併存関係に矛盾することがなく、一定の整合性を持つものとなっている。以下、段階毎に述べる。

第1段階 6号・13号堅穴建物(古)が機能した段階。調査区のはぼ中央部に堅穴建物が築かれる、集落の成立期と言える。ただし、両堅穴建物は重複する堅穴建物との関係からあくまでも相対的に位置付けたものであり、同時期という確証はない。

第2段階 2号・7号・9号(古)・13号(新)など下部覆土が黄粘の堅穴建物が機能した段階。堅

穴建物は軒数を増し、分布域を西、すなわち海側へ広げている。

第3段階 10号・12号・14号堅穴建物といった下部覆土が黄粘であるが堆積の薄い堅穴建物が機能した段階。この他、16号堅穴建物は近接する堅穴建物が存在しない時期となることから、7号土坑は12号堅穴建物と堆積パターンが似ることから、この段階に属する可能性が高い。また、13号堅穴建物内の集石の形成は堅穴建物が埋没するこの段階以降と考えられ、いずれかの堅穴建物の掘削で生じた土と礫を埋め込んだものと思われる。

第4段階 3号・4号・9号（新）・11号・15号堅穴建物など下部覆土が暗茶粘の堅穴建物が機能した段階。堅穴建物の軒数は最大で、分布域も東西に広がっており、景観的には集落の最盛期の様相を呈している。10号・14号堅穴建物内に見られる若干の集石は、この段階以降に属するものであろう。

第5段階 1号・5号堅穴建物など下部覆土が灰粘の堅穴建物が機能した段階。1号堅穴建物は時期が大きく後出し、併存しない可能性もあるが、一応この段階に含めておく。また、9号堅穴建物内の集石の形成や、11号堅穴建物を切り込む焼土坑である11号土坑もこの段階以降としておきたい。

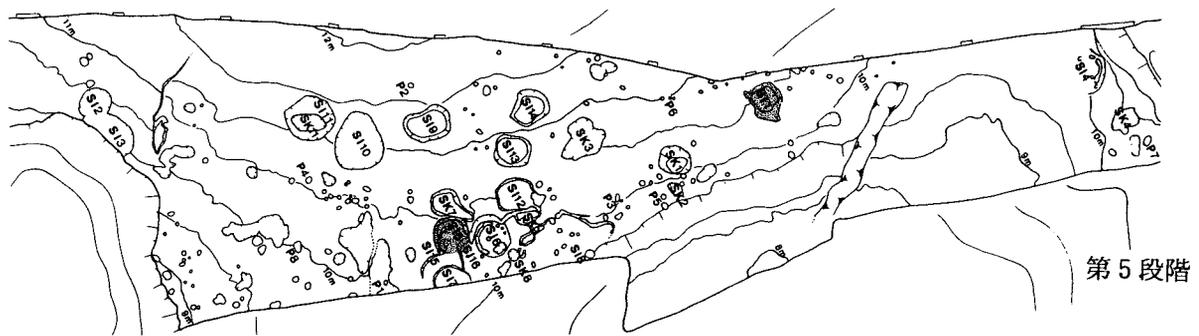
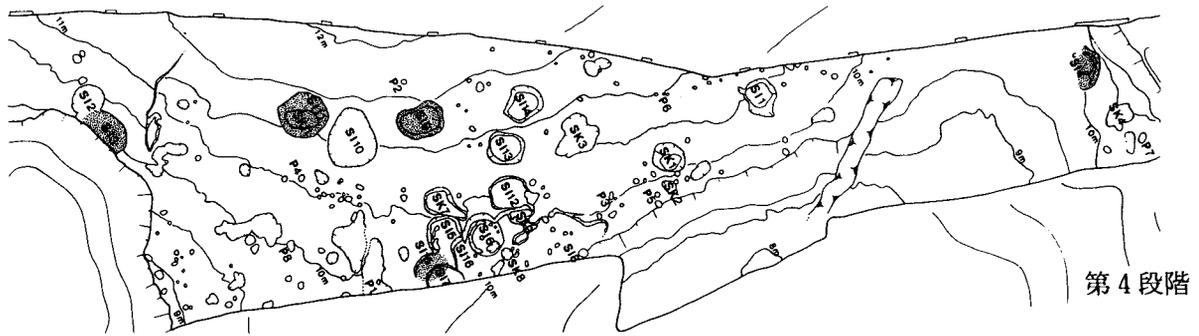
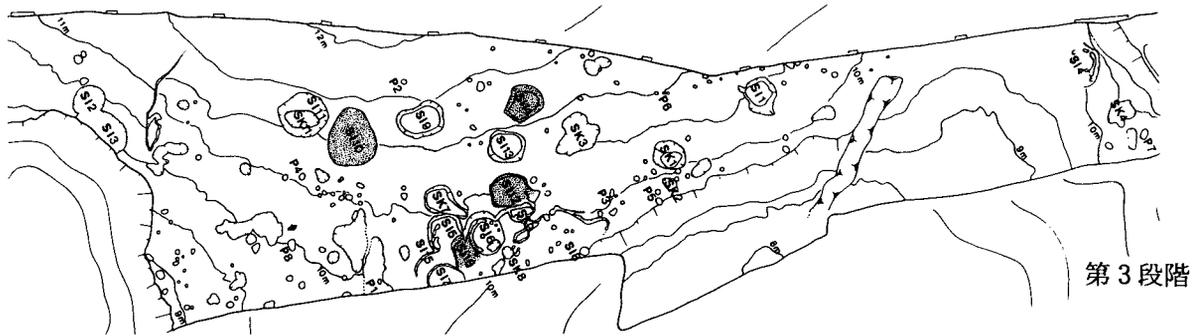
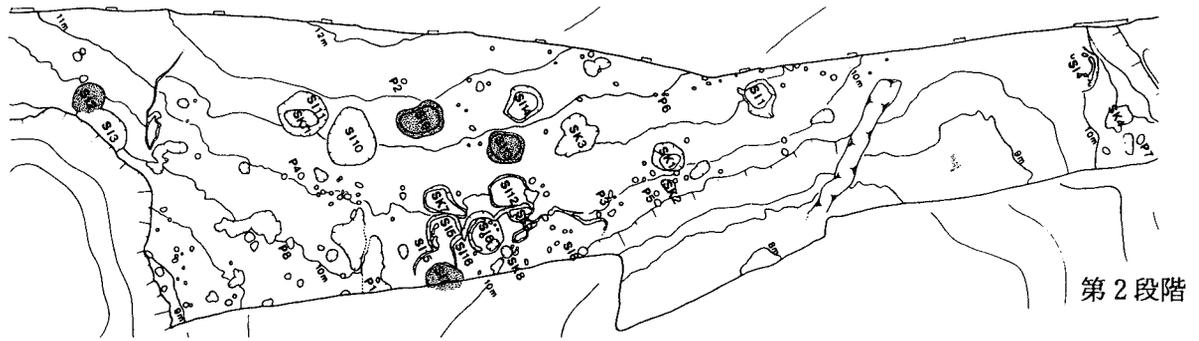
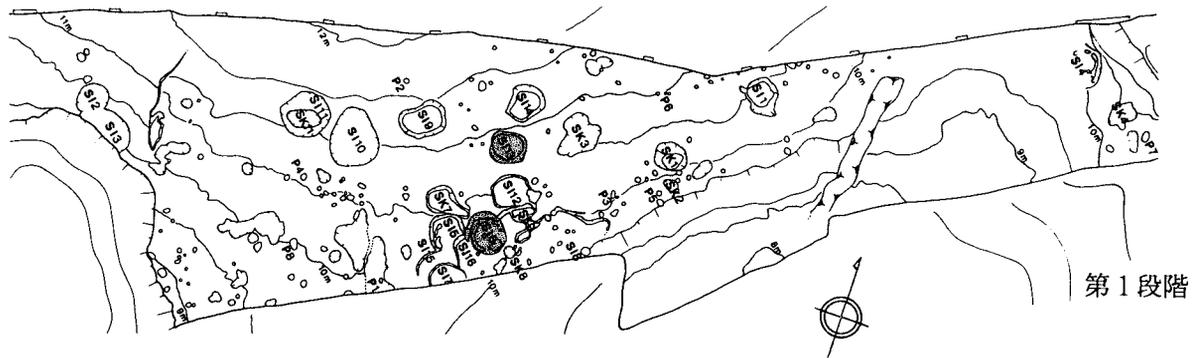
第1から第5までの各段階の内容については、不明確な要素を多分に残しており、堅穴建物の変遷試案とみなすべきかもしれないが、縄文土器のはぼ一型式のうちの、集落の非常に多様な活動が示されていると言えよう。各段階の堅穴建物については、併存が確実でない、細かい時期差が存在する、どの程度の年月かわからないが堅穴建物の下半が埋没する段階が間に入ってくるなど、さらに細分される可能性はあるが、逆に短縮される可能性はほとんどないと考えている。

以上のような、縄文土器の編年観で捉えきれないような遺構の変遷については、関東地方の縄文中期を中心にして既に指摘されているところである⁶⁰。また、堅穴建物の構築と廃棄、そして埋没あるいは新築に至る過程については、その行動パターンが鮮明に観察できた⁶¹。どちらも縄文時代にはほぼ普遍的な様相とされながら、北陸の縄文前期においてはほとんど注目されたことがなく、本遺跡において明らかになったことは非常に大きな成果と言えよう。

5 意 義

ここでの検討によって、通ジゾハナ遺跡の集落の構造と変遷をモデル的にはあるが、提示することができた。それは、縄文土器型式では細分しがたい遺構群が、かなり細かい段階に分解され、集落が実に多様な局面をもっていることを強く示唆する内容であった。

一方、変遷に対応すると捉えた堅穴建物覆土の差異については、筆者の理解が適切かどうか、今後論議を呼ぶことが予想される。容易に結論は得られないだろうが、筆者は今回の検討を通して、縄文時代の遺構、特に堅穴建物については、「吹上パターン」に見るような遺構の機能と出土遺物の年代が直結しない状況を示すものが大半であり、遺物の編年観が絶対年代の基準にも乏しいという、根深い問題も強く影響して、その細かい時期や変遷を知ることがきわめて難しい場合が多いことを痛感した。同時に、発掘調査全般における詳細な観察と検討は、遺構の覆土に限らず、遺跡からより多くの情報を引き出す鍵になることを確信した次第である。基本的なことながら、その重要性をここで提言できたことに最も大きな意義があるものと考えている。



第63図 通ジゾハナ集落の変遷 (S=1/700)

第5章 結 語

能登島町通ジゾハナ遺跡の発掘調査は、平成3年度の現地調査から、本報告書が刊行されることによって、完結に至った。現在までに多くの関係者、機関の協力を得たことに、まずは感謝したい。

通ジゾハナ遺跡は能登半島の内浦側で、七尾湾内に浮かぶ能登島に位置する、縄文時代前期の集落遺跡である。同じ能登半島でも外浦と内浦では、外浦が日本海の風浪を直に受けるのに対して、内浦では波風が抑制されるという海洋環境に大きな違いがあり、それによって生じる気象、地形からそこに暮らす人々の歴史、文化に至るまで様々な差異が見られる。内浦においても遺跡周辺は特に風浪が小さく、波穏やかに日々が過ぎるため、漁業や大小の船舶の往来が活発な地域であった。しかし近年、水産業の衰微、自家用車の普及と道路網の整備により、こうした伝統も急速にすたれている。歴史的な景観が自然と共に徐々に失われて行くようであり、気懸かりなところである。

七尾湾岸では、通ジゾハナ遺跡とはほぼ同じ時期の遺跡は島内に佐波遺跡、半浦キリデン遺跡があり、半島側では田鶴浜町三引C・D遺跡、吉田野寺遺跡の他、湾岸をより広域に見れば中島町の小牧大杉谷内遺跡、能都町の真脇遺跡、姫西上野遺跡、田ノ浦コヤダ遺跡、七尾市の水上六郎谷遺跡等も含まれる。この時期の遺跡数の多さでは北陸でも群を抜いた地域であり、前述した穏やかな環境に依る部分も大きいものであろう。しかし多くの遺跡のうち、明瞭な遺構を捉えた例はきわめて少ないため、その性格も明らかとは言えず、具体的な生活のイメージについても曖昧な状況である。

通ジゾハナ遺跡の発掘調査では、堅穴建物、集石、土坑等の遺構が検出され、大半が前期前葉の時期と判明した。出土した縄文土器は、前期前葉の佐波式・極楽寺式土器の後続型式と認定される良好な資料であり、県内ではこれまで希少な存在であった。石器については計量分析によって、すり石類が卓越するという特徴的な器種組成が算出された。石器の石材については全ての産地を明らかにしたわけではないが、今後の研究の方向性は示されたものと感じる。その他では、ドングリ種実が堅穴建物から出土しており、この段階での堅果類の食料化を窺わせる事例として注目できよう。

残念ながら、集石の性格、出土遺物の詳細な分布、縄文土器の施文原体、石器石材の名称の不統一等、適切な評価を与えられなかった点も多い。この中には現地調査時点からの不備も含まれており、全ては縄文集落に対する調査担当者の認識不足から生じている。こうした問題は今後、遺跡の評価を左右すると思われるので、あえてここに記しておきたい。

さて、発掘調査成果のうちでも特筆すべきは、前期前葉段階の堅穴建物を多数確認したことであろう。検討した結果、比較的小規模で、支柱、炉、貯蔵穴等を基本的に持たない、簡素な構造の建物が、少なくとも5段階にわたって変遷した集落と想定された。北陸において建物遺構を伴う最も古い段階の集落として把握され、きわめて良好な集落モデルの一つに認定し得るものと評価する。

通ジゾハナ集落で営まれた人々の生活の実態はどのようなものであったろう。一般的に連想される縄文集落とは、概ね縄文中期以降の、支柱、炉、貯蔵穴等を備えた床面積20㎡を超えるような規模の堅穴建物を伴う遺跡が相当しよう。本書では「吉峰タイプ」とした堅穴建物を含む集落と重なる。これに対して、通ジゾハナ集落は「通タイプ」とした堅穴建物で構成されている。「通タイプ」はテント式住居が堅穴を伴ったような簡易な構造で、付属施設もほとんど持たない堅穴建物であり、「吉峰タイプ」と同様の生活が可能であったとは考えにくい。通ジゾハナ集落は「吉峰タイプ」を含む集落とは、決して同一視できない性格のものである。

多湿・多雪の北陸地方の風土において、両タイプの堅穴建物の実生活レベルでの決定的な差は、1

年を通じた屋内の使用、居住が可能かどうかであろう。付属施設については屋外に求めることもできようが、構造的な差は大きい。すなわち通ジゾハナ集落は冬の積雪期、夏が多雨・多湿期の使用に耐えるものとは考えにくく、恒常的には使用されなかった集落となる可能性が高い。逆に、限定的に使用されたとするならば、その季節は春か秋と考えられる。季節的な集落については品田高志氏が新潟県柏崎市尻振坂遺跡で既に指摘するところである⁹²。

また、限定的な使用は狩猟、漁撈、採集といった特定の生業に起因するとも考えられる。通ジゾハナ遺跡の周辺を見回すと、眼下に七尾西湾、背後に山地を控えて食料資源に恵まれているように見える。しかし、より細かく見ると、海は海峡部にあたり、潮流が速く、山地は標高が低い丘陵であり、山林はあまり深くない。当時の自然環境に現在と極端な変化がないものとするなら、石錘を用いた漁撈、石鏃を用いた狩猟には必ずしも適してはいない。一方では緩やかな丘陵に発達する二次林にはクリ、ドングリ等の植物質食料がよく成育し、立ち入りが容易であるから多くの食量が採集できた可能性が高い。石器組成においても植物食料加工具とされるすり石類が卓越しており、通ジゾハナ集落の生業が植物採集中心であったことが強く示唆される。さらに推測を進めると、検出された谷筋の湧水が堅果類の水さらしに結びつくかもしれない。

以上から通ジゾハナ集落は季節、及び植物食料採集との関係が深いことが窺われるが、対象となる植物自体も季節が限定されるものが多いと思われる。その採集期は現在でも春、秋が中心であり、堅穴建物の使用可能な季節と一致するものである。よって通ジゾハナ集落について、植物質食料の採集を主な目的として、春・秋等に期間を限定して使用された集落、という可能性を導くことができる。

このような集落が存在するならば、当然、使用していない期間は別の集落に起居するということになり、集団が複数の集落をセット化して利用する生活パターンを考えなければならない。通ジゾハナ集落については周辺地域も含めて二つのモデルが予察される。一つは通年居住が可能な拠点となる集落、仮に「母村」とする集落が地域に存在し、季節、生業に応じて通ジゾハナ遺跡のような半ばキャンプサイト的な集落に移動するパターン（モデルA）、もう一つは母村を持たず、集落を周期的に移動するパターンである（モデルB）。両モデルは地域の求心性や集団間の連携度といった社会構造がかなり異なるものであろう。通年居住が可能な「吉峰タイプ」堅穴建物とそれを含む集落の一部は十分に母村となりモデルAを形成しうるが、その初現は現在のところ縄文前期中葉であり、前期前葉以前には確認されていない。しかし、今後その初現が遡る可能性にも期待したいので、通ジゾハナ集落とその周辺地域がどちらのモデルに属するかの結論は現状では保留しておくべきであろう。

以上のように、通ジゾハナ遺跡の発掘調査成果からは、北陸の縄文前期集落の多様な姿を垣間見ることができる。同時に、集落の固定的な解釈への警鐘にもなろう。しかし、縄文時代の集落にはまだまだ疑問・難問が山積みであり、本書はその可能性の一部を記したものに過ぎない。特に、実生活レベルの研究に進展が少ない点は、北陸においては縄文時代に最も顕著であろう。集落には何よりも当時の環境に応じた人々の生活と価値観が反映されているはずであり、調査例の寡多にかかわらず、もっと深く追及できないものだろうかと思っただけでなく、強く感じた次第である。

概して晴天が少なく、多湿、多雨、多雪である北陸の気象も集落が営まれた当時の生活を考える上で重要な因子の一つである。今思えば、現地調査では終始不順な天候に悩まされたが、快晴時には国定公園に指定される美しい風景がいっそう映えた。通ジゾハナ集落の人々もこの空を仰いだりしたのだろうか、などと想いをめぐらせた日々を振り返りつつ、筆を置くことにしたい。

最後に、未熟な担当者がともかくも本書の刊行までに漕ぎ着けたのは名古屋大学の山本直人氏、同僚の本田秀生、布尾和史両氏のご教示、ご指導に負うところが特に大きい。重ねて感謝したい。

註

- 1 能登島町教育委員会が平成6・7年度に発掘調査。
- 2 高堀勝喜「考古編第1章第2節 通り鼻遺跡」能登島町史専門委員会1982。
- 3 津田耕吉「第Ⅱ章第2節2. 半の浦遺跡」七尾鹿島1986で紹介された後、遺跡地図の改訂により遺跡名が変更になった。
- 4 橋本澄夫「考古編第1章第1節 佐波遺跡の調査」能登島町史専門委員会1982、伊藤雅文・小阪大「能登島町佐波遺跡発掘調査報告」石川埋文セ1992。
- 5 平成5年度に町教委が発掘調査。
- 6 石川埋文セ1993、平成3年度に石川県立埋蔵文化財センターが発掘調査。
- 7 石川埋文セ1986、同1987。能登島町教育委員会が昭和59年度に、石川県立埋蔵文化財センターが昭和60年度に発掘調査。
- 8 石川埋文セ1996。発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが平成6・7年度に、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が平成8年度に行なっている。
- 9 四柳嘉章「一 考古資料 第二章二 姫西上野遺跡」能都町1982。
- 10 四柳嘉章「一 考古資料 第二章一 田の浦こやだ遺跡」能都町1982。
- 11 西野秀和「第二編第一章第一節 小牧大杉谷内遺跡」中島町1995。
- 12 唐川明史「第Ⅱ章第2節3. 水上ロクンダン遺跡」七尾鹿島1986で紹介された後、遺跡地図の改訂により遺跡名が変更になった。
- 13 福井県教委・若狭歴史1983。
- 14 石川埋文セ1992。
- 15 石川埋文セ1993、社石協1992。
- 16 社石協1993。
- 17 社石協1994。
- 18 県内ではこの段階の資料は少なく、能都町1986で概要が解説されている他、金沢市馬替遺跡等にまとまった出土例がある。県外では富山県朝日町境A遺跡、新潟県東蒲原郡津川町大坂上道遺跡出土土器を参考にした。
- 19 木立雅朗「鳥屋窯跡群の概要」石考研・北古土研1988。
- 20 橋本澄夫「考古編第1章第1節 佐波遺跡の調査」能登島町史専門委員会1982。
- 21 安 英樹「第3章第1節 a 石鏃」石考研1996。
- 22 胎土中に雲母が含まれる土器については、低火度酸化炎焼成の土器に限定するならば邑知地溝帯地域を中心とする分布がほぼ時代を問わず伝統的に見られる。雲母は花崗岩質岩石の造岩鉱物としてよく見られるが、地溝帯東西の山地に存在する花崗岩質の岩石を起源として平野部に堆積した砂礫や粘土が、土器の素材として使用されることによって胎土中に含まれるものと思われる。本章第3節でも述べる花崗岩石材の礫石器の搬入とも合わせて、七尾湾岸域と邑知地溝帯地域との陸海路での交流を示す興味深い資料と言えよう。
- 23 佐波式・極楽寺式は良好な発掘調査資料が少ないことからかなりの時期幅を包括した土器型式となっており、四柳嘉章氏らによって新古細分が検討されている（四柳嘉章「第Ⅲ章 能登における縄文早期末～前期中葉前半の編年について」七尾鹿島1983、「第6章第1節1 第1群土器 佐波式・極楽寺式土器」能都町1986、等）。今回、縄文前期前葉を前後する時期の型式的な流れ、組成の変化を検討した成果では、条痕・縄文の地文別の組成、その他文様の施文頻度と種類、底部形態別組成等に注目することによって佐波式・極楽寺式の段階についても新相・古相に細分することが可能と思われた。今回取り上げた吉田野寺遺跡資料は条痕文系土器が定量残り地文縄文土器と量的に拮抗し、その他文様の施文率は低く、底部形態はほぼ尖底のみという非常に早期的な様相を色濃く残す土器群であり、古相の基準資料となる。新相については、地文縄文土器が主体となって条痕文系土器は減少、底部形態に上げ底風の平底が定量加わった様相を考えている。良好な資料に欠けるが、甲・小寺遺跡資料の一部、能都町田ノ浦コヤダ遺跡資料、七尾市水上六郎谷遺跡資料、加賀市柴山瀧底貝塚資料などを想定しておきたい。
- 24 四柳嘉章「第6章第1節2 第2群土器 朝日C式土器」能都町1986。
- 25 四柳嘉章「9 考察 極楽寺式土器に後続する型式について」穴水町1972、及び能都町1986のP48編年表の(+)型式。
- 26 現在までに石川県では辰口町庄が屋敷B遺跡第1群土器の一部、中島町小牧大杉谷内遺跡第1群土器、羽咋市寺家遺跡オオバタケ地区第1群土器及び第3群土器C類の一部、鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡B地区資料、志賀町又谷池遺跡第1群土器、富山県では小杉町南太閤山Ⅰ遺跡Ⅱ群土器、氷見市十二町湯排水機場遺跡資料などをこの段階に位置付けることができよう。
- 27 新潟県埋蔵文化財発掘調査事業団が北魚沼郡堀ノ内町清水上遺跡、三島郡和島村大武遺跡の発掘調査を行なっている。大武遺跡では後述する布目遺跡より後出的な様相、清水上遺跡では新谷遺跡より後出的な様相が見られる縄文土器が出土している。寺崎裕助氏は清水上遺跡の資料を前期前半Ⅰ期・Ⅱ期に細分し、Ⅰ期を関山Ⅱ式並行で新谷遺跡に後続する段階、Ⅱ期を有尾式並行段階と捉えた。さらにⅡ期において確認された越後系土器について根小屋式という型式を設定している（寺崎祐介「第Ⅶ章1 土器 B 縄文時代前期前半の土器について」新潟県教委・（財）新潟1996）。
- 28 巻町1994。資料は実見しており、その際に前山精明氏より教示を得ている。
- 29 埼玉県1974。他、大宮市1984、新井1986、下村1986を参考にした。
- 30 高堀勝喜「第6章第1節24 北陸の縄文土器編年」能都町1986。

- 31 富山県1986。連続刺突文は第Ⅱ群土器第11類の一部、沈線文は同第13類に相当する。資料は実見しており、その際に山本正敏氏より教示を得ている。
- 32 前掲註26の資料のうち、庄が屋敷B遺跡第1群土器の一部、鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡B地区資料、南太閤山I遺跡ZⅡ群土器の一部、氷見市十二町潟排水機場遺跡資料については、非常に施文幅の狭い羽状縄文や新谷遺跡よりさらにラフな底部の刺突文が見られる。これらの資料は前掲註で述べた内容の佐波式・極楽寺式までは遡り得ないと思われる様相の一群であり、通ジゾハナ遺跡の段階でも新古相の存在を確実に示唆する。同様の資料は新潟県でも布目遺跡、柏崎市大湊遺跡等で見られる。布目遺跡資料はその全体的な位置付けから考えると、前掲註23の佐波式・極楽寺式新相にも一部含まれることになろう。両段階の精密な区分とそれぞれの細分については今後の課題としたい。
- 33 相原1990。
- 34 宮田村中越遺跡資料、及び原村阿久遺跡Ⅱ期Ⅰ～Ⅲ群土器を参考にした。刺突文の多用という点ではむしろ後続する有尾式がより類似するようにも感じられる。
- 35 相原1990、および加藤1982。
- 36 古くは和島誠一氏が「尖底土器を使っている早期末までは各住居址に炉がなく、…(中略)…ところが平底の土器をつくる前期になると一つ一つの堅穴に炉が切れ、生活の単位としての世帯が共同体の内部で自立する傾向が現れてくる」と指摘している(和島1962)。現在では各地で平底や住居内炉の初現がかなり遡っており、必ずしも縄文早期・前期の時期区分とは一致しなくなっているが、生活史的には依然として重要な意義を含む変化と捉えている。
- 37 立山町1990、及び谷杉1993。
- 38 山本直人「第6章第7節1 石器」能都町1986、及び加藤1996。真脇遺跡Ⅹ層蜆ヶ森式期の石器組成を採用した。真脇遺跡と同様の立地をとる中島町小牧大杉谷内遺跡(中島町1995)の石器組成もこれに似る。
- 39 以上のように、石器組成から縄文時代の集落遺跡の性格を特定することは難しい。しかし、特定の食糧に関係した各種の石器が卓越する遺跡については、その獲得に重点を置いた活動が予想される。また、獲得が可能な時機は食糧種に応じてかなり異なるはずであり、年間を通じて見れば活動する季節が限定されるような村も考えられよう。
- 40 石川県農林水産部1984、及び調査時の所見から。
- 41 石川県農林水産部1982、及び西岸部については栃木英道氏の教示から。
- 42 遺跡への搬入が製品か原石の状態であったのかは資料からうかがうことはできないが、原石から製品への加工はきわめて容易と思われるのでどちらでもそう大きな問題ではなからう。但し、原石を採取する段階ではかなり選別されているものと推定している。
- 43 炉についてはその使用頻度の低さや、焼土が後世に変質することによってその痕跡が確認できなかった可能性も考えられる。また「灰床炉」等痕跡を残しにくい炉形式も指摘されている(林1996)ので一概に存在しないとは言いきれない。しかし仮に使用頻度の低い屋内炉や屋外炉が存在したとしても、以降の時期で屋内で明瞭に確認される地床炉や石組炉とは、その生活の実態と堅穴建物に対しての意識という点で一線を画して扱うべきと考える。この両者が同時期に同遺跡で確認されることはほとんどないといつてよい。
- 44 宮本1988、以下の引用も多くはこの文献による。
- 45 林1996など。
- 46 宮本1988。
- 47 福井県では三方町の鳥浜貝塚で縄文前期の堅穴建物が確認されている(福井県教委・若狭歴史1985)。形態・規模は通ジゾハナ遺跡に近似し、地床炉を有するとされる点が異なる。しかし、この地域は西日本の影響が伝統的にきわめて強く、北陸の様相として評価しかねるので、ここでは扱わないことにしたい。
- 48 田鶴浜町吉田野寺遺跡の土坑など。また能都町姫西上野遺跡では前期前葉の堅穴建物が報告されているが(四柳嘉章「一 考古資料 第二章二 姫西上野遺跡」能都町1982)、底面の傾斜が床面としては強すぎると思われ、積極的に評価できなかった。
- 49 石川県立埋蔵文化財センターが平成2・3年度に発掘調査(石川埋文セ1992・同1993)。
- 50 高橋1996。
- 51 通ジゾハナ遺跡と同形態の堅穴建物が検出できるかどうかは、壁際もしくは壁面の小ピットの柱穴としての認識、また柱の傾きの認識といった視点が調査時にあったかどうかによって大きく左右される。これらに関する記述が見られる報告書は全国的にもきわめて少ないであろう。
- 52 吉峰遺跡例の方が古い時期であること、北野遺跡例が正式な報告書が刊行されていないことから、今回は吉峰遺跡の名称でこのタイプを代表させることにした。
- 53 新潟県教育委員会1996。前期前葉段階には堅穴建物1軒と掘立柱建物3軒が検出されているが、堅穴建物が掘立柱建物よりも古く、併存しないとされている。
- 54 縄文時代では、桐生直彦氏、黒尾和久氏、小林謙一氏らが堅穴建物出土遺物の接合関係から、一時的な集落景観の復元を試みている(桐生1989、黒尾1995、小林1995など)。また、三鍋(旧姓森)秀典氏は堅穴建物の主軸方向の違いに着目した時期細分を行なっている(立山町1990)。
- 55 ここで示した下部・上部の覆土は末木健氏、山本輝久氏らが示した堅穴建物の第1次埋没土・第2次埋没土に相当する。末木氏は第1次埋没土の堆積する時間に居住者の移動を想定し、集落の断続を指摘した。山本氏は常識的に自然堆積と考えられていた第1次埋没土に対して、儀礼に伴う周堤等の埋め戻しを指摘し、第2次埋没土の堆積とは時間的に連続するものと解釈している。(黒尾1988b)

- 56 小林達雄氏が提唱した特徴的な竪穴建物内の遺物の出土パターンの一つである（庄和町教委1965）。その後、多くの調査例から、縄文時代に普遍的な存在と認識されるに至った。ただし、同氏の「吹上パターン」の概念では「完形土器が遺棄される」点が強調されているが、現在ではそれはむしろ特殊な例であり、土器小破片や破損品を中心とした石器類、炭化物なども含む、質・量ともに多様な遺物の出土状況が確認されている。本遺跡例も同様であるが、遺物遺棄の過程としての原則は共通するものであり、広義の「吹上パターン」として認識したい。
- 57 13号竪穴建物にその可能性がある以外では、大半が古い方の下部覆土までにとどめている。竪穴建物の深さに極端な差がないものとするれば、おそらくは時間の経過につれて生活面となる地表も埋積によって高くなるため、床面高も高くなるものと考えたい。
- 58 覆土の下部については、55で示したように末木氏と山本氏の対立する見解のように、自然か人為かによって、竪穴建物や集落の評価が大きく異なる。当然、どちらも様々な条件によって生じ得る性質のものであり、確かな資料からそれぞれの特徴をパターン化して判断していくしかなかろう。また、時期も性格も異なる遺構であるが、北野博司氏は弥生時代末の大型土坑群について、覆土の堆積状況で埋没が人為か自然かを区別し、さらに自然埋没については覆土の質で堆積した季節、2種の質の異なる覆土が互層をなす層序で自然埋没の期間を想定している（石川埋文セ1991）。
- 59 仮に、ある段階の竪穴建物の下部覆土が自然堆積である場合、どの程度の時間かわからないがその堆積する期間、すなわち次の段階の竪穴建物との間に空白期が存在することになり、黒尾氏や末木氏らが指摘するような縄文土器一型式内での居住者の移動と集落の断続が想定される（黒尾1988 a・同1988 b）。
- 60 中山1995。
- 61 縄文時代の竪穴建物の遺物出土状況を弥生時代以降と比較した場合、覆土に多くの遺物が含まれる広義の「吹上パターン」的な状況もさることながら、逆に床面に残される遺物が炉体土器等を除けばきわめて少ない状況が非常に大きな特徴のように感じられる。前者は竪穴の存在そのものに起因する、かなり普遍的な廃屋窪地の利用形態のようであり、弥生時代以降も見られる。しかし後者は土器様式の変質とも相関するかなり顕著な変化であり、竪穴建物内空間の意識、土器の使用を含めた根本的なライフスタイルの変化を示すものと考えている。
- 62 柏崎市1996、品田1996。
- 参考文献
- 相原淳一「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年―仙台湾周辺に分層発掘資料を中心に―」『考古学雑誌』第76巻第1号 1990年
- 穴水町文化財保護専門委員会『甲・小寺遺跡―能登における縄文前期初頭文化の研究』1972年 石川
- 新井和之「文様系統論―関山式土器―その成立と終末―」『季刊考古学』第17号 1986年 雄山閣
- 石川県農林水産部耕地整備課『土地分類基本調査』水見 1982年
- 石川県農林水産部耕地整備課『土地分類基本調査』七尾・小口瀬戸・蛇が島 1984年
- 石川県立埋蔵文化財センター『羽咋市気多社僧坊跡群』1984年
- 石川県立埋蔵文化財センター『能美丘陵東遺跡群Ⅰ』1993年
- 石川県立埋蔵文化財センター『谷内杉谷遺跡群』1995年
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』資料編 1988年
- 石川考古学研究会『石川県内生産遺跡分布調査報告書』1993年
- 石川考古学研究会『石川県考古資料調査・集成事業報告書 装身具Ⅰ』1995年
- 石川考古学研究会『石川県考古資料調査・集成事業報告書 武器・武具・馬具Ⅰ』1996年
- 石川県教育委員会『石川県遺跡地図』1992年
- 石川県立埋蔵文化財センター『石川県立埋蔵文化財センター年報（昭和59年度）』第6号 1986年
- 石川県立埋蔵文化財センター『石川県立埋蔵文化財センター年報（昭和60年度）』第7号 1987年
- 石川県立埋蔵文化財センター『金沢市米泉遺跡』1989年
- 石川県立埋蔵文化財センター『押水町冬野遺跡群』1991年
- 石川県立埋蔵文化財センター『石川県立埋蔵文化財センター年報（平成2年度）』第12号 1992年
- 石川県立埋蔵文化財センター『石川県立埋蔵文化財センター年報（平成3年度）』第13号 1993年
- 石川県立埋蔵文化財センター『大津遺跡』1995年
- 石川県立埋蔵文化財センター『三引遺跡 発掘調査の概要』1996年
- 大宮市遺跡調査会『深作東部遺跡群』1984年 埼玉
- 加藤邦雄「5 前期の土器 縄文尖底土器」『縄文文化の研究』3 縄文土器Ⅰ 1982年 雄山閣
- 加藤三千雄「石川県真脇遺跡」『季刊考古学』第55号 1996年 雄山閣
- 加茂市教育委員会『牛が沢B遺跡―新潟県加茂市牛が沢B遺跡発掘調査報告書―』1993年 新潟
- 柏崎市教育委員会『尻振坂』1996年 新潟
- 柏崎市史編さん委員会『柏崎市史資料集 考古篇Ⅰ』 1987年 新潟
- 金沢市教育委員会『金沢市磯部運動公園遺跡』1988年 石川
- 金沢市教育委員会『金沢市馬替遺跡』1993年 石川
- 桐生直彦「住居址間土器接合資料の捉え方―現状認識のためのノート―」『土曜考古』第13号 1989年
- 黒尾和久「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』No.454 1988年 a
- 黒尾和久「竪穴住居出土遺物の一般的あり方について―吹上パターンの資料論的検討を中心に―」『玉口時雄先

生古稀記念考古学論文集『古代集落の諸問題』1988年 b

黒尾和久「接合資料の検討からみた縄文中期の居住景観－埋設土器の事例検討を中心に－」『シンポジウム縄文中期集落研究の新天地』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会 1995年

小林謙一「住居跡のライフサイクルと一時的集落景観の復元」（出展は黒尾1995に同じ）1995年

小林達雄『縄文人の世界』1996年 朝日新聞社

小林康男「2 石器Ⅰ 組成論」『縄文文化の研究7 道具と技術』1983年 雄山閣

埼玉県教育委員会『関山貝塚』1974年

志賀町教育委員会・赤住地区埋蔵文化財調査団『赤住遺跡群』1990年 石川

品田高志「季節と縄文集落－柏崎平野における縄文遺跡群の検討から－」『新潟考古学談話会会報』第16号 1996年

下村克彦「施文原体の変遷・羽状縄文系土器－花積下層式～関山式土器－」『季刊考古学』第17号 1986年 雄山閣

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報3 平成3年度』1992年

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報4 平成4年度』1993年

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報3 平成5年度』1994年

庄和町教育委員会『米島貝塚』1965年 埼玉

大門町教育委員会『小泉遺跡』1982年 富山

高橋保雄「新潟県東蒲原郡上川村 北野遺跡の調査概要－縄文時代前期後葉～末葉の集落跡を中心に－」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐって』資料集 山梨県考古学協会 1996年

立山町教育委員会『吉峰遺跡－第7次発掘調査報告書－』1990年 富山

谷杉廷子「縄紋時代前・中期の石器組成について」『大境』第15号 1993年 富山

富山県教育委員会『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要（4）南太閤山Ⅰ遺跡』1986年

富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編7－境A遺跡総括編』1992年

中島町教育委員会『オカ・ノギヤチ遺跡』1992年 石川

中島町史編纂専門委員会『中島町史』資料編上巻 1995年 石川

中島町史編纂専門委員会『中島町史』通史編 1996年 石川

中山真治「縄文中期土器の時期細分と集落景観－既刊報告書の再検討－」（出展は黒尾1995に同じ）1995年

七尾鹿島広域圏事務組合『吉野寺遺跡－七尾南湾・西湾周辺の縄文前期遺跡－』1983年 石川

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その5 昭和51・52・53年度－』1982年 長野

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団『磐越自動車道関係発掘調査報告書 大坂上道遺跡 猿額遺跡 中棚遺跡 牧ノ沢遺跡』1995年

新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書 清水上遺跡Ⅱ』1996年

沼田啓太郎・上野与一・太田和夫・小村 茂「柴山潟底縄文貝塚の調査」『小松市立博物館研究紀要』第8集 1973年 石川

能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団『石川県能都町真脇遺跡』1986年 石川

能都町史編纂専門委員会『能都町史』第三巻－歴史編 1982年 石川

能登島町史専門委員会『能登島町史』資料編第一巻 1982年 石川

能登島町教育委員会『須曾蝦夷穴古墳－保存修理事業に係る第1、2次発掘調査の概要－』1992年 石川

農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帳』1989年版 1989年

林 謙作「連載講座 縄紋時代史」『季刊考古学』1996年 雄山閣

藤田富士夫『玉』考古学ライブラリー52 1989年 ニュー・サイエンス社

福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館『鳥浜貝塚 1981年・1982年度調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3－』1983年

福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館『鳥浜貝塚 1984年度調査概報・研究の成果－縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査5－』1985年

巻町『巻町史』資料編1 考古 1994年 新潟

益富壽之助『原色岩石図鑑』全改訂新版 1987年 保育社

増山 仁「小松式土器の再検討」『北陸の考古学Ⅱ』（『石川考古学研究会々誌』第32号）1989年

水ノ江和同「縄文前期の「西北九州型片刃石斧」について」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ 1988年

宮田村教育委員会『中越遺跡発掘調査報告書』1990年 長野

宮本長二郎「特論 堅穴住居の復元」『考古学による日本歴史』15 家族と住まい 雄山閣

宮本長二郎「縄文の家と村」『古代史復元』2 縄文人の生活と文化 1988年 講談社

山内清男『日本先史土器の縄紋』先史考古学会 1979年

山本正敏・大野究「氷見市十二町瀧排水機場遺跡の資料」『大境』第12号 1988年 富山

和島誠一「序説－農耕牧畜発生以前の原始共同体」『古代史講座』第Ⅱ巻 1962年 学生社

写 真 图 版



調査前（東から）



調査前（取付道、北から）



2・3号竪穴建物（西から）



5・7・15・16号竪穴建物（南から）



竪穴建物群（南から）



竪穴建物群（南西から）



1号竪穴建物（南から）



2号竪穴建物（西から）



3号竪穴建物（西から）



4号竪穴建物（西から）



1号竖穴建物土層（南西から）



2号竖穴建物土層（西から）



3号竖穴建物土層（南東から）



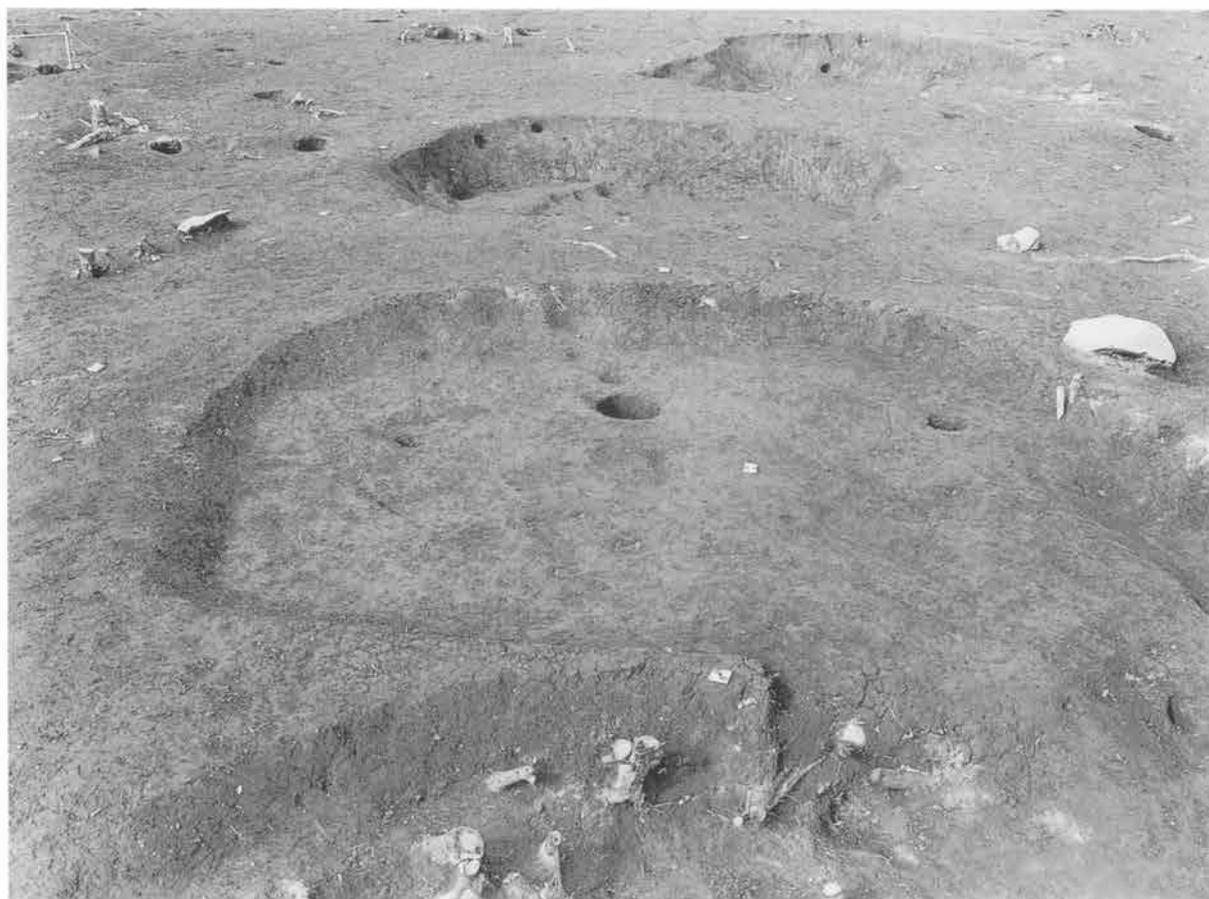
5号竪穴建物（南から）



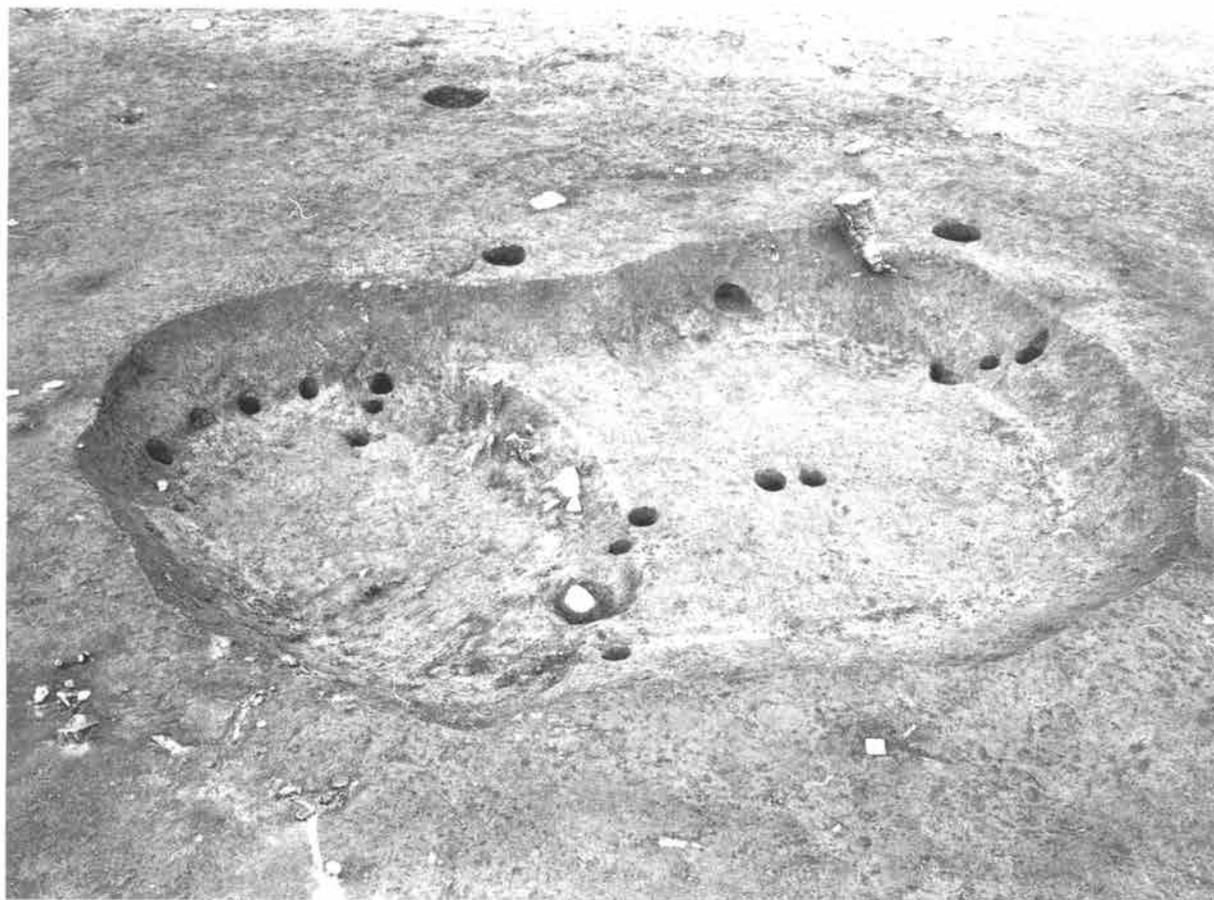
7号竪穴建物（南から）



6号竖穴建物（南から）



12号竖穴建物（南から）



9号竪穴建物（南から）



10号竪穴建物（南から）



集石（9号竪穴建物検出前、南から）



9号竪穴建物検出（南から）



9号竪穴建物土層（南から）



11号竪穴建物（南東から）



13号竪穴建物（南から）



11号竪穴建物・11号土坑検出
(南から)



11号竪穴建物検出・11号土坑掘削
(南から)



11号竪穴建物・11号土坑土層
(南から)



13号竪穴建物堀削（南から）



13号竪穴建物土層（南から）



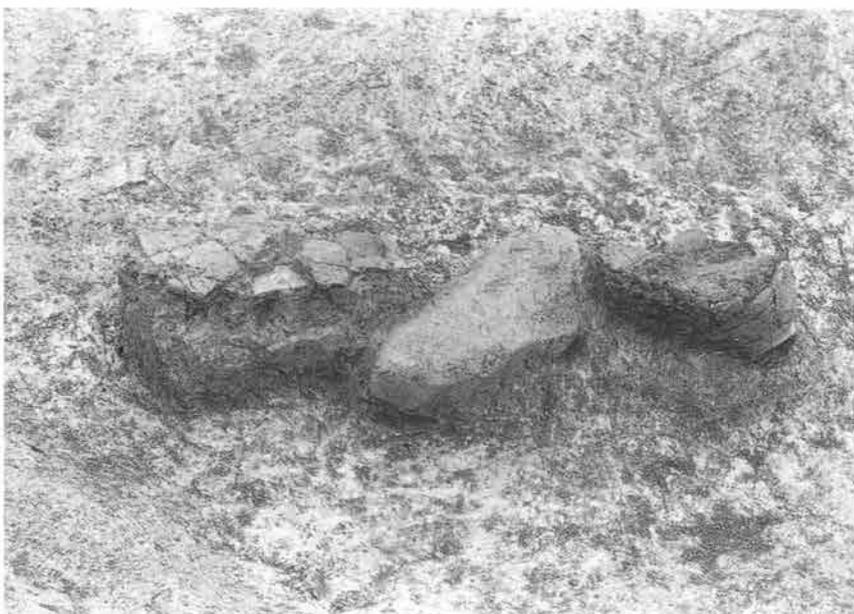
13号竪穴建物土層（南西から）



14号竪穴建物（南から）



14号竪穴建物土層（西から）



14号竪穴建物出土の縄文土器
（西から）



1・2号土抗（南から）



3号土抗（西から）



5号土抗（東から）



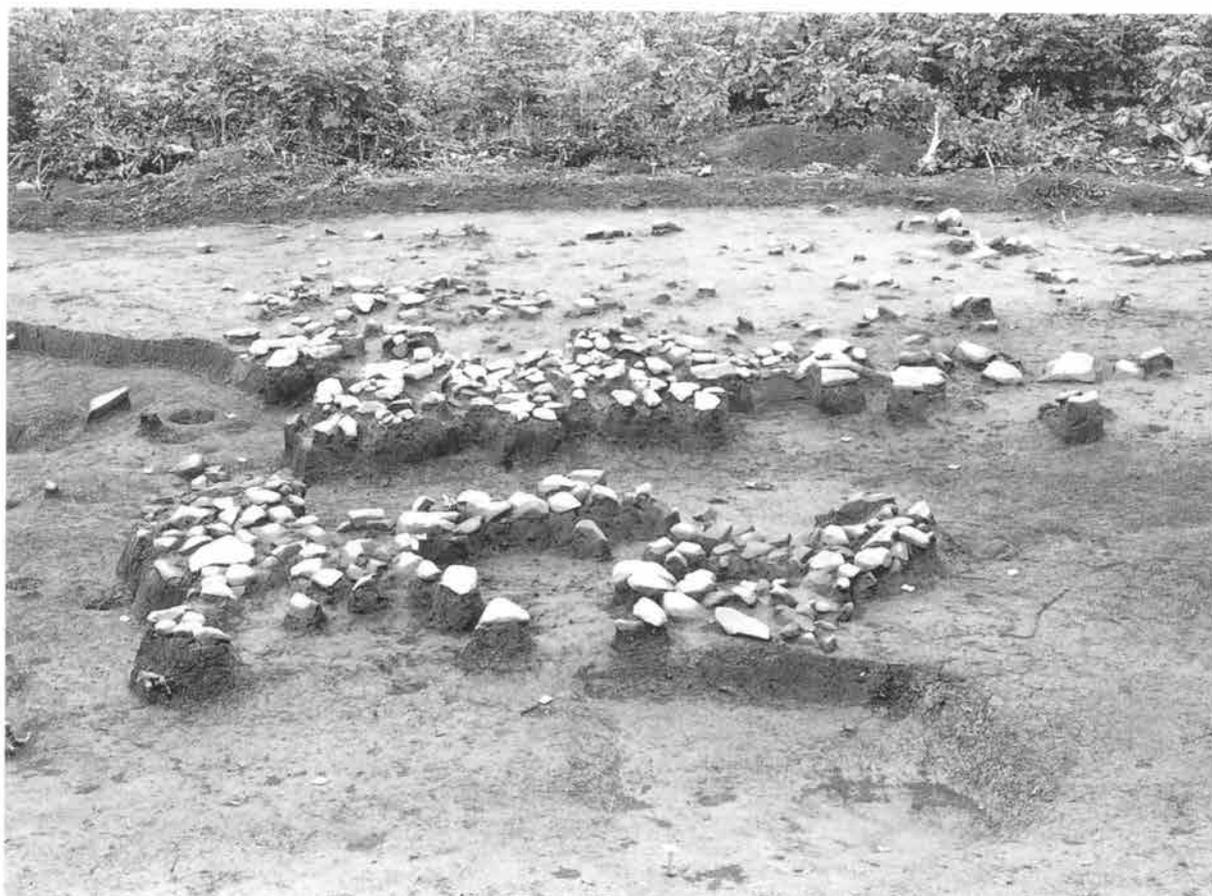
6号土抗（北から）



6号土抗出土の縄文土器
（北から）



8号土抗（南から）



集石 (A~I地点、南から)



集石 (J~R地点、南から)



集石 (A~R地点、南から)



集石 (X地点、南から)



塚（北南から）



塚（東から）



塚拡張区（東から）



塚盛土土層（西から）



塚周辺土層（13地点、南から）



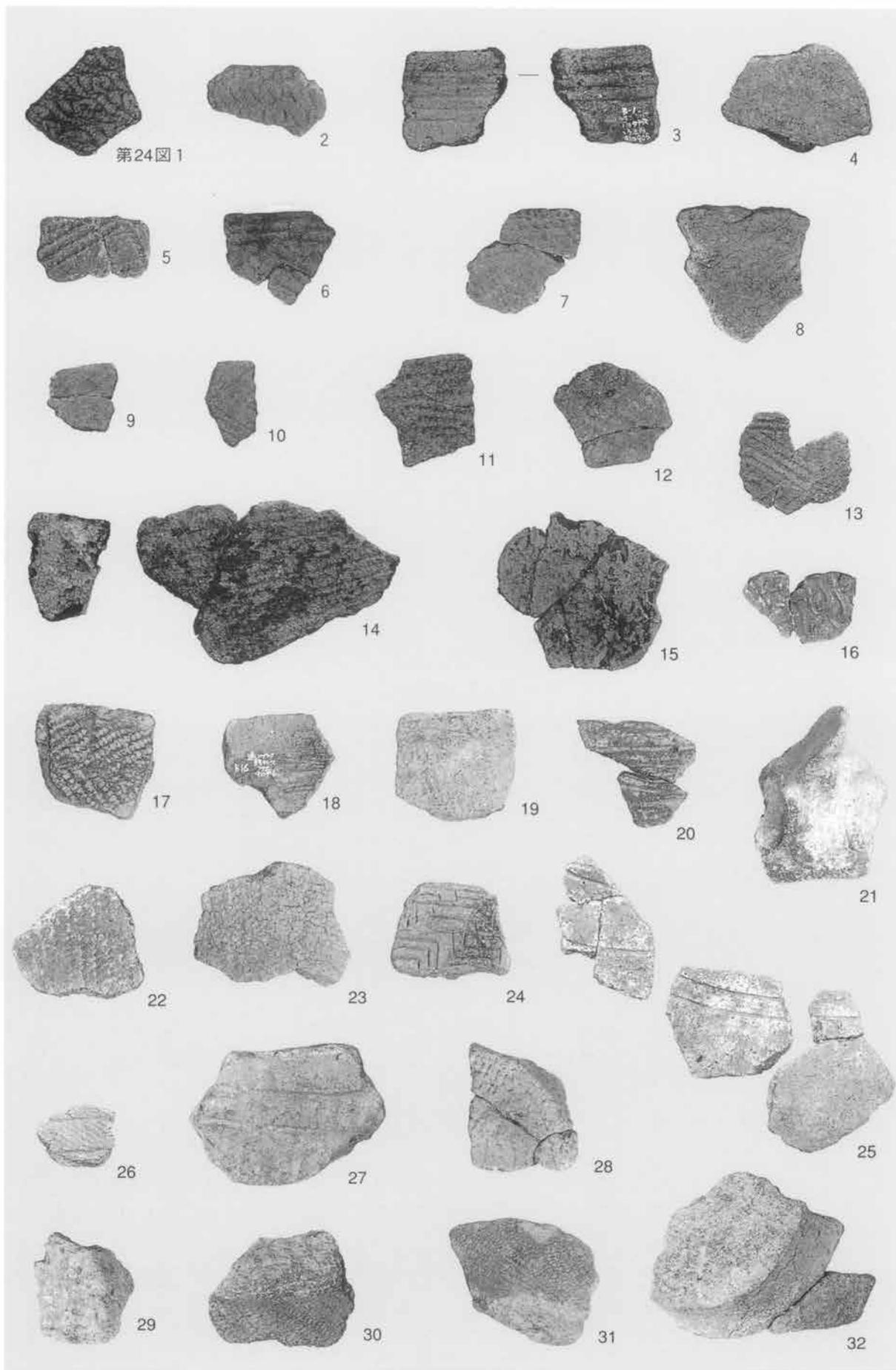
塚拡張区集石（西から）



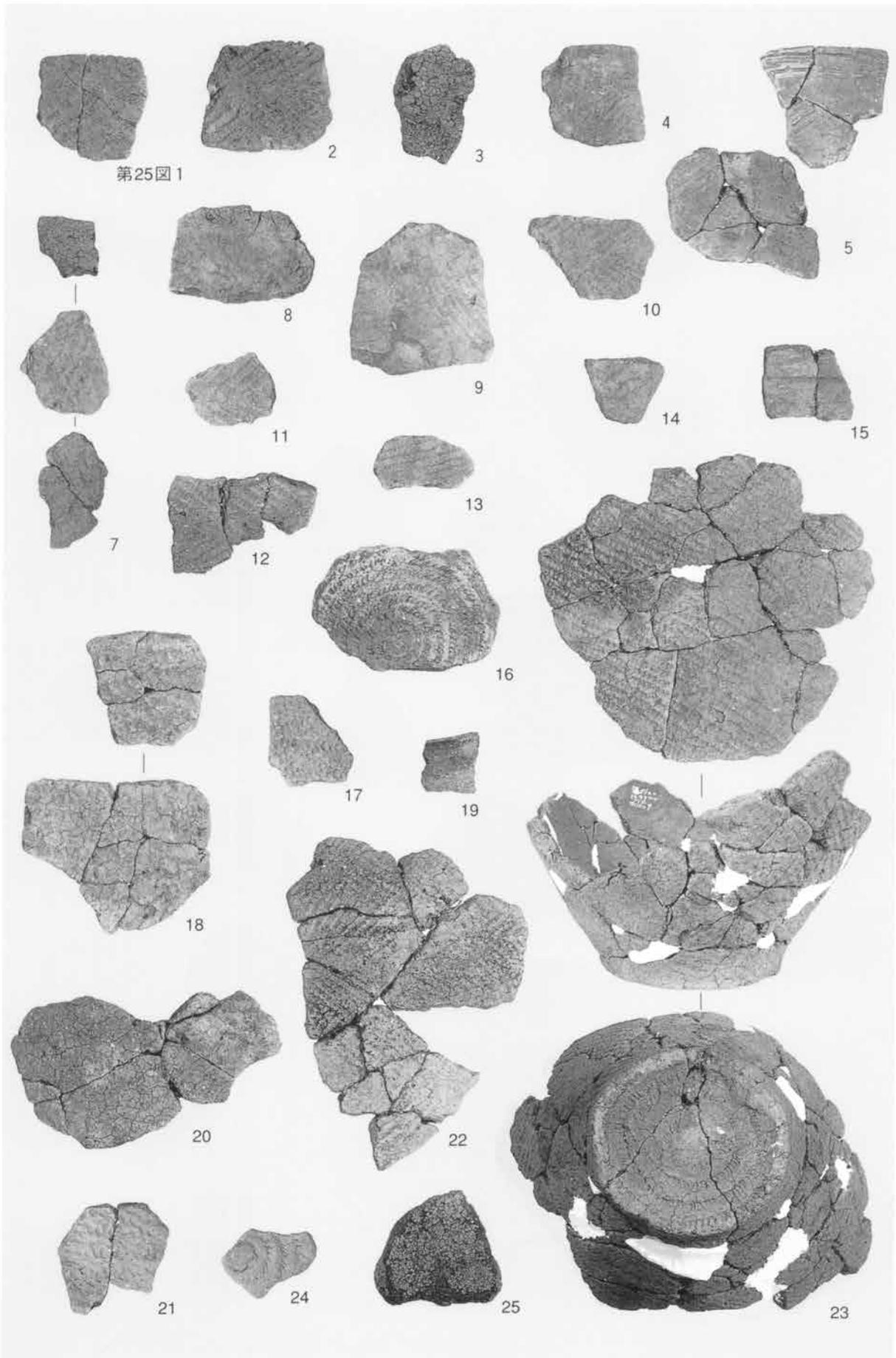
調査後（東から）



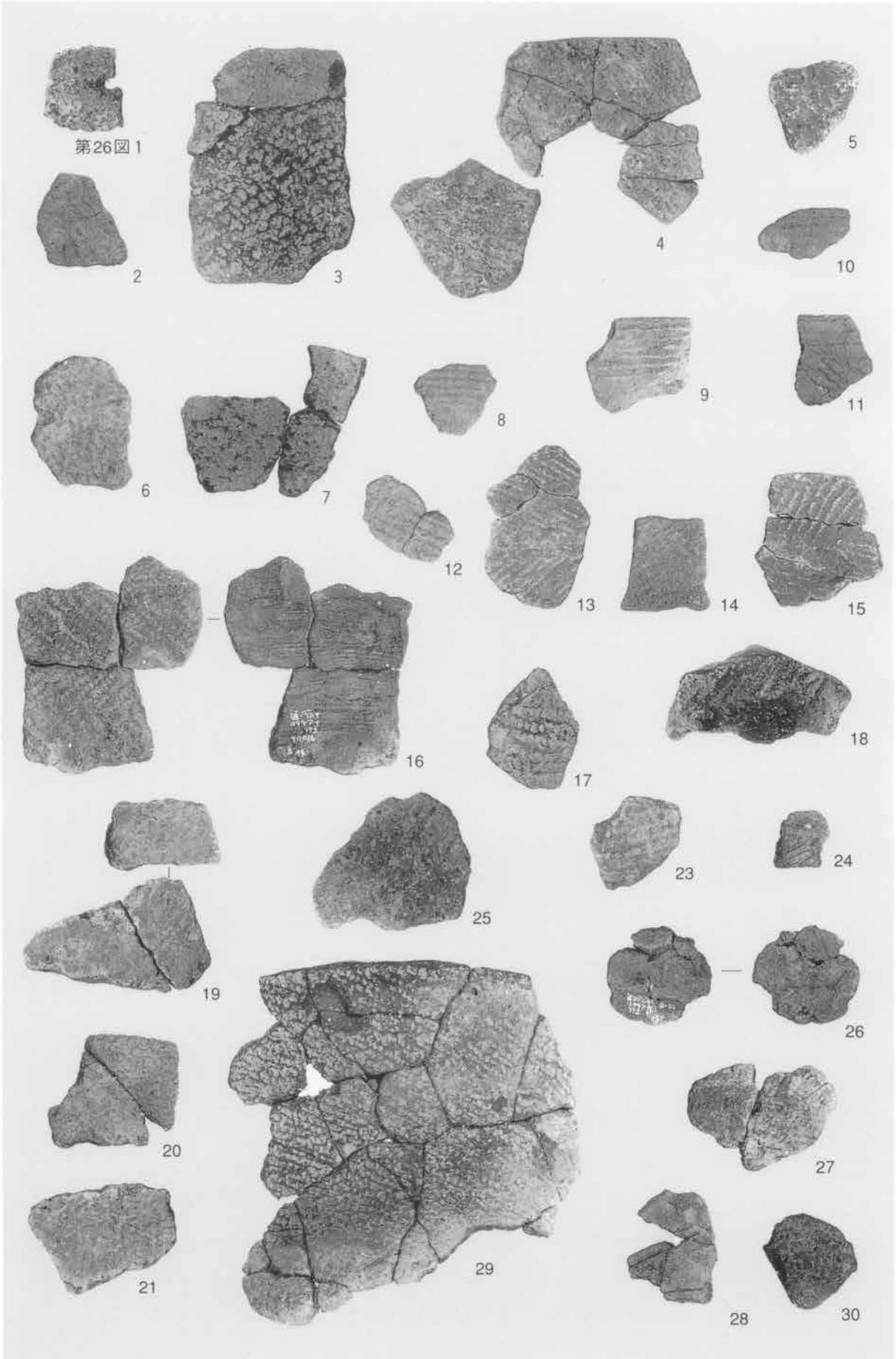
調査後（取付道調査区、北から）



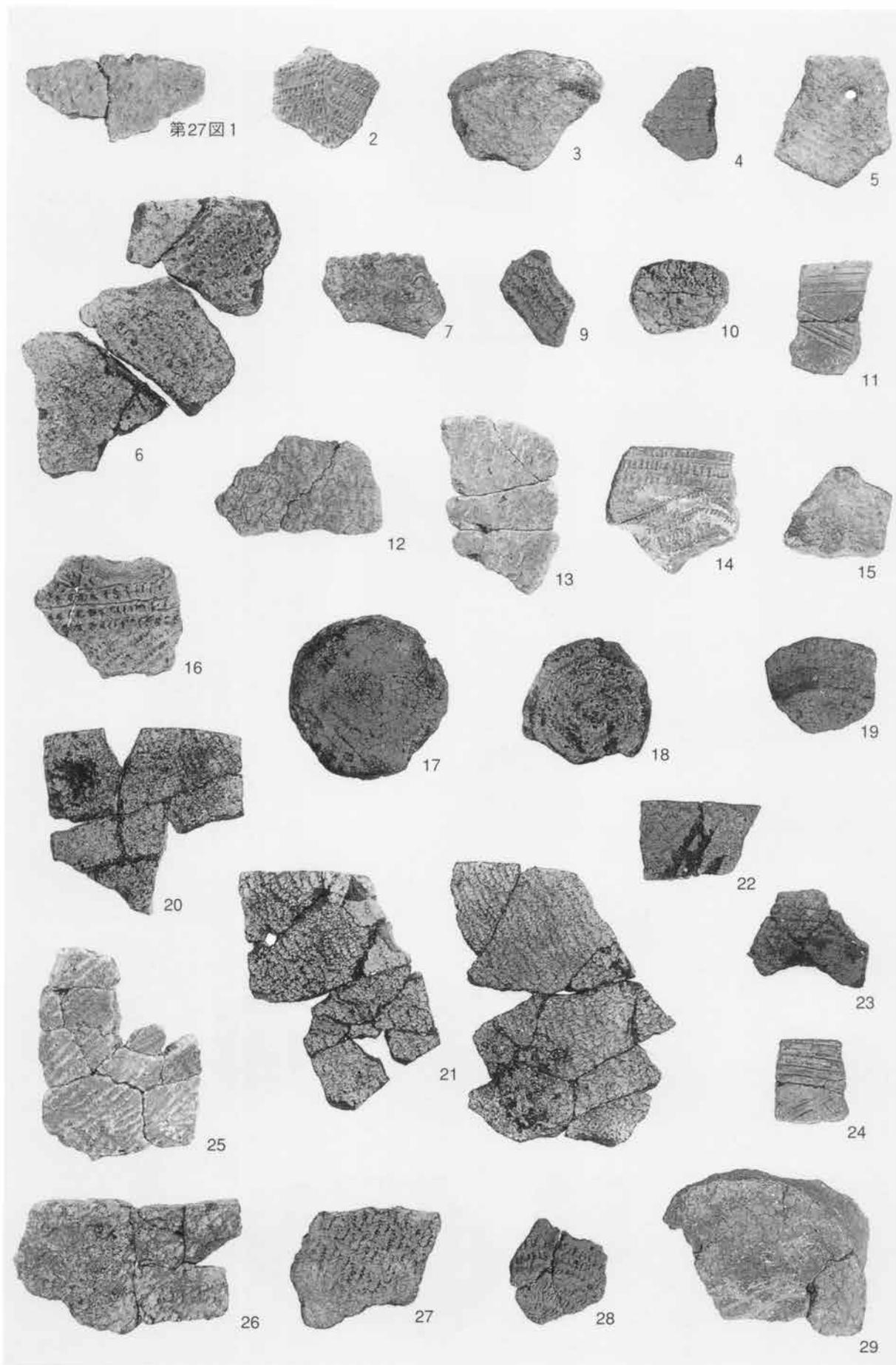
出土遺物 (1)



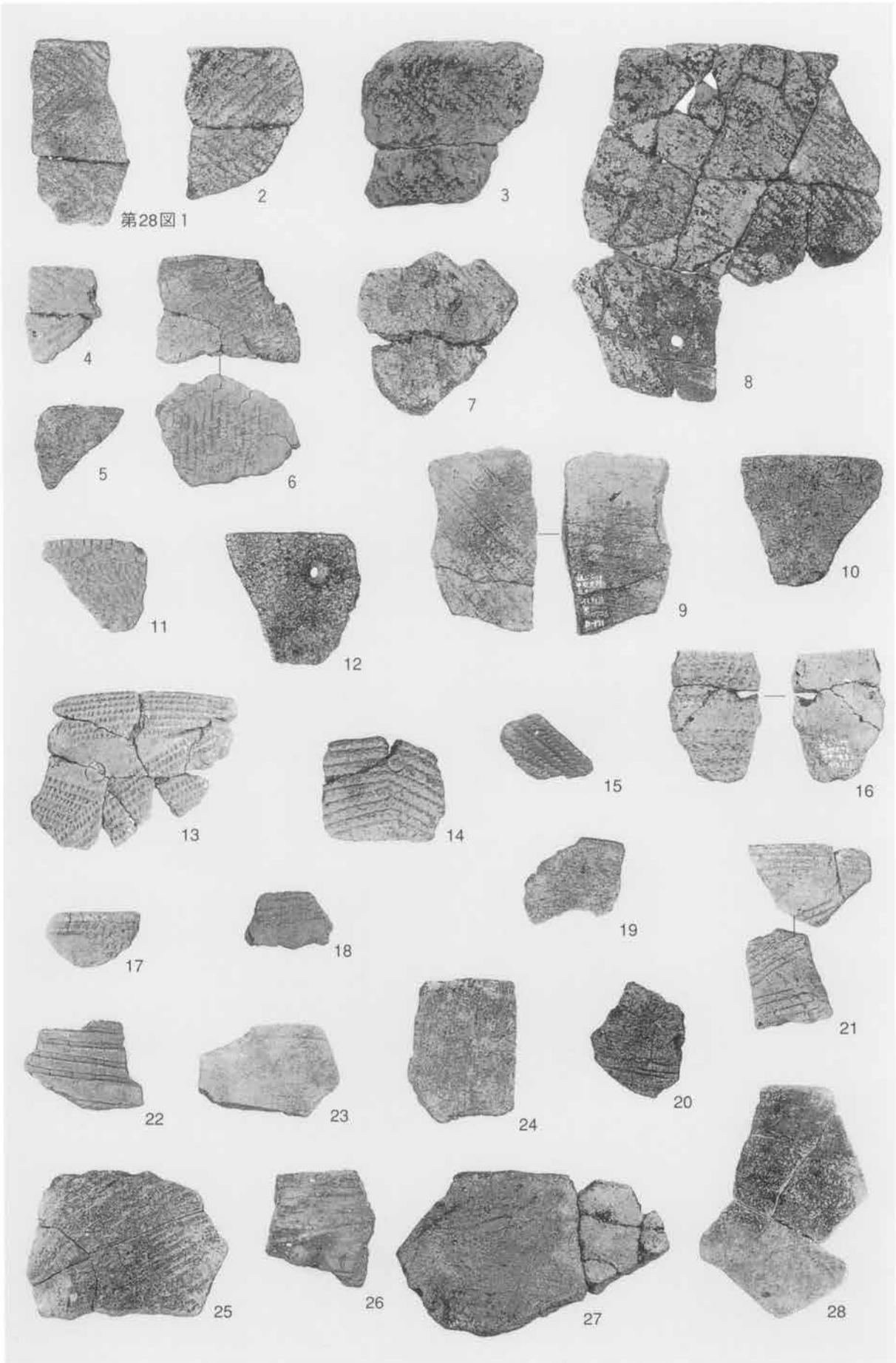
出土遺物 (2)



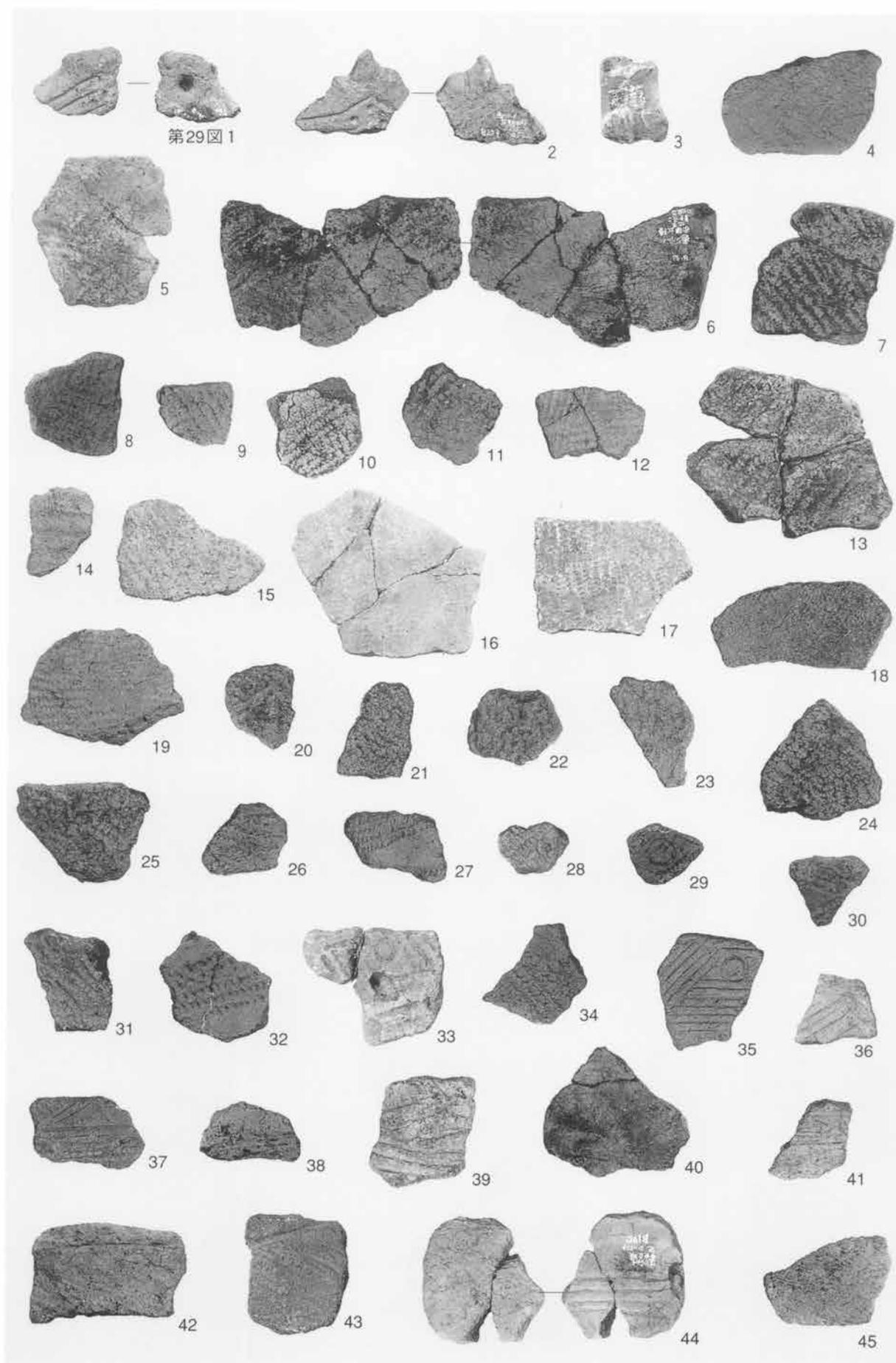
出土遺物 (3)



出土遺物 (4)

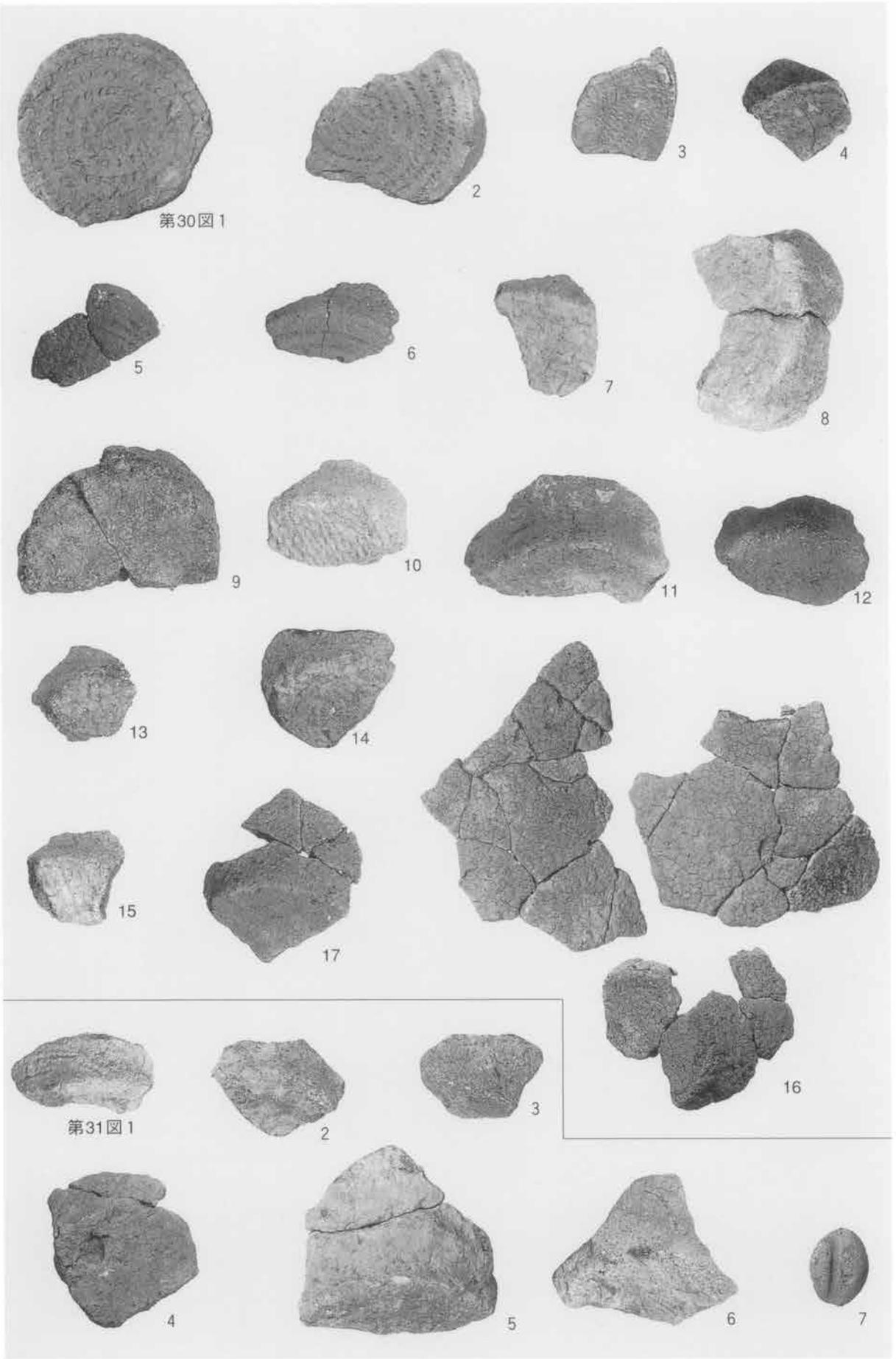


出土遺物 (5)



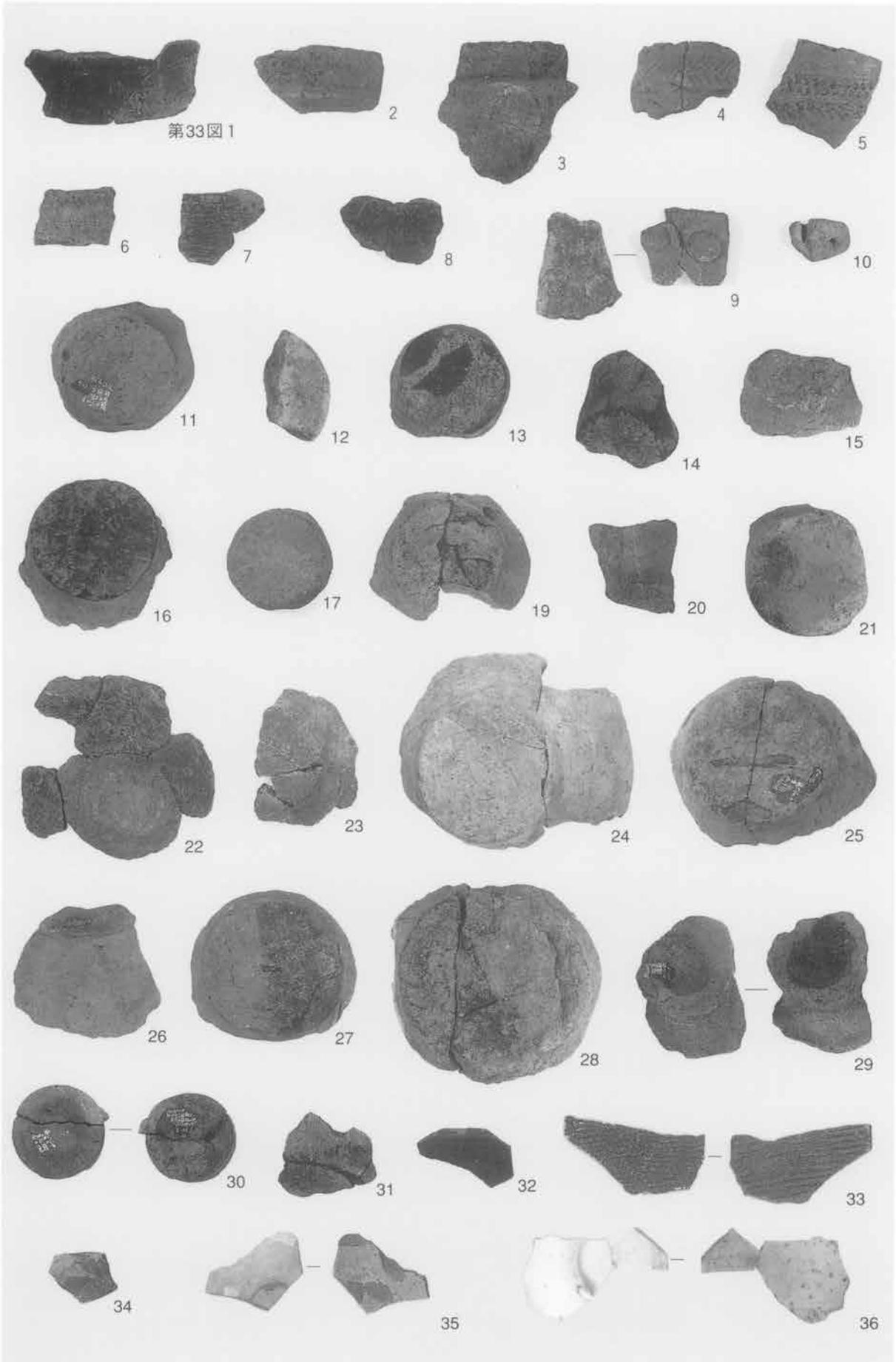
第29図 1

出土遺物 (6)





出土遺物 (8)



出土遺物 (9)



第34図1

2

3

4

5



6

7

8

9



10

11

12

13



14

15

16

17



18

19

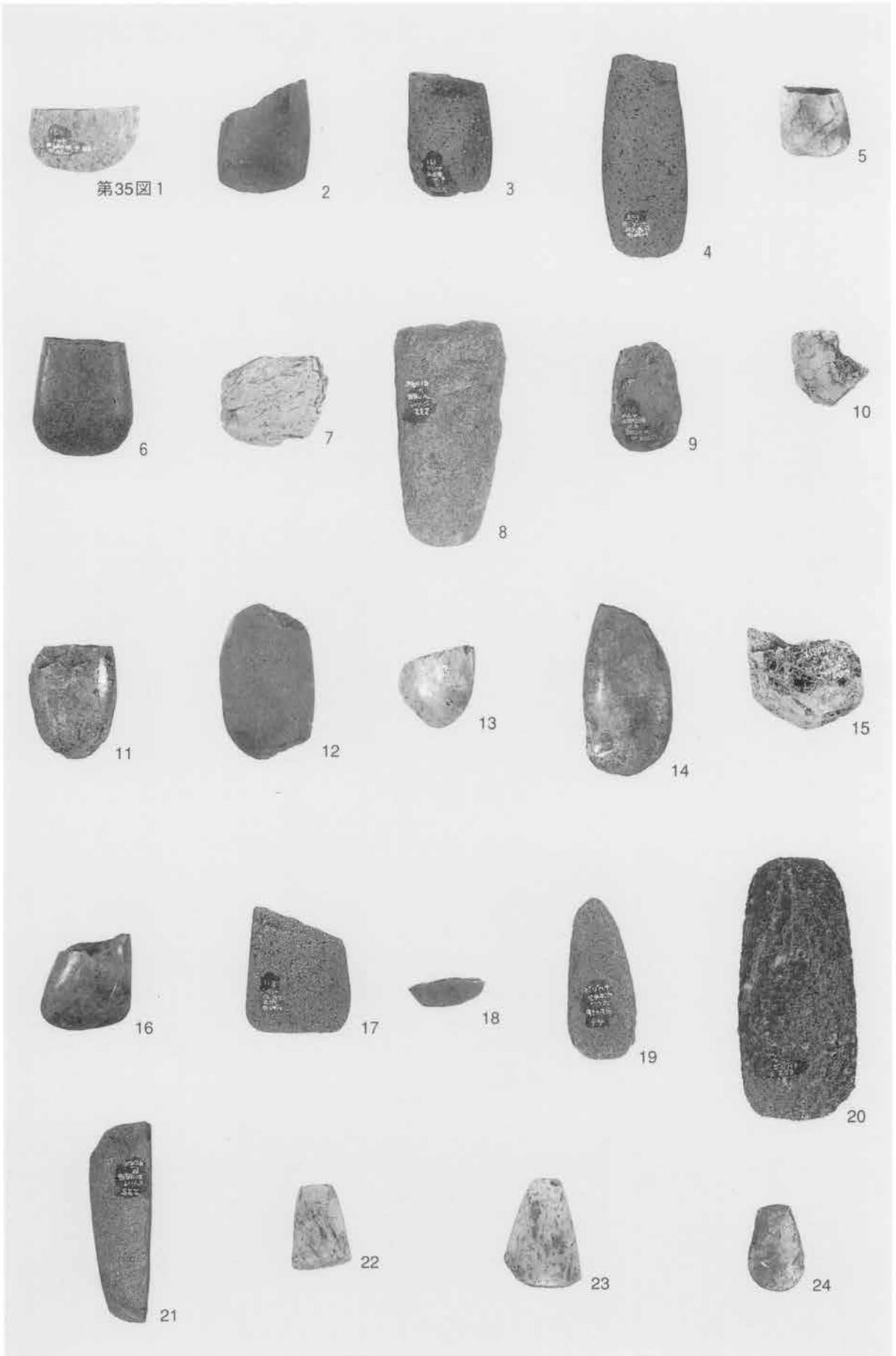
20

21

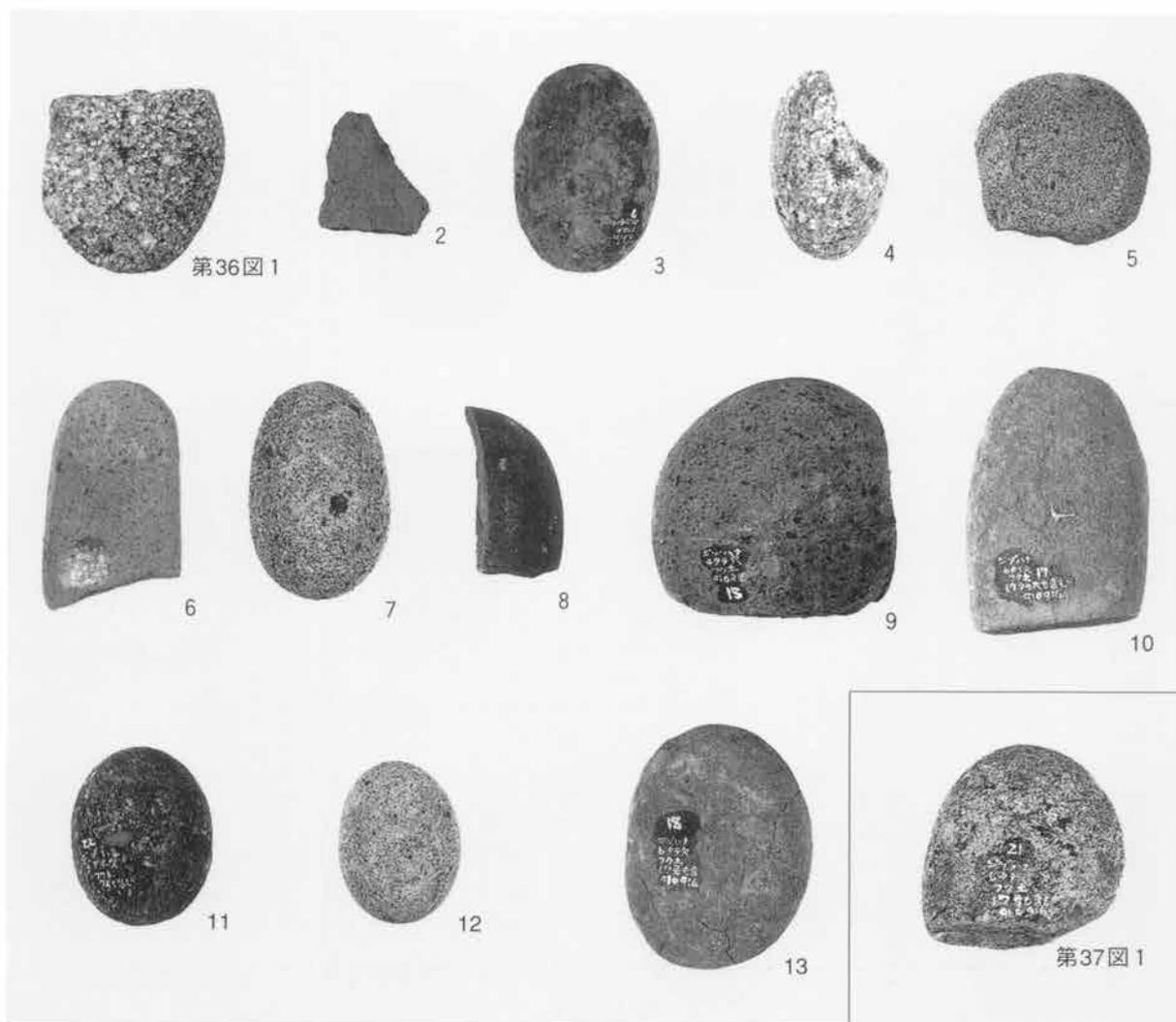
22

23

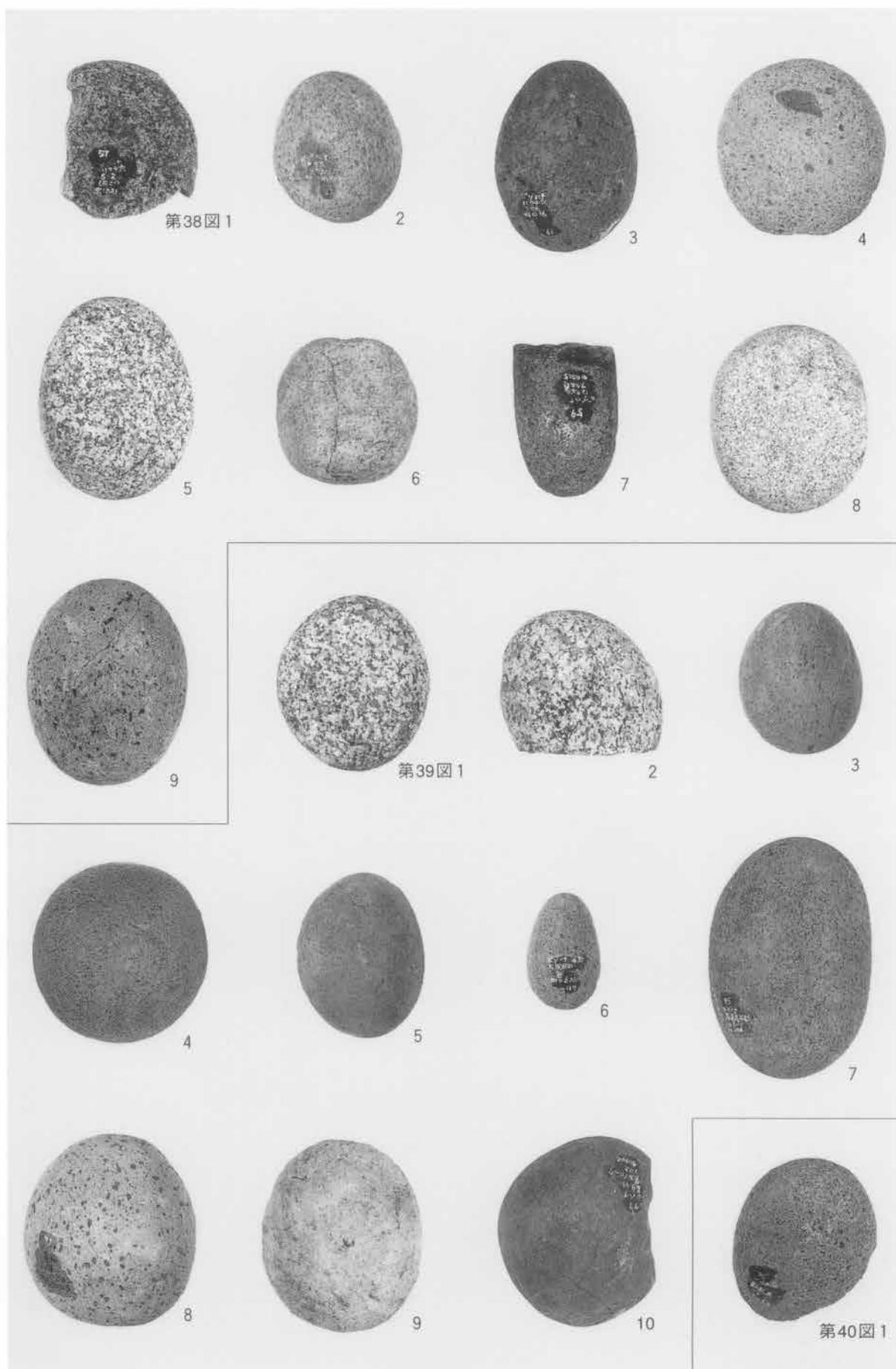
出土遺物 (10)



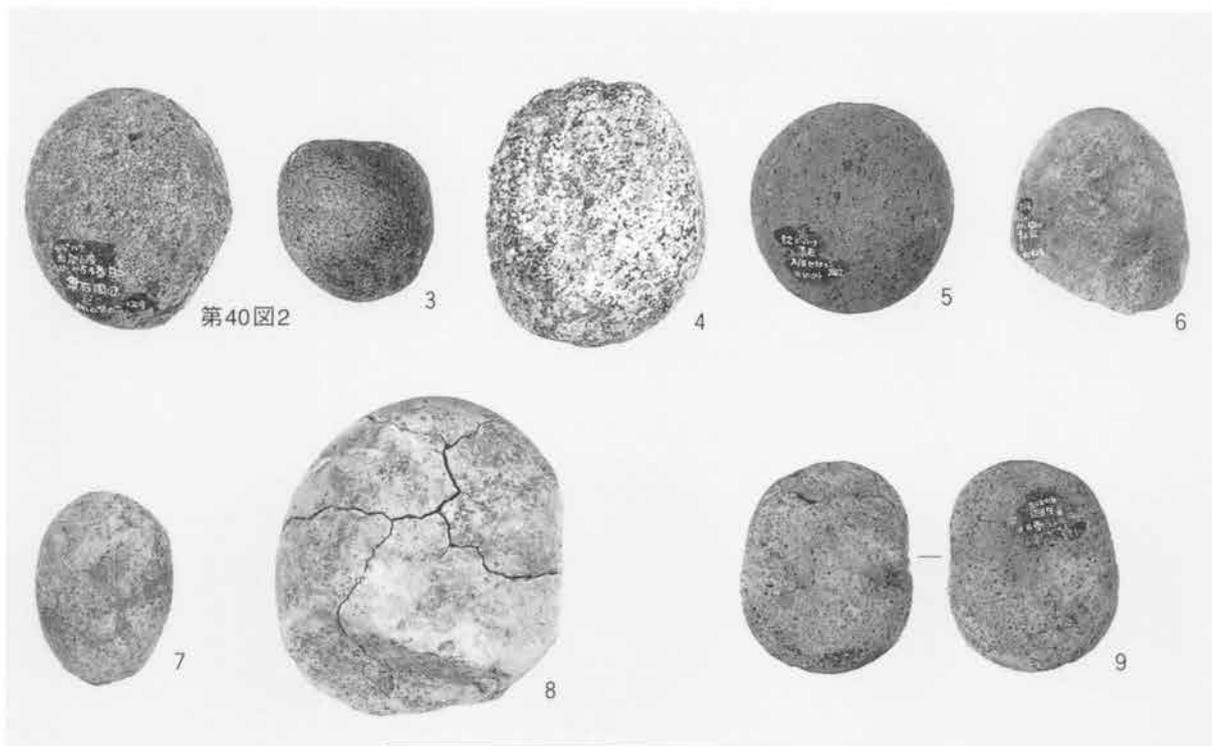
出土遺物 (11)



出土遺物 (12)



出土遺物 (13)



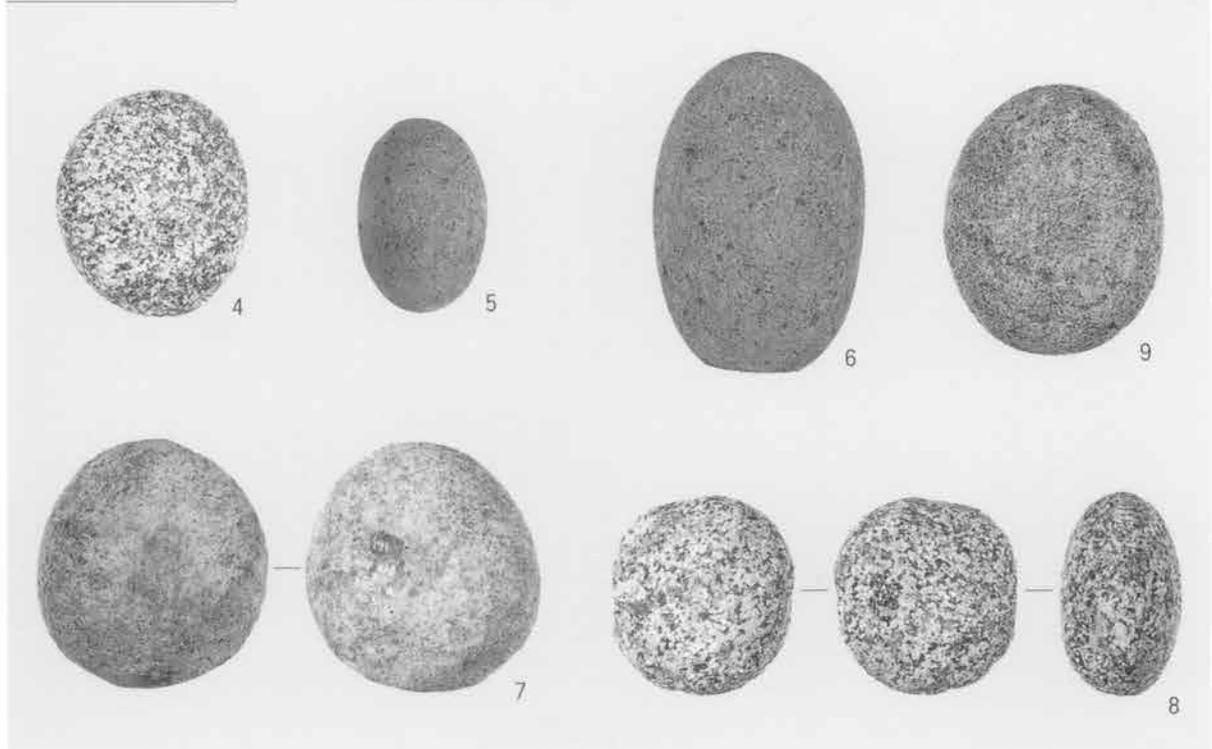
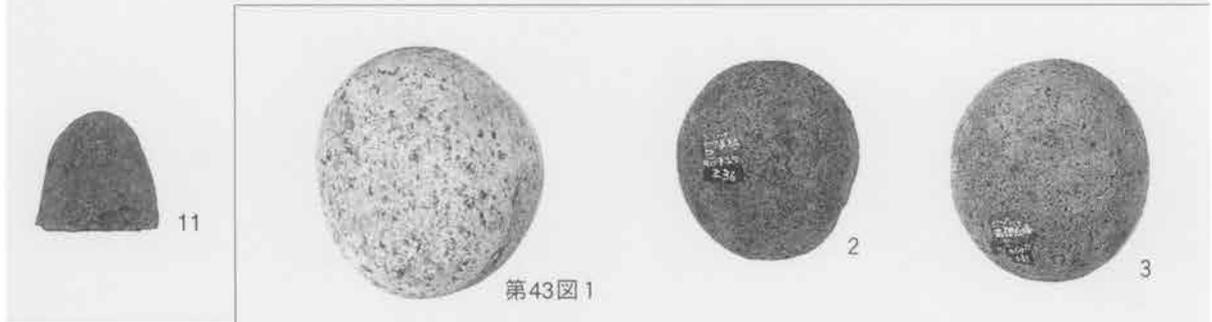
第40図2

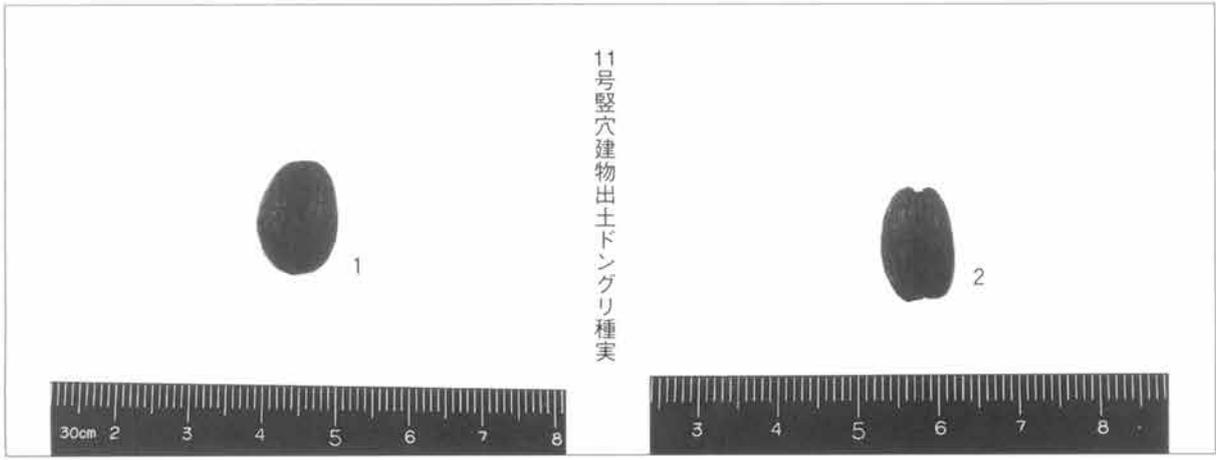
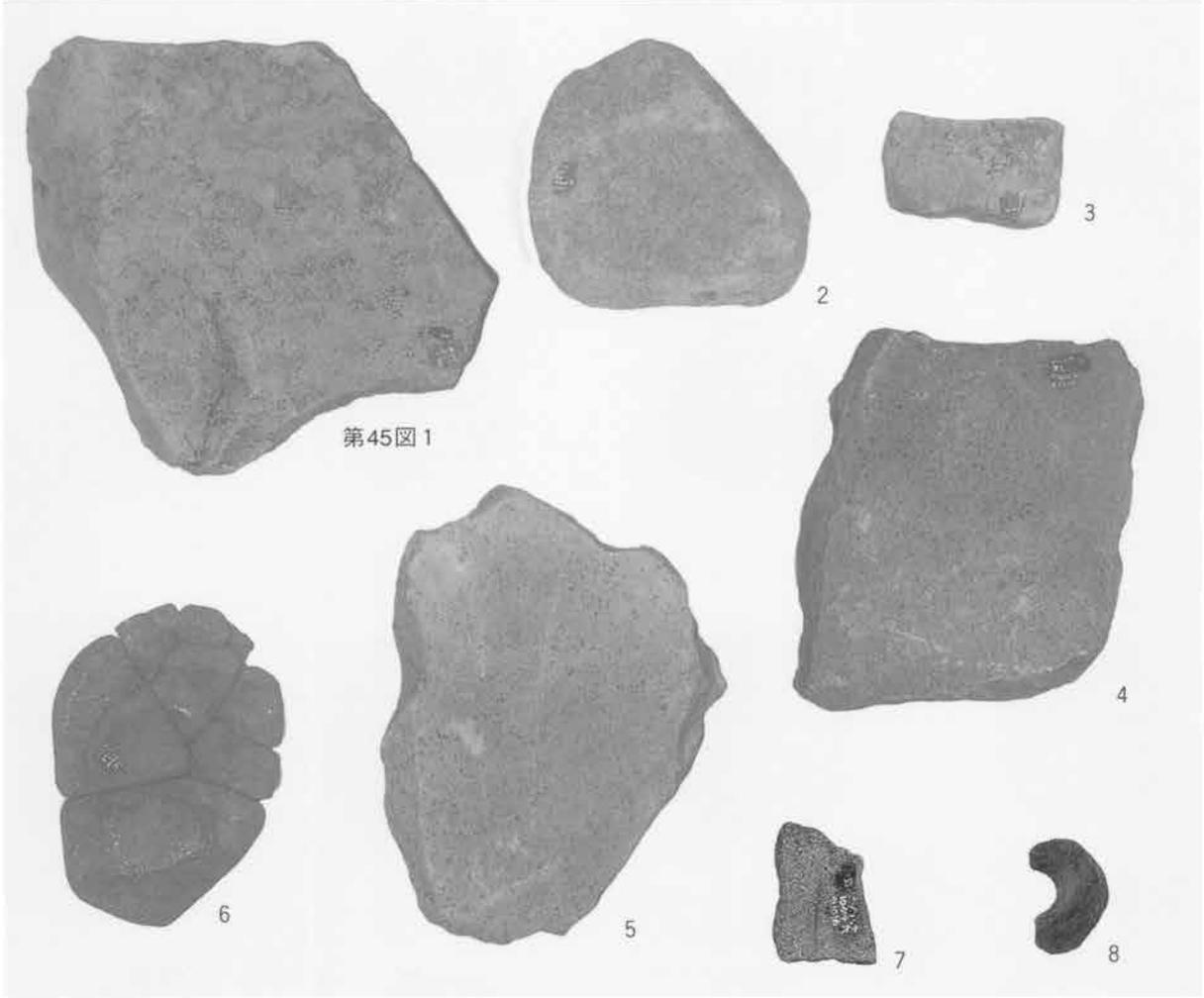
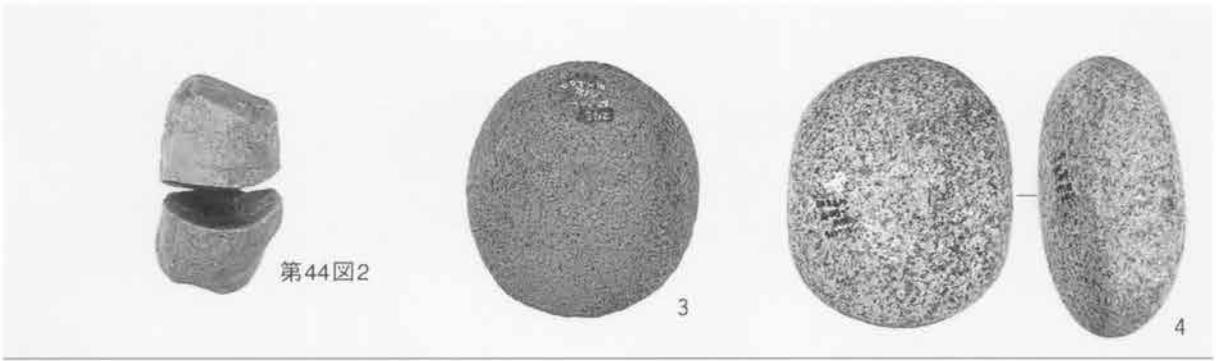


第41図1



出土遺物 (14)

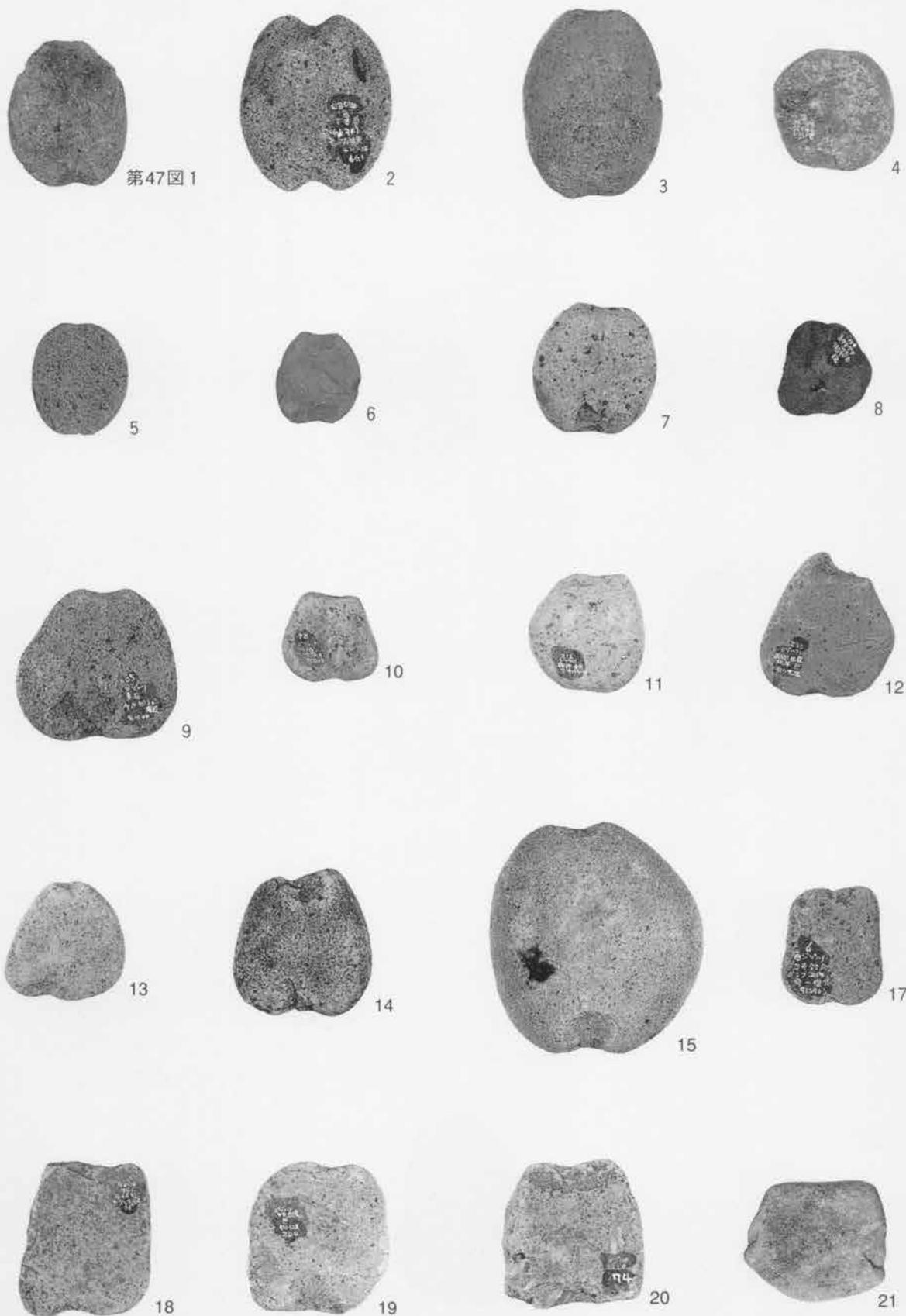




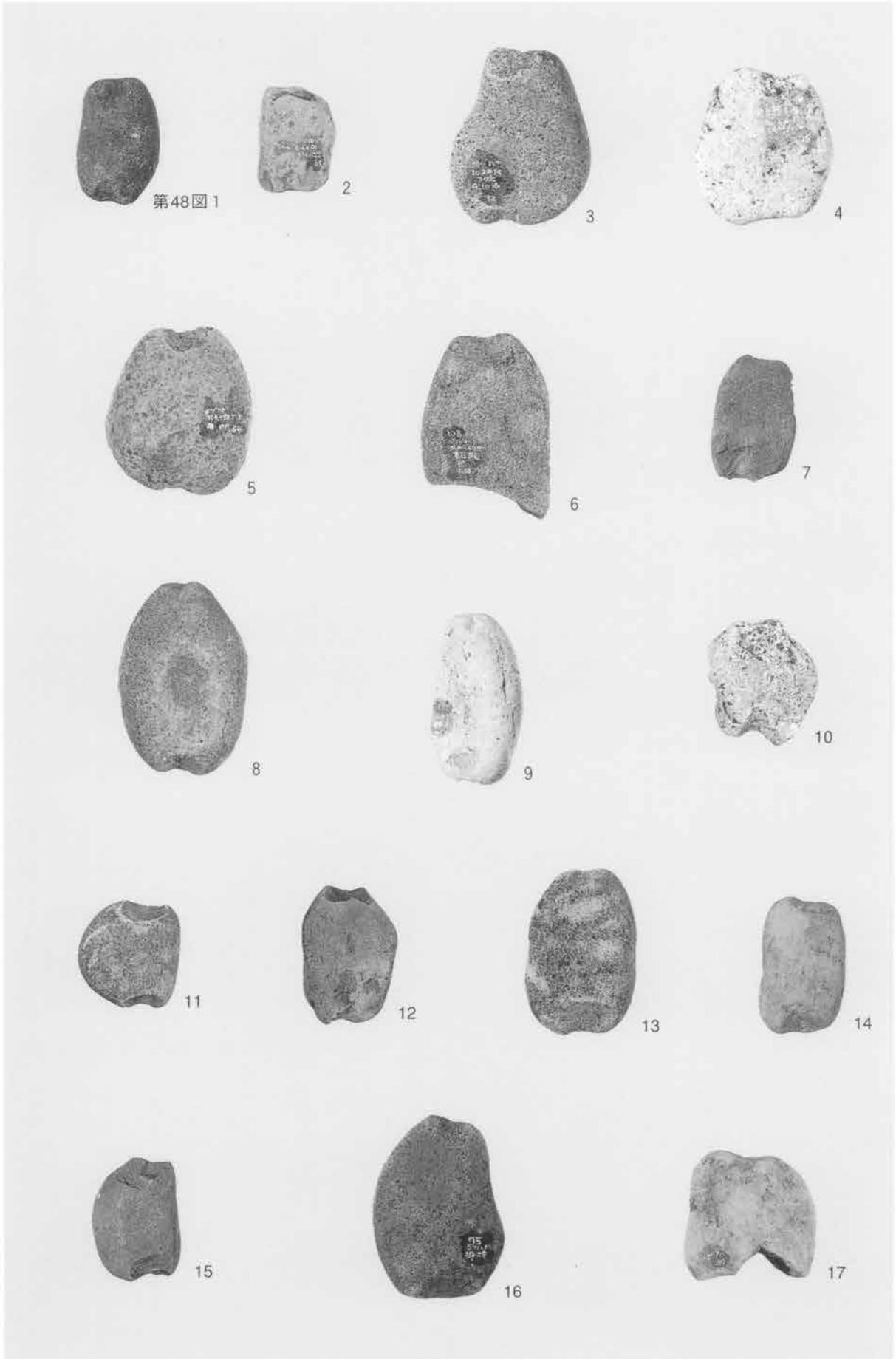
出土遺物 (16)



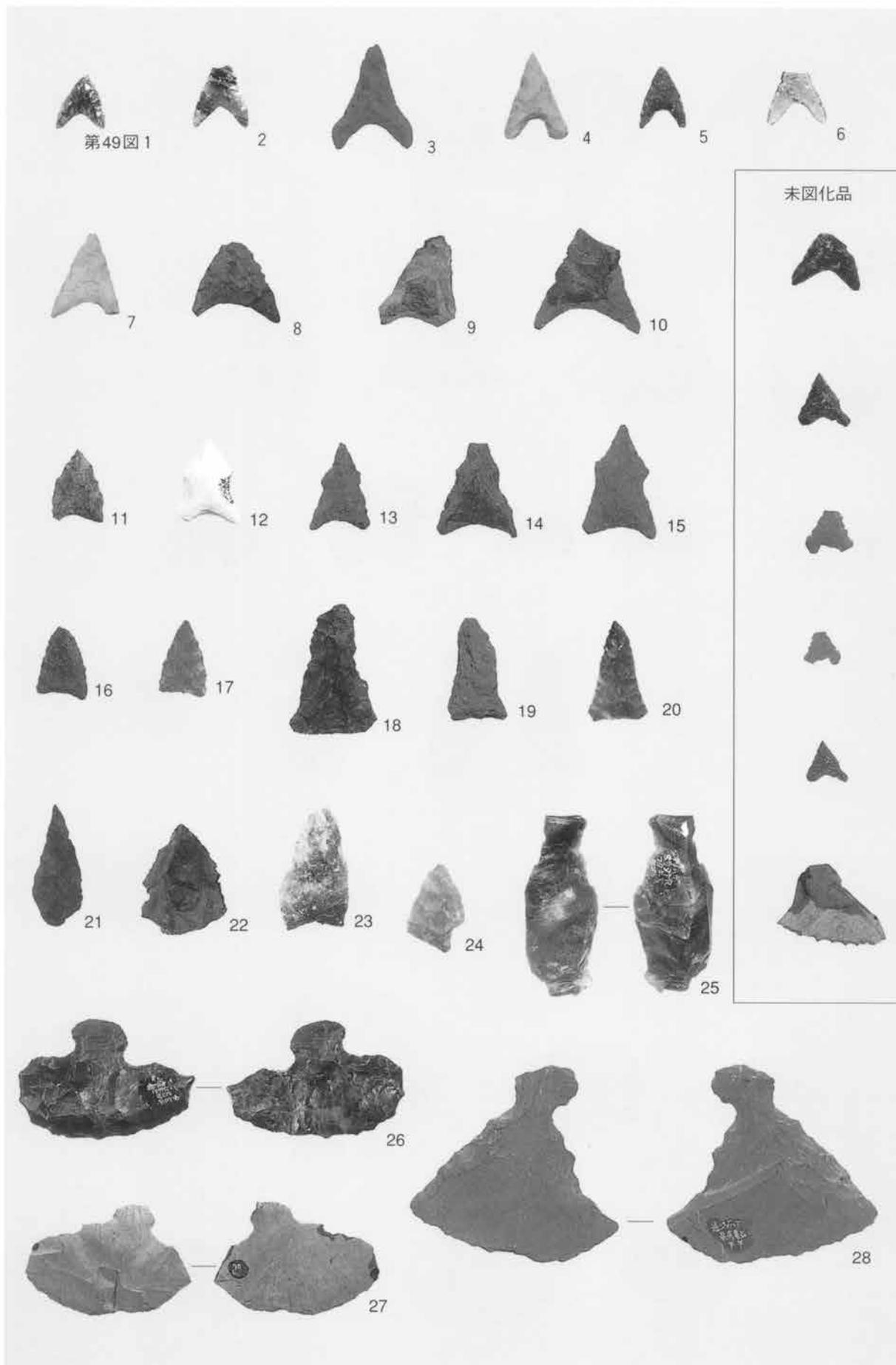
出土遺物 (17)



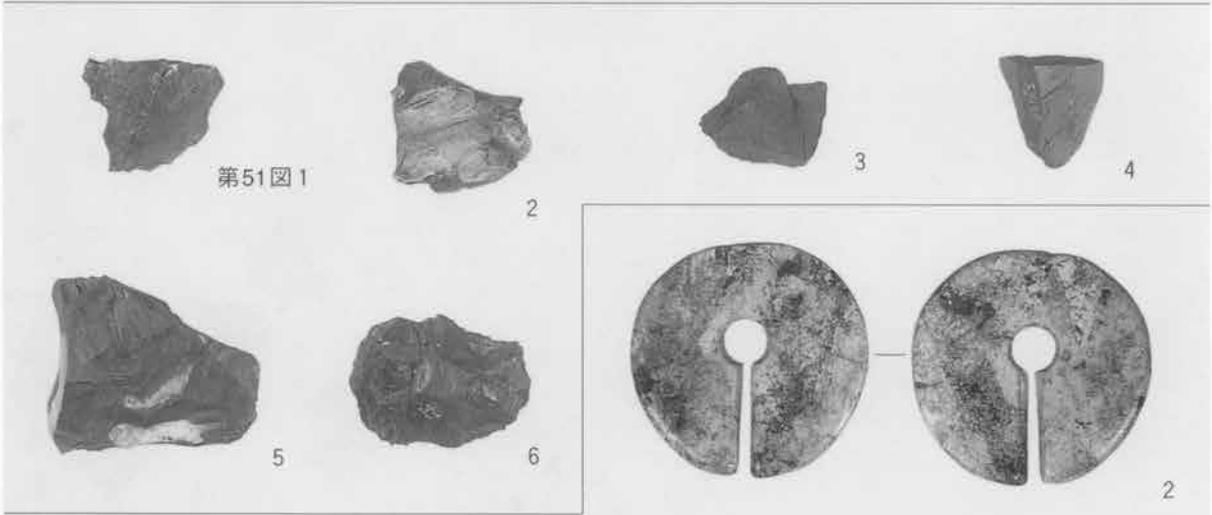
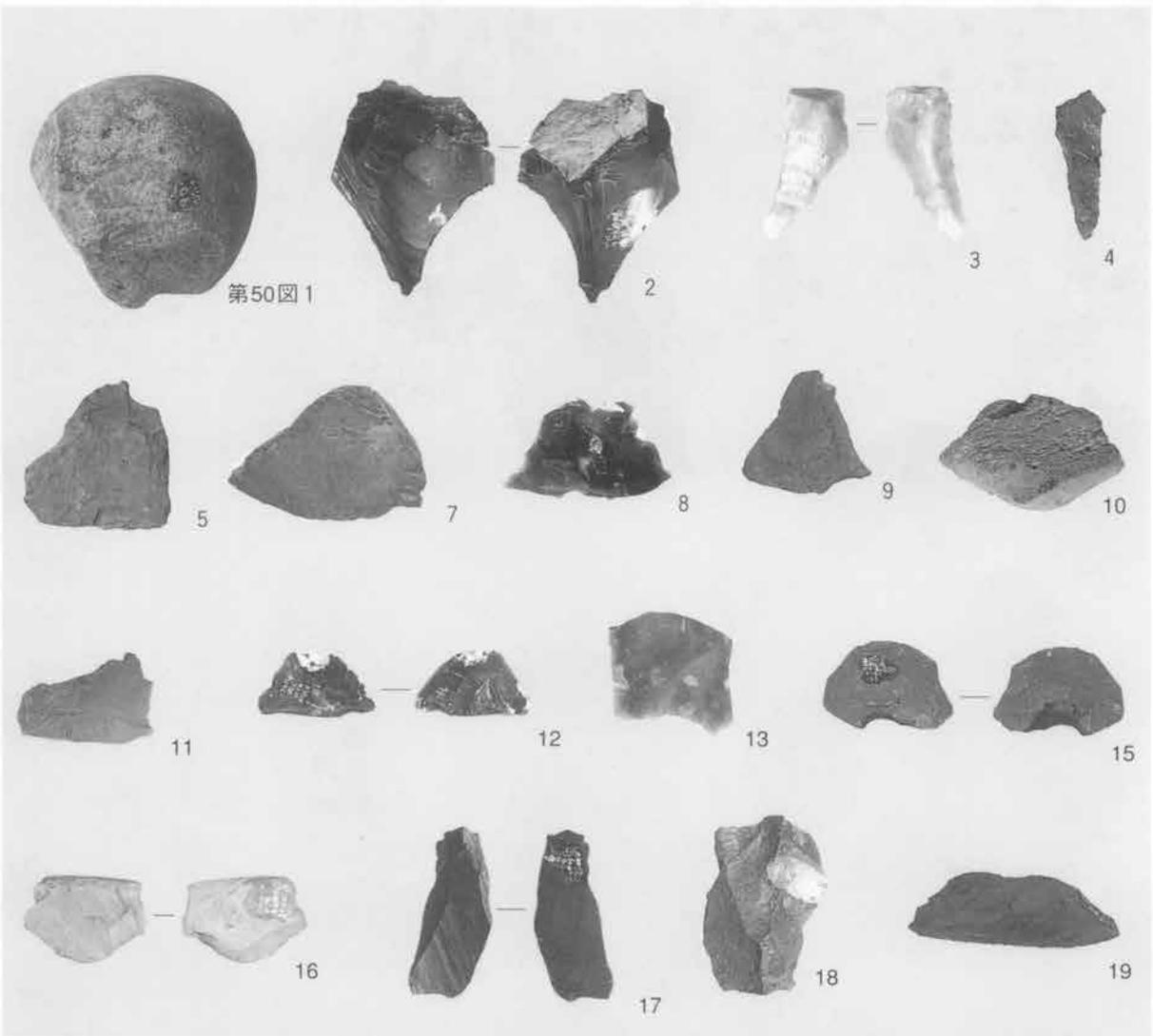
出土遺物 (18)



出土遺物 (19)



出土遺物 (20)



能登島町通ジゾハナ遺跡

広域営農団地農道整備事業能登島第2地区
に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

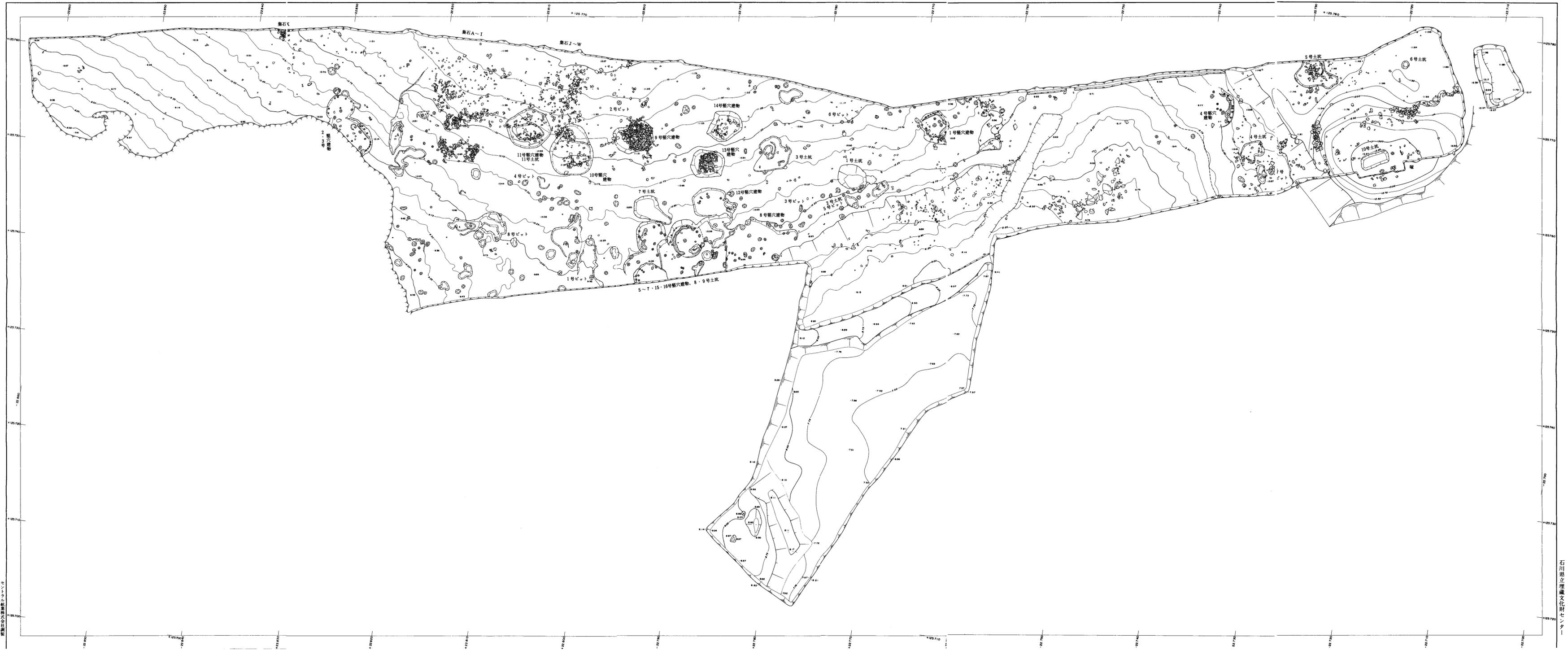
平成9年3月19日 印刷

平成9年3月19日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話(0762)43-7692(番代)

印刷 能登印刷株式会社

能登島町通ジソハナ遺跡平面図





出土した縄文土器の底部文様